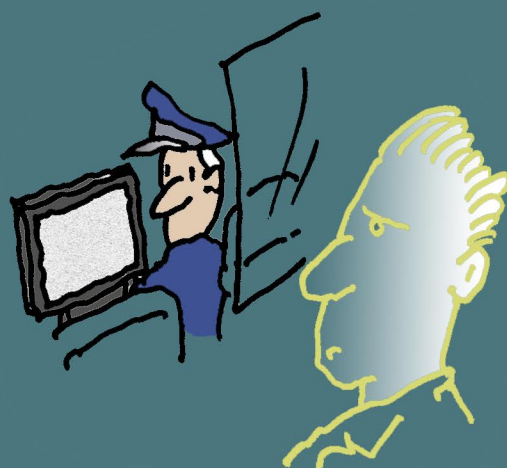


連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 17 No. 2

第 66 号

September 2026

対人援助学会

No.66 M O K U J I

目次		2 - 3
ハチドリの器	見野 大介	4
執筆者@短信	執筆者全員	5 - 15
家族療法を学んだ人、日常でどう活かしてる？(2)	千葉 晃央	16 - 19
臨床社会学の方法 (54)	中村 正	20 - 29
カウンセリングのお作法 (48)	中島 弘美	30 - 32
晩年DAN通信(17)	団 士郎	33 - 53
幼稚園の現場から (66)	鶴谷 圭一	54 - 61
福祉系対人援助職養成の現場から (66)	西川 友理	62 - 65
ああ、相談業務 (26)	河岸 由里子	66 - 68
きもちは言葉をさがしている (59)	水野 スウ	69 - 73
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	74 - 74
路上生活者の個人史 (20)	竹中 尚文	75 - 76
スポーツおじいさんになりたい！ (10)	國友 万裕	77 - 85
役場の対人援助論 (56)	岡崎 正明	86 - 90
臨床のきれはし (34)	浅田 英輔	91 - 92
発達検査と対人援助学 (25)	大谷 多加志	93 - 95
講演会&ライブな日々 (47)	古川 秀明	96 - 98
療育手帳の向こう側 (8)	坂口 伊都	99 - 103
周辺からの記憶 - 東日本大震災家族応援プロジェクト - (52)	村本 邦子	104 - 126
精神科医の思うこと (42)	松村 奈奈子	127 - 130
雪女(1)	柳 たかを	131 - 138
心理コーディネーターになるために (23)	山下 桂永子	139 - 143
先人の知恵から (53)	河岸 由里子	144 - 150
うたとかたりの対人援助学 (37)	鵜野 祐介	151 - 154
ああ結婚 (39)	黒田 長宏	155 - 156
PBLの風と土 (38)	山口 洋典	157 - 162
接骨院に心理学を入れてみた (37)	寺田 弘志	163 - 170
現代社会を『関係性』という観点から考える (38)	三浦 恵子	171 - 177
「余地」—相談業務を楽しむ方法— (35)	杉江 太朗	178 - 180
統合失調症を患う母とともに生きる子ども (16)	松岡 園子	181 - 183
原田牧場Note (23)	原田 希	184 - 186
横書き都々逸 (2)	川畑 隆	187 - 188
応援、母ちゃん (26)	玉村 文	189 - 196

HITOKOMART (25)	篠原ユキオ	197 - 200
川下の風景 (22)	米津 達也	201 - 203
こころ日記『ぼちぼち』	脇野 千恵	204 - 205
一語一絵 (23)	畑中 美穂	206 - 208
対人援助をリポートするこの一冊 (41)	渡辺 修宏	209 - 213
対人援助をリポートするこの一冊 (42)	二階堂 哲	214 - 215
対人援助をリポートするこの一冊 (43)	小幡 知史	216 - 218
新・島根の中山間地からWork as Life (9)	野中 浩一	219 - 227
ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！ (16)	高木 久美子	228 - 240
理事長のひとりごと (6)	鳴海 明敏	241 - 242
現象学としての書道(16)	櫻井 育子	243 - 244
コソダテノシンリ (14)	中谷 陽輔	245 - 255
社会科の授業を対人援助学の視点から (14)	内田 一樹	256 - 262
人生は対応のバリエーション (14)	宮井 研治	263 - 267
けふばあちゃんからの手紙 (9)	乾 京子	268 - 269
心理臨床における多重関係を考える(8)	本林 友梨	270 - 273
森で出会えば (7)	田中 千晶	274 - 275
思考の補助線(3)	八木 明恵	276 - 279
対人援助のためのNVC (非暴力コミュニケーション)	シルバーマン恵子	280 - 281
対人援助のジレンマのありか(2)	八木 慎一	282 - 287
新連載 ジェノグラム for Everyone	大沼 吹雪	288 - 292
編集後記	編集長&編集員	293 - 294

ハチドリの器 49

見野 大介

Mino Daisuke



- 右上：蒼天釉茶盃
- 右下：桃花鳥釉菓子鉢
- 左上：極灰釉飛鳥ぐい呑み
- 左下：極灰釉波紋六角皿



大沼 吹雪 新連載

今回から、「ジェノグラム for Everyone」という連載を始めます。マガジンとの出会いは2020年。ジェノグラムについて調べの中で千葉晃央さんと出会い、それをきっかけに、ときどき読むようになりました。それから6年。今度は自分も書くことになりました。

私は秋田県横手市役所の職員です。児童福祉を担当したことをきっかけにジェノグラムと出会い、その後、いろいろな方から学ぶことができました。国の調査研究事業の委員を務めたり、現在も秋田県の法定研修で講師をしたりしています。

ジェノグラムについても、仕事についても、分からないことや「これ、どうにかできないの？」と思うことに、ずいぶん首を突っ込んできました。そんな中で、自分だからこそ見えてきたこと、伝えられることもあるかと思っています。そんなことを、この連載で少しずつ書いていきます。どこかで「それ、私も思った！」があればうれしいです。これから、どうぞお付き合いください。

ジェノグラム for Everyone

P 288

八木 慎一

日本全国の人が感じられていると思いますけど、暑いですね。京都も盆地やと、39度とか平気であります。ただ、福祉事業所の開所時間には、明確なサマータイムはなく、9時から16時までオープンです。農業を仕事にする「農福連携事業所」でも、変わらずです。日中畑に出て、海老芋の土寄せ作業や、ナスの剪定作業をしているのですが、周りの農家さん誰一人として田畑にいません。農家さんは朝5時から9時。そこから昼寝して、16時から19時みたいな動き方なんです。ちょうど僕らが動いている時間と逆になっているんです。これが農福のつらいところなんです…。

対人援助のジレンマのありか P282

シルバーマン 恵子

強くなってきた雨と風の音と気配。そして、いつもと変わらぬカエルの声に包まれて、この短信を書いています。今年もエルニーニョでハリケーンの数はいくつも増えそうという予測を春頃に聞きました。毎年、ハリケーンは発生しますが、必ずしも住んでいる島に上陸するわけではなく、最後にこの島に上陸したのは2014年。その時は、大量の木々がなぎ倒され、大好きだった近所の木のトンネルも壊滅し、3週間ほど停電が続きました。

この島がハリケーンの影響をどのくらい受けたのか？がわかる明日の夕方に飛んでいき、状況を確認できれば、とこんな時にも、タイムマシンが欲しくなります。

気づくと今年も折り返し地点を越えただけではなく、もうすぐ残り三分の一だと思ふと、時の速さに圧倒されると同時に、来年の日本は、世界はどんなところにいるんだろう？パレスチナは？ウクライナは？米国はどんな状況だろう？そして、日本と中国の緊張感は？と、タイムマシンも欲しくなりますが、私たちが少しでもより人間らしく生きられる方向に流れが向かっていくことを祈りたいと感じています。

今日は終戦の日でもあります。父親を戦争で亡くした両親の元で育った私は、子どもの頃は、「おじいちゃんに会いたかった」と、会ったことのない祖父の存在を残

念に思っていました。



今の私は、戦時中の貧困や戦後の混乱の中で、父親のいない家庭で育った二人が、どんな思いで、そしてどんな困難を抱えながら、急速に変化していく社会の中で家族をつくろうとしたのだろう、と想像します。私たちの社会は、世代を越えてまだ戦争の大きな影響の中にあると感じます。戦争を始めない。戦争に加担しない。そして、解決に向けて関わっていかうとする。そんな流れが、これからもっと強くなっていくことを願っています。

対人援助のための NVC P280

八木 明恵

AIは人間ではないと分かっているのに、AIとの人間関係に悩むことがあります。

研修では「AIに心はありません」と言い切っているのに、普段の私は、まるで心があるかのような錯覚に振り回されることがある。「どうしてそんなことを言ったの？」とAIに問い詰めて、返ってきた答えがあまりにもとんちんかんだと、なぜかとても安心します。「ああ、あなたもやっぱり計算機だったのね」と。

毎日かなり長い時間を一緒に過ごしているからこそ、近づきすぎたり、逆に距離を取り直したり。その繰り返しです。

AIとの付き合い方を考えることは、案外、人間である自分の側を考えることなのかもしれません。

思考の補助線 P276

田中 千晶

先日聞いていたラジオのテーマは『あなたの人生のテーマソングは？』でした。人生！と聞かれると1曲に絞れないので

すが、その月、その季節、その時の心情にはこれ！という曲はパッと思い浮かぶタイプです。

切羽詰まるほどボルテージが上がってくる私。課題提出や資格試験前のテーマソングはももいろクローバーZの『ワニとシャンプー』です。この原稿作成も『絶体絶命！Summer Night 完徹決定！All Night ヤバイ！ ヤバイ！ まちでヤバイ！』という歌詞がピッタリ！ギリギリでいつも生きています。（これはまた別の歌の歌詞）

森で出会えば・・・ P274

本林 友梨

もう夏も過ぎようとしている。前回の執筆から今回の執筆までの3か月間で、プライベートでも仕事でも研究活動でも様々な経験があり、はっきり言って、調子を崩した。「こうやって調子って崩れていくんだなあ」というのを人生で初めて体験した。何か怖い大きなものに引き込まれていくような感覚だった。必要以上の刺激を受けたくないと思心の底から思っ行動する日々を過ごした。

とはいっても、時間は過ぎる。マガジンの締め切りは来る。「とりあえず、書かなきゃ。続けなきゃ。」ということで、本当に久しぶりに研究と向き合った。マガジンがなければ、まだ向き合うことはしていなかったと思う。ありがとう、対人援助学マガジン…。これぞまさしく、対人援助のマガジンだ！（次の短信には楽しい内容を書きたい。）

心理臨床における 多重関係を考える P270

馬渡 徳子

夏休み、三月まで石川中央地区にて二次避難を継続していたが、口能登地域(能登の入り口付近の自治体)に新たに住居を構えた子ども世帯と、偶然に能登につながる道の駅で再会した。

社会福祉協議会主催の研修講師を終えて、名物の能登ジェラートを口いっぱい頬張っていたところに、「のりこせんせい、どしたん？ めっちゃ、おしゃれしとるじ。」と声をかけられた。ママにも「幸せそうな顔し

て。笑。」

この子は、対人援助学マガジン第60号執筆者短信に紹介した2025年春の就学にあたり、「ほんとうは、のどのしょうがつこうにいきたい。」という気持ちを二次避難先の祖父母に制止され、親になかなか伝えることが叶わなかったが、私に打ち明けたことをきっかけに、親に気持ちを伝える練習をして、パパが単身赴任先から帰宅している晩の風呂場で伝えることができたあの子ともである。

パパとママから、残念ながら希望は叶えられないが、打ち明けてくれたことを喜んでくれ、『はばたくとり』の折り紙を持ってきた。「これしっとる？ はばたくとり っていうげんよ。かなしいことやこわいこと があったら、これをうごかしたら、こころに まほうがかかってふきとばしてくれるげんて。いっこ、あげるね」と私に報告してくれ、その後は私が保管している『はばたくとり』で元気のない友だちをみつけると元気づけていた。

小学二年生になり、背丈もぐんと伸びていた。「せんせい、ダンスとボード、やってみるよ。」と嬉しそうに報告してくれた。そうして、今習っているストリートダンスを披露してくれた。

どうやら、三歳から習っていたダンスとボードの習い事を再開するために、パパの勤務先にも30分以内に着けて元々習い事に通っていた自治体に引越すという選択をされたとのことだった。

パパ・ママによると、その自治体には公共交通機関が複数あり高校卒業まで利便性が高いこと、親自身も石川中央地区での地震後の新たな生業を継続するためにも移住した子育て世代が結構おられるとのこと。今後の家族構造の変化にも対応できるようにと、県職の公務員試験を受験し続けている友人もいるとのことだった。ふるさとの仮設住宅で暮らす祖父母世帯にも近いこともそのような選択をされた要因とのことだった。

『はばたくとり』ね、めっちゃ大活躍しているよ。ありがとうね。またいつか会えたらいいね。」という、うんうんと頷いていた。

招かれし朱鷺よ
揚げよと祈るは
幸福の種まきなり

2026年5月31日本邦初の朱鷺放鳥

に寄せて



今号は本文をお休みさせていただきます。

馬渡の眼 休載

水野 スウ

8月末日をどうにか無事に迎えられてホッとしているところです。2年前から、夏になると夫婦して急に具合が悪くなる、を繰り返していたんだけど、今年は年々暑くなる地球にとうとう白旗をあげて、わが家に初めてエアコンを取り付けました。

電気にあまり頼らずに暮らしたいと、向かいの雑木林を抜けてきた風が南北東の大きな窓から自由に出入りする家を建て、それで特に苦もなく30年間、暑かったら扇風機を回すくらい、それでも「スウさんち涼しい～」といわれるほど、無理にがんばることなく穏やかに夏を過ごしてこれたのですが、ついに。

とはいえエアコン設置を決意するまでの涼しい6月、続く急に暑い7月とで、老いた胃腸はとつくに悲鳴を上げていたんでしょ。いまだにおかゆ中心の、お腹をいたわりながらの日々が続いています。やれやれとほほ。

温暖化の脅威は、つい先ごろの北陸への突然の豪雨や、ついには氷河までも崩れ落ちるほどに迫っていること、実感します。まじ、戦争なんかしてる場合じゃない！です。にもかかわらず、高市首相は戦争の準備に突っ走ってるとしか思えない政治をしている。2月の衆院選以来、多くの市民が声を上げ、路上に立つようになったのも、憲法に関心を持つ人が増えたのも、そういった危機感の表れか、と思います。

憲法のお話出前の注文もまた増えてきました。そんなこんなで、今回は憲法語りの初心に戻って、憲法前文のこと、前文ワークショップのことを書いてみました。お読みいただけたら幸いです。

きもちは言葉をさがしている

乾 京子

「暑いですねえ。」「本当にいつまで続くんでしょうねえ。」「一雨欲しいですねえ。」このところ毎日のご近所さんとの会話です。まったく、年々暑さが厳しくなってきました。

とはいえ、一方沖縄や関東では台風だ、ゲリラ豪雨だと大雨による死者まで出てきています。地震の後の熊本も気になります。地球が悲鳴を上げているというのに、温暖化を防ぐどころか、ウクライナもガザもイランも戦争によりますますひどい状況です。

80代を前に、体力もそれなりに落ちてきているのでしょうか？この夏は、夏風邪をひいたり、立ち上がるのとくると目が回ったり、体調を崩すことも増えてきました。自分の体力を過信せず、身体と心の声に、今まで以上に耳を傾けていないといけないなあと思った今年の夏でした。

じゃりんこ文庫 P268

中谷 陽輔

この文章を書いている8月25日は、小学生の息子の夏休み最終日です。とはいえ、我が家は共働きなので、お盆休みの数日を除いて、子どもたちは学童・保育園を利用し続ける日々でした。

ただ子どもたちは、連日の熱中症アラートにより、一日中室内で過ごさざるを得ない日もかなり多かったようです。そんな子どもたちへの親としての心苦しさも相まって、休みの日はなるべく外出していました。

プールはもちろん複数回。夏祭りなど、夏休みならではのイベントにも多く足を運びました。屋外で開催されるものはなるべく夕方から参加し、できれば空調のきいた屋内で開催されるものを選ぶ日々(ショッピングモールで開催されるものが、とってもありがたい……)。

そんなこんなで、“涼”を求め続け、子どもたちと親自身の体調管理にも努め続けた夏休みが、もうすぐ終わります。外出日和となる秋が、もうすぐそこまで来ている、はず(!?)です。

子育てを終えた先輩方からは、子どもが

楽しくお出かけについてきてくれるのも、せいぜい10年くらいと聞きます。だからこそ今のうちに、子どもたちのお出かけをできるだけ楽しんでおきたい……！と自分に気合を入れつつ、秋の外出計画をさらに練りたいと思います。

コソダテノシンリ P245

団 士郎

自分のことを、太っちょの爺さんだと思う日が来るなど想像したこともなかった。しかし実際、ドール四条店のカウンターでミラノサンドAを待っていると、左手に大きな鏡があって、写っている自分が目に入る。

そこにいるのは紛れもなくお腹が出たふとっちょ爺さんである。見慣れない感じはあるが、そう嫌なわけでもない。自慢できることではないが、八十年近く、ダイエットなど考えずに生きて来た。(健康には気をつけているので太りすぎには注意を思っているが、そのリミットを年齢に合わせて増やしているのは問題か？)

大学生時代、一番痩せていた時、身長は今と変わらないが体重52キロだった。それが現在は77キロ、25キロも太った1.5倍人間になっているわけだ。もともと年齢は3倍になっているし、人間としてはもともととど(笑)。

その割にどこことって体調の悪いところは今のところなく、あちこち動くのが億劫でもない。歩く速度はやや遅くなった気がするが、まあ歳相応だと思えばいかほどのこともない。



写真を読み込んでチャッピーに「似顔絵を描いてみて」と言うこんなモノ(左)が。「もう少しふざけた感じにして」というと右が。漫画家の出番もなくなるわなあ。

晩年D・A・N通信 P33

内田 一樹

「継続する」とは何かを考え続けた夏だった。20年来ファンだったSCANDALというガールズバンドが、来年21周年を機に活動終了を発表した。同一メンバーで世界一長いガールズバンドという記録を持っていて、女子高生バンドとして彼女たちがデビューしたとき、同じように男子高校生だった私は、その後の人生の節目や様々な思い出と共にその時々の彼女たちの歌がある。「継続する」とこと何かの「終わり」。自分にとっての節目も考えていく時期に来ていると思う。

社会科の授業を 対人援助学の視点から P256

宮井 研治

今回の掲載で、14回分書き上げました。唐突ですが、今回で一旦休載しようと思います。「書きてえ」という思いから始め、1回分だいたい5000字を書いたわけです。駄文とはいえ、概算七万字はなかなかの作業でした。とりわけ、「締め切り」という言葉が大の苦手でありながら、よく書けたかなと思います。

ここで一休みして、自分の書いたものを少し見返してみようかなんてね、そんなことを考えての休載です。まだまだ書きたいこともありますのでそのうち戻ってきます。

こんな身勝手な一執筆者の意向を尊重してくれる懐の広い団編集長をはじめ、大谷編集委員、千葉編集委員には感謝の言葉もあります。では、その時まで、アディオス！！

人生は対応のヴァリエーション P263

櫻井 育子

涼しい夏だった。わたしは夏が弱いので、過ごしやすくていいのだがなんだかんだと体調に左右されることが続いた。それで、ということではないのだが、自分が移動し続けてきたフェーズから、「来て欲しい人を宮城に呼ぶ」という方向にちょっとずつシフトしている気もする。意図してそうしているわけではないのだが、やはりそこで

わたしの周りの人が、わたしの好きな人たちに会ったときの促進力たるや、最高なのである。オンラインで団士郎さんのトークライブを久しぶりに聴いて、ああ、やはり直接聴きたい、と思った。そうそう、東京で遊さんに久しぶりに会って話ができたこともあって、やはりもっと「直接会う」という機会を大事にしたいと思った。

いや、やはり大事なものは、ちゃんと「身体ごと」出会う、ということなのだよね、と思った。

生涯発達支援塾 TANE 代表

shukou0122@gmail.com
<https://ikuko-sakurai.com>

現象学としての書道 P243

畑中 美穂

前号の短信で、種から蒔いて藍を育てていること、無事に育って何らかの作品になったら「ご披露します」と書いた。その後すくすくと育ち、葉を摘んで布を染めたり紙を漉いて入れたり。作品の素材としての制作もあり、藍もまだまだ成長中。毎日何かしら藍のことを考えて、夏休みの自由研究のよう。日々にぎやかだ。



おもしろいと思うのは、藍をどの視点から見るかで見え方が違ってくる、ということ。というわけで、作品といえば作品(?)な一枚を。生地を捏ね、チーズだけでシンプルに。染めるだけではない藍のたのしみ方。

一語一絵 P206

渡辺 修宏

暑い日々が続きます。そして時々各地で、大雨とか地震とか、災害が続きます。海の向こうでは紛争や戦争がずっと続いております。

世の中を知れば知るほど不安にかられます。そこに YOUTUBE やネットニュースの情報を追加すると、ますます不安が増すばかりです。私たちが住むこの世界の未来には、悲しい出来事しか待っていないかのような気持ちにすらなってしまうです。

でもですね。よくよく考えれば、そんな不安なんて、いつの世にも蔓延っていたような気がします。そしてその時その時に、心ある人たちが一生懸命努力され、悲しみを招く出来事を予防され、回避させてきたような気がします。

私たちも、私も、今を生きる者として、努力しなければいけないんだよね...この世界を次の世代につなげるために。

対人援助実践をリポートする この一冊 P209

玉村 文

長男が小学生になり、初めての「長い夏休み」を経験しています。京都の酷暑の中でも、毎日お弁当を持って学童へ。学童から帰ってくると、子どもたちは公園へ遊びに行きます。

朝は町内会のラジオ体操にも参加しています。それにしても、ラジオ体操のある午前7時台から、すでに暑い。そんな暑さにもかかわらず、子どもたちは朝晩と公園に行くのがすっかり日課になっています。この暑さに適応するように、子どもたちの身体は進化しているのではないかと思います。ほど元気です。

一方、私はいつと、すっかり夏バテ気味の7月、8月を過ごしています。町内会が機能し、地域の中に子どもたちを見守ってくれる目があること。そのありがたさを、今年はこれまで以上に感じています。暑さは厳しいけれど、子どもたちの元気に励まされながら、なんとか夏を乗り切っています。

応援 母ちゃん

P189

杉江 太郎

児童福祉の現場で働く杉江と言います。以前に原稿でも書いたことがあるのですが、今年度も団士郎さんの DVD を使った勉強会を開催する運びとなりました。今年度で4回目の開催となります。もう慣れたもので、職場内の決裁を得て、日時を決めて、団遊さんに連絡を取り、参加者を募り、DVDを受け取り、動作確認を行い...マガジンが発行される時期にはもう終わって、DVDも返却しているでしょう。

組織の中だけで行っているの、何も気を使うことはなく、気持ち的には安心して行えます。これが、他の職場に声をかけるなどとなると、他の職場の上席に了解を得たり、出張費の問題や、駐車場を確保したり等、研修以外のことに気を回す必要があります。そうしたことを考えずに自身の決定の範疇で行えることは非常にありがたいシステムだと思っています。

そして、勉強会を行っているのは DVD 中の団士郎さんであるにもかかわらず、なぜか自分自身が勉強会をしたかのような自己肯定感を高める気持ちになるのでお勧めします。組織の交流を図るために開催されてはいいがでしかうか。

「余地」-相談業務を楽しむ方法- P178

米津 達也

人生初の会社役員となった。「いや〜取り締まれ役ですわあ」というお決まりの親父ギャグも使える。

思えば就職氷河期、カバンひとつ抱えて上京。社会人一歩目は、マンションの1室で細々やってる小さな制作会社だった。山登りと一緒だ。ぼつぼつと登りながら、先の見通せない頂上を目指していく。振り返ってみれば、登ってきた山道よりも、出会った人々に感謝の念を抱く。足下の道はいつ崩落するとも限らないが、引き返すことができないのだから、この先もぼつぼつと歩みを進めるのみです。

川下の風景 P201

川畑 隆

最近、見てよかったもの

…「スターゲイトホテル関西エアポート」(泉佐野のりんくうタウン駅直結)の45階の部屋からと最上階54階のレストランからの眺め。閑空とそこを離発着する飛行機がオモチャノのように見え、泉佐野、泉南、熊取、貝塚、岸和田…そして淡路島が眼下に広がります。青い海、それが暗黒に沈んだ後も、散りばめられた宝石の中に大蛇のように横たわるオレンジ色的高速道路。なんと贅沢な時空。

…映画「マイケル」。中でも、子役のマイケル・ジャクソンの素晴らしい歌声(もしかして声は本物?)というより、歌詞を物語るようなボイスは耳に、ムーンウォークは目にこびりついています。

…京都市京セラ美術館での「日本南画院京都展」は水墨画の全国サイズの展覧会。児童相談所時代の同僚が作品を発表していることもあって入場券をもらい、毎年出かけています。よいです、水墨画。墨であること自体にすでに懐かしさが充満していて、見入ってしまいます。

最近、見なければよかったもの
…リモート会議にバスローブ姿で出席したカニング竹山似の秋田県幹部職員動画。そこに愛人も顔を見せ、またその顔にモザイクがかかっていたのも、なんというか、これがギャグだったら安手でも拍手してやったのに。

横書き都々逸②

P 187

浅田 英輔

青森は、ねぶたが終わり、お盆が過ぎるとほんとに涼しくなる。まだ日中は暑い日があるけど、夜は窓を開けていると寒いくらいだ。となると、雪のことが心配になる。いやだなあ、雪。

開業祝いということで、団編集長にイラストをいただいた。本文でつかっていきませう！

<https://co-aomori.net/>

臨床のきれはし

P 91

松村 奈奈子

夏の暑さに負けて、7月に長野県の大町市に避暑。黒部ダムアクセスポイントでもあるので、久しぶりに黒部ダムの見学もしましたが、印象に残ったのは「信濃大町駅」の近くにある昭和レトロな『大町名店街』。



近くの駐車場を見ると他府県ナンバーの車がいくつかあり、若者が「エモい」なんて言いながら写メを撮っていました。ネットで見ると、長野でも残り少ない、有名な昭和のアーケードの様です。地方都市に行くと時々見かける昭和の商店街は、再開発の波が来なくて、時の流れのままに経過したという事でもあり、いろいろ考えさせられます。でも、とっても魅かれるので、微力ですが名店街でご飯を食べながら、頑張ってくださいーい、また来まーす、と思いました。

神科医の思うこと

P 127

村本 邦子

震災15年を振り返る12日間の巡業中。どこに行ってもたくさんのお話が聴ける。自分たちもそうだが、変わらないものもある。時間が経ったからこそ語られることがある。こんな形で出会ったからこそ語られること、この場が開かれたことで生み出される語りがある。

すべては一期一会である。生きていることの尊さ、それは死者とともに生きていることの尊さなのであるが、それをしみじみ感じ入る。

周辺からの記憶

—東日本大震災家族応援プロジェクト—

P 104

9

國友 万裕

夏休みになって、やっと落ち着いてきました。この半期間は本当に大変でした。そして、それは立命館の映画の講義を受けただけからです。去年と比べて、仕事の量が増えたわけでもないのに、今年はいつもの年にも増して、体がしんどくて、家に帰るとそのまま眠ってしまうような生活でした。コマ数は変わってなくても、やはり京都から大阪まで行くのがしんどかったんだなあということがあらためてわかりました。大阪とは言っても、茨木ですから、京都と大阪の中間地点ではありますが、やはり京都に仕事を固めた方が楽なんだなあと思ったものでした。

立命館の授業が終わった後の楽しみはカフェ「ぶいいい」という駅前のお店で、ご飯を食べることでした。ちょっと高めではあるのですが、とても美味しくてヘルシーなお店でした。何よりも味噌汁が具がたっぷり美味しい。それとトーストのセットも美味しくて、本当にこの店で食べるのが楽しみで通っていました。

毎週ここで食べていたので、最終授業が終わった後で、店のお兄さんから「いつもありがとうございます」と言ってもらえました。しかし、残念ながら、立命館の授業はこれで終わりなんです。最初から半期のみのピンチヒッターという約束でしたし、来年以降また仕事を回してくれる可能性もあるけど、衣笠ならいいけど、他の大学での仕事が減らない限り、茨木まで来るのはやはりしんどい。

これからは体のことも考えながら、仕事をしなくてはなりません。僕は40歳過ぎてからは常に忙しく仕事をしていましたし、50歳ぐらいの頃は寝屋川の摂南大学で教えて、その後、京都の大学に教えに行っていたわけだから、今よりも忙しかったんですね。

だけど、あの頃はまだ今ほどにはしんどくなかった。老いは着々と近づいてきています。これからは老いを味わう生活にシフトしていかなければなりません。お金がないから仕事はできる限りたくさん続けなきゃいけないけど、侘び寂びを感じる人生に少しずつシフトです。

スポーツおじいさんになりたい！

三浦 恵子

7 月には熊本地震、そして 8 月には千葉の豪雨と、災害が相次ぎました。

亡くなられた方の御冥福と、被災された方の一日も早い生活再建をお祈りします。

熊本地震の報道に触れた瞬間、過去に自分自身が従事した被災地支援の業務、家族・親族が被災した東日本大震災に関する記憶の蓋が一気に開くような心持ちになりました。

被災された方に思いを寄せながらも映像を直視できるまでに日数を要した方も身近におられました。

被災地のインフラを圧迫せず、できるだけ速やかに支援が届く方法を考え、職能団体や現地でボランティアを受入れ調整する機関の支援を微力ながら行っているところです。

本連載でもとりあげた書籍『めざせ! ムシヨラン三ツ星 刑務所栄養士、今日も受刑者とクサクないメシ作ります』の「みようがはどこまで剥くんですか?」に関連して少し綴ります。

連れ合いに「御飯を〇合炊いておいて」と頼むと、硬さは一定であるものの、〇合の量が毎回かなり違っていました。調理実習で教わった「米1カップ、水 1.2 倍」を順守する生真面目な連れ合いなのですが、実は「カップ」を「コップ」と記憶していたのです。文字通り「コップ」のときもあれば、「マグカップ」のときもあり、ある時は茶碗のことも…目についた「容器」を使っていたため、炊きあがりの際に有意差が発生していました。「いや、カップは 180cc、1 合って決まっているから」と伝えたときの表情がいまでも忘れられません。これも「男子あるある」かもしれません。

現代社会を「関係性」という観点から考える

P171

坂口 伊都

『対人援助のための「観察力」と「質問力」の磨き方 実践に役立つ事例・ワーク・質問集』の執筆者の顔合わせと出版記念イベントで石川県に行ってきました。

オンライン研修は編著の千葉さん、寺

本さん、早樫先生のお三方が中心に展開していきました。

京都駅からサンダーバードと北陸新幹線を乗り継いで金沢へ。どちらの電車も初めて乗ったのでウキウキで旅行気分が止まりません。電車旅、楽しい。初対面の執筆者の面々と編集者に緊張したのは最初の方だけで、笑いが尽きない和やかな顔合わせになりました。

オンライン研修は、【対人援助に役立つ! あなたに直接伝える観察力と質問力の磨き方講座】という内容で、私の事例も取り上げていただきました。皆さんの話を聞きながら、改めて何を観察しているのだろうか? 私は、どのような話題ならこの人は反応したくなるかを探しているなあと思います。話題の内容だけでなく、口調やトーンをどこにチューニングしたらいいのかなとやっていると、ここかなと感じる瞬間がみつかるようになります。しかし、それがみつからないで終わると徒労感に襲われる。それを回避したい気持ちも手伝って、黙々と観察を続ける私が出来上がっているのかも知れません。

療育手帳の向こう側

P99

河岸 由里子

【片付け】私は片付けがあまり得意ではない。もったいない、まだ使える、いつか使うかもしれない……そう言っでは、あれこれ取っておく癖がある。

事務所の物を少しずつ整理しており、今日は古い本を捨てようと並べてみた。しかし、懐かしさからつい手に取ってしまう。なにせ五十年前の本だ。



当時「ことてん」と呼んでいた大きく重い心理学事典や、行動理論、数心理学、異常心理学などの教科書たち。ページをめくれば、恩師や友人の顔、当時の学校の様子が鮮明によみがえる。

その先生方も、今では皆お亡くなりになってしまった。佐藤方哉先生にはよく銀座や新宿へ飲み連れて行ってもらったな、印東太郎先生の授業は難しかったな、山本和郎先生の授業は面白かったな、と記憶は尽きない。こんな感傷に浸るのも歳のせいかもしれないし、これでは片付けがちつとも進まない。いい加減、捨てようよ私。

ああ、相談業務

P66

先人の知恵から

P144

中村 正

娘夫婦がアメリカに出かけるという。2026 年秋学期からだ。彼が大学の医学部に所属しており、附属病院の医師をしている。大学からサバティカルリープの機会を得た。3 歳の子どもを連れていくという。医学領域なので人文系とはずいぶん異なる。2 年間になるらしい。

アメリカ東部のアイビー・リーグのひとつ、イエール大学というところだ。コネチカット州ニューヘイブンという大学街にある。ニューヨークから電車で 2 時間近くかかるらしい。

娘も心理臨床について研究したいと張り切っている。問題は円安だ。保育園、住まい、自動車にはじまり、日常生活費がとても気になる。保育園は1ヶ月に 30 万円ほどらしい。驚く。研究資金は確保しているみたいだが、やはり生活費は自弁だから気になる。気温は-5 度から 28 度の幅らしい。夏は京都よりはるかに過ごしやすいが冬が大変だろう。私の連れあいは海外が好きなので、ちょくちょく行きたいといい、同じように楽しそうにしている。

私もサバティカルで長期の海外滞在を複数回経験しているので気持ちは分かる。ちょうど同じ頃、娘が 3 歳の時に、カリフォルニア州バークレイという街で父子生活をして過ごしたことを思い出す。世代が一回転したことになる。ネットが発達しているので情報収集という点ではずいぶんとスムーズだが、やはり現地で生活しながら得ることは大きい。私も何度かいくことにするか。

臨床社会学の方法

P20

中島 弘美

「わあ、涼し〜い、長袖の服を持ってきて良かった〜」そう感じたのは、北の大地、北海道。気温は20℃前後だ。

この夏、北海道の東部、釧路空港に着し、知床、摩周、阿寒湖などを訪れた。知床岬や、摩周湖など、聞いたことがある地名ばかりだが、訪れたのは今回が初めて。とにかくどこも景色が美しい。空気が澄んでいて、車道のすぐそばに、フツーにたんちようがいたりする！いくつも牧場があったり、コーン畑やそば畑が続いていたり、あちこち緑がたっぷりだ。

知床五湖の高架木道は一湖まで歩道が整備されている。熊などに遭遇しないように、安全が保たれていて、すがすがしい気分で歩くことができた。摩周湖は、摩周ブルーと呼ばれる湖だけでなく、摩周岳も美しかった。阿寒湖温泉の宿からは、湖が見え、時間によって周辺の様子が変わるのも面白かった。この大きな湖が冬になると一面が凍って、わかさを釣ることができるらしい、かなり寒そう。寒い時期は冬の自然の美しさをきっと見ることができるのだろう。

カウンセリングのお作法 P 30

黒田 長宏

Youtube マーサとクッピのチャレンジトークも番号が30回になった。その中の演奏の部分だけ抜き出した Tiktok が、はまる人にははまってしまったというコメントをいただくことが出てきた。ということは、やたら多くの人に知られれば、かなりはまる人が出てくると想像される。『マーサとクッピのチャレンジトーク』で検索すれば出てくるパフォーマンスに希望を見出そうとしている。

あぁ結婚 P155

脇野 千恵

もう猛暑には慣れてしまった。世界情勢は日に日に悪くなる。温暖化が進む中、私のような者でも、確かに気候変動を身近に感じる。わずかな面積の畑を借りて野菜を育てるも、容赦ない太陽熱に、いくら

水をやっても実がならない。土は硬くなり雑草もなかなか抜けない。近隣の農家は、夏野菜を育てる難しさを吐露する。特に葉物の育ちが悪いそうだ。

我が家はまだまだ田園風景が楽しめる地域だが、米づくりに変化を感じる。作付け期間が短くなり、すでに稲刈りを迎えている。東南アジアのように二期作も可能になるかもしれない。

気になるのは食料自給率。日本は34%、なんと東京は0%。驚きだ。食料はお金で買えるものという当たり前のことが、当たり前でなくなる時代が来ないことを願うが、私たちの健康を維持する食料をどこからどんなふうに調達しているのか、真面目に考えておくことが大事だと思う。

こころ日記「ぼちぼち」 P 204

岡崎 正明

以前短信で最近「旅」についている、みたいな話を書いたが、今年もすでにこの8月まで、山口・高知・瀬戸内の島・仙台・福島・佐賀・長崎と行かせてもらった。仲間との研修あり、友との二人旅あり、家族との旅行あり。どれもいろんな味わいや想い出がたくさんである。

その中でも運命的なものを感じたのは、30年来の友人と2で行った、高知の足摺岬である。これまでも高知には何度か行ったことがあったが、高知市周辺がほとんどで、足摺は初めて足を踏み入れた。第一印象としては、とにかく遠い！高知市内から車で3時間もかかるのだ。そしてそれ以上に心に残っているのが、ジョン万次郎である。



これまで私の幕末知識では万次郎は「海で遭難してアメリカの捕鯨船に助けられた漁民」「英語が喋れるようになって帰国し、侍にとり立てられたラッキーな人」程度の理解であったが、ちょっと調べると実は他にも一緒に遭難した仲間がいたのだ

と。だったらなぜ彼だけが歴史に名を残すことになったのか？その背景に何があるのか？興味が沸き、記念館へ足を運んだ。

結果を言えば大満足大興奮！何より現地に行った際に「ジョン万次郎を大河ドラマにしよう」的な誘致活動をほそぼそやっていたので、気まぐれに私も友人と一緒に署名したのだが、旅行から帰って1カ月ほど経った頃、ネットニュースで「2028 年大河ドラマにジョン万次郎決定！」の文字が。これってオイラたちのおかげ？といったもの勘違いパワーが出たのだった。

ちなみにジョン万次郎が漂着した無人島に、それより50年前に漂着し、13年間そこで生き永ええ、ついには船を作って自力で帰国した「無人島長平」という人がいたと記念館の展示にサラリと書いてあり。「むしろそいつのほうがスゲー——！！」と盛り上がった。いつか長平も大河になるかなあ。

役場の対人援助論 P 86

柳 たかを

僕の本棚に長年にわたり古びた薄いハードケースに入った四角い書籍がある、英語学習を目的にした本で英語小説をネイティブの朗読者がゆっくりと読み録音されたマルチメディア書籍だ、その朗読データが収録されたプラスチックの小さなレコード盤が数枚、後ろの頁に添付されている。

収録されている作品は3作「むじな」「雪女」「耳なし芳一」。原文を書いたのはラフカディオ・ハーン、明治の頃、英語教師として明治政府に雇われ来日した、先日のNHKテレビの連続朝ドラ「ばけげん」で描かれた外国人英語教師・作家で、日本の怪異な伝承話を取材し英文で記録、後世に残した。

この朗読冊子を購入したのは50年前のことになる、僕が今も描き続ける一コママンガ作品にはキャプションといって、それぞれのマンガ作品に短い説明文をつけます、マンガ作品の意図を簡潔に伝えるメッセージ文のことです。

毎回いかに見た人の心に届く「キャプション」「言葉」を見つけるかに苦心します。日本語でキャプションを考えると選択肢が多すぎて迷うのですが、英語に直してみる

とこちらの語彙力が無いのが幸いするのかわずかひと言ですむことが多い。

ハーンの英語の「怪談」には、ガイジン
の目を通した日本の要約、「約束」や「タブー」といった万国共通のテーマの物語へ
単純化され、シンプルにストンと胸に入っ
てくるように思います。今回はそのうちの
「雪女」に取り組んでみました。

「雪女」 P131

原田 希

歳をとると白髪(毛)が増える牛さんが
います。白が増えて黒が消え、大きな斑
紋の形も変っていくことがあります。今回
は美容院の話を書きましたが、白髪の生
える場所で体の弱っている部分がわかる
そう。

白髪が増えた牛さんを見つけたらそっと
撫でていたわっています。北海道は朝晩、
秋の空気になってきました。



原田牧場Note P184

竹中 尚文

月に 1 回のホームレス支援だけれど、
提供するの食品[いなり寿司・ゆで卵・
アルファ米・月替わりの食事]と日用品[固
形石鹸・ブラシ・ひげ剃り・ヘヤーブラシ]
である。アルファ米は災害用の賞味期限
に近づいた物を寄付してもらっている。日
用品の多くはいろんな人たちが少しずつ
提供して下さる。いなり揚げは毎回 300
枚以上を使用するので、卸売業者から配
送されてくる。買い出しに行くのは卵と月

替わりの食材である。今月は「冷たい素麺」
だった。先月は「バターチキンカレー」だっ
た。◆前日の準備作業は、ゆで卵は 60
個を茹でる。たくさんの卵なので、それな
りの難しさがあるが少しずつ腕を上げたと思
う。他に、お米を洗っておくことやカレー
などは野菜を切っておいて、これら準備物
を冷蔵庫に入れておく。この作業を私たち
夫婦で行う。ここにお葬式という予定外の
ことが起きると大変である。何度かそうし
たことがあるが、どうやってクリアしたか記
憶が定かでない。◆当日は午前中に「ご
馳走」の調理を始める。今回は素麺だった
から茹でただけである。4kg の素麺はそん
なに簡単に茹でられない。20 分の湯を沸
かして、1 kg ずつ茹でた。昼頃になると 3
〜6 升のご飯を炊く。昼過ぎにお寺の婦人
会の人たちが来てくれて、いなり寿司を作
る。それらすべてをワンボックスカーに積
み込んで 16 時ごろにお寺を出発する。大
阪の扇町公園に到着するのは 18 時半で、
大阪のボランティアの人たちが来てくれて、
荷物を駐車場から公園に運び込む。仕事
帰りのボランティアの人たちが少しずつ増
えて、19 時半には準備完了。その頃には
病院の診察を終えたお医者さんも来てく
れる。20 時半か 21 時に終了して、撤収
する。急ぐ人はこの時点で帰宅に向かう。
近所の食事処でボランティアの人たちと反
省会というか情報交換などをしながら遅い
夕食をとる。22 時ごろに終了となる。◆私
はここから姫路にあるお寺に帰る。これま
でだったら、1 時間半か 2 時間で帰り着い
た。それが、ここ数ヶ月、すっかり時間が
かかるようになった。眠くて仕方がない。
今回は 4 時間半もかかった。この支援を
始めて 13 年になる。その頃はひとつパシ
リだった。

路上生活者の個人史 P75

千葉 晃央

山口県での仕事の前に、時間を少し作
って長生炭鉱跡へ。1942 年、山口県宇部
市の海底炭鉱「長生炭鉱」で、崩落水没
事故が発生。朝鮮半島出身者 136 人を含
む、183 人が犠牲に。遺体は収容されな
いまも現在も。近年、ダイバーで遺骨回収
も、さらにそのダイバーも事故…。ここま

での経過は報道やドキュメンタリーで複数み
てきた。

現場には JR 宇部線の線路の脇を通っ
て向かう。水路が道沿いにあり、そこには
カニたちがたくさん。民家もあり、そこを抜
けると炭鉱入り口跡。その横には真新し
い花がたくさん供えられた慰霊碑。碑も複
数。元坑道は海の下なので海面から突き
出ている排気塔(通称「ピーヤ」)があり、
その 2 本が今も砂浜から少しのところの
海の中、その波間に立っている。

事故の説明プレートもある。慰霊、保存
等の活動も複数で活発。この炭鉱を含む、
元宇部炭鉱に関しては、宇部市石炭記念
館があり、後世に伝えている。訪問すると、
当時の坑道出入口が再現されていた。現
場を訪れて思うのは、報道ではわからない、
様々なこと。一方のニュースでは防衛
費の拡大がますます進む…。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P16

見野 大介

職業病の腰痛防止のための朝散歩、
暑すぎてサボってます。腰のためにも早く
秋になってほしいです。

ハチドリの器 P4

荒木 晃子

本年7月に主催した「対人援助学会第
36 回研究会」では、LGBTQ+ 当事者支援
を長きに渡り継続するお二人にお話し
いただく機会を設けた。筆者を含め、参加
した方々は、教育、心理それぞれの専門性
を持つお二人のお話から多くの学びを得
たに違いない。当事者支援について、知ら
なかったこと、異なる視点だから見えるも
の、(当事者を)知っている・理解している
から言えることなど、参加者がこれまで知
っている、理解できていると思っていた、
“勘違い”や思い違いに改めて気づいた方
もいるかもしれない。かく言う筆者も多くの
気づきを得たひとりである。

お二人のお話の後は、恩師の中村正先

生に指定討論をお願いした。直接、ゲストスピーカーへ、(いつもの)鋭い突っ込みを入れていただこうとの目論見があつてのことである。無事、作戦は成功したように思う。中村先生からの示唆は、結果としてゲストスピーカーのお二人の、より深い学びにつながったのではないだろうか。そうであつて欲しいと願っている。司会を担当した筆者といえ、お二人のゲストから得た多くの学びと、熱いディスカッションにパンク状態。閉会の挨拶を失念して、さっさと退室してしまうという大失態をやらせてしまいました。みなさん、ごめんなさい。

生殖医療と家族援助 P74

野中 浩一

ベトナム生活が始まって1か月。7月下旬に日本を発ってハノイでの生活がはじまり、その1週間後にはハノイからダナンに移動して、また新たな環境で生活しています。そんなベトナムの街を歩いていると、なぜか私の脳裏に昭和的なノスタルジーがよぎる瞬間があります。雑多な個人商店が多くて賑わっているからでしょうか。さて、9月からダナンは夏を終えて、長い雨季に入ります。そして私は大学での活動が始動します。先が読めない不安と、先が読めない楽しさ。どうぞ本編もご一読ください。

島根の中山間地から Work as Life P219

西川 友理

大阪キリスト教短期大学で保育幼児教育者養成に、またそれ以外の場所でも福祉系対人援助職養成に携わっています。

大阪を中心に、おやこ対話や当事者研究やらの対話の場でファシリテーターとして出没しております。

今回私は、本マガジンで「現象学としての書道」を連載していらっしゃる櫻井育子さんの講座に参加した感想を書きました。大変面白かったんです！保育にも、福祉にも、対話の場にも、いや、対人援助と呼ばれるあらゆる活動をしている人に、とてもおすすめです。

櫻井さんはどうやら10月にもこの講座を開催するご予定のようです。詳しくは本文に櫻井さんのHPのアドレスを書きましたので、チェックしてみてください！

福祉系対人援助職養成の 現場から P62

松岡 園子

朝晩、少しずつ秋の気配を感じるようになりました。店先には秋らしいものが並び始めています。私もそろそろ秋を楽しもうと思うのですが、暑いので今日も冷たい飲み物を選びました。気持ちは秋、身体はまだ夏。季節の変わり目は、いろいろと足まみがそろわないようです。

統合失調症を患う母と ともに生きる子ども P181

寺田 弘志

10月で開業30周年を迎えます。

何かイベントをやりたいと思っていたところ、ちょうどその時期に商工会議所主催で「茨木まちゼミ」が開催されることがわかりました。当院も「第19回茨木まちゼミ」に参加し、痛みやこりを改善できるセラピーごっこ講座を開きます。

内容は「専門知識がなくても家庭でできるセラピーごっこをおぼえて、あなたもゴッドハンドをめざしましょう」というものです。

開催日時 2026年11月7日土曜日
午後1時～2時30分 寺田接骨院下中条本院 電話 072-621-8888

2026年11月14日土曜日午後1時30分～3時 寺田接骨院西駅前分院 電話 072-621-8767

上記日時以外にも、「裏ゼミ」を設けています。裏ゼミ受講ご希望の方は、当院に電話でお問い合わせください。

10月20日以降にお電話でお申し込みください。参加費は無料です。

接骨院に心理学を入れて P163

篠原 ユキオ

運転免許センターにて

高齢者ドライバーの事故のニュースがあると「年寄りは運転するな！」という言葉が出る。高齢者にも幅があるがわが家の近所では多くの80代の元気な人たちが車を運転している。自分自身もバスと電車を使う事が多かったがまだまだ車は手放せない。

歳を取ると視力は落ちるし白内障が入って来て、夜の運転時には対向車のライトが眩しく視界に影響が出る。特に明るいとこのそばの影の部分が見えにくい。

これを自覚しているので夜は知った道しか走らない。それでも必要に迫られて出なければならない時はいつも以上に安全運転を心がける。

先日、免許証の更新に行った時、高齢者ばかりのグループの一番乗りだったが集まった人たちに向かって係員がこう聞くのだ。「皆さんの中でマイナ免許証にされる方はおられますか？」

マイナ免許証はマイナンバーカードと免許証が1枚になっている訳だが1枚で良いというのはその方が不安である。紛失すれば2枚分のダメージとなるわけだ。調べてみると更新時の講習がオンラインでも出来るらしい。

しかし説明の最後に(60歳以下)との但し書き。はなっから高齢者に出来ないようになっているのだ。予想通りだったが誰も手を上げる人はいなかった。最初から結構差別されてるんだよね。



HITOKOMART P197

山口 洋典

7月28日の令和8年熊本地震、各地で相次ぐ豪雨災害、さらにはネパールでの洪水と、災害が相次いでいます。被害に遭われた方々に、心からお見舞い申し上げます。

この4月から1年間、立命館大学の学外研究制度により、生活拠点を石川県七

尾市田鶴浜地区に据えています。比較的頻繁に利用している七尾線も、8月27日からの大雨によって線路の土台が流されたことにより、羽咋～七尾間で長期運休を余儀なくされました。

人と防災未来センター長も務める関西大学の河田恵昭先生は、災害多発時代であることを踏まえ、災害を防ぐ「防災」、災害の被害を減らす「減災」に加えて、「縮災」という観点を2015年に提示しました。

災害から復興に至るまでの時間を縮めようという視点であり、改めて人々の知恵と行動が重要であることを痛感させられる2026年です。

PBLの風と土 P157

鶴野 祐介

昨日(8月30日)、65年生まれてきておそらく初めての、気を失う体験をしました。熱中症でしょう。バス停でベンチに座っていた時、急に目の前が真っ白になり、額を地面にぶつけて気がつきました。周囲の方がたが介抱して下さり、濡れタオルや冷たい水のペットボトルを下さって、一息ついてからタクシーで帰宅しました。幸い、打撲傷だけで骨や脳内部には別状ないとの診断でした。しばらく静養することになります。皆様もどうぞくれぐれもご自愛ください。

うたとかたりの対人援助学 P151

鶴谷 主一

65号で10ページにも渡って紹介した「年長組お泊まり保育」は、今年度「熊」の出現によって外部での宿泊にピリオドを打ちました。27年ぶりに園で泊まることに変更したのですが、この変更は、最近の保育業界の傾向からいくと必然だったのかもしれない。

より子ども主体を重視した保育方法の変化、猛暑や環境の変化への対応、園運営の変化など、いろんなことが変化している昨今、「いままでと同じように」という固定概念こそ柔軟に変化させなければならぬのでしょう。

幼稚園の現場から

P54

山下 桂永子

昨日まで、旧友たちと北海道に2泊3日で行ってきました。8人でレンタカーを借りて小樽や積丹半島をめぐり、漁師宿での美味しい食事に、素晴らしい風景を堪能し、なにより30年前の話を共有できる人がいること、会わなかった30年を労い合える人がいるということがうれしくて、喉がカスカスになるほどしゃべり倒し、笑い倒した3日間でした。内容とは関係ありませんが読んで頂ければ幸いです。



心理コーディネーターになるために P139

鳴海 明敏

備忘録～理事長の独り言～

県庁職員を定年退職した翌月、2010年平成22年4月に新規開設された児童心理治療施設青森おおぞら学園の園長を引き受けて、15年間勤めました。

2024年令和6年秋に軽い脳梗塞で入院し、それを機に、翌2025年令和7年3月で園長職を退き、現在は、法人の理事長として、週に3日学園に顔を出すという生活をしています。

そんな生活をしながらか、思い出したことや気が付いたこと、整理しておきたいことなどのあれやこれやについて、思いつくままに書き残していこうかと思います。

学園のこどもたちのことを紹介することもあるかと思いますが、それなりのカモフラージュを施しています。

理事長として、週三日5時間ずつ出勤する生活も1年5か月を経過しました。「三日出かけて四日在宅」というペースにもだいぶ慣れてきました。時間の使い方が、少しずつ上手くなってきたと思っています。

新園長の邪魔をしないようにしながら、少し距離をおいて、学園の子どもたちと職員を眺めています。

月一のペースで開催している「フォーカシングの会」と、同じくらいのペースでウェブで開催している「(カウンセリング関係)文献を読む会」への参加が楽しみです。

8月には、弘前カウンセリング研究会主催の一日ワークショップの講師を頼まれました。ワークのテーマが「フォーカシング」だったので、「フォーカシングの会」と一緒にやっている“おひげのKさん”と一緒に引き受けました。

理事長の独り言 P241

古川 秀明

心理系や教育系の大学・大学院に通う学生を対象にしたワークショップを、5月から開催している。「若い人を育てたい」という、私自身の欲に突き動かされた、わがままな研修会だ。誰かから依頼されたわけでも、報酬をいただいているわけでもない。まったくの自主企画である。

現場で35年かけて培ってきたノウハウを学生に伝え、自殺予防に寄与できる人材を育てたい——それが目的だ。現在、10名ほどの学生が参加してくれている。受講料は無料。私も無報酬。

「よ〜し、存分に教えてあげよう！」そう意気込んでいたのだが、蓋を開けてみれば、私のほうが学ばされてばかりいる。むしろ、私が学生から学んでいるようにも思える。

いつまで続くかはわからない。けれど、この取り組みを、ひとつのライフワークとして大切にしていきたい。

講演&ライブな日々 P96

高木 久美子

<https://www.goishshoshimasho.com/>

國學院大學人間開発学部教授の柴田保之先生と障害当事者の方々が主催するお話し会「きんこんの会」に参加しました。「きんこんの会」には、先天性または出生

後の病気等で乳幼児期から障害をお持ちの方、病気や事故による心肺停止から蘇生後に重度の障害が残った方、神経難病の方などが集い、柴田先生の介助付きコミュニケーション「指筆談」の書字介助により、お一人ずつ、日々の生活のことから社会問題まで幅広いテーマで自由に発言されます。

会の前後や休憩時間に、私も参加者の皆さんと指筆談で個人的にお話させていただきました。

その日、お一人韓国出身の方がいらっしやいました。

その方は日本語が堪能で、指筆談介助で表音文字として書かれるひらがなもとても早くてよどみなく、お話するように対話できて一気におしゃべりに花が咲きました。私は以前韓国語を少し勉強していたことがあるので、その方の書字介助をしながらもつい、チャンス到来！と思ってしまい、「ハングルで何か書いてみていただけませんか」とお願いしました。

私はアルファベットは読み取ったことがあったのですがハングルは初めてだったので、慎重にと強く意識してしまいましたが、その方は私が緊張しているのがわかったのでしょうか。ゆっくりと書き始めてくださいました。

最初に縦線、それから横線から下に降りて縦線、そして横線。ストロークがはっきり私の脳のディスプレイに移りました。その通りに 1 画ずつ、その方と共に私の手のひらに力を増幅して書きました。子音の「m」を表す「ミウム」でした。

良い感じで同調できたようで、その後は、その方が少し速度を上げて書いてくださいました。

만나서 반갑습니다

「マンナソ パンガッブスムニダ」と読み上げると、「〇」を書いてくださいました。

“お会いできてうれしいです”

私もうれしいです！

まず、無事に読み取れたのがうれしいし、これから母語でもこの方のお手伝いができると思うととてもうれしい。もちろん韓国語をしっかりと勉強しなくちゃいけないけど。そして何より、本当にお会いできてうれしい。日本語でお話した時にこの方の強烈な魅力に釘付けになったので、介助者としてだけでなく、ぜひお友達になりたい

です！

新しい出会いがあり、かつて勉強したことが活かされたことがとてもうれしかった一日でした。

**ヨミトリとヨミトリ君で
ご一緒にしましょ！**

P228

大谷 多加志

充実しながらも慌ただしい日々が続いています。誘われると何でもホイホイ乗ってしまう質と、仕事が無いことを恐れる貧乏性が原因と思われますが、結果的に面白い体験になることが多いと、なかなか止められません。

とはいえ、体力も落ちてきて、無理をすればパフォーマンスも落ちてくるので、もう少しいい塩梅を探るべきなのかもしれません。そんなことを考えていたら、いつの間にか 3 か月経っている、というのが最近の暮らしぶりです。

発達検査と対人援助学

P 93



迫 共

今回は休載です。申し訳ありません。書きたいことはたくさんあるのですが、この夏は社会福祉士と精神保健福祉士の実習演習担当教員講習を受けており、時間と体力がなくなっていました。zoom で 17 日間の講習。コロナ対策の時期を思い出しました。zoom 講習の合間に投稿論文の査読の返しと紀要論文作成、科研費申請などを行っています。

9 月 2 週目に後期オリエンテーションが始まります。ようやく一息つけそうです(笑)。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

休載

家族療法を学んだ人、日常でどう活かしてる？

実践から学び続ける事例検討

2

千葉 晃央



事例検討がない…

京都国際社会福祉センターで家族療法を学ぶ中で事例検討をたくさんする機会があった。この事例検討のやり方は、それまでしてきたものとは進め方も大きく異なっていた。参加していても興味深いし、事例を出せばさらに理解が深まる。このやり方は、もっと多くのところで行われて、活用されるといいのにと強く思っていた。

1999 年から京都国際社会福祉センターで家族療法を学び、ほとんどの研修を修了した。この頃、私は福祉施設で仕事をしながら、社会人学生として、大学院に入学していた。その大学院では京都国際社会福祉センターでもお世話になった団士郎先生が講師を務め、家族についても学ぶことができるタイミングで入学した。

大学院は、1 学年 60 人程度が定員で、社会人学生が半分以上いて、主に夕方から夜間に授業が行われた。つまり院生は支援の第一線で活躍する人が多い環境だった。さ

らに講師陣も充実し、そこに集まった院生の仲間にも恵まれていた。

ただ一つ、気になったのは、入学して半年、こうした実践家が多く集まった院の授業の中で、事例検討がほぼなかったことである。

社会に自分でプラスする

そのことを、団士郎先生に話すと「自分でやったらいいやん、やるんなら、手伝うよ」といってくださいました。こうなったら、やるしかない和社会人院生 1 年の 2001 年 12 月に初回を開催した。会のタイトルは「家族をテーマにした事例検討会」。通称「かじけん」と呼ばれることが多かった。

会場は大学の教室を使わせてもらうことになった。教員である団士郎先生がいてくださることで、実現できた。開催頻度は、月

1回、大何〇曜日と固定をした方が分かりやすいということで、第3木曜日で固定した。そして、8月に関しては、大学の休みもあるので開催せず、それ以外は毎月開催することで進めた。

参加者は院生の仲間と私の職場や仕事のお仲間に声をかけて始めた。そして、メールのメーリングリスト機能を使い、登録をして、次回の案内を告知することになっていく。その時に、文章を添えたり、写真を添えたりして、家族とは？支援とは？人生とは？ヒューマンサービスとは？のような問いかけを行うことが習慣化していく。かじけんのメーリングリストだけでなく、自分が所属していた、院生のメーリングリスト、学会のメーリングリスト、社会福祉士会のメーリングリストにも投稿した。その結果、さまざまところからの参加者が来るようになった。

参加要件なしの「ごちゃまぜ」

参加の対象は、こういった事例検討に関心がある方として、ごちゃまぜで行った。福祉職、心理職、先生、保育士など支援者が多くおられたが一般企業の方、アートな方も、専業主婦もおられた。広い意味でのヒューマンサービスであり、いろんな業界の話が聞けるし、つながりもできるしとても面白い時間だった。ごちゃまぜで豊かであった。

会は、事例検討だけではない。会の前半は参加者が一人ずつ話をする。「最近こんなことあるんですよ」という話をそれぞれが2分ぐらい全員話す。家族の話でも、仕事の話



でも、プライベートな話でもなんでもよかった。それが重なったり、影響し合ったりするので、そこも面白かった。20人いたら、一人2分で40分というように、話す準備ができた人から話し始めていった。ここでの話がごちゃまぜ状況での出会いをより具体化していった。こうしたやり方がオープンダイアログやリフレクティングという言葉で最近では整理され、紹介されることも多い。このやり方も京都国際社会福祉センターで団先生、早樫先生はじめ他の先生もよく用いた研修の場の作り方であった。

最近こんなことあるんですよ

時間は18時半から21時。2時間半。合計150分。前半60分、後半事例検討90分ぐらいがよくあった割合ではないか。会場は多くは立命館大学の衣笠キャンパスで行われた。自宅からも近く、歩いていくことができた。第3木曜日はさっと帰宅して、大学に向かった。教室に着くと、ほとんどが私が一番のことが多く、待たせてしまっていると「ごめんなさい」というスタートで合った。教室入口には、マグネットで「家族をテ

ーマにした事例検討会」の会場看板を貼った。教室に入ると机を壁際に移動させて、椅子だけで円を作って待った。到着した参加者は画用紙にクレヨンで自分の名前を書いて3つに折ってもらい、着席した足元に置いてもらった。その名札は、次回も使い、参加者が増えるごとにたくさん溜っていった。2回目以降は、到着したら自分の名札を探して置くのが定番になっていった。

研修にしない

会が終わると、必ずごはんやお酒というのはあまり定例化しないようにした。メインの集まりはあくまで会で、飲み会だけ参加するという逆転が起こるのは希望ではな

い。目的は、援助職を応援し、日々の暮らしや仕事が少しでも活性化すること。そこに注力した。

そのため、事例は仕事で担当しているもの多かったがそうでないこともあった。ご自身の家族の場合、または職場のチームについても考えたことがあった。この事例検討のやり方は集団で過ごす場に関して検討するときに応用することもできた。

研修にしないことも大切にした。誰かがよく知っていて、一般の人は知らないということが起こらないのが家族の領域。誰もが家族に関しては、経験があることが多い。そのためあくまで「コメンター」として団士郎先生が出席。また、早樫一男先生も可能な限り、足を運んでくださった。事例は事前に誰が出すか決めておくことが多かった。



新刊、既刊のご案内

社会への還元

そのため、参加費は無料にした。実費をもらうことも考えた。しかし、結局は千葉がご縁に恵まれて学ぶことができたことを社会に還元したいという願いで進めていった。

毎回、記録をして、次回に前回欠席者も雰囲気分かるように「かじけん通信」を作成した。文字お越しは千葉が長くしたが、同じく主催をしてくださった方々も作成を担ってくださった。本当にありがたい。

準備したのはキッチンタイマー。前半の話が誰もが話せるように公平に時間を割り振れるよう、1人2分ずつとか用いるようにした。事前申し込み制もとらずに開催し、数名のこともあれば、20数名になることも。200回以上結局開催することになる。

ここで紹介した学びを『[対人援助のための「観察力」と「質問力」の磨き方: 実践に役立つ事例・ワーク・質問集](#)』（千葉晃央、寺本紀子、早樫一男 共編著 中央法規出版）にまとめました。面接で聴きにくい、お金や離婚、再婚の話題、暴力、喪失体験等をどのように話題にしていくとよいのか？ 具体的質問集も収録されています。既刊『[ジェノグラムを活用した相談面接入門: 家族の歴史と物語を対話で紡ぐ](#)』（早樫一男編、千葉晃央、寺本紀子著 中央法規出版）と合わせて、ぜひご活用ください。



臨床社会学の方法(54)

「私ごと」からの脱暴力論

—マイクロアグレッションの理解をとおして—

中村 正

1. 差別と人権をめぐる課題—日常の無意識的コミュニケーション

デラルド・ウィン・スー (Derald Wing Sue)
著『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション—人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』（明石書店、2021年。著者は米国コロンビア大学ティーチャーズカレッジ教授で中国系アメリカ人である）をマイクロアグレッション研究会として翻訳したことは以前から記してきた。在日コリアンの院生や社会人を中心にした勉強会が元になっている。

「マイクロ」は日常の何気ないやりとりという意味である。そこに棘のように感じる「アグレッション（攻撃）」が埋め込まれている。しかも、行為者の、無知、無関心、善意、中立性に基づくもので、曖昧で漠然とした、認識しづらい差別と偏見であり、「あからさまな」差別とは対比される差別的言動のことである。マイクロは、「些細な」「小さい」という意味ではない。この概念

は「無意識のバイアス」とともに普及し、いろいろな領域で使われるようになった。

さらに、差別を見る視点としての概念だけではなく、どうすればよいのかという視点から、「小さな一歩（マイクロアクション）」という言葉を用いて、脱差別のための行動化を促すことも提唱してきた。本マガジンでの関連原稿は次のようである。①「臨床社会学の方法(36)暴力の文化—Micro Action for Violence-Free プロジェクト構想—」（第12巻第4号・通巻第48号、2022年3月）、②「臨床社会学の方法(40)加害者プログラムの試み—京都方式の紹介」（第13巻第4号・通巻第52号、2023年3月）、③「臨床社会学の方法(47)隣人のもつカー日常から生成する脱暴力のエコロジー」（第15巻第4号・通巻第60号、2025年3月）等として論じてきた。

対人暴力は個々人でなんとかできるし、しなければならぬ問題であるが、個人の次元だけでは解決できない面もある。いじめ、ハラスメント、ネットでのヘイト発言

など含めた対人暴力は、すべて社会問題であり、暴力をつくりだす社会構造がある。そのことも視野に入れ、臨床社会学の典型的な対象と位置づけている。

こうした議論に関心を寄せ、マイクロアグレッションを人権教育として位置付けていきたいという教師たちの依頼があり、この原稿を書いている。本稿の内容は、タイトルは異なるが、6割程度の分量に圧縮され、教師や保護者のための『生活教育』（日本生活教育連盟）誌の2026年10月・11号に掲載される予定である。さらに、2の事例は『差別の心理学：マイクロアグレッション』（明石書店、刊行予定）でも紹介する予定である。

2. 「私ごと」から考えるマイクロアグレッションの具体例

在日コリアンの若者たちの日常生活での経験を語りあいながらの翻訳作業となった。若い人たちも幼い頃からたくさんのいじめを受けてきたという。しかも相手は無自覚なものが多いと語る。「日本語上手ですね」「留学生ですか」「日本生まれだったらほぼ日本人じゃん」「ワールドカップどこ応援するの」「日本人とか外国人とか関係ないよ」と言われることがよくあるという。

これらに悪意はない。むしろ善意と無知に支配されている。翻訳しながら、事例がたくさんだされた。悪意のない日常の会話のなかにある「常識」が問題とされる。こうした事例について、私が体験した事例をいくつか紹介し、人権教育の内容にしていくための素材としていきたい。マイクロであるがゆえに「私ごと」として把握しやすい。

2-1. 認識的不正義と無知と善意ーヒジャブの話

「京都の夏は暑いのでそのスカーフをとったらどうなの？」とイスラム教徒の女子留学生に話しかけた大学1回生の男子が、その経験について話をしてくれた。ヒジャブはイスラム教を信仰する女性に着用が義務付けられている頭や身体を覆う布のこと。彼女は困惑していたという。

その後3回生になってからその時のことを反省し、謝罪をしたという。彼女はそのことを覚えていたらしく、謝罪を受け入れたという。時間がかかり過ぎているが彼なりに大学で勉強したのだろう。ようやく修復の実践ができた。1回生の時の経験を思い出したのは、私が担当していた授業（教養ゼミナール）でマイクロアグレッションという言葉に出会ったからだという。そこまで2年かかっている。

善意と無知の合わせ技でこの発言に至ったと振り返った。他のマイクロアグレッションも、意図的な差別的言動というよりも、こうした無知と善意から成り立つことを理解してほしいくて、知らないということや知らされていないことを明らかにするために「認識的不正義（Epistemic Injustice イギリスの哲学者ミランダ・フリッカーが構築している）」という概念があることを話した。

最後の授業で自らにとって教養とは何かについて言語化することを受講生に課した。ムスリムにとってのヒジャブの意味について詳細に調べたらしいが、なによりも彼女に謝罪をするというマイクロアグレッション乗り越えの実践ができたことが教養の力になっていると思うとコメントした。

2-2. マジョリティの多様性－日傘の男

自らの男らしさについて考察する過程でマイクロアグレッションに気づいていく男子学生がいた。筋骨隆々のマッチョな彼の研究テーマは「日傘の男」だ。中学から柔道、高校時代はアメフトもやっていたという。筋肉はもっとつきたい。手の爪は短く切りそろえられ、ホワイトネイルカラーが塗られている。彼は爪が割れやすく、肌も荒れやすいので日焼けやシェーバーのダメージを避けていたという。脱毛をし、日焼け止めや日傘を使い、保湿にも気をつけていた。あくまでもこれはスキンケアやセルフケアなのだという。色白で肌がつやつやしたマッチョな風体の男がそんなことをするのかと父ともめたという。「まともな男になれ」と言われたのだ。

彼は強い肉体という男らしさの象徴的な記号を持っているが、自己認識はマジョリティのはしっこにいる自分だという。友だちも、心の奥底で「男なのに」と感じている人もいるだろうという。「お前女子力半端ないな」といじられることが多いらしい。これはジェンダーのマイクロアグレッションである。「男らしくない男」を批判するための揶揄としてのいじりを多く体験してきた。マイクロアグレッションはマイノリティに向かうだけではない。マッチョな男性はマジョリティだが彼の場合は周辺性を帯びている。そこにマイクロアグレッションが立ち現れる。

2-3. マイクロアグレッションとしてのいじり－いじめを覆い隠す機能

いじりとは、相手の欠点、特徴、失敗等をとらえ、冗談交じりに指摘し、さらにその反応をネタに周囲の笑いを誘い、場を盛り上げるコミュニケーション手法のことである。いじめを覆い隠す機能もある。いじりといじめの境界線は曖昧で、容易にいじめになりうる。やめてと言ったら「ノリが悪い」と無視されることも多い。その人の変えられない特性（容姿、家柄、名前等）を捉えて揶揄する。相手をバカにして自分を優位に見せようとすることもある。そしていじられキャラとして自虐的な対応をすることで仲間集団に加わることもあり、そのように仕向けるのがいじりの特性である。

また、いじりはフレームの混乱を意識すべき事態である。いじめであるにもかかわらず、いじている側が「これは遊びだ」といってフレームや状況を恣意的に定義することがある。「遊びなのにまじめに反応するな」というメッセージを含み、いじめられている側へは、たかがいじりだと指摘し、反論を封じるというダブルバインド状況をもたらす。いじめといじりは連続的であるが、いじめとはまた異なる恐ろしい面、つまり無自覚で無意識的で遊び感覚的な要素がある。同じようなことは、これは愛情なのか暴力・コントロール（愛の鞭という）なのか、しつけなのか虐待なのか、いじめなのかふざけや冗談としてのいじりなのか、体罰なのか指導なのか等、相互に関係を希求しあうところにはこうしたフレームの混乱が生じやすい。いじりには、楽しい、面白いといった感覚がある一方で、会話の中

でしんどさを感じる人がいることには注意が必要である。いじりのなかにはマイクロアグレッションが含まれていて、いじめを覆い隠す。

2-4. 正義の名の下に—他罰性をつくりだす

「有害な男性性」にフォーカスする男子学生がいた。マイクロアグレッションという概念を知ったことで気づいた恋愛経験を話してくれた。

「自分にはDV気質があるのではないかと振り返る。彼は警察官を志望している。研究テーマは正義感と関係している。最終的な論題は「孤独なマッチョ」となった。マイクロアグレッションの概念をとおして自分にも思い当たることがあると感じ、その体験をもとにデート暴力についての論文を書いた。

内容はこうだ。日常生活で、自分がよくいらだちを感じていたという。たとえば駅で電車を待つときのルールやマナー違反へのいらだちである。割り込み乗車する人に注意するくらいだ。マイクロアグレッションの学習から、関係の非対称性について応用して考えたという。

元彼女を自分の思うようにさせたいという気持ちがあったことを思い出したという。彼女が自分と同じぐらい努力してくれないと、「俺の彼女なのにどうして」とイライラすることがあったことを思い出したのだ。

たとえば、少しでも待ち合わせの時間に遅れると叱責したことがあり、よくもめたという。怒りのもとにある厳しい正義感を親密な関係性で発揮することがデート暴力

を産みだすことを自覚した。そういえば、友人からのなんらかの助言も「否定された」と受け取りがちだったという。彼女にふられ、友人も離れていく「孤独なマッチョ」の経験である。マイクロアグレッションという言葉ゼミで学びながら、いらだちを言語化し、整理できるようになったのでずいぶん楽しくなったらしい。

彼の正義の意識は間違っていない面もあるが、異なる使われ方をしている。マイクロアグレッションはこうした正義の感覚をもとにした行為でもある。他罰的な、暴力を肯定する意識として作用している。

2-5. 自分中心の関係性—デート暴力の萌芽

若者に浸透する恋人間暴力は萌芽的な「関係コントロール」のかたちがある。講義の後で女子学生からこんな相談があった。彼氏から、「俺のっている講義が休講になったのでこれから会いたい」と授業が始まる直前にラインメールがきた。彼女はどうかすべきか悩み、またそのことに悩んでいる自分に悩んでしまったという。会わないと愛情が薄いと非難されるかと思うと怖いと話をしに来てくれた。こんなメールがよく入るが、悩んでいるのはいつも彼女で、その関係性は対等とはいえない状態だった。

断ったらどうなるのだろうとその先の不安を感じており、二人の関係性に宿る問題を理論的に整理したいという。一方的にいつも愛情を注いで、相手のことを慮り、要請があったらデートをしないとイケないという役割は、女性の方に割り振られていることが多い。「愛情供給係」のようになって

しまい、ケアすることが当たり前になってしまっている。

暴力の話をするときに「コントロール」ということを学生たちに伝える。殴る蹴るといった有形力の行使というわかりやすい形の暴力だけでなく、とくに親子や男女といった関係における暴力には、コントロール行動が多くある。

女性側が、関係性のあり方に悩むこのケースでは、すでに気持ちがコントロールされているといえる。さらに自分の学習する権利に侵入され、時間主権をおびやかされている。自分の都合のよいようにラインメールで侵入してくるのはやはり相手をリスペクトできていないことになる。暴力的でもあるといえるだろう。彼女は次に会う際に余計な心配をしなければならない。「この前は会えないと言ってごめんなさい」という一言を発するか、彼が授業中と知りながら会いたいとメールをしたことを謝るかのどちらかだろう。現実には前者の方が多いだろう。女性の方がそうした声をかけて会話をすることにならないようにと話をした。コミュニケーションの非対称性である。この関係性の元には彼の無自覚なマイクロアグレッションがある。

2-6.モラルハラスメント

DVや虐待は、身体への暴力が多いが、その背景には心理的な暴力がある。パワーとコントロールという。被害者の話からそうした加害者の行動がみえてくる。被害者からの相談を受けることがある。次のような事例があった。

①自分のものを買うときにいつも一緒に

付いてくる。「僕の好みの女性になってほしい」と言う。自分が自分でなくなっていく感じがする、②交通の便の良いところに住んでいるので本当は免許が欲しい。必要なのに、免許を取らせてくれない。「運転が下手だから」って言う。だからいつも彼の車で行動することになる。免許をとらせてくれない男性の暴力性である。③習い事をしたいと言うと、それは男性から教わるのかって聞いてくる。④DVを受けているのに彼という方が安全だと思えるような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁に入ったりするので、結局一緒にいることで落ち着くこともあり、しぶしぶ元の関係に戻ってしまう。⑤「今日は何をしていたのかと聞いてくる」、「死んでやると言われると別れられない。元の関係に戻ることが多い」等の相談があった。

もちろんこれらはすべてが直ちに暴力だというわけではない。愛情、配慮、心配の裏返しともいえる。とはいえ、境界域にあるコミュニケーションや行動である。共通していることは「関係をコントロールしようとしている」ことである。親密な関係性では、いまここで起こっていることの意味づけの枠組の混乱が生じやすい。これらの事例の背景にあることは、養っている自分が一番という特権意識、さらに俺の家族や恋人だという所有意識がある。そして自分を怒らせる相手が悪いので自分こそが被害者だという意識もある。こうした関係が長く続くと被害者は、恐怖感や無力感に陥る。責められ続けると自分にも落ち度があったのではないかという「自責の念」を持ちやすくなる。

さらに、DVと虐待の重なりも重大だ。DVは子どもからみたら母への暴力に他ならない。お前の子育てはなっていないとかいいながら、子どもを厳しく躰けしろと命令することがある。母であり妻である女性への暴力といえる。身体的な暴力性ではなく関係性のなかに宿る暴力性である。親密な関係性にはマイクロアグレッションが多く宿っている。

2-7. ルールそれ自体がマイクロアグレッション

子ども虐待でよくある例は、躰のために体罰を用いるという行動である。たとえばルールの混乱がある。ルールを運用する論理が間違っている点がマイクロアグレッション的である。嘘をつく子どもをしつけようとして体罰を用いることが多い。

こんな父親がいた。「我が家のルール（実態はマイルール）」を父親が決める。確かに「うそをつかない」というのは大切なことだ。しかし、成長の過程でまったくうそをつかずに生きていくということを約束させられるのは無理だ。「うそをつかない」というルールはすぐに破られるし、殴られるのがこわくて「うそをついていないといううそ」をつきとおすはめになる。こうしたルールの設定は恣意的なので、どちらにしても「虐待する理由をつくっているルール」として機能する。ルールが守れなかったら「長時間立たせる」という別の体罰が加わる場合もある。耐えられるものではない。その罰も守れなかったら、また虐待が待っている。すべては「矯正」のためということだ。

この場合のルール観は歪んでいる。ルー

ルを破ったときのルールとして暴力を用いることが正当化されているからだ。これはルールとして機能しない。親父のルールでしかない。そのルールについて子どもとは合意していない。暴君として君臨できるだけだ。「これは躰だった」という虐待する親の勝手な言明と行動が浮かび上がっていた。

2-8. ダブルスタンダードージェンダーのマイクロアグレッション

女の子は浪人しなくて良い、看護師や福祉の仕事が向いている、一人暮らしはだめと強く言われ、自宅から通える範囲の大学に限定されたという女子学生がいた。マイクロアグレッションとして積み重なり、女子学生自身の可能性を狭める。その価値観を学生自らが内面化していることもある。キャリア形成にジェンダーのマイクロアグレッションが入り込む。企業の管理職や大学教授に占める女性の割合はまだ少ない。

教壇で立って教え、社会のリーダーは男性という姿を見て育つ。これを支えるような女言葉がある。女の子なのだから僕と言っていけないが典型だ。他にも、女言葉は命令や指示の表現になじみにくい。「～だわ」「～なのよ」「～かしら」など、語尾や言い回しに柔らかさや上品さを持たせる表現は、ジェンダーのマイクロアグレッションとして機能している。それはやさしさの名の下に置かれている。男性的なリーダーシップの言葉ではない。

2-9. ホモソーシャルなエロトーク

女性がいないときに男性だけで話す話題、

つまり「下ネタ」「エロ話」「猥談」は男同士の絆を強め、男性同盟として機能している。この関係をホモソーシャルな関係という。男性同士の下ネタトークは「男同士の連帯感」を強めるためのコミュニケーションツールとして機能している。これを「ヒムパシー（男性同士の共感性を高める行為という意味）」という造語で表現することがある。また、異性愛が前提とされる話題ばかりである。男性の同性愛者が「ホモネタ」として侮蔑される。「女々しい」として脆弱な男性性が笑いの対象になる。

女性がいる場面では言いにくいことを共有し、仲間性を高揚させる。全員が楽しい話題ではなく、いやいやその話を聞いているだけの男性もいるはずなのに、止むことなく続く。堅苦しい会社や学校での緊張をほぐし、話しをはずませるためのガス抜き効果もあり、よく用いられる。もちろん女性たちも下ネタトークをするだろうが、男性同士は絆を強めるためなのでジェンダー秩序に寄与する機能が異なる。下ネタトークはマイクロアグレッションに満ちている。

3. 属性主義と能力主義とマイクロアグレッション

3-1. 属性と業績

人権教育とマイクロアグレッションを考えていく際に強調しておきたいことは、属性主義（本人からみて変更できない属性）と業績主義の見地からの整理が必要な点である。依頼のあった雑誌は教育に関心のある読者が多いと想定されるので、最後にこの点を強調しておきたい。なぜなら、教育と

いう営みは学歴主義を介して業績主義の土台となっていくからである。業績主義の典型は能力主義であり、現代の差別の典型ともなっている。

翻訳書は、人種、ジェンダー、性的指向というサブタイトルからも分かるように、属性的地位を主な対象としている。特段に能力主義とマイクロアグレッションという章を設けていないが、それらとの相互作用について随所に登場する。この点を取り出して強調しておくことは現代の差別問題を検討し、人権教育の内容として編み上げていく際に不可欠だと考える。

属性的なものが差別の主題となるのでやむを得ないと考えるが、日本で考えていく際、能力主義や学歴主義は単独で取り上げてもよいテーマだと思える。その論点を紹介しておきたい。

3-2. 世界人権宣言と憲法の平等

「世界人権宣言」第2条は、「すべて人は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、門地その他の地位又はこれに類するいかなる事由による差別をも受けることなく、この宣言に掲げるすべての権利と自由とを享有することができる。」と規定している。連動して、「日本国憲法」第14条は、「すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。」と定めている。いわゆる平等権である。

注目しておきたいことは、前者には「財産」という言葉があるが、後者にはない点であ

る。「財産」は **property** の訳である。「世界人権宣言」における財産の意味は経済的地位による差別の禁止のことである。富裕層であるか貧困層であるか、あるいは土地や財産を持っているか持っていないかといった経済的・所有格差を理由として、人権や自由の享有を制限・差別してはならないことを定めていると解釈されている。

日本国憲法に「財産」が例示されていないのは、資本主義経済（私有財産制）を前提としており、財産の多寡による「合理的な区別」を認める必要があるからだと解釈されている。世界には資本主義国ではない国も存在しているから自ずと異なる規定となっている。

3-3. 「合理的な区別」としての能力主義とされているが

日本では、「財産」の差は「合理的な区別」として認められている。そのためすべての人を同じに扱う「絶対的平等」ではなく、事実上の違いを考慮した「相対的平等」であるとも解釈されている。「財産」の多寡という点での合理的区別に、例えば累進課税制度がある。収入の多い人には高い税率が課されている。社会保障給付も同じように低所得者層を中心に生活保護や手当を支給している。日本国憲法は第29条で「財産権」を保障し、私有財産制を認めている。同時に、財産権は「公共の福祉に適合するやうに、法律でこれを定める」とされており、社会全体の利益のために国が一定の制限や課税を行うことをあらかじめ予定している。

また、経済的平等について日本国憲法は他の権利保障で規定している。第25条（生

存権）「すべての国民に健康で文化的な最低限度の生活を保障する（貧困による見捨ての禁止）」。第44条（選挙権の平等）：選挙に関しては「財産又は収入によつて差別してはならない」と個別で絶対禁止にしている。

このように資本主義社会では、合理的な区別という範疇で、能力の差異による異なる取り扱いが肯定されている。さらに、その能力が社会的構築物であるとする、その具体的な現れとしての学歴による異なる取り扱いも肯定される。時には学歴主義へと至る。この関わり合いが差別と平等を考える独自の領域を日本では成していることを想定すると、マイクロアグレッションを人権教育へと編成していく際にも独自の位置付けをすべきであろう。

業績・能力と属性的な地位の関係は、アメリカの文化人類学者ラルフ・リントン（Ralph Linton）が1936年の著書『人間の研究（The Study of Man）』で提唱した、社会的な「地位（Status）」の獲得様式を表す概念が元になっている。リントンは、社会における個人の地位を以下の2つに大別した。

一つは、アスクリプション（帰属地位/属性地位）である。自分の意思や努力とは関係なく、生まれながらに、または自動的に割り当てられる地位のことである。それは本人の能力で変更することがほぼ不可能な初期設定となっている。具体例としては、血縁・家系、性別、年齢・年代、出生地・人種などである。

二つは、アチーブメント（獲得地位/業績地位）である。個人の選択、努力、能力、競争などによって、後天的に獲得した地位のことである。本人の行動次第で、獲得する

ことも失うことも可能な地位とされている。具体例としては、職業、役職、学歴などである。

しかしそう簡単に二分できない。特に二つ目の業績的地位は、能力主義と重なり、獲得的な地位といえない面もあるからである。その業績を得るまでに属性的なものが相当に役割を発揮していること、さらに自己責任論を中核としたネオリベリズム的な動向を支えるものとして作用している点を見逃すことができないからである。私は、アチーブメントのアスクリプション化と名付けた。業績地位は能力主義と同義であり、その典型が学歴主義となる。

3-4. 能力主義は肯定されるか－マイクロアグレッションとの関係

能力主義は、「勝者の傲慢と敗者の屈辱」のようにして資本主義社会では機能している。成功者は「自分の努力のおかげ」と過信し、弱者を「努力不足」と見下す分断の意識をもたらす。

スーのマイクロアグレッション論では、「能力主義の神話 (Myth of Meritocracy)」というテーマとして、このテーマは重要な分類 (類型) の一つに組み込まれている。「誰もが努力すれば成功できる」「能力のある人が評価されるべきだ」という純粋な能力主義の言説が、現実の社会構造にある人種やジェンダーなどの不平等や特権を覆い隠し、マイノリティを追い詰める微細な攻撃 (マイクロアグレッション) になり得ると指摘している。

具体的には、以下のような事例が紹介されている。「能力主義の神話」がマイクロア

グレッションとなる理由は、構造的差別の隠蔽 (カラーブラインドネスとの連動) となる。「人種や性別は関係ない、実力の世界だ」と主張することは、現実にある制度的差別やスタートラインの不平等を無視 (無効化) することとなる。「努力不足」「無能」という隠れたメッセージ成功できない原因をすべて「個人の努力や能力の差」に帰せられるため、結果としてマイノリティに対して「あなたが成功していないのは、怠惰だからだ／無能だからだ」という潜在的メッセージ (メタコミュニケーション) を伝えることになる。

4. 乗り越えるための小さな一歩－マイクロアクション

マイクロアグレッションは社会構造や制度の問題としてわかりやすく現れる差別の構造ではなく、個人間の日常的なやり取りやコミュニケーションのなかに埋め込まれている。そこから差別の社会構造があぶり出されてくる。マイクロなことをとおして、日常的行動のなかに大きな重量感をもつ社会が埋め込まれており、それが立ち上がってくることで、とりわけマイノリティ側に負荷をかける過程を捉える概念である。マイクロアグレッションを適切に定義し、言葉を与えていくことで、語られていない、私とあなたのあいだに横たわる社会が上昇してくる。

ここでは限られた例示しか紹介できていないが、エピソードとして列記しているだけではなく、理論的な整序がさらに必要となる。翻訳書では、マイクロアグレッションは、攻撃型 (マイクロアサルト)、侮辱型 (マ

イクロインサルト）、軽視・無視型（マイクロインバリデーション）の3つに分類されており、理論化がなされている。

攻撃型は、あそこの地域の人間と関わると面倒だ、男同士でべたべたしてもしかして「そっち」なのか、トランスジェンダーと性犯罪者をどう見分けるのか、日本に不満があるなら国に帰れば等が代表的である。特に、差別的な冗談で嘲笑する、仲間外れにする、SNS等の匿名空間で利用されるという特徴がある。

侮辱型は、たとえば、女性らしい気配りができて素晴らしいね等がある。その中心には、相手の属性を侮蔑する、思い込みや善意のなかにある見下しとして露出する。

軽視・無視は深刻なダメージを相手に与える。たとえば、「私にはLGBTの友だちがいる（から偏見はない）」、「部落差別は昔の話でしょ」、「民族や人種なんて関係ないでしょ。みんな同じ人間なんだから」、「誰だって苦手なことはあるから、障害に負けずに頑張ればいいんだ」、「悪気はないんだから気にしすぎだって」等である。無自覚で無意識、相手の存在の否定になることがある。

マイクロアグレッションを人権学習として体系化する際には、マクロな社会的差別の構造との関連付けが必要となるので、こうした整序が必要になる。「私ごと」として書いてきたことは、気づきを促す目的があり、あくまでも例示的なものである。学習者が体験してきたことを掘り起こす役割があるのでリアリティがあると考えた。

また、マイクロアグレッションをした側の体験とされた側の体験の双方がある。それをきちんと言葉にすることで、「私ごと」

として人権問題が腑に落ちる。社会的差別の学習にはこうした気づきが役立つ。「私ごと」から始まる人権教育である。

さらに男性性ジェンダーの視点からすると、その「私ごと」は「僕ごと・俺ごと」に他ならない点も忘れてはならない。

こうして、マイクロアグレッションに気づくことは身近な日常の「常識」の問い直しから始まるともいえる。気づきは日常生活に埋め込まれた暴力性をもつ相互作用に気づくことに他らない。

さらに理解を促す点は、身体的暴力という有形力の行使だけが暴力ではないことである。心理的な、無自覚の、時には善意や熱意に潜むコントロール行動を考える。それを踏まえ、誰にでもできる行動として、対人場面やコミュニケーションにおける小さな一歩としてのマイクロアクションが意味をもつ。「私ごとからの脱暴力実践」である。そのためには、もちろん意識的な取り組みが必要となる。それをマイクロアクションとして紹介してきた。

立命館大学特任教授
社会病理学・臨床社会学、男性性研究
2026年8月31日受理

カウンセリングのお作法 第48回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島 中島(水鳥)弘美

～ 「カウンセリング」って実際は ～

???

「カウンセリング」という言葉を見聞きしたとき、どのようなことをイメージしますか？ では「心理療法」という言葉と比較すると、イメージは異なりますか？

今回は、一般的に受け止められているカウンセリングのイメージと、実際との差、ギャップを理解したうえで、丁寧な説明をしながら、支援活動をすすめることの大切さについて話します。

カウンセリングのイメージ

カウンセリングという言葉は、1995年の阪神淡路大震災以降、心のケアなどとともに、注目を集め、多くの人が知るところとなりました。現在、カウンセリングについての関心は高く、カウンセリングを学びたい人、そして、カウンセリングを受けてみたい人は増えていると感じています。

大学の共通教育の中の、カウンセリングに関する選択科目を担当させていただいていますが、多数の学生さんが受講を希望しています。その理由は、友人から相談されることが多いから役立てたいので学びたい、どんなことをするのか知りたいと、比較的身近な存在と、感じているようです。

ただ、関心の高さに比べると、実際のカウンセリングそのものを、ある程度、知っている、わかっている人は少ないように感じられます。

一方、「心理療法」という言葉になると、様子が変わります。医療機関で治療すること？なんだか、むずかしい、堅苦しい、ちょっとハードルが高いという印象になるようで、心理カウンセリングと心理療法は異なると受け止められているようです。

カウンセラーは何でもわかっている

さらに、心理カウンセリングを行うカウンセラーに対しても、一定のイメージができていているようです。

カウンセリングを仕事にしている人物は、人々が考えていることはなんでもお見通し、人の心理をなんでもわかっている人、と考えている人がいることも珍しくありません。少し、不思議な気もしますが、占い師のようなイメージを持っている人もいます。

カウンセリングはすばらしく良いことを教えてくれる

カウンセリングとカウンセラーに対するイメージをあわせて、作り上げられると、つぎのようになります。

「カウンセリングに行って、困っていることを話したら、すぐに、カウンセラーが良いこたえ、解決策を教えてくれる、とてもいいことを言ってくれる。魔法のようなすばらしい話をカウンセラーはその場でしてくれる」

カウンセリングは万能！完璧！

といったぐあいです。

医療機関の医師などから、紹介され、診療情報提供書を持参して、来られる場合は、このような像を持っている方は多くないのですが、そうでない場合は、慎重に対応する必要があります。

初めて来所された方が、カウンセリングに対して、ある一定のイメージを持っていると、実際に支援が進んでいく中で、いつのまにか、クライアントとカウンセラーの間でずれができあがってしまう可能性があります。

相談に来られる人の相談内容の理解はもちろんですが、その来所動機(カウンセリングのお作法第31回掲載内容)を把握するとともに、カウンセリングに対して、いつのまにか作りあげられた像ある意味の思い込みを持っている人がいることも受けとめながら、把握していく必要があります。

「どうしたらいいですか？」

クライアントさんが、面接のなかで、どうしたらいいですか？という言葉、繰り返すことがあります。

面接の初期において、カウンセラーは、クライアントとの間で信頼関係づくりしながら、情報収集することが中心になりますが、そのような段階の途中にもかかわらず、「どうしたらいいですか？」と、具体的な指示を早々と求めているような言動がみられることがあるのです。早く問題を解決したいという気持ちが多くあり、来所動機も高いのですが、一方で、なんでもすぐに解決してくれる、早く何かの指示をしてほしい、早く教えてほしい、というカウンセラーに対する大きな期待とともに、その後の依存関係につながる可能性も含まれる言葉であるため、要注意となります。

困っていることを伝えれば、すぐに対応してくれる、たとえば、子どもが不登校状態であれば、相談に行きその状況を担当者に説明すると、すぐに再登校できる方法を指示、教えてくれるという図式です。まるで、マニュアルやAIの答えをもとめるような心境です。

このような心境で面接室に座っているクライアントさんは少なくないです。

現在の事情や状況について、情報収集し、それぞれの家族の心境を理解する。そして、今後の方向についてクライアントや家族それぞれの思いや希望などをまとめ、作り上げることが大切で、慎重に行う必要があるなど、それらのことも含めて、このあとどのような段階を経るのかをクライアントとそのご家族に、随時、詳しく説明する必要があります。

そのためにも、支援の流れの中で、気になることやわかりづらいことがあれば、どんなことでも担当者にたずねてくださいという態度を示し、早い段階での疑問や不安を和らげることにつなげる、話しやすい関係を築いていることも重要であると考えられます。

晩年

D・A・N 通信

No.17

2026.05.21 (79 歳) ~08.20 (79 歳 3 ヶ月)

団 士郎

5/22

奈良、広陵町での講演会に。近鉄がこんなシートになっていた。なんか不思議。かぐや姫ホールで快調に話した後、卒業生と食事。このサーモン、アボカド并なるものが非常に美味しかった。このところゆっくり目のスケジュールで、あれこれエンタメを楽しんでいる。



5/23

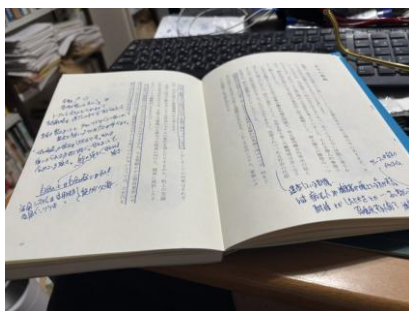
時間にゆとりがあると、やらなければならないことの他に、今やってみたいことに手をつけたい。木陰の物語・掛軸版データのカラーリングを始めた。来年三月のぼむ漫画展用

だ。手間な加工もやり直しも、締め切りに追われていないから、平気でいろいろ試せる。楽しい。



5/26

「家族理解の教科書 graphics」を使った Zoom 授業を今年も 6 月 26 日から開講する。昨年に続いて 2 度目になるが、同じことをしても面白くない。今回は漫画より文章部分の行間の、書ききれなかった諸々をディテールにこだわって語りたいと思う。興味が湧いたらぜひご参加を。 shiro-san.com



5/27

札幌市の「かでの 2・7」で家族漫画展が始まった。5月30日、20時までの展示。お近くの方、ぜひお運び下さい。12作品展示しているので、結構な読み応え、椅子もあります。世話人の河岸さんも会場にいてくれるので、お声かけください。私は30日18時頃には行けそうです。



👍 🗨️ 📷

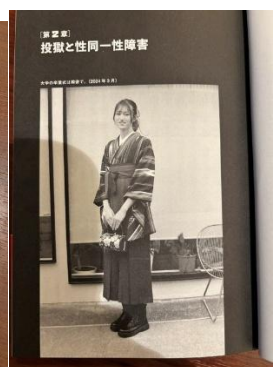
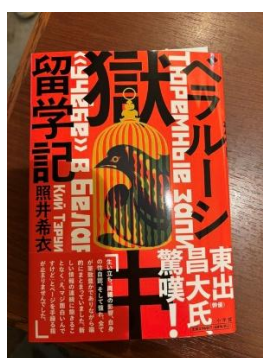


👍 🗨️ 📷



5/28

漫画集団ぼむの例会で楽しく会食、雑談を終え丸善をのぞいたらこんな本が。海外の撮り鉄くんがベラルーシにおいてテロリスト容疑で捕まった。面白そうと思って読み始めたら第二章に仰天の写真。よく見たら表紙にも書かれていた。結局、トランプ恩赦で釈放されるまで半年拘束されてたって。面白そう。



5/29

珍しく朝早く目が覚めた。寝床でなんだか漫画が描きたいと無性に思った。連載「木陰の物語」第315話の下書きはしてあったので、早朝からペン入れをした。中でも、このコマが上手に描けた気がしてしっくりきた。誰も判らないだろうけれど、描いている線が自分的に微妙ないい感じなのだ。



5/30

札幌に来た。北海道では初の木陰の物語掛軸漫画展最終日をのぞく。200人近い方にご覧いただけたようで嬉しい。運搬の簡便さ、取り扱いの楽さ、最終の撤収作業の効率の良

さは、目ざして工夫を重ねた結果だから、作業を見ていて満足。明日は札幌 WS、長いことやっているが私は飽きない。



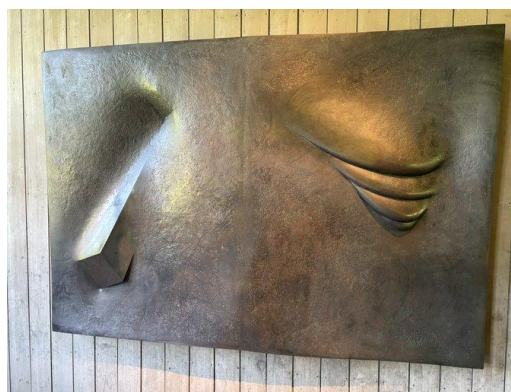
5/31

札幌 WS、6 時間を無事終えて、道庁前で繰り広げられていたコスプレイベントの人混みを抜けて会食に。楽しく 2 時間過ごした後、ホテルへの道すがら紀伊国屋書店に。文庫一冊を買って隣のスタバ。21 時閉店と聞いて、それまでゆっくり読書。



6/1

安田侃彫刻美術館・アルテピアッツァ美瑛に案内してもらった。元小学校の展示空間。新緑の北海道、かつて炭鉱で栄えた地域にある居心地がこの上なく良いところ。入場料無料である。月曜日の昼、訪れる人がポツポツある贅沢な場所。





6/2

対人援助学マガジン第 65 号の編集会議の予定だったが、台風の接近で延期した。札幌からは昨晚戻って仕事場に来ておいたので、雨にも遭わず、一日編集作業。今号から二人新規連載が始まる。若い世代の執筆者も少しずつ増えている編集長としては、バランスの良い仕事をしている気がする。

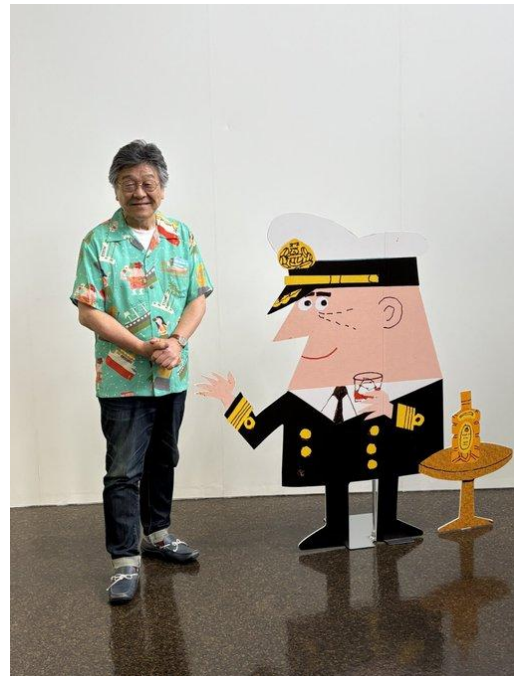
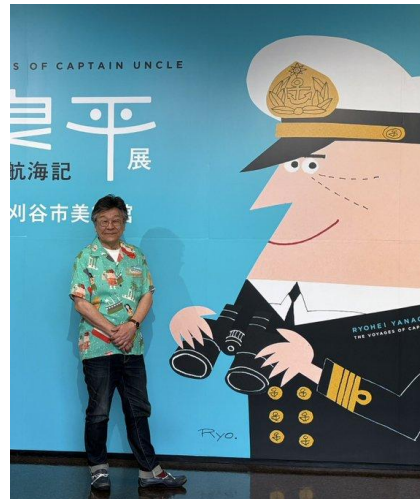
6/5

JR 駅に来たところ、隣駅で人身事故のため運転見合わせ。ベンチに腰掛けて、乗り継ぎ列車や空港バスがあったりしたら大変だったなあと思いながら遅延を眺めている。遠出するつもりで来ているが、約束相手はないので心穏やかだ。自分だけは不運に遭わないなんて思っていないので、こんなことで割り当ての一回を済ませてもらえたら有難いくらい。



柳原良平展をやっていると大学のマンガ研究会で一緒だった友人 Yas の Facebook でみ

たので、愛知県刈谷市美術館に。持っているがなかなか着る機会のないアロハを思い出したので、それで出かけた。結果、美術館スタッフの人に何度も話しかけられ、絶賛してもらった。こんなこと初めての体験だ。写真も自撮りではなく撮って下された。



6/6

年に二回、初夏と秋に伺う学びの森。私がその時期、関心が向いているところを気ままに

語らせてもらう会も数えて十三回目。何であろうと続いてしまうのが私の特徴。リピーターの方、初めての方、うなづく方、心の中で首を傾げる方、当然様々。次回は十月に。基本、どなたでも参加できます。



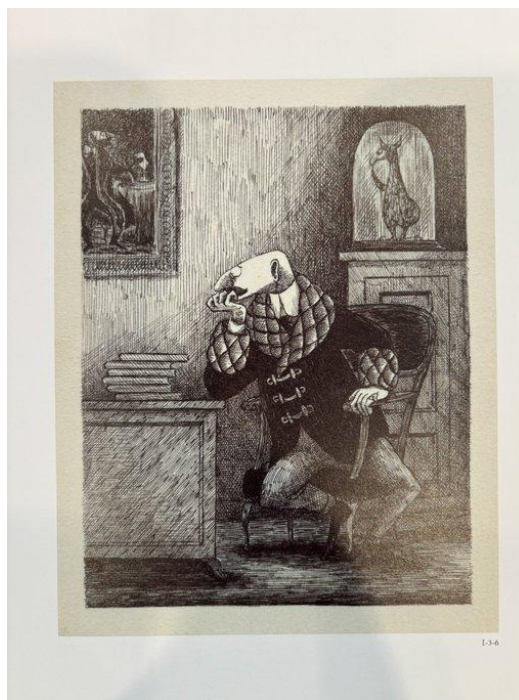
6/8

週末移動の JR チケット購入。市民税の支払い。スタバで草津勉強会のレジュメと石川(津幡)WS のパワポ完成。きちんとしているように、今朝のストレッチ予約が見えていなかった。書き落としではない。ちゃんと書いてあるのを目にしているはずなのに、見えていなかった。これが歳、呆れてしまう。



6/10

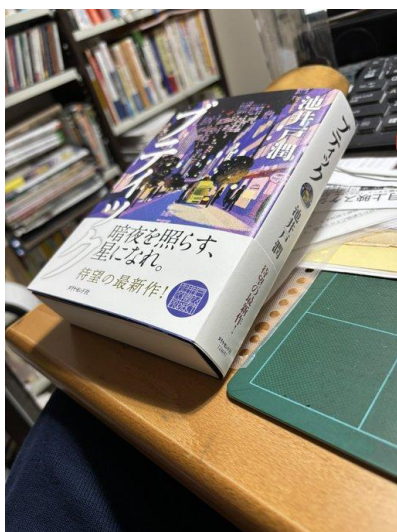
京都えき美術館のゴースト展をのぞく。絵本を数冊持っていてインタビュー本も読んだ。好みかと問われると何とともだが、目にすると気になる。今日もザーツと見ながら、ひとつプランを思いつく。先日の柳原良平展でのひらめきは昨夜かたちにした。



6/10

夜の定例、草津家族勉強会まで、午後時間があつたので出先のカフェで読書。久々の池井戸潤。想像以上に快調。570 頁ある小説を 250 頁まで一気に読んでしまった。小説はもっぱら Audible にしていたのだが、待ちきれな

かった。例によって敵役の人物造形など半沢直樹かと思うが、定番は快調。



6/12

2019年9月に訪れたウクライナ、キーウの原発事故博物館が爆撃された。原発事故の対応にあたった消防士、軍人、民間人たちの膨大な記録が壊されたようだ。見学するのに過剰な程の情報や資料があった。歴史の中ではこんな風にいろんなことが、やがてなかったかのように忘れられていく。

《聞くところによると、データ等はバックアップされていて、失われたわけではないらしい。しかしその後、キーウ・ペチェールシク大修道院（キーウ洞窟大修道院）がロシアのドローン攻撃で、破壊、火災にあったという。11世紀に創建された世界遺産になっているウクライナ正教の聖地だ。

訪れたところがこんな風に破壊されたのを耳にする度に、人類が賢くなることはないのだなあと思う。

風化や忘却、自然災害でもいろんなものは失われていくのに、爆撃や破壊工作、デマ、フェイク等で追い打ちをかけて、人間は何をやっているのだろう…》

チョルノービリ博物館に被害 ロシア攻撃、展示品4割失うーウクライナ

時事通信 国際報道部

2026年05月25日14時16分 配信

トップ 記事一覧 画像 Googleでフォロー



24日、ウクライナの首都キーウで、ロシアの攻撃で被害を受けたチョルノービリ（チェルノブイリ）国立博物館を訪れるゼレンスキー大統領（中央）（AFP時事）

ウクライナで23日から24日にかけてあったロシア軍による大規模攻撃で、首都キーウにあるチョルノービリ（チェルノブイリ）国立博物館が甚大な被害を受けた。原発事故の記憶を伝える同博物館は2011年の東京電力福島第1原発

の事故後、日本との交流に力を入れたことで知られる。ゼレンスキー大統領は24日現場を訪れ、被害状況を確認した。<下へ続く>

博物館は1986年の北部チョルノービリ原発事故の6年後の92年に開館。事故処理作業員の関連品などを展示し、原子力災害の深刻さを訴えている。内務省は攻撃によって展示品の約40%が失われたと発表した上で「ロシアは人命だけでなく（事故の）記憶も破壊しようとしている」と非難した。

チョルノービリ博物館改装 ウクライナ大統領視察

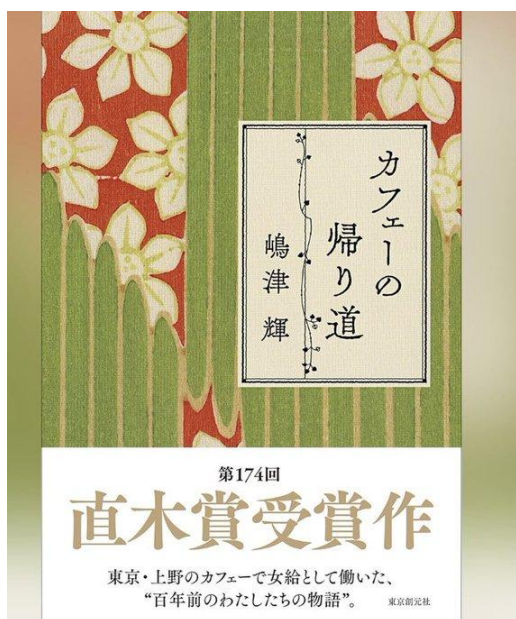
クリメンコ内相は、原発事故直後に旧ソ連当局が情報を発表しなかったことを念頭に「ロシアはかつてチョルノービリの真実を隠蔽（いんぺい）し、今はその真実を保存する場所を攻撃している」と指摘した。博物館は今年4月、事故から40年の節目に合わせて改装オープンしたばかりだったが、被害を受けて運営を停止した。

#ウクライナ 国際 政治 社会

最終更新: 2026年05月26日12時35分

6/13

山形の友人が送ってくれた甘いさくらんぼをつまみながら、「カフェーの帰り道」をaudibleで聴く。落ち着いた懐かしさに包まれて、自分が何歳の頃の感覚で聴いているのだろうかと思う。昭和の日々、周りには明治生まれの人がたくさんいた。今、私も長く生きてきたから味わえたものがたくさんあるなあとしみじみ思う。



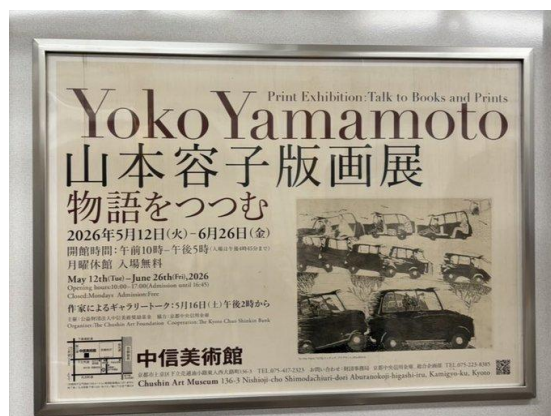
6/14

石川県津幡町でWS。昨年度能登半島で複数カ所実施のマンガ展、トークライブの報告も受ける。二十三人が近隣あちこちから集まって5時間。前半、二時間半を一気にしゃべる。ティーブレイクにお抹茶と生麩饅頭をみんなでいただく。なかなか優雅な取り組み。場所は倶利伽羅塾和室。



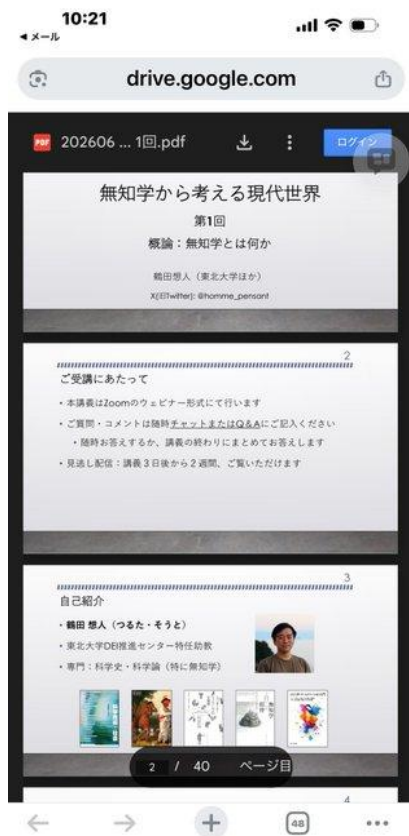
6/16

仕事場徒歩圏内で「山本容子版画展」をやっているのウォーキングを兼ねて足を運ぶ。無料のせいか高齢女性が思いがけずたくさん来場していた。好きな絵が一枚、初めて見たものもいろいろ。大昔、一点購入した作品が自宅に掛けてある。あちこちの展覧会図録も持っている。割に好きな作家なのだ。



6/17

昨晚から NHK 文化センター京都教室が開催する zoom 講座「無知学」の第二シリーズを聞き始めた。先方の zoom 不安定などがあり、ハラハラしたが、中身は面白かった。擬態と無知学の重なりなど、考えたことがなかった。



6/20

週末 WS で弘前に行った。長く続いている会は、まだ終わりそうにない。次回の予定を約束して終えた。その間にちょこっと案内してもらった鳥居の鬼。2カ所、見たが不思議だ。こんな鳥居は他で見たことがない。



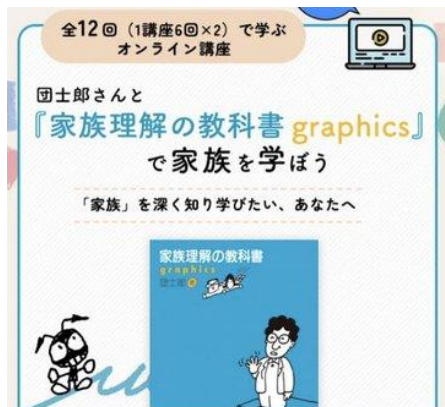
6/22

昨日は朝から家族面接をバックスタッフとして見に行った。終了後メンバーと楽しく歓談しながらランチ。この間に W 杯はチュニジアに完勝。いい気分の仕事場に向かう前、思い立って話題の映画を見る。大人になってから熱狂することなく、ずっと眺めてきたマイケル・ジャクソン。ドルビーなんちゃらの仕様劇場の素晴らしい音で満喫する。数々のダンスシーンから、あの頃 MTV に流れていたなあ...と思い出が蘇る。



6/26

今夜からの連続zoom講座の準備をずっとしていた。2年目になるのだが、2度目のジnkスのようなものがある、思ったように上手くいかなかったりする。W杯第二戦がなかなか上手いかなかった過去が勝手に重なる。でも今年は勝利したから、それにあやかって私も充実させたいと工夫中だ。



6/26

ライブの方、アーカイブス利用の方、多くのエントリーをいただいて家族理解の授業 2026 の zoom 開催スタート。嬉しい。出来はまずまずかと思って終えてTVを見ると、2個の台風だけではなく地震報道。このところ自然現象がやたら不自然だ。こんな事態を落ち着いて受け止めるのも、家族の役割。

6/27

土曜には予定の集まりがあった。出かけるスケジュールで週の後半の仕事場と自宅の段取りをしていた。ところが台風の雨で仕事場連泊が続き、着替えに戻る暇がなくなったのでやめた。そんな理由で？かもしれないが気持ちの問題だ。

夜、自宅に居たら長男が泊まりに来た。そうだった、聞いていたのに忘れていた。お茶をしながら楽しくダベる。こういうことがあれこれ起きるのが歳ということだろう。



6/28

谷町六丁目のカジュアル割烹 iida で二人の息子と待ち合わせ。それぞれとは会うが三人揃うのは珍しい。79歳、51歳、49歳と元気で並んで、おいに語り美味しく食べる。それぞれの家族も上々で暮らしている。スキーフリーク兄弟、とくに弟のストイックな日常鍛錬癖に呆れる。





6/29

録画してあった台湾山岳大横断を非常に面白く見た。思ったこともなかった事実も知って驚く。高校時代まで日本の山には登っていた。三千米越えの山は多くはないのでいくつかすぐにあげることができる。ところが九州ほどの大きさの台湾に三千米超えの頂が200以上あると言う。知らなかったなあ！



6/30

「急に具合が悪くなる」、ほとんど何も知らずに観た。えーっこんな映画なのか...と思った数分後、気がついたら三時間十六分経っていた。圧倒的コンテンツに、今自分が気になっている世界のことがドンドンかぶってくる。こんなに緻密に明快に語るんだと、その人にしか見えない岡本多緒さんアツパレ！



「健康な者たちは、本当に生きているのか」聞いたこともない文言がスクリーンから強く目に突き刺さった。できるだけ健康に注意してと思って生きてきた自分に、それは本当に生きようとしているのかと問われている。

そう言われると、何かザワっとするものがある。思ったこともなかったが、健康は事なかれ主義なのかもしれない。



7/1

大阪現代画廊で開催中の篠原ユキオ漫画展に重ねて、漫画集団ぼむの月例会ランチ。中之島川べりのリーズナブルなレストラン。お爺の集まりには不似合いだが、美味しく楽しく歓談。AIについては、私が多少使っている方だという面々。一枚の写真がすぐアニメになるものなど実演してはしゃぐ。



石川ワークショップの雑談で、なかなか野菜を食べるのは難しい。結局食べきれず残るから無駄になる。使い切れるのはカレーくらいだと話していた。

すると安価な温野菜便利グッズ(ダイソー)に塩麹ポン酢を添えて送ってくれた人が。試してみると、簡単なのに本当に美味しい。キャベツ、にんじん、サツマイモ、ジャガイモ、タマネギ、キノコ、トウモロコシ、豚肉(鶏肉)、そこそこの量が食べられそうだ。



7/2

どうしても出かけなければならない用件があって、土砂降りの中を出た。駅に着くまでに靴もズボンもびしょ濡れになった。晴耕雨読に近い環境になってから久々の出来事だった。

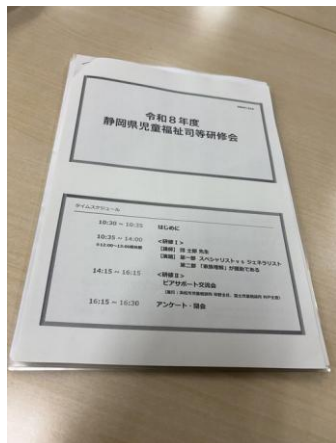
散々だったが帰宅したらこれ「急に具合が悪くなる」が届いていた。風呂でゆっくり読み始めたら、そうだねえと声が出た。これは良い本だ。



7/3

静岡で県内児童福祉司の研修。今の児相のことを知っているわけではないので、普遍的だと思っている対人援助職の在り方について、

思うところを勝手に話す。楽しく聞いてくれた人もあったようだが、ずっと変わらないことを言っているなあ。



7/4

浜松 WS、10 人の参加者を前に、3 時間半の長演説をした。久々の暴挙だが、話しておきたいことを、余すところなく語れた。聞いてくださったありがとう。

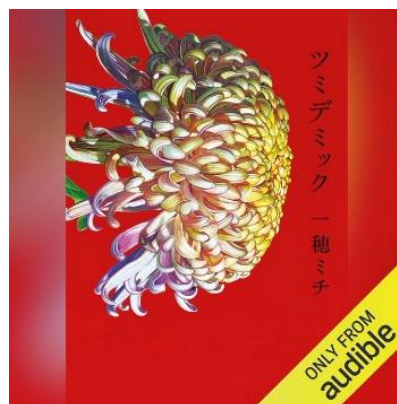
中身の結果がその内出るだろう案件。どうなるかを楽しみにしてもらうためにも、不足ない解説が必要だった。さあどうなるだろうか。



7/5

新作の下書きに日曜早朝から市役所前のスタバに。完了後、仕事場に戻ってペン入れ。この間、audible がちょうどいい。そして向いているのがこの短編集。そこそこ毒も効いていて、切れ味も楽しめた。この前聴いた長編

は、長すぎて事件解明段階で、それって誰？ と思ってしまった。失敗失敗！



7/6

頼みもしないのに出てくるこの機能。とはいつつ、目にすると読んでしまう。これは全く記憶にない。でも、あの頃はまだ元気で典子はいたのだなあと懐かしい。そんな人だった。

過去のこの日

12年前



国士郎

2014年7月6日・Twitter・🔒

...

7/5 朝のウォーキング、目的地の公園で外した眼鏡を置いてきてしまった。気づいたのは帰宅、朝食後、出かけようとした時。だいぶ探した末に思い出した。しかしもう一度あそこまで取りに出かけるのが億劫で……。すると妻と一緒にいってあげようかという。そんなわけで第二ラウンドに出かけた。



7/7

映画館で予告編を見たものを、Netflix で夜中に見た。戒厳令下の台湾の話なのに、画面のあちこちが懐かしい気がしてならなかった。私が育った頃の日本にも、似た空気や情景があちこちに溢れていた。時代全体が都市伝説の塊みたいな疾走感。



7/8

ストレッチを済ませてランチの後、丸善に。読み切るかどうか微妙だが気になるので購入。

その後草津の家族勉強会に。駅前の商業ビルの地下にあるジュンク堂に書店のハシゴ。結構大きなスペースで、書棚の作り方がどこかここの独自性を感じる。



7/10

大津市長等の徳圓寺へ。65 年以上前、ボーイスカウト大津第七団が結成されたところで、OB 会開催というのでスタートメンバーの一員として出かけた。住職でもある今井隊長が 94 歳でお元気なのに驚嘆。子どもの頃の私の記憶を、大人だった隊長が語られる。仲間の記憶は様々。

中 1 で転校した私の悔しさを理解する人もあった。BS 活動が私の今の活動基盤になっていることを再確認する時間になった。



7/12

どんなものなのか見当もつかずに選択していた舞台。役者ジャン・レノ自身の人生を歌い、一人語りする。モノクロ・プロジェクター映像と本人が重なって登場し、その時々を語る。満席で大歓声のカーテンコール。

映画「グラン・ブルー」と遭遇するまでが特に印象深かった。エンゾと再会したくなった。



7/13

次男に薦められてピラティスなるものを始めて三回目。マシーンをを使った個人トレーニング。長くストレッチに行っているのて体は動く。その結果、ゆるーい動作なのに発汗が凄い。歳だなあとか思いつつ、呼吸のこととか体幹、姿勢のことを、動かしながら考える。巷の流行りにいっちゃ囃んでいる。



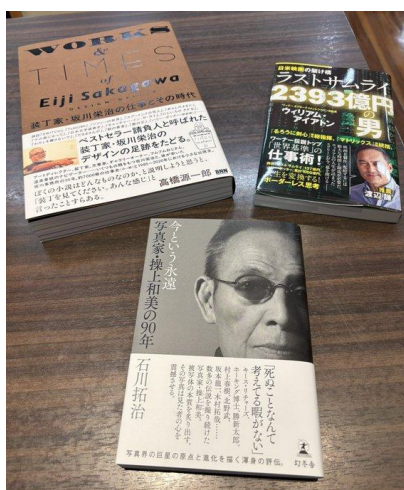
7/13

夕刻、こんな雲だあと見上げた。書店を覗いて仕事場近くまで来たら、こんな空になっていた。どこかで誰かがお薦めと書いていたこの漫画「あたらしいともだち」を読んでみた。自分では手が伸びそうにないものが、なんだかたまらなく良いというのはいい事だ。



告知です ♡ 8/5 にまた、こんなのをやります。家族理解の講座ではなく、二本立ての四方山話、漫談というほど面白さには傾かない、随談？まあそのようなものです。よかったらお申し込み下さい。今からネタ準備に入ります。やはり一つは今秋満願「家族の練習問題第十巻」の刊行嘶かな。

を三冊購入。自著を買ってもらった売り上げを受け取ったので、交換のように書店で購入。装丁家、映画プロデューサー、写真家の本。皆、いい歳の職人だ。



7/23

ちょっと一息ついてしまうと、再起動に時間がかかる。なかなか出力が上がってこないの
街に出て、高島屋別館の5階のTSUTAYAワ

ークルームへ。駄菓子をつまみながらスタートしたら思いがけず集中。気がついたら結構な長時間滞在で高くついたが、三件の目処がたった。なので夜中に気になっていた「教皇選挙・コンクラーベ」を観る。なかなかの室内劇にオーと嘆声。



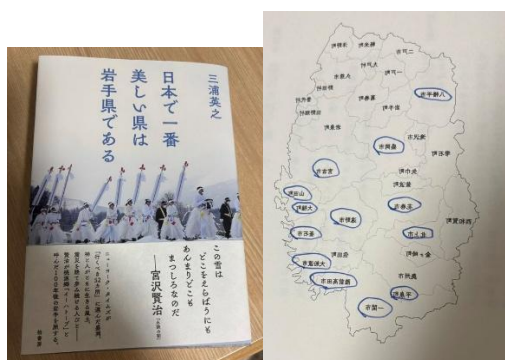
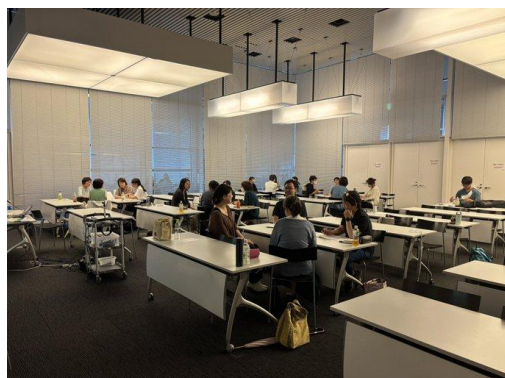
7/25

久しぶりに沢木耕太郎さんの新刊を片手に空港に。ターミナルビル内の上島珈琲店で「木陰の物語」新作が動きそうな気配を感じて着手。なかなかいい感じの話がまとまった。これを道中の合間に下描きをして、月初めには第318話の完成である。秋に刊行の「家族の練習問題」第十巻の編集も着々。



7/26

盛岡で3年目のWS、六時間。二十人余の参加者が楽しんでくれた。昨夜は定例の店で食事会。ご一緒した人からこの本をいただいた。おや三浦英之さん！この本は知らなかったが、「五色の虹」は大いに影響された一冊だ。岩手は氏のフィールドだもんなあ。本に掲載された地図に○を付けてみたら、私も県内あちこち行っていることが判明。



7/27

昨夜はホテル近くに見つけたここで海老づくし。美味しかった。今朝は10時過ぎまで朝

寝してからチェックアウト。盛岡駅への道すがらのカフェで木陰の物語新作の下描き。順調に進むので明日は仕事場でペン入れができる。どこに出かけても自分のつमりの作業をしているなあ。



7/27

盛岡駅近くでワンコそば風の美味しい十割蕎麦を食べて、早めのバスで花巻空港に。読書でもしようかと入ったレストランに「瓶ドン」なるものが。好奇心で食べたが美味しい。ちと高いが。時間があるのでついでに三色団子のお茶セットも。美味しかったが食べ過ぎだ。体重が年齢に並ぶ。



8/4

娘が孫を連れて夏の帰省に。とはいえ実際は大掃除屋さんの数度目の来訪感覚。家は大幅に綺麗になっていく。ありがたいことだ。私は食事の用意だけをしながら、自宅仕事や必要な外出仕事をこなしている。

直近の Amazon 配達はこれ。別々のきっかけで注文したが、ちょっと読んだだけで、重なる関心事が多いのに感心と納得。

7/30

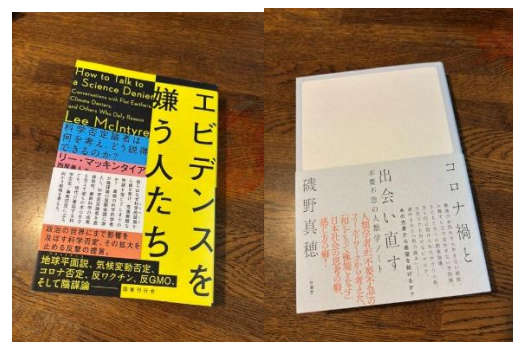
今月初めに手にした本「急に具合が悪くなる」を、何度かに分けて今日読み終えた。映画きっかけだったが、この本がとてもいい。「そうかあー」、「そうだなあー」と 呟かされてばかりで、巻末へ疾走する。

8/1

団士郎トークライブ！ 今度の水曜日、8/5 開催。中味が固まりつつある。第一話は「社会見学道中記①」どんな話になるのか、お楽しみに。第二話は「舞台へのあこがれ」どういう話なのかは聞いてのお楽しみ。お時間あったらどうぞお越しください。

8/1

同志社大学の後輩で、児童相談所でも仕事をしていた 2 人が来訪。すっかり定例化した賑やかな集まり。二人は飲むからビールやワイン持ち込みで、勝手にやっている。後半は行きつけのスペイン料理店に移っておまかせの美味しい食事会。共通の昔話に、知らなかった話が混ざってなかなか楽しい。



8/6



例によって途中で飽きてしまう琵琶湖花火大会。人出も半端ないので街には降りて行かない。娘、孫と三人で住まいの住宅地内の見晴らしのいいところで。私は 20 分ほどで戻ってきた。後から動画や写真を見ると、「もったいない、クライマックスがー」と語りかけてくるが、まだまだ酷暑の夏の夜。

8/8

夜中に救急車のサイレン。自宅近くなので表に出てみた。ストレッチャーを準備していた。高齢者の多い地域だしなあ。そして今、京都駅の新幹線待合室前で、若い男が倒れていて救護している。暑い！

♪だけでも問題は♪、バラ寿司の陳列場所が変わっていたこと。無くなったのかとうろたえた。他を探して、再度戻ってきて発見。ここじゃ売り上げ打撃だろう。井上陽水「傘がない」だな。



8/8

お茶の水、平和と労働センターを会場に、家族理解ワークショップ八十二回目。十五人で六時間。私的には時間配分も計画通りで、コントロールの効いた回だった。初参加が六人あり、その方達が楽しんでくださっていればと思う。



8/9

日曜の朝、神田駅前のカフェで大学院時代の教え子たちと面談。高齢者福祉現場のマネージメント話。私の渦中高齢者意識を絡めてあれこれ話す。午後は大学時代の旧友と久々に。お互い八十前になっているのだから、昔話も長いし、今を暮らしているから、そこもあれこれ。亡くなった近しい同窓生もあるので、自分では何ともならんこともあるねえ。愉快地食べて飲んで過ごす。



8/12

お盆。12 日は妻の七回忌。姫路・専光寺の竹中師は妻とも長い交流があったので、亡くなって以来ずっと来てくれる。

こちらは次男と娘と孫。午後のひと時、典子を偲ぶ良い時間。

昨日は、帰省といえばここの鰻。開店前、早目に着いて順番待ちをしたのが正解。大賑わいだった。しかし美味しいなあ。



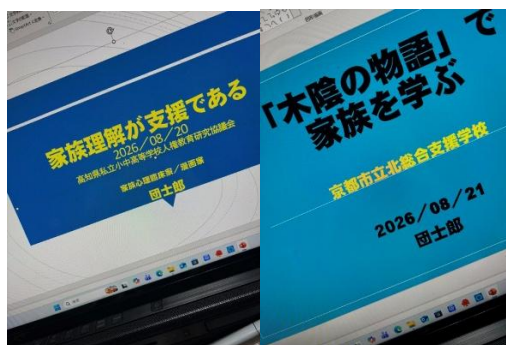
8/14

みんな帰ってしまった今日から、私も平常運転に。8月後半の準備をどんどん片付ける。それにしても、都市でのワンオペ子育てに近い娘の効率的課題処理には感心した。でなければやってられないと聞いて、今頃になって妻の三人の子育ては大変だったろうなあ、なんて呑気なことを呟く。



8/15

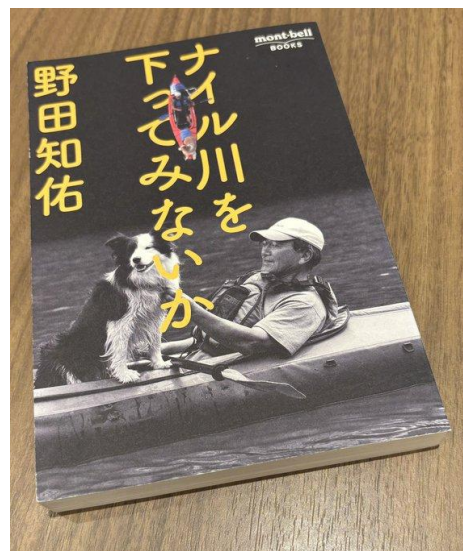
新刊「家族の練習問題」第10巻の前書きと後書きを仕上げて送信。高知と京都で連日になる講演のパワポ完成。対人援助学マガジン第66号の表紙、連載原稿、その他を完了。毎月の木陰の物語319回目の候補案数話をまとめに入る。その合間に、複数の人から耳にしたドラマ「Tシャツが乾くまで」をしてみる。



8/18

昨夜は家族の練習問題第10巻のzoom編集会議。自作について思うことを語りだすと止まらない。いつもか！

ふらっとのぞいた mont_bell で野田知佑さんの知らない本を見つけて購入。雑誌「旅」連載の「日本の川を旅する」でゴムボート川下りに誘われた。もう40年以上前のことだ。



8/19

漫画集団ぼむの月例会。近くなのに行ったことがなかったヒルトン Kyoto のイタリアンランチ。ロビーに集合していると、空間の外国人比率はほんとに高い。体調不良で欠席があったので、5人だが、写真を見て亡くなったのかと心配されてもおかしくない歳頃揃い。カフェに移動して計四時間だべる。



8/20

今日は高知日帰り出張。朝早く伊丹に。JRの運行状況を見たらちょっと怪しいことがあったので、とりあえず急いで空港に向かった。結果的に早く着いたのでチェックインしてから朝食。昔はギリギリセーフが得意だったりしたが、今じゃもうゆとりを持って一本になった。



パワポ資料を用意しているのに、余計なことをあれこれ話してしまう。準備したままの方がまとまりはあるが、話のノリは脱線気味に展開する。初めて聴く人には定型の方が受け止めやすいのかもだが、ライブだからなあ。馴染みの高知城の見える建物のホールで二時間半。やはり時間が足りぬ。



66・変更をチャンスに変える

お泊まり保育計画変更から学んだこと

2026年9月 原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

毎回、幼稚園で行われている活動と活動のねらいを中心にお伝えしている私のレポートですが、今回は珍しくメッセージ性の強い内容になります。

☆今回一番のメッセージは、

計画変更を「失敗」と捉えるのか、「新しい可能性」と捉えるかを学んだ体験レポートです。保育の世界でも、対人援助の世界でも、予定通りいかないことは日常に起こることで、大きな行事を変更するときは、物理的、精神的に大きなエネルギーが必要です。そんなときに、実行する決断者（施設の長だけでなく職員みんな）としてなにをマインドセットしておけば良いか、今回の経験が示唆してくれました。

《三度の計画!?!》

第1段階 「これでいける!」と思っていた

もともとは朝霧高原での一泊二日。65号で紹介していますが、長年続けてきた定番コースがあり、

マスのつかみ取り

川遊び

朝霧野外活動センターで宿泊

キャンプファイヤー

酪農体験

という、いわば「完成されたプログラム」がありました。

ところが今年は、牧場の予約が取れず、さらにクマの目撃情報。

安全を最優先に考え、朝霧での活動を一部変更することになりました。

長い歴史が中断される悔しい思いと「せっかく準備してきたのに……」という「マイナス」が発生します。



第2段階 「代替案」を探す

気を取り直して最初に考えたのは、

朝霧でできなくなったものを、どこか別の場所で代わりにできないか？

という発想。

そこでレジャー施設「まかいの牧場」を下見。代替場所としてはなんとか納得できることから「これならお泊まり保育を成立させられる」と考えます。

二度目の計画案を作成。そして6/24には保護者への第1回目の説明会を実施します。

そこでは、今後「熊」情報が報道されたら即刻中止、代替案は考えていない。と告知していました。

ここまでは、「失ったものを、別のもので補う」

という発想です。

ところが、ここからもう一段階、状況が変わり考え方が変わります。

第3段階 「代わり」を探すのをやめる

説明会の5日後、お泊まり保育本番の約10日前に熊の目撃情報が報道されました。その日のうちに園舎で宿泊する目処、代替案を確認し、翌日速報メールで「**お泊まり保育は園で実施する**」ことを伝え、朝霧野外活動センター等の予約をキャンセルするなど対外的な手続きを済ませました。

3回目の保護者への説明資料には、「朝霧高原で行ってきた活動を代替するのは不可能」と明記しました。

そして、私たち保育者は、

「代替案では無く、園でのお泊まり保育ならばどんなことができるか」

「ふだんできない、子どもたちの頭の中のイメージを具現化できるなにか！」

という視点に切り替えてきました。

つまり、

Before 「できなくなったことを、どうやって別の形で実現するか」

から、

After 「条件が変わったのなら、この条件だからこそ何ができるか」へ視点を切り替えることができたのです。「熊のおかげ」と言うと少し語弊がありますが、結果として、私たちが計画そのものを見直すきっかけになったことは確かです。

そして、活動の性格そのものが変わった

朝霧高原でのお泊まり保育は、豊かな自然環境そのものが大きな教材でした。

一方、園泊に変更したことで、

「園だからできること」を考える必要が生まれました。

そこで生まれたのが、「富士山とすきなもの」オブジェづくりです。

子どもたちが事前に構想し、友だちと相談しながら、大きなオブジェをつくる。本番まで1週間という日程があったことも幸運でした。子どもたちのやりたいことを聞き出し、話し合い、アイデアを出して、それをできる限り実現させてやろうという姿勢で取り組むことができたからです。カインズホームで素材になるものも買い込めました。

「朝霧高原に行けなくなったから、仕方なく工作をした」のではなくむしろ「園に泊まるなら、園でしかできないことをやろう」に変換された。

考察：「変更」が子どもの主体性を生み出した

ここから、今回のことを考察してみます。

当初の計画では、大人が考えた「子どもたちに体験してほしいこと」を、子どもたちと実施するという色合いが強かった。。もちろん、それ自体は悪いことではありませんし、普段経験することができないことから得る成長も期待できました。

しかし、計画が大きく崩れたことで、

「じゃあ、どうする？」という問いが生まれました。

そしてその問いによって、子どもたちが考える、相談する、アイデアを出す、友だちと協力する、自分たちでつくる、「こうしたい」を実現するという活動が生まれた。

つまり、

「大人が用意した体験」から「子どもがつくる体験」へ、活動の性格が変わったのです。

いままでのお泊まり保育を思い出すと、牛の乳搾りがこわくて泣いている子どもを説得して、なんとかやらせて「山を乗り越えさせられた！」と保育者側はある意味達成感を得ていましたが、それが果たして本当にそうなのか？疑問はいままでもあったけど、そちらに目はあまり向けていなかったわけです。

「できた！」という結果を、大人は「成長」と評価するのですが、それは本当に子ども自身が「やりたい」と思って得た経験だったのだろうか。という問いは常に考えなくてはならないことです。

今回のお泊まり保育では「やらせる」よりも「どうしたい？」と聞く時間が増えました。

今回、一番ガッカリしていたのは、園児を通わせてくれている元職員の親たちでした。活動の詳細を知っているだけに「あの経験をさせられないんだ！」と彼らの批判はいちばん大きかったです。でも、お泊まり保育をよく知らない親は「熊のことは気になっていたので安心した」という声も多かった。子どもたちは、知らないところに泊まりに行くというプレッシャーから開放され、「普段通っている幼稚園に泊まれる」という安心感からか、期待値がぐーんと上がったのは意外でした。

「変更を嫌う心」を考える

ここでは少し踏み込んで、
なぜ私たちは変更を嫌がるのか？を考えます。

理由として、

これまで準備してきたものが無駄になる

努力が否定されたように感じる

周囲への説明や段取りが大変

責任を問われるのが怖い

新しいことを考えるのが面倒

失敗したくない

「最初の計画が悪かった」と思われたくない

などがあります。

だから、「変更＝マイナス」と感じやすい。

しかし実際には、環境が変わったのに、最初の計画に固執するほうが危険な場合もあるわけです。

当初は大人が、「子どもたちががっかりするのではないか」と心配していた。

実際、保護者向け資料にも、朝霧高原に向けて準備してきたため、子どもたちのモチベーション低下を心配していると書きました。ところが子どもたちは気持ちを切り替え、園で泊まることを楽しみにしてくれた。

ここから、

大人は「計画が変わったら子どもはかわいそう」と思っていたのですが、子どもたちは思っていた以上に柔軟だった。「朝霧に行けない」ことより、「みんなでお泊まりする」ことを楽しみにしていた。という発見があったのです。

「変更に弱かったのは、子どもではなく、

大人のほうだったのかもしれない。」

大切なのは「目的」と「手段」を分けること

今回変えなかったのは、お泊まり保育の「ねらい」です。

自分のことを自分でする

自信を持つ

友だちと協力する

非日常を楽しむ

日常ではできない経験をする、という部分でした。

変わってよいものは、その「ねらい」を実現するための手段です。

ここを分けて考える。

目的は守る。方法は変えても良い。

これは今後の保育活動でも重要な考え方になると思います。

今回の実践から見えた3つのポイント

今回の経験を整理して、我々スタッフに必要な力を考えました。

① 捨てる力

「せっかく準備したから」と、古い計画にしがみつかない。

必要なら、「これは一度捨てよう」と判断する。

② つくり直す力

条件が変わったら、「じゃあ何ができる？」とゼロから考え直す。

単なる代替ではなく、新しい価値をつくる。

③ 意味づける力

そして一番大切なのが、「この変更には、どんな意味があるだろう？」と考えること。

今回なら、「朝霧に行けなくなった」という出来事を、

「園でしかできないお泊まり保育をつくる機会になった」と意味づけ直した。

この「意味づけ」は、今後の活動設定においても必要な力になるのではないか。

さいごに、幸運だったこと

○猛暑の中、牧場へ行って炎天下の中で歩き回ることを危惧しておりました。その点、
「特別なおたのしみ計画」で水族館を選んだため館内での活動は涼しい中でできました。
屋外スタジアムでのアシカショーは汗だくでした。これからの夏の屋外活動は気温を考慮しなければなりません。

○保育園のお昼寝用の簡易ベッドを借りて使うこと、給食室の協力を得られたことは、施設として幸運でした。

○一日の汗を流す、ナイトプールは午前中から水を張っておくことで、冷たすぎずちょうど良い湯加減？で楽しむことができました。

○2日目にお迎えに来られた保護者たちは「子どもたちが構成した朝霧高原」で、我が子と一緒に“模擬お金”を使って、子どもたちが考えたお店で楽しんでから帰りました。
保護者も一様に驚きと満足の顔で、たくさん写真を撮っておりました。

○いつも同じ活動をしていた保育園と幼稚園は、1日目の夜～2日目はそれぞれに、考えた活動を実施しました。（一緒じゃなくてもいい、ということが柔軟にできました）

《 資 料 》

最終的に園泊のお泊まり保育保護者向け資料（1 ページ）

お泊まり保育説明資料2026《園泊版・幼稚園》

日程：7/10(金)～11(土) 大きな体験しよう！

6月30日にメールで「熊目撃報道→朝霧での活動は中止」とのお知らせから3日経ってしまいました
が、園でのお泊まり保育の計画が整いましたのでお知らせいたします。

これまでの経緯を説明します。

まず熊報道があったら即中止という前提でしたので、29日の目撃報道があった時点で中止は決定でした。もし来週報道が出ていたら、準備期間もなかったので園でのお泊まりは実施できなかったと考えます。タイミングとしてはギリギリでした。2学期以降に振替の日程が取れるとは限らないため、なんとかこの日程でできないか検討を始めました。

まず子どもたちの活動を考えて、園で泊まるにしても「何かしら非日常のお楽しみを体験させたい！」と考え、バスに乗って出かけられる場所の選定を行いました。まかいの牧場は安全だとは思いますが、99%安全としても富士宮市内ですので不安は残ります。その1%の不安を解消する術は無いのが熊の厄介なところです。熊スプレーも準備していましたが有効かどうか、上手く使えるかすら定かではありません。

天気予報では雨の確率が高かったので、もう変更はゴメンだという気持ちもあって、雨でも対応できることも考慮し、急ぎょ三津シーパラダイスを見学してきていたのですが、ちょうど加藤学園さんが遠足にきていました。ざっと館内を見回って魚介類の観察もできるし簡易的なアスレチックで遊ぶこともできること、その日の予約は原町だけということで施設を問題なく使えるということで三津シーパラダイスを選択しました。イルカのショーも魅力的なところです。園にお泊まりする日のはじまりとして、子どもたちの共通の体験と話題を提供してくれると思います。

30日はここまで決まったところで、いち早く保護者の皆さんにお知らせしたほうが良いという判断で、とりあえず「予定の日程で実施します！詳細は後日」ということでメールを流しました。

その後、どんな活動をしていくか検討をしてきました。朝霧高原で行ってきた活動を代替するのは不可能なので、代替案では無く、園でのお泊まり保育ならばどんなことができるか、という視点で子どもたちの活動を再計画しました。（メールでお知らせした内容と若干違っていますので活動のタイムスケジュールをご覧ください。）

朝霧高原での準備を進めていただけに子どもたちのモチベーションが下がってしまうことを心配していました…。幸いなことに、子どもたちは気持ちを切り替えて園で泊まることを楽しみにしてくれているようですので、私たちもその気持ちに応えるべく「お泊まり+α」で、子どもたちの思い出に残るお泊まり保育、そして成長の機会とさせて頂きたいと考えます。ご理解をよろしくお願い致します。

2026年7月3日（金）原町幼稚園園長 鶴谷主一 原町保育園園長 鶴谷由美子

※ねらいも若干変更しました

◆お泊まり保育の目標&ねらい

1. 「自分のことは、じぶんでやる」が基本。
「自分にもこんなことができた！」という自信を持とう。
2. 友だちと協力することの楽しさを体験しよう。
3. 海の生きものを観察し、興味を持とう。
4. 園に泊まるというトクベツ感を楽しむ。
5. 日常ではできない活動に取り組む。

幼稚園：富士山とすきなもののオブジェ作り（現在進行中）
保育園：三島の柿田川公園に園外保育



★活動タイムスケジュール

1 日目の活動		2 日目の活動	
12:45	12:00~12:30までに登園 ★記録カードを担任にお渡し下さい。 園庭集合	6:00	起床→洗面→着替え →布団片づけ、朝の体操 散歩（雨天時はお部屋で体操）
13:00	バス乗車→出発 三津シーパラダイス到着	7:20	部屋に戻る→手洗い、トイレ等
14:00~14:40	幼稚園/キッズコーナー、保育園/水族館	8:00	サンカフェにて朝食 サンドイッチ作り/エプロンバンダナ 「いただきます」
14:40~15:20	幼稚園/水族館、保育園/キッズコーナー	9:00	「ごちそうさま」→片付け 食後は幼保別々のプログラムになります 幼稚園：合同製作続き 片付け→荷物整理、お帰り準備 園長先生からのお話
15:30	イルカショー→出発→園着	11:00	お迎え わくわくホールにて製作物披露 幼稚園お帰り11:30までに駐車場をあけてください
17:00	夕食準備（カレーライス+サラダ）		
18:30	ナイトプール 晴れ：保育園屋上プール 雨天：幼/うさぎテラス 保/乳児組ベランダ ※お風呂代わりも兼ねているのでぬるま水 ※ドライヤー使用で髪を乾かす		
19:30	キャンプファイヤー 幼/New合同制作・「富士山とすきなもの」 富士山と町（すきなものなんでも）をテーマにみんなでわくわくHいっぱいにおブジェを作り上げます。事前にみんなで構想したオブジェを友だちと協力して2日間かけて製作。 保/New園内探検 普段は入れない夜の保育園を探検！	8:45	保育園：柿田川公園に園外保育 ※雨天の場合：保育園でおたのしみ
		12:45	帰園後保育園で昼食 園長先生からのお話
20:30	就寝準備（はみがき、検温、着替え、トイレ）園貸出の敷き布団orベット。クラスごと就寝 つき/つき組の部屋（落合、小川） ほし/ゆり組の部屋（山田、鈴木） フリー真野、伊藤	14:00	お迎え
21:00	にじ/うさぎの部屋（藤田、石村、杉山） 消灯・就寝		

◆食事メニュー

- 夕食：カレー、サラダ、デザート、ヤクルト
 - 朝食：自分で手作りサンドイッチ（レタス・トマト・チーズ・ハム・ジャム）、牛乳
- ※夕食朝食/アレルギー対応はしていません



園庭でのキャンプファイヤー



「幼稚園の現場から」ラインナップ

- 1号 エピソード (2010.06)
- 2号 園児募集の時期 (2010.10)
- 3号 幼保一体化 (2010.12)
- 4号 障害児の入園について (2011.03)
- 5号 幼稚園の求活 (2011.06)
- 6号 幼稚園の夏休み (2011.09)
- 7号 怪我の対応 (2011.12)
- 8号 どうする保護者会? (2012.03)
- 9号 おやこんぼ (2012.06)
- 10号 これは、いじめ? (2012.09)
- 11号 イブニング保育 (2012.12)
- 12号 ことばのカリキュラム (2013.03)
- 13号 日除けの作り方 (2013.06)
- 14号 避難訓練 (2013.09)
- 15号 子ども子育て支援新制度を考える
- 16号 教育実習について (2014.03)
- 17号 自由参観 (2014.06)
- 18号 保護者アナログゲーム大会 (2014.09)
- 19号 こんな誕生会はいかが? (2014.12)
- 20号 ITと幼児教育 (2015.03)
- 21号 楽しく運動能力アップ (2015.06)
- 22号 (休載)
- 23号 大量に焼き芋を焼く (2015.12)
- 24号 お話あそび会その1 (発表会の意味) 2016.03
- 25号 お話あそび会その2 (取り組み実践) 2016.06
- 26号 お話あそび会その3 (保護者へ伝える) 2016.09
- 27号 おもちゃのかえっこ (2016.12)
- 28号 月刊園便り「はらっば」 (2017.03)
- 29号 石ころギャラリー (2017.06)
- 30号 幼稚園の音楽教育 (その1・発表会) 2017.09
- 31号 幼稚園の音楽教育 (その2・こどものうた) 2017.12
- 32号 幼稚園の音楽教育 (その3・コード奏法) 2018.03
- 33号 (休載)
- 34号 働き方改革・一つの指針 (2018.09)
- 35号 働き方改革って難しい (2018.12)
- 36号 満3歳児保育について (2019.03)
- 37号 満3歳児保育・その2 (2019.06)
- 38号 プールができなくなる!? (2019.09)
- 39号 跳び箱 (2019.12)
- 40号 幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉 (2020.03)
- 41号 コロナ休園 (2020.06)
- 42号 コロナ休園から再開へ (2020.09)
- 43号 ティーチャーチェンジ (2020.12)
- 44号 除菌あれこれやってみた (2021.03)
- 45号 マスクと表情 (2021.06)
- 46号 感染予防と情報発信 (2021.09)
- 47号 親子ソーラン節 (2021.12)
- 48号 親子コンサート (2022.03)
- 49号 うんちでたー! (2022.06)
- 50号 子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ (2022.09)
- 51号 子どもが育つ園庭・その2 砂場 (2022.12)
- 52号 子どもが育つ園庭・その3 スライダーと Tonka (2023.03)
- 53号 リスクと安全・園庭編 (2023.06)
- 54号 夏の音楽会・動画 (2023.09)
- 55号 クリスマス劇・動画 (2023.12)
- 56号 こいのぼり製作 (2024.03)
- 57号 この頃、気になること (2024.06)
- 58号 お話あそび会動画解説《年少編》 (2024.09)
- 59号 お話あそび会動画解説《年中編》 (2024.12)
- 60号 お話あそび会動画紹介《年長編》 (2025.03)
- 61号 マルシェを開催しませんか (2025.06)
- 62号 夏の暑さ対策! 日除け改良版 (2025.09)
- 63号 運動会雨天延期に直面して (2025.12)
- 64号 年長組さいごの参観会 (2026.03)
- 65号 年長組お泊まり保育 (2026.06)
- 66号 変更をチャンスに変える (2026.09)

▶ 気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.ed.jp



こもれびのながのおはなし

はらまち
HARAMACHI Kindergarten
est.1957

福祉系対人援助職養成の現場から

66

西川 友理

“すみあそび”

…普段墨を磨（す）ったり、筆でかいたりということをしないから、なんだか思うとおりにいきません。どの筆を使うといいかわからない。どの紙をつかうといいのかもわからない。薄くなったり、濃くなったり、想定よりずっとにじんで、思わぬところで急にかすれて、私の想定を含みながらも、好き勝手に紙に跡が残っていきます。

でも、なんだか気持ちいい。紙と筆と墨が出す想定外の姿に呼応するように筆を動かし、立ち現れてくる姿に驚き、楽しみ、またかいてみる。うまくいかなさというのは違和感の連続、でもその違和

感を持ったまま、次の一手を考える。

“すみあそび”と名付けられたこのワークで、ひとり禅問答のような時間が過ぎていきます。

先日、マガジン連載をされている櫻井育子さんの「アートプレイワーカー 養成講座」を3カ月かけて受講しました。4回のオンデマンド含むオンライン講座と、1回の対面講座です。オンライン講座では座学とそれに基づく参加者同士のZOOMでの対話、対面講座では櫻井さんがご用意くださった墨や筆で“作品”をつくり、その後、“展示・発表”して、その場にいる人たちに説明する、という

“すみあそび”をしました。

思ったほど、思うようにいかない。

…それにしても筆と墨というやつは、なかなか思い通りにいきません。想定していたことよりも、想定外のことがたくさんおきます。道具に慣れていたらそんなことないのかしら、と思っていたら、櫻井さんも「思ったとおりにいかない」ということがあるらしいです。ふーん、そういうものなのか…と思いつつ、想定外を楽しみます。

保育の場面でもそうです、子どもはこちらが想定していた範囲を軽々と超えて様々なことを表現します。まずは「あれっ」という違和感があり、その違和感とどう付き合っていくか、その違和感と共にある私でいると、子どもにもこちらの感覚が伝わるのか、どんどん面白いことが起こり始めます。

この連載の46号に書いた卒業生の言葉、保育が指導案通りに上手くいかない時にどうしたらいいと思う？という問いに対して卒業生が言った言葉を思い出します。

「思い通りにいかない、なんて当たり前じゃないですか！そんな時は、思ったよりずっとよくなったらいいだけやん、って思うんです。だから、子どもの思いに寄り添って、子どもに任せてしまいます。」

私が主催している親子哲学対話や当事者研究等の対話の場でもそうです。想定していた展開ではないところに話は進みます。何が答えかわからない、何が正解かわからない、だれも着地点をもっていない、どこにたどり着くかわからない、そういう場だからこそ、場を注意深く見て、聞いて、感じて、皆が皆に刺激されて場は発展し、考えはどんどん広がっていきます。

想定外と想定内

想定外が面白いからといって、あまり用意をしておかない、ということではありません。むしろ色々と想定して場の準備をしておきます。

例えば、時間を決めていたり、自傷他害の恐れがある事は制限したり、安心が脅かされるような要素は出来る限り排除したり、何をする場なのか、何を目指す場なのかを考え、ある程度の枠組みを用意しておきます。その場にいる人皆が出来るだけ自分らしく自由であるために、この場がどういう所かを考えておき、時にはその場を構成する人みんなに宣言しておく必要があります。

とて、そこに参加する子ども、大人、学生に、この枠組みについて、ギッチリ沿ってもらおうとはあまり考えていません。むしろ、その中で出来るだけ、自分らしくいてもらえるように考えた末の“場のあり方”であることを伝えます。

そういう準備をしっかりとしておく、きちんと作っておいた枠組みに「あれっ」という違和感が生じることがあります。枠組みの外、“想定外”に、何かが生じることが往々にしてあるのです。「あ、そんなやり方があるか！」「そんなこと考えていたのか！」「そうくるか！」などなど、豊かな展開が生まれます。

時には、講義もそうなります。私は対人援助職養成の資格に関わる科目を担当していますから、国から科目の内容について指定されています。指定されている内容は教えなければいけません。しかし「指定されている内容しか教えられない」のではなく「指定された内容さえクリアすれば、何を教えても、どんな教え方でもいい」と捉えると、出来ることは増えます。そういう気構えで講義を構成し、受講する人たちが出来るだけ自由に考えてもらえるような設定をすると、予期せぬ発言や、こちらが考えていた講義ではない展開になり、思わぬ方向に学びが発展していきます。

……などと、頭の中でいろんな思考を巡らせつつ、ひたすら、かきます。

“すみあそび” 発表の場

さて、墨と紙による、いくつかの作品が完成しました。会場内にそれらを展示し、自分が作った作品を皆で眺め、どん

な気持ちで作成したかを話す、“発表”をします。

櫻井さんは「発表する、とは、“伝える”ことではなくて、自分の表現を“差し出し”、世界と“分かち合う”ことです」とおっしゃいました。

私はこの発言について2点、「あっ」と思うことがありました。

一つは、「自己主張じゃなくて、自己表現なんだ」ということです。自分の意見を言うのでなく、自分の中からあふれた思いが形になった“表現を差し出す”、というかたちを体験することを重要視されていることが強く伝わりました。そして表現を分かち合う、という体験を十分にすることは、実は自己主張や意見表明をするための土台にもなると感じました。

もう一つは、「発表って、一方的なものでなく、双方向的なものなんだ」ということです。自分の中から出てきた表現を相手と分かち合う時に、“分かり合える”という経験をします。それはとても嬉しいものです。一方で何をどうしても“分かり合えない”“この人とは感覚が違う”ということも生じます。分かり合えないズレはいわば「想定外」です。想定外の何かが生まれるきっかけになります。相手とのやり取りの中でズレた隙間から、新しい発見、新たな発明が生まれます。分かり合えるから世界は整っていく、そして分かり合えないから世界は広がっていく…ということだと感じます。

アートプレイワーカー、とは。

一日たっぷり“すみあそび”をして、さて振り返ってみれば、あ、そうだ、この講座は「アートプレイワーカー養成講座」だったっけ、と思い出しました。

最初は、表現遊びをする場にいる大人として、何を用意するか、どう声をかけるか、子どもとどう接するか等のスキルを学ぶのかな、と思っていました。しかしそれよりもむしろ、違和感に注目し耳を澄ますこと、違和感を持ったままその場にいること、関係性の中で相手も自分も生成されること、拙速な結論ではなく問いと共にあること、表現することと主張することの違い…などを4回の座学と1回の実践を通して学びました。

櫻井さんのHPには、この講座について、このように説明されています。

「APW（Art Play Worker）養成講座は、人や場で起きていることを、自分自身もその一部として観察し、関係の中から生まれる変化や可能性を扱う実践です。心理学や発達理論、現象学などを手がかりに、違和感や身体感覚に耳を澄ませ、すぐに答えを出さずに問いとともにいること。そして、すみあそびなどの表現実践を通して、自分・他者・場が関係の中で生成されていくプロセスを探究します。」

場を作るひと、という立場上、どうしても力を持ってしまいがちな1人として（特に子どもがいる所で、大人や先生として存在するならなおさら！）、私自身がどうあるか、どう居るか、を学ぶ場に

なりました。

こんな気付きを、やがて子どもと共にある仕事に就きたいと考えている学生にも、体験してほしい。そのための仕組みってどうすればいいのかな…ゆっくりじっくり考えて、今後も様々に試行したいと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・

※ところで、櫻井さんの「違和感」についての考察、めっちゃめっちゃ面白いのです。詳しくは本マガジン 65号「現象学としての書道 #15」を読んでください！

<https://humanservices.jp/wp-content/uploads/magazine/vol65/47.pdf>

引用）櫻井さんのHP <https://ikuko-sakurai.com/>

ああ、相談業務

～ 満君の話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

26

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

今回は、助けられなかったケースについて綴ろうと思う。虐待や不登校、家庭内暴力、非行など相談内容は様々だが、すべての子どもたちの問題を解決できるわけではない。スクールカウンセラーとして赴任する学校や勤め先が変わることで、支援が途切れてしまうことも多々ある。その後が気になっても、個人情報保護の壁に阻まれ、確認できないことも多い。今回は、そんな無念さが残るケースを一つ紹介したい。

家族構成

満君は18歳の高校3年生。家族は父親（50歳、トラック運転手）、母親（47歳、パート）、妹（14歳、中学3年生）の4人家族。

相談経過

満君に会ったのは、5月の連休明けのことだった。母親の妹夫婦にあたる叔父と叔母が、本人を連れて相談に訪れた。このご夫婦には子どもがおらず、満君を我が子のように可愛がっていた。自宅も隣の市で、車で20分ほどの距離だったため、満君はたびたび叔母宅に泊まりに行っていたという。

叔母の話によると、連休中に泊まりに来ていた満君が突然泣き出し、「家に帰りたくない」と訴えたそう。詳しく話を聴くと、父親から虐待を受けているという。理由もなく竹刀で叩かれたり、拳で殴られたりする日々耐えきれ

ず、逃げ場を求めて叔母の元へやってきたとのことだった。

早速、満君の体を見せてもらった。目立った痣などは見当たらず、叔母夫婦は「長年叩かれていたから背骨が曲がってしまったのだ」と説明した。確かに背骨は若干曲がっているようにも見たが、それが虐待によるものかどうかを判断することは、医師ではない筆者にはできない。その旨を伝えつつ、本人が「逃げる場が欲しい」と望んでも、18歳という年齢がネックとなり、当時の児童相談所が保護に動くのは難しい状況であることも率直に伝えた。

それでも本人の訴えを重く受け止め、児童相談所に連絡してみた。しかし、案の定「年齢的に施設での受け入れは難しく、18歳の男子なら自力で逃げられるのではないか」という返答だった。（児童虐待防止法が施行されたのは平成12年であり、このケースはそれ以前の出来事である。現在とは制度や支援体制が大きく異なる時代のケースである。）

児童相談所からの見解を踏まえ、自力で逃げることはできないか、あるいは叔父夫婦のもとで匿うことはできないかなどを話し合った。しかし、叔父夫婦は母親側の親族であり、粗暴な父親には到底太刀打ちできないと感じていた。

「満君を引き取ったり虐待を非難したりすれば、聞く耳を持たれないどころか、下手をすれば自分たちも殴られるかもしれない」とひどく怯えている状態だった。

話し合いの末、解決策として提示できたのは「実際に殴られて痣などができた状態で警察に相談する」「殴られるのを避けながら何とか卒業まで耐え、その後家を出て自立する」といったことくらいだった。筆者としても力不足を痛感した。

結局、叔父も叔母も「助けてくれないんです

ね」と肩を落とし、満君を連れて帰っていった。それきり、彼らが相談に訪れることはなかった。

まとめ

現在であれば、虐待を受けた子どもや若者を受け入れる様々な支援機構や施設がある。また、現在の日本では18歳は民法上の成人であり、アルバイトなどでお金を貯めて一人暮らしをすることも選択肢の一つになりうる。しかし、児童虐待防止法ができるまでには、満君のように十分な支援に繋がることができなかった子どもたちが数え切れないほどいたはずだ。

当時は、叩かれて痣を作って登校しても、本人が「自分でぶつけた」と言えば、教師が違和感を抱いてもそのままにされることが少なくなかった。実際、小学校2年生の男の子が母親に灰皿で頭を殴られてケガをしてきた際も、学校側は「自分で転んだ」という子どもの言葉を鵜呑みにし、それ以上の聞き取りを行わなかったケースがある。たまたまスクールカウンセラーとして関わっていた筆者が不審に思い、本人から本当のことを聞き出し母親を呼び出したことがあった。

虐待防止法が施行された後も、しばらくは虐待と分かっているながら通報されないケースが多々あった。学校が躊躇なく通報するようになったのは、比較的最近のことだ。

誰にも気づかれず、ひたすら暴力を我慢し、傷ついてきた子どもたちの中には、今大人になり親になっている人もいるだろう。彼らは一体、どんな親になっているのだろうか。

叩かれて育った子どもは「叩くことが嫌なのだ」と学んでしまうことがある。虐待の連鎖はそうした背景から生まれる。「自分は叩かれて育ったから、絶対に子どもには手を上げたくない

い」と思いながらも、結局叩いてしまったという母親に、筆者はこれまで何人も出会ってきた。

学校でも家庭でも、体罰や「躰」という名のもとに暴力が容認されていた時代は長かった。その時代を生きてきた我々「昭和世代」は、今も社会の中でかなりの割合を占めている。

しかし、体罰を受けてきた人が皆、虐待をするわけではない。躰という名目であっても、そこに愛情を感じられる場合や、感情に任せただけでない場合、あるいは頻度が少ない場合は、受けた側の傷つき方が比較的小さいこともある。そうしたケースは虐待の連鎖には繋がりにくいかもしれない。

一方で連鎖を引き起こす背景には、体罰や躰を隠れ蓑にし、自らの感情の捌け口として、限

度をわきまえず、理由も曖昧なまま一方的かつ執拗に繰り返される暴力がある。

暴力を肯定するつもりは毛頭ないが、筆者を含め、教師や親から叩かれた経験を持つ人が、「何でもかんでも虐待と捉えること」に抵抗感を抱くのは、こうした理由からなのだろう。

酷い虐待を受けて育った大人たちは、今もその後遺症に苦しんでいる。一体いつになれば、この虐待の連鎖は止まるのだろうか。

過去のケースを思い返し、助けられなかった子どもたちの「今」を想像すると、暗澹たる気持ちになる。

この連鎖を断ち切るために、今、目の前にいる子どもたちを助けること。それが我々支援者の使命なのだと、改めて心に刻んでいる。

きもちは、 言葉を さがしている



第 59 話

水野 スウ

マエソラのこと

憲法お話の出前に呼ばれるようになって、20年あまりたちます。その頃は、憲法＝難しそう、自分に関係なさそう、と思う人が今よりずっと多かったように感じてたので、どうしたら憲法を少しでも身近に、自分ごと感じて帰ってもらえるだろうかと毎回、試行錯誤しながら伝え方の工夫を重ねていました。話す時は、できるかぎり主語を小さくして、ふだん使いの言葉で、私の日々の暮らしがどれだけ憲法によって支えられ、守られているか、その実感が聴く人に届くよう、そう願いながら語ってきて、その工夫は今も継続中です。

出前先では話の終わり頃によく「マエソラ」をします。マエソラ、と聞いた皆さんは一樣に、え？という顔。「日本国憲法前文をそらんじることです。まえぶん、とも読む前文のそらんじを、私はマエソラと呼んでいます」と説明して皆さんやっと合点。だけどここでいきなりマエソラを始めると、前文が言葉の羅列に聞こえてしまいそうでもったいない。

なのでマエソラする前にはいつもちょこっと解説をつけます。

前文に何度も何度も出てくる「日本国民は」「われらは」「われらの」という言葉。これは今の憲法の主語が、わたしたち国民であることの確かな証拠です。この憲法の持ち主は主権者のわたしたちであって、政府の持ち物ではないということがわかります。この前文のすごいところは、先の戦争が誰によって引き起こされたのか、それをここでははっきりと言っていること。それを二度と繰り返させない、政府に対するその決意を求められているのは、他ならぬわたしたちです。世界中の人々が等しく平和に生きる権利を持っていて、そうあれと強く願っています。何より、この憲法が、自分だけ、自分の国だけよければそれでいい、という日本ファーストの憲法ではまったくないということです。

などと語った後で、マエソラを始めます。

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが

国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであって、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ」

一人マエソラ

一人で家にいる時も何気にしょっちゅうマエソラしています。「われらは、世界中の人々が恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」のところでいつも、今が今、恐怖に泣き叫ぶ子どもたちの顔が浮かんできて胸がウツと詰まりそうになる。そしてこの「恐怖と欠乏」は今や、何も遠い国の戦場に限ったことではないとも思います。砲弾の飛び交っていないこの国であっても、若い人たちの抱く将来への強い不安、戦争に近

づいているみたいという怖れ、危機感、年代問わずの生活の苦しさ厳しさなど、恐怖と欠乏がすでによその国の話ではなくなっているんじゃないのかと。

一人でマエソラすることによって一体どんな意味があるのだろう、とも考えます。この前文を、きれいごとすぎる理想にしか聞こえない、と言う人もいるし、今の首相が「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」のくだりを、おめでたい、と発言したことも知っている。それでも私がマエソラするのはなんでだろう。

この憲法の理想は確かに崇高で、それゆえに実現はとってもとても困難だけれども、憲法というものにはやはり高い理想が必要と私は思っています。それがこの前文に込められているからそれに向かって一歩でも前に進みたいし、先の戦争への反省が端的に表現されていること、主語が明確で、国の都合を押し付けられていないことなどなど、マエソラするたびにそれを確認します。何より、声に出してそらんじることで、この憲法の理念が私のからだにじわじわ染み込んでいって、そうだよ、政府に好き勝手放題の政治させちゃいけないんだ、黙って見てちゃいけないんだ、という私の決意がまた少し強くさせてもらえる、そんな気持ちになるのです。

草かふえて前文ワークショップ

1983年から毎水曜の午後、わが家を開いてしている「紅茶の時間」は、いつの頃からか、個人のきもちも社会や政治の話もしあえる場になっていきました。それもあって、2016年からコロナ期までの数年間は、「紅茶」内の1時間を「草かふえ」と称して、今の憲法と2012年版自民党改憲草案を読み比べる時間にあてていました。

2016年は、夏の参院選で改憲派の議席数が、改憲発議に必要な3分の2に達した年です。衆議院ではすでにそうだったので、この選挙結果を受けて、憲法をかえるための国民投票が一気に現実味を増した年でもあります。その危機感から始めたのが「草かふえ」。当初は文字通り、自民党の草案、草の

案を学ぶことから始めたので、こういうネーミングになりました。

毎週の「紅茶の時間内草かふえ」では、毎回違う顔ぶれの人たちと何度か「前文ワークショップ」をしました。今の憲法前文を一節づつ区切って輪読した後、気になる言葉や、ここ大事、ここ好きだな、と思う箇所をそれぞれ発表しあいます。

「われら、って本当に何度も出てくるね、憲法の主語はわたしたち、なんだってこと改めて感じる」「戦争の惨禍が政府の行為だった、って書いてある。それを繰り返させないと決意する、その主語も、われらなんだ」「こんなことははっきり書いてる今の前文。改憲したい人たちからしたらこの部分、不都合できつとかえたいだろうな」「人間相互の関係を支配する崇高な理想、って言葉がちょっと難しい」「うん、お互いの違いを認めて尊重しあう、憲法13条の個人の尊重を思い浮かべるといいかも。難しいからこそその崇高な理想だけど、それを実践した人がアフガニスタンに水路を開いた中村哲さんじゃないかと思う」「自分だけよければそれでいいって憲法じゃないんだね、世界中の人々の平和を強く願ってる。それが憲法前文にちゃんと書いてあること、初めて知ったよ」などなど。井上ひさしさんの『子どもにつたえる日本国憲法』（講談社）や池田香代子さんの『やさしい言葉で日本国憲法』（マガジンハウス）がテキストがわり。この2冊もワークショップで度々輪読しました。

自民党の前文草案

そんなふうにして30～40分、今の前文をしっかりとっぷり、参加者全員で味わった上で、今度は自民党の前文草案を、また一節ごとに区切って輪読します。

「日本国は、長い歴史と固有の文化を持ち、国民統合の象徴である天皇を戴く国家であって、国民主権の下、立法、行政及び司法の三権分立に基づいて統治される。

我が国は、先の大戦による荒廃や幾多の大災害

を乗り越えて発展し、今や国際社会において重要な地位を占めており、平和主義の下、諸外国との友好関係を増進し、世界の平和と繁栄に貢献する。

日本国民は、国と郷土を誇りと気概を持って自ら守り、基本的人権を尊重するとともに、和を尊び、家族や社会全体が互いに助け合って国家を形成する。

我々は、自由と規律を重んじ、美しい国土と自然環境を守りつつ、教育や科学技術を振興し、活力ある経済活動を通じて国を成長させる。

日本国民は、良き伝統と我々の国家を末長く子孫に継承するため、ここに、この憲法を制定する」

読み終えるなり、参加してる人たちから言葉が次々あふれました。

「え？ 今の前文と違って、主語が、日本国、わが国、になってるところが多いよ」「天皇を戴く国家、ってうやうやしくて、なんか偉そうだ」「すごい国だって自慢してるみたい」「そのすぐ後に国民主権とか三権分立って一応書いてはあるけど、本気があまり感じられない」「先の大戦による荒廃って、政府になんの責任もなさそうな書き方」「うん、戦争と大災害、並列にすることで責任をぼやかしてる気がする」「国防とか、国を経済成長させるとか、家族は助けあうとか、義務という単語はここで一つも使ってないけど、実は義務がいっぱい隠れてる感じ」「国から、国民はこうあれ、と言われてるよう」「まるでどこかの会社の社訓にも見えてきたよ」

皆で語り合った最後に、こう質問します。この草案って一体誰のために書かれているんだろう。「国民のものって気がしない」「日本はすごい国だぞ、その国を守れ、って言われてるみたい」「国民のためでなく、国家のための憲法だ」などなど。この憲法をつくる目的が、「良き伝統と我々の国家を末長く子孫に継承するため」とある最後の一文を読んだ時、これは国のための、国の都合による憲法の前文なのだ、と参加者一同で確信しました。

憲法との距離を縮めるこんな前文ワークショップ。数人集まれば、誰でもいつでもどこでもできます。

今年2月にあった衆院選の結果、自民党は単独で3分の2を超える議席数を得ました。参議院での与党は少数派とはいえ、今の状況は憲法をかえたがっている人たちにとって、2016年以来のまたとない好機。数の力で、皇室典範改悪や国旗損壊罪、国家情報局会議創設法などなど、賛否分かれる法案を次々とおしている高市政権のこと。気づいたらあっという間にもう憲法がかえられていた、ということにもなりかねない。そうなる前に、憲法が気になる友人たちとこんな感じで前文ワークショップしてみるってどうでしょうね。

駅前のペンライトデモ

国会前のデモに連動するように、金沢駅前でも春以降度々、ペンライトデモが行われています。回数を重ねるごとに若い人たちの参加が増えてきました。SNSで探して、デモカレンダー（一人の主婦が始めたデモや集会の予定を発信するこのサイトには、2月からの半年間で約6850件の情報が載せられた）を見て、というひとりで参加の人、デモは生まれて初めて、という人も多いです。

金沢駅前デモには、私も時間の許す限り参加して、話したいことがある時はマイクを持ってスピーチします。ある時、そこでマエソラをしたら私の次にスピーチをした若い人が「聞いてて涙が出た」と言ってから、自分たちで計画しているデモの予告をしました。「今度、仲間とハンセン！カシパデモします」と。意味がわからなくて聞き返してみたら「戦争いやだ！のお菓子パーティの事です。昼間にお菓子

を持ち寄って、思ってること語りあう、ゆる〜いデモです」と。ちなみに彼女は金沢の大学生さん。同級生と二人でこの菓子パデモを計画してるんだと言います。

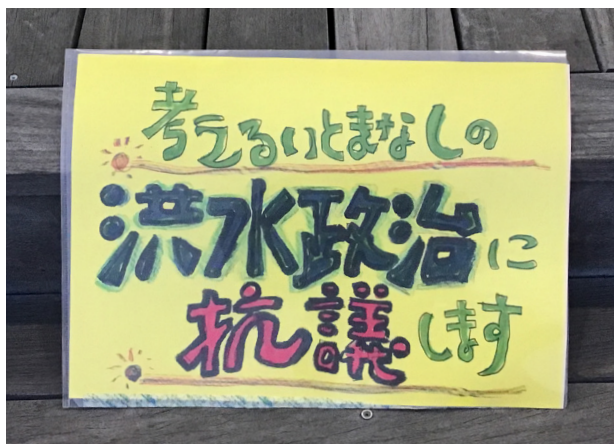
菓子パデモ

その菓子パに、お菓子を持ってピクニック気分で参加してみました。場所は、いつもペンライトデモをしているのと同じ金沢駅前イベント広場。広げたシートにお菓子とプラカードを並べ、三々五々集まってきた人たちが、シートに腰を下ろしてぼつりぼつり気持ちを語りはじめる。マイクなし、コールなし、聞いているだけでしゃべるのはパスもあり。



若い人たちがほとんどの、小さななま声で、だけど真剣な本音の吐露。駅前デモおわった後で、すごく誰かとしゃべりたかった/一人でぐるぐる考えると病んでしまう/周りにこういう話できる人がいない、家族とも話せない/国会でしてること全然ついていけない、自分の精神衛生のために来ました/政治的アカウント作って発信してるんだけど、そのこと言うと、偉い、勉強してるね、って言われちゃう。その度、違う！って思ってる、などなど。

みんな話を静かに聞いていた主催者の学生さんの一人が「私は本当〜に戦争がやだ！誰にも死んで



ほしくない（涙）、みんなが幸せだったらいいのに。今20歳だけど弟、妹はこの先10年、私みたいに自由に生きられるかな。私もいつか結婚したい、子どももほしい、って思ってる。だけど考えちゃう、生まれてくる子の未来。これじゃ下がるわけだよ！出生率。防衛費それ自体批判しないけど、順序違うかい？って思う。デモって言葉がこわいと言う友だちがいて、ならこわくないデモしよう、って今日の菓子パを友だちとすることにしたんです。こんなこと、大学でもしたよ。どでかいフルーツポンチつくって食べながら30人ぐらいでしゃべった。不安に思ってることから始めると、人は意外と話してくれる。不安をボードに書き出していったらいつの間に、政治に、憲法に、つながっていったんです」

風に吹かれながら食べたり涙したり笑ったり、誰も仕切らず、それぞれ抱えてる不安を20人ちょっとで語りあった2時間。ただ穏やかに暮らしたいと願っているだけなのに、ここまで若い彼らを不安にさせてる今の政治って一体何なんだろうと思います。思うと同時に、こんな時間を体験したことが、あ、自分一人じゃないんだ、こういう話をしてもいいんだ、って思える、次の誰かと話せる勇気の種子にきとなる、社会のこと話しやすい空気を育ててく、と私は信じます。

そんなふうに話題にすることを今とりわけ大事だと思うのは、社会について、政治について、話す/考えるのが一部の人たちだけじゃない方が断然いいって思うから。話す人、話せる場が増えれば、その分、話しやすい空気が増える。思っても周りや世間を気にして話題にしないままだとその分、話しにくい、話せない、の空気が世の中に増えていってしまいます。

駅前でも 街なかでも

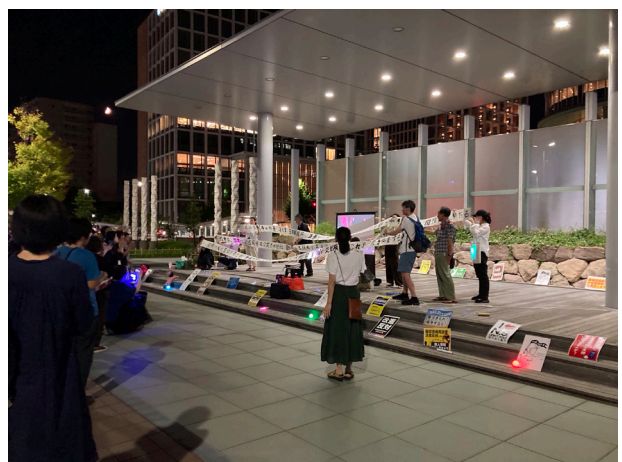
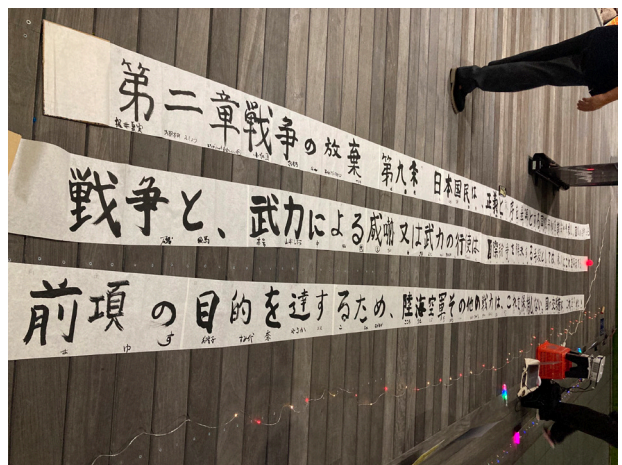
まだ寒かった春ごろ始まった駅前ペンライトデモ、回を重ねるごとに若い人が増え、8月のデモではスピーチするほとんどがそういう彼らでした。用意されていないとっさに出てきた言葉、政権に対して言わずにおれない怒りの声、涙に詰まりながらのたつ

たひとこえ、この場を毎回準備してくれる人たちへの感謝の声。そういう彼らの言葉に拍手するためにも駅前にまた行こうと思わせてくれる、8月のデモでした。菓子パデモを主催した学生さんとも久しぶりに再会できました。

写真は、前月のデモの時に始まった「一人一文字九条」、九条の条文を、一人が一文字ずつ筆で書く、という試み。8月のデモしてる間に完成して、デモの最後にお披露目をしているところです。

デモで出会った同士、立ち話でなく時にはもっとゆっくり語り合いたいね、ということで、駅前デモを主催してる人たちが街なかのカフェで2回目の「平和についてみんなで話すカフェ、PEACE CAFE」を開催する由。菓子パデモの学生さんと、次回はそこで会う約束をしました。

2026/8/26



生殖医療と家族援助

～LGBTQ⁺当事者支援・・・その前に～

荒木晃子

「知る」を深める

過日開催した対人援助学会第 36 回研究会では、「可視化された LGBTQ 当事者の『生きる』を援助する」をテーマに、今年の対人援助学会でご登壇いただいたお二人のゲストのお話を伺った。

教育者、研究者、当事者支援にご活躍の Ni さんからは、「トランスジェンダー支援の出発点から整理し直す」というタイトルで、①カテゴリー理解から、社会規範との関係から捉え直す、②当事者の多様性と人権基盤型アプローチ、について解説いただいた。トランスジェンダーを理解する、という概念を根底から捉え直す好機を得たように思う。次に、Na さんからは「社会運動と臨床の連続性」と題し、『アクティビズムと個別性の間でー支援者が向き合う「意味の身体」と家族の多様性』について、心理の専門職ならではの多彩なお話であった。いずれも、筆者にとっては今後の当事者支援に繋がる大きなヒントと気づきをもたらす内容であり、かつ、大きな課題を受け取った実感がある。この場をお借りして、再度お二人には感謝したい。

あらためて

LGBTQ⁺に関する理解が深まるたびに思うことがある。彼らは、単に性的マイノリティ（性的少数者）当事者である、というだけでなく、そこから派生する様々な当事者性を持っている。否、「持っている」という表現はふさ

わしくない。“様々な当事者になってしまう”と表現するのがふさわしいだろう。例えば、心的外傷を伴う体験、現在も抱えるトラウマ、からだの性別違和、揺らぐ性自認、同性に向かう性的関心など、生まれながらに持つ個人的な問題や成長過程の体験から生じた個別の問題を持つ当事者性。親きょうだいなどの家族関係、教育現場で生じる教師や友人との関係に生じる対人関係の問題や、教育環境、教育内容にある性別規範等の未解決課題や問題などである。なかでも教育現場にあるそれらは、LGBTQ 当事者の成長・発達を阻害する要因にもなり得る。また、社会に潜在する職場や近隣との人間関係、更には、行政や公的機関、医療現場でもシスジェンダーが経験することはないであろう担当者から対応や書類上の手続きの困難さを経験することがあるという。なかでも、成人期以降の当事者の経験には、国民皆が持つ幸福追求権や人権をも侵害しかねない重大な問題が発生しているケースも確認している。

これらは LGBTQ 当事者が抱える困難の片鱗でしかない。LGBTQ 当事者が抱える課題や問題は、教育、医療、家族、対人関係に起きている。それらの要因や原因は、当事者にあるのではなく、社会にあるといえるだろう。この壮大なテーマを紐解くには、社会システムを見直す（捉え直す）必要がある。以上が筆者の今後の課題となった。

路上生活者の個人史

第20回

竹中尚文

宮崎 雅晴 氏(仮名)

1970 生まれ。55 歳

私は愛知県の北部、長野県との県境の辺りの田舎で生まれました。愛知県といっても、すごい田舎で近所にはコンビニすらありませんでした。生まれた頃の家庭は、両親と祖父と妹の 5 人家族でした。父親は地元の役場に勤める公務員でした。しかし、私が中学の頃に胃癌で亡くなりました。続いて、祖父が亡くなりました。家族は母親と私と妹の 3 人になりました。

父親は私が中学入学の頃に家を新築していました。父親が亡くなって、新築の家が残りました。母親は静岡出身なのです。家を建てていなかったら、母親は私と妹を連れて静岡に

帰っていただろうと言っていました。実際は新築の家があったので、私たちはそのまま暮らすことになりました。私は地元の中学校、高校を卒業して、就職をしました。22 歳まで地元の土木建築会社で働きました。その時に貯めたお金で、自動車免許を取りました。23 歳の時に大型の免許も取りました。そして地元の運送会社でトラックの運転手をしました。47 歳の時にその運送会社を辞めました。辞めた理由ですか。私はゴールド免許だったので、有効期間が 5 年でした。免許の更新を忘れていました。運転免許の失効に気がついたのが半年後でした。半年以上過ぎていたら、特別の理由がない限り更新はできないといわれました。免許を

取り直すことは考えませんでした。
もう何もする気力がなくなっていました。

そうですねえ、結婚もしていなかったのが気楽でした。結婚なんてしたいと思ったこともありません。妹は結婚をして、都会で暮らしています。私は一人がいいのです、気楽ですからね。ある日、ぼんやりとテレビを見ていました。テレビで大阪のホームレスの番組を流していました。そのままフラリと大阪の西成に出てきました。

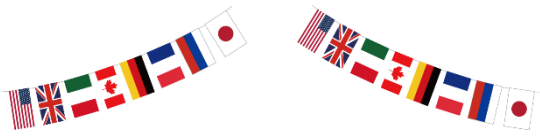
日雇い仕事の声がかかります。日雇いや 10 日間の契約の仕事があります。土木や解体の仕事をしています。そうすると、宿舎があります。給料はメチャメチャ安いです。トラックの運転手をしていたときの 3 分の 1 です。それでも何とか暮らせて

います。

母親ですか？たぶん独りで暮らしていると思います。数年前に電話をしたら、実家の電話番号は無くなっていました。母親は生きていたら、80 歳ぐらいだと思います。母親との関係ですか？悪くないですよ。私が出たのは、免許がなくなってヤケになったからです。だから、フラリと何も言わずに家を出ました。母親には何の不満もありません。数年前に偶然に知り合いに出会ったとき、「おまえ、搜索願がでているよ」といわれました。だから、実家に電話したのですよ。でも、電話が使われていないということなので、そのままになっています。

母親が心配？ 心配なんてしてないですよ。私は元気なのですから。

私はこうした聞き取りをする時、本人に私の意見をいうことはありません。人の人生に是非をいうことはできません。しかし、今回は宮崎さんに言ってしまいました。一度、故郷に帰るべきだと。お母さんの顔を見るべきだと思う、といいました。このインタビューをしたのは去年の 9 月でした。それから、彼の顔を見なくなりました。

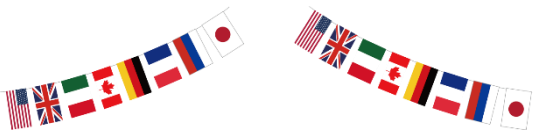


スポーツおじいさんにな りたい！⑩



『コクーン』
(ロン・ハワード監督・1985)

國友万裕



1. ありがとう、マッサージの男たち！

40 過ぎてからの俺の人生は、マッサージの歴史だった。

40 になって、仕事が増え、そのため経済的には楽になったのだが、その分、体がしんどくてどうしようもない。マッサージに行ってみようか。

そう思って、最初に行ったマッサージは、西院近くの京町家を改造してなさっていた、タイマッサージのお店だった。ここのお兄さんは、当時 30 代ぐらい。柔道をなさっていたとのことで、タイマッサージにはもってこいの人だった。

タイマッサージは、ストレッチが多いし、アクロバットの的に相手に柔道の技をかけるように体をのばしてくれる。大体 90 分ぐらいのコースを頼んでいたのだが、最後の 30 分はオイルマッサージで、背中にオイルを塗ってくれていた。そして終わった後はハイビスカスのジュースを出してくれる。そういうお店だったのだ。

この人はインテリマッサージ師という雰囲気の人だった。色々なことをご存知であれやこれや教えてくれる。

オイルマッサージの場合は、当時は女性限定、男性の場合だったら女性同伴の場合のみ OK というところが多かった。

「そうしないことにはトラブルが起きるんですよ。男の人を裸にしてオイルを塗るわけですから、中には風俗と勘違いしてやってくるお客さんもいるんです。私のところにも時々、電話で男の人からオイルマッサージの依頼が来るんです。だけど、『するのは私ですよ』とその時にはまず答えることにしているんですよ」とおっしゃってい

た。

俺は、その当時、オイルマッサージに結構凝っていて、京都駅の地下にあったロミロミマッサージにも何度か行った。その時もマッサージをしてくれるのは 30 代くらいの男の人だった。オイルマッサージだから、当然、上半身は裸になるのだが、「女の人の場合だとどうするんですか」と訊くと、「女の人でも脱いでもらいます」と言われた。

そのタイマッサージの人にその時のことを話すと、「京都駅みたいな人通りの多いところだったら、男 1 人でも大丈夫なんです。ああいうところはいっぱい人が通るから、下手なことはできない。だけど、普通の場合だと、マッサージ師の人は疑いをかけられる。変なところを触られたとか言われる可能性もあるし・・・」

なるほど。お客が男性であっても女性であっても、あれやこれや難しい問題があるんだなあと思ったものだった。しかし、女性の方が意外に大胆みたいで、そのお兄さんのところにも女性の客は結構来ていた。前に鍼灸師の人も言っていた。意外に女性の方が裸になることに躊躇しないんだ、男の人の方が恥ずかしがると。それはそうなんだろう。女性の方が普段が裸に近い格好なのである。男は普段はきちんとスーツみたいなカチツとした服を着ているわけで、突然脱ぐのは抵抗があるのだ。

そのタイマッサージのお兄さんのところは結構気に入っていて、40 代の最初の頃はよく言ったものだった。ところが、2 年後くらいだっただろうか。ある時、予約の電話をかけると、「今、ちょっと風邪をひいているんです。うつしちゃ悪いんで」と断られてしまった。

そして、そのしばらく後、悪い予感がして、そのマッサージ店の前を通ると「閉店」となっていた。HP を見たところ、神戸に移ってマッサージをしていますと書かれていた。俺の勘では、おそらく、神戸に移って、雇われマッサージ師になられたのだと思う。その人、すごく腕は良かったのだが、やはり 1 人で店を続けていくというのは大変なことなのである。

そして、次に行くようになったのが、近所の鍼灸院だった。その鍼灸院に通い始めたのは、40 代半ばくらいだったと思う。それ以前にそこがまだ整骨院だった頃から時々、通っていた。ところが、俺が春休み中だったと思うのだが、行ってみると、「しばらく店を閉める」と言われた。

その院長はまだ 30 代の前半で、鍼灸の勉強をしにしばらく四国の方に行くということだった。すごく寂しかった。俺は結局、あの頃、その先生に体をいじってもらいながら、世間話するのが楽しかったのだ。閉店の知らせを聞いた時に、急に寂しさが襲って来て、実家に帰省したのを覚えている。あれが 40 代前半の頃だろうか。月日の経つのは早いものだ。

でも、それから 2 年くらい経って、その先生は四国での修行を終えて、新たに鍼灸院をそこで開かれたのである。たったの 3000 円。安かった。

鍼灸の場合も、当時は上半身は裸になるしかなかった。その後、しばらくたってから、やはり羞恥心の問題を考えてか、背中や胸だけ開けることができるような服を羽織るようになったのだが、その当時まではそういう配慮がなかったのだ。

鍼灸の場合は、気持ちがいいかどうかと

いうと微妙である。気持ちがいいのはマッサージの方がはるかに気持ちがいい。針や灸は、効果はあるんだろうけれど、どう効果が出ているのかがわからないのである。でもその先生は、マッサージもしてくれていた。しかも2時間くらいいても何も言われなかった。あそこで寝ているだけでもリラックスできた。

元々あまりお客さんが来ていないからということもあるのだが、「國友さんが来ると、いつだって僕のことを褒めてくれるからということもあって、サービスで長くしていたんですよ」と後で言われたものだった。

その先生とは性格的な相性も良かったのだが、いかんせんお客さんが来ない。あまり商売つけない人で、そこも2年くらいで、別れが来たのだ。それまで、その先生は「僕は京都が好きだから京都を離れない」ということを常におっしゃっていたのだが、娘を猫可愛がりなさっていて、奥さんが東京出身で京都の水が合わないと、もらされているライクで、娘と引き離されるくらいだったら、東京に行くしかないと思ったんですと話されていた。

その先生とは私的にも仲良しだったので、一緒に銭湯に行ったこともある。食事と一緒にしたのだ。常に金がないと言われていたので、もうお別れだから俺が奢ろうかと言ったら、断られた。「國友さんの気持ちは嬉しいけど、妻や娘に苦勞をかけているのに、自分だけご馳走になるわけにはいかない」と言われた。真面目ないい人だった。若い頃はラグビーや日本拳法をやっていたと言っていたが、穏和な雰囲気の人だった。

しばらくは東京の整骨院に勤められていたので、何度か東京に行った際に尋ねたこ

ともあった。ところが、ある時「今度また東京に行くからまたマッサージお願いします」とメールすると、もう今は鍼灸や整骨はしていない。老人ホームに勤めているんだという連絡が来た。おそらく、鍼灸師はよほどの人でなければ、収入がない。娘を育て上げるためには、もっと収入の多い仕事を探すしかないと思われたのだろう。

「國友さんのご活躍を心からお祈りしています」とメールの末筆に書かれていた。

もう、俺と会う気はないんだなあと思ったものだ。

その先生がいなくなってから、しばらくは近所の整骨院に通った。ここは寿司屋みたいなノリの整骨院で、威勢のいいお兄さんが5人くらいいる。伏見区にチェーン店があって、俺は両方の店で、全ての人からやってもらった唯一の客になったものだった。

そこも腕はいいし、たったの500円で相当な時間マッサージしてくれる。お兄さんたちの指は変形していて、ボーリングができないんだとおっしゃっていた。でも力のある人ばかりで、あれで500円というのは破格だった。しかし、いかんせん、次々に辞めていかれるのである。

前に蕎麦屋でばったり、そこのお店で1番のお気に入りだった人に偶然あったところ、「だって今、整骨院なんていくらでもありますもの」と言われたものだった。ああいうところは給料は安い、すぐに次が見つかるから他のところに移れる。そういう形でいくつもの店を転々として、最終的には自分の店を持ったりする人が多いのだろうと思われる。

しかし、2年くらい経つと、その店とも

終わりがやって来た。それは FB でつながっていた元スポーツクラブのインストラクターだった人が、俺のところに突然メッセージを送って来たのである。俺はその当時、体が痛くて、「痛い、痛い」と FB でぼやいていたため、「ぜひ、僕にやらせてください」というメッセージが入ったのだ。

その人は肉体労働系フリーターみたいな人で、木こり、引越しの手伝い、人力車、スポーツクラブのインストラクターともっぱら体を使う仕事をしてきた人だった。「なぜ、大学まで出ているのにこんな仕事ばかりするの？と言われるけど、こういうのが好きなんですよ」と言っていた。

彼に関しては、当時 30 歳くらいの人だったのだが、その前に彼がスポーツクラブで働いていた頃、プールで彼の身体を見て、びっくり仰天したのを覚えている。あんな見事なヘラクレスを俺は見たことがなかったのだ。

彼はそれから俺のところに週に 2 回くらい来てくれるようになっていった。この連載にも書いたことがあると思うが、彼はいっぱい、男っぽいことを味合わせてくれた恩人である。

鴨川沿いを 2 人で上半身裸で 1 時間くらい歩いたり、一緒に銭湯に行ったり、海水浴に行ったり、それまでの俺では考えられないようなことを次々に味合わせてくれた。

俺は、彼と限らず、それまでのマッサージの人から体感的に男性性を吸収していったのだった。「こういう業界は体育系の人が多いんです。身体を使う仕事だから」と前に書いた鍼灸師の先生も言っていた。

そのヘラクレスのような人との付き合いは長く、10 年以上続いた。彼は最初の頃は

独身で彼女がいなかったので、彼の方も暇で、付き合う人がいないということもあって、一緒に楽しい時間を過ごさせてくれたのだった。

ところが、奥さんができ、子供ができてからは、そういう付き合いは徐々になくなって行った。それは仕方がない。奥さんや子供の方が大事だろうから、それを責めるわけにはいかなかった。

しかし、ある日突然、ちょっとしたトラブルから彼との縁を切ることになってしまったのである。その理由についてはここでは書けない。ただ、俺は彼とは別れたけれど、彼には感謝している。

いや、彼だけじゃない。それまでのマッサージ師の人たち、全てに感謝している。俺の男の部分を目覚めさせてくれたからである。

そして今は、マッサージのチェーン店に通っていて、そこでまだおそらく 30 歳ぐらいの若い男の人を指名してマッサージしてもらっているのである。ここは、チェーン店だから、そうそう個人的な付き合いはできないが、たくさんいるセラピストの中で、この人が一番俺の体に合っているため、毎回指名料を払ってこの人にやってもらっている。

俺はひょっとすると本質的に体育会系の性格なのかもしれないと思う。体育会系の人と付き合っていると楽しいのだ。教え子も、これまで俺に懐いてくる子は大抵は体育会系が多かった。

しかし、俺は子供の頃からスポーツができなかったため、能力的に他のスポーツ系の男の子たちと付き合うことができなかった。そのときの辛い思いが鬱積しているのだ。日本の学校教育の問題なのである。

だから、中年過ぎて、体育系の人と裸の付

き合いができるのがすごく楽しくて、そういう人から体のケアをしてもらえるのがすごく嬉しいのだった。

時々ボクシングジムでも、そこのお兄さんにマッサージしてもらっている。そのお兄さんも最初は柔道をやっていて、それから整骨の大学に通って、整骨院を開いている人だ。

今となってはみんな俺が「運動音痴」だった過去を知らないし、そのヘラクレスの人からは、「そんな鈍いわけでもないんじゃないですか」と言われたものだった。

これはいわゆる「ラベリング現象」である。俺は子供の頃から、「運動神経が鈍い」「弱虫だ」と言われて育っているため、そのラベルに従ったような行動しかできなかった。例えば、運動部に入りたいくても、「お前みたいな下手くそな奴が入部できると思っているのか」と言われるのが怖くて、自分から殻を作ってしまったのである。

しかし、今はみんな俺の運動音痴だった過去を知らない。だから、のびのびと運動できる。こんな歳になって、マッチョなことができるなんて、子供の時は想像すらしていなかったのである。

2. 久しぶりの立命館

俺の人生は非常勤のまま、終わろうとしている。

この連載で何回も言っているが、俺は立命館を卒業するときに指導教授からパワハラ・アカハラをされて、それ以来ずっと蟠っていた。指導教授だけじゃない。クラスメートからも酷い嫌がらせを受けた。あの頃の俺はまだ大学に溶け込めるような心理状態

じゃなかったから仕方がなかったのだろうけど、そうであるにしても何も自分に対して危害を与えたわけでもない人を白眼視したり、陰口をしたりするのは、彼らの方が悪いのだ。今だったら、ハラスメント委員会がどこの大学にも設置されているから、どこかに相談に行けただろう。しかし、当時は、セクハラやパワハラという言葉もない。自分の問題としてどうにか折り合いをつけるしかなかった。

俺はその後京都外国語大学の大学院に入り、その当時、外大は博士課程がなかったため、関西学院大学の博士課程に入った。渡り鳥である。立命館と上手くいかなかったのが俺にとっては致命的なガンになってしまったのである。

でも、それは遠い昔の話、もうかれこれ40年である。その後徐々に俺の京都での仕事は増えていき、人間関係のネットワークも広がっていった。今、この原稿を書いている対人援助学マガジンも中村正先生の紹介で投稿するようになっていったのだから、立命館といい加減和解しなくてはならないところなのだが、いかんせん、対人援助学会の会員の人たちは、俺とは研究の畑が違っているの、親しくなる機会もないし、お互いに接点がないのである。だから、俺は立命館で教えることは永久にないと思っていた。

ところが、今年の2月、立命館の先生から突然、半年だけ映画の講義をもってくれないかと連絡が来たのだ。その先生とは前に映画関連の学会で一緒だっただけで、FBでつながってはいたのだが、ほとんど話をしたこともなかった。おそらく、誰も頼む人がいなくて頼んでこられたのだと思う。半期限りのピンチヒッターである。1コマだ

けならやってみようか、映画の授業だったらやり甲斐があるし、どっちみち半年だけなのだからと思って引き受けたのだった。

月曜日の5時間目、茨木キャンパスで一番豪華なドルビー教室での授業だった。3時間目までは京都の他の大学で教えているので、それが終わった後、JRに乗って、京都駅で乗り換え、約1時間弱で大学まで到着する。

蟠りが溶けるのであれば、それはそれで嬉しいことだし、溶けなかったにしても半年だけのピンチヒッターだからと思って、俺はいざ立命館に通うようになったのだった。

そして、結果は……実はどちらとも言えないのである。

正直いうけれど、もう別に立命館に来て特別な感慨も湧かず、それなりに楽しく授業はしたけれど、特別慕ってくれる子はいなかった。途中でちょっと学生とコミュニケーションのトラブルが起きかかったが、幸いなことに専任の先生が間に入ってくださって、すぐに解決した。1コマだけだったから、あっさり半期間が過ぎたという感じだった。

立命館は昔のような「貧乏な」イメージはすっかりなくなっている。キャンパスも豪華だし、学生たちも昔のように「暗い」というイメージではない。そもそもキャンパスが茨木だから、俺が通っていたキャンパスではない。だから別に思い出も湧いてこない。

それに湧いてこない方がいいのである。

たまたま、この原稿を書いているときに、Yahooのニュースで、「今なら語れる、ずっと広島が嫌いだった…古希過ぎて被爆の記憶語るうち人生の一部として受け入れられるようになった」

<https://news.yahoo.co.jp/articles/30ec8eb92e30609b76ef44ab036ea1c62ce32b78>

という記事が目に入った。

俺も還暦過ぎて、立命館の学生だったことを語ること、「人生の一部」として受け入れるようにならなくてはならないのである。

いろいろなことで、立命館の頃の嫌な思い出をは数えきれない。俺は不登校で大検を受けて大学に入った。だから、大学のことを深く考えている余裕はなかった。どこか入れたところに行くしかない。それで立命館に入ったのだ。

何も知らなかった俺は、入学式に白いブレザーと緑色のジーンズという格好で行ってしまった。他の連中はみんなスーツだったのに、何も情報がなかった俺は、何も知らなくて、母がデパートに入学式用の服を買に行ったところ、その店員のお兄さんが、「ブレザーとかそういう格好で行かれると思います」と適当なことを言ってしまったらしくて、そういう格好で行ってしまったのだ。一人だけ浮いたような格好。上級生の奴らが白い目で見、あれこれ笑いながら話していたという記憶がある。

さらに俺はワンルームマンションで暮らしてしまった。あの当時の立命館は学費の安い、貧乏学校というイメージを引きずっていた。だから、それを立命館に入学した言い訳にする奴も多かった。実際には俺のクラスに1人だけ、母子家庭で新聞配達をしながら通っている男子学生がいて、彼は学費が安かったから立命館に来たと言っていたが、他の子はそうでもなかった。むしろ、「学費が安かったから立命館に入ったのだ」と言ってしまう、他の大学に落ちてきたと言わずに済む。

そういう奴が多かったように記憶している。だけど、俺は元祖ワンルームマンション。そのことでストーキングされたこともあった。だから、学費が安いから立命館を選んだんだという言い訳もできなかった。

しかも、当時の立命館は少人数制を売り物にしていた。他の大学よりもクラス単位の授業が多くて、クラスの結束が硬いから友達になりやすい。それを最初に言われたことを記憶している。しかし、俺にとってはそれもガンになってしまった。

確かにクラスメートたちの結束は他の大学よりも強かったのかも知れないが、俺はそこから除外されるタイプの子だったからだ。やはり3年も引きこもって、その後1年、予備校に通ったくらいで他の子に同化することはできないのである。サークルにも上手い具合に入ることはできなかった。

しかも、女子からの集団的な嫌がらせが原因で高校に行けなかった俺が、女の子が8割近いクラスに投げ込まれた。

俺は大学に入学する前、そのことが何よりも不安だった。英語が好きだったから英語を勉強したいけれど、俺は自分が女子に「気持ち悪がられる」タイプの子だということを自覚していたので、英文科を選んだのは間違いだったのではないかという不安が募ったのだ。

すると、俺のはとこに当たる女性はいったものだ。

「大人しいタイプなんだから、女が多い方がいいじゃないの。男が多いと上下関係厳しくなって大変よ」と。

彼女は女性の暴力性みたいなものに気がついていない。女の方が優しいみたいに思っている。でも、それは俺みたいな「最下位

男子」には当てはまらない。最下位男子に対しては女子の方が過酷なのだ。

事実、やはり女子たちからの悪口影口は1年生の秋ぐらいから始まって行った。この頃、「引き寄せの法則」ということがしばしば言われる。「悪いことを想像すると悪いことが起きる」という考えである。しかし、あの当時の俺はできる限りポジティブに考えようと一生懸命に涙ぐましく頑張っていた。だけど、やはり女の子の悪口は始まっていった。今でも、俺が「引き寄せの法則」を必ずしも信じないのはそのせいなのである。

本当にあの当時は幸運の神様が完全に俺に背を向けていたのである。もう何から何までが裏目に出たという4年間だった。

唯一、俺が好きだったのは、立命館高校出身のやつらだった。俺はそういうやつが基本的に好きなのだ。3年生くらいになって、やっと彼らと多少は友達になれて、少し良い思い出ができたものだった。でも所詮、俺は付き合ってもらっていたのである。一般に付属校系のやつらは意地悪ではない。それは他の大学でもそう。だから俺みたいな変なやつにも偏見を持たずに接してくれる。

しかし、彼らとも卒業してからは会っていない。32歳の時だったと思う。立命館高校出身で高校の先生になったやつが、大学時代から付き合っていた彼女と結婚して京都外大の近くのマンションで暮らしていた。俺はあの当時外大で教えていたので、ばったり彼女と会った。彼女は乳母車を押していた。男の子だった。

「私のところはもうこれ以上は子供は作らない。この子一人だけにしようと思っているの」と言っていたのを覚えている。

それが大学時代のクラスメートと会った

最後なのである。すなわち、もう 30 年ぐらい彼らと会う機会はないまま、電話で話すことも、SNS で繋がることもないまま、30 年が過ぎたのだ。

もうあの男の子も 30 歳ぐらいになっているのだ。ということは、もうクラスメートたちはお爺ちゃんお婆ちゃんになっているのだろう。

SNS の時代になって、検索すれば大学時代に知っていたやつの何人かは引っ掛かるだろう。しかし、俺はもう大学時代の奴らとも会いたくないのだ。彼らの方も俺のことなんか忘れているだろう。

もう永遠に会わない方がいい。自分にとって不都合な過去は断捨離した方がいいのだ。

3. 熊本から京都へ

10 年ぶりに俺の故郷で地震が起きた。

何の罪のない人がたくさん死んでいるのに、こんなことを言うのは不謹慎極まりないということはわかっているのだが、俺は熊本が嫌いだ、九州が嫌いだ、とりわけ九州の女が嫌いだと言うことは俺が親しい友達にはみんな知っている。

この連載にも何度か書いてきた通り、俺の心に一生消えない傷を残したのはまずは熊本の女たちだったのだ。俺は子供の頃から、最下位男子だったため、女の子からも馬鹿にされるタイプの子だった。おばあちゃんから虐められた。小学校の時の女性教師の体罰に悩まされた。中学の時は集団的ないじめを女子から受け、わざとクラス委員に選出された。まともに話せない、発達障害的な子だった俺をクラス委員にしてみんなで面白がろうという作戦だったのである。

なのに、フェミニストは女に罪はないという。

今から 12 年前、エマ・ワトソンの国連スピーチは大きな話題になって、彼女はここで男性問題にも同等に言及しているのだが、あるジェンダーの先生の話だと、もうその余韻も消えてしまい、また再び、女は悪くない理論、女は可哀想理論が復活している、男の被害なんて認めないそういうフェミニストが多いとのことである。

本当にフェミニストはしぶとい。おそらく、そういうフェミニストはもうおばあさんだから、もうそうそう長くはないのだろうけれど、依然として彼女たちが存在している間は、男性被害の問題は日の目を見ないのである。

しかし、熊本で生まれたことは一つの運命だったのかも知れないと思う。俺は、同志社教会で洗礼を受け、クリスチャンとなり、礼拝に通っているが、同志社教会の設立には、熊本バンドが大きく関わっているのだ。熊本バンドとは、熊本洋学校の生徒たちのことで、米国人教師ジェーンズの影響を受けて、プロテスタントに改宗し、熊本洋学校が閉校となった後は、新島襄の同志社英学校に移って、同志社大学の基礎を築いたのだそうである。

同志社の礼拝で説教を聞いていても、熊本バンドの名前はしょっちゅう出てくる。この人たちは、熊本から京都に来た人であり、俺と同じルートを辿った人だ。しかも、同志社に深く関わった人なのだ。

俺は、同志社で嘱託講師として勤務するようになって、もう 30 年。たくさんの学生を教えてきたし、同志社女子大学でも教えている。同志社教会にも通っている。同志社のボランティアガイドにも参加するようになり、ほとんど毎日、同志社に通うような生

活だ。死んだ後は同志社のクリスチャンの人たちが眠る墓地に入れてもらおうと思っている。もうほとんど同志社が本拠地になってしまっているのである。

立命館で教えたこの半年間も、はるかに同志社の方が自分の居場所だなあと感じたものだった。同志社だけじゃない。龍谷大学や京都大学、京都女子大学ももう長く教えているため、はるかに立命館よりも自分の居場所になってしまっている。

半年間教えてみて、もう立命館のことは遠い昔の人生の一部になってしまっていることを痛感したのだった。思えば、辛い4年間。何もかもが上手くいかなかった。

中村正先生みたいに、生え抜きで、自分の母校の教授になって、それを全うして名誉教授になれる人というのはある面羨ましい。スムーズにずっと走ってきた人生という感がするからだ。

しかし、俺はつぎはぎの人生。色々な大学を経験して、凸凹道をどうにか歩んできた人生だった。でも今となっては、色々な大学を知ることができたということは良かったのかも知れない。立命館では上手くいかなかったけれど、他の大学ではそれなりに上手く行って、今年の8月は京大の学生たちと食事した。同志社の体育系の学生ともこの後、食事する予定である。龍大の子でも慕ってくれる子はいる。同志社女子大学の教え子には、銭湯でバイトしている子がいて、「先生、一回来てください」と言われている。でも、銭湯はちょっと、女子学生の前でお風呂には入れないなあー（笑）。京都女子大は優しい子が多いから、スムーズに授業ができる。

他にもかつては京都外国語大学、近畿大学、摂南大学、帝塚山学院大学と色々なところ

ろでお世話になってきた。それぞれの大学はカラーが違っていて、今思えば、全ていい思い出。正さんみたいにずっと1つのところでまっとうできるのもいいけれど、次は義に色々なところで教えられたことも、一つの味わいのある人生なのだ。

4. 『コクーン』(ロン・ハワード監督・1985)

この頃、お風呂に入るときに自分の体を見ると、つくづく爺さんの体になってきたなあと思う。

今更、ムキムキのマッチョにはなれないだろうと思う。でも歳をとった爺さんの体もそれはそれで味祝いがあるのだ。様々な年輪が衰えた体に染み付いているからだ。

そんなわけで、今日は『コクーン』という映画を思い出した。この映画は老人ホームにいた爺さんたちがプールで泳ぐ場面が出てきて、俺はこれからこういうのを目指さなきゃいけないんだなあと思って、配信のデータを買ってしまったのである。

この映画、1985年の映画。ちょうど、大学生活が上手くいなくて苦しかった時代の映画である。あの頃に比べれば、今はずっといい。

苦しかった立命館での大学生活も、ここに辿り着くまでの「人生の一部」だと思えば、それで構わない。

もちろん、これからの人生でもっと辛いことが待っているかも知れないけれど、どういう人生であっても、それはそれで味があるものなのだ。つくづく、そう感じる世代となったのだった。

役場の対人援助論

(56)

岡崎 正明

(広島市)

忘れられない窓口

窓口現場というところ

今年4月の人事異動にともない、5年ぶりくらいにいわゆる「窓口業務」がある職場に戻ってきた。多くの人が「役所」と聞いて想像するあの場所。銀行のようなカウンターがあり、その向こうに職員がデスクを並べ、一番奥には役付きが来客者に向かい合う形で鎮座する。常に市民の目に晒される現場。そんなところである。

そういえば私が就職した頃は、新人ほど窓口に近い配席で。年数を重ねるとドンドン奥の席に座れ、来客対応の頻度が減るとというのが当然だった（ちなみに支給されるイスも、新人は中古の肘掛け無し・背もたれ腰まで、から始まり、年数を重ねると→肘掛け付き→背もたれが頭まであるデラックスへ…と、ものすごく分かりやすくグレードアップしていた）。今ではそんな謎の年功序列的風習も影を薄め、経験の少ない職員の隣にベテランが座るとか、席順も効果効率を重視する傾向になった気がする。

そんなお役所における窓口は、いうなればそのお役所の「顔」であり、市民と出会う「主戦場」「メインステージ」と言ってもいいだろう。最近ではオシャレな半個室みたいなところもあれば、コロナ以降の影響でパーティションがこれでもかと設置されているところなど、そのスタイルも多様化しているように思う。来所する市民から見れば、構造の新しい古いはもちろんだが、雑然と並ぶ書類や積まれた段ボールや文具、様々なチラシやポスター、働いている職員の姿や態度・表情など、そのすべてが自治体の印象を左右する要素となる。そしてそこでは、さまざまなコミュニケーションが交わされ、時として人の感情を動かすドラマが起こることがある。

20年以上前、当時私が住んでいた自治体に客として行った窓口でのことは、いまだに覚えている。対応した4～50代くらいの女性は、私が必要とする証明書は当日発行できないとサラリと述べた。事前の問い合わせでは、すぐ発行できると聞いていた私は困惑

し、なんとか手立てはないのか聞いたが、女性の態度は変わらず。私が食い下がると、ちょっとポカンとした表情で上司のもとへ下がっていった。私の席から、女性と上司がコチラをチラチラ見ながら相談する姿が見え、女性の表情がヘラヘラと笑っているのが見えた時、沸々と怒りが込み上げてきた。思わず大きな声を出しそうになったが、その後別の職員が出てきてフォローしてくれ、事なきを得たのだった。しかし今でも思い出すのが不愉快な出来事である。

窓口にはいろんな市民がやってくる。急いでいる人も、ついでに寄った人も、間違っただけで来た人も。そして迎える職員のほうにもいろいろあり、新人やベテラン、その手続きの担当でない者、近くをたまたま通りかかった者、別の業務で追われている者など…。そんな複雑な要素も含めた一期一会的な偶然性も、窓口で起こるドラマに影響を与えることとなる。

ある日の窓口で

障害福祉の窓口で働いていたときのことだ。こんな場面を見かけたことがある。

ある日の午後。それは 30 代くらいの男性だった。リュックを背負い、少しくたびれた黒っぽい服を着たお客さんが、フラフラ～と窓口にやってきた。普通窓口に来る人というのは、明確な用件があって真っ直ぐこちらに向かって来るか、あるいはどこに行けばいいのか周囲を確かめながら来ることが多いが、その男性の焦点は定まっていなくて、用事があるのか無いのか一見して分からず、まさしく「フラフラ～」とこちらに近づいてきたのだった。男性の髪は無造作に伸び、手には白いビニール袋を持っていて、中には数種類のお菓子が覗いていた。

私はその姿・視線・言動から、何か障害や事情があって配慮が必要な人かな？と感じた。実際私たちの窓口は障害福祉の部署ということもあり、そういった来客も多かった。他の職員も男性に気づいたようで、私より近くにいた職員が近寄り「何かお手続きですか？」と声をかけた。男性はチラッと職員を見ただけで返事はせず、案内された席に腰をかけた。精神保健福祉手帳を持っている人だった（念のため断っておくが、精神保健福祉手帳を持っている人＝手続きで支援が必要な人ではない）。

男性はしばしば袋の中のお菓子を出したり、「今何時？」と別の話をしたりしていたが、少ししてようやく用件について語り出した。ただ、言いたいことが伝わりにくく、職員も男性の求めることがすぐに理解できなかった。そのうちしびれを切らした男性が「だからあ！」と大きな声を出してしまい、それまで静かだった窓口に緊張が走った。他のお客さんも男性の方をチラチラと見ていた。

なんとか男性の用件が分かり、必要書類に記載をしてもらって、手続きのために職員が書類を持って一旦下がると、1 人残された男性はブツブツと何かを言いながら、落ち着かない様子で待っていた。私はまた男性が興奮したり、大きな声を出さないだろうか…と、少し気になりながら業務をしていた。周囲も気にしないフリをしながら、そちらに意識を向けている空気が漂っていた。

そのときだ。1 組の親子が窓口に来てきた。それは 30 代くらいのお母さんと、5 歳くらいの女の子だった。お母さんの方は大きなカバンを肩に下げ、電話をしており、清潔感のある服装だが忙しくしている印象。女の子の方はお母さんの前を誘導するように、スキップ交じりに窓口へと近づいてきた。そしてたまたま空いていた 2 人掛けの窓口ブ

ースに、吸い込まれるように収まった。そこは例の男性のすぐ隣の窓口だった。

男性が大声を出してわずか数十秒足らずのことだったが、少しのタイミングのズレと、お母さんが電話していたこともあり、親子はこの窓口の状況に気づいていない様子だった。席に着くとお母さんは早々と電話を終わらせ、出てきた職員に笑顔で「すみませんが、〇〇のことで…」と用件を述べた。女の子は退屈気味に周囲をキョロキョロしていたが、そのうちに隣の窓口にお菓子がいくつも置かれていることに気づき、興味深そうにジーンと見ていた。

お母さんの方は手続きのことで職員と二三言葉を交わし、必要書類の記載を始めたが、何枚かの書類に記載が必要な手続きで、職員に相談しながら集中しての書類作成となった。なので当然女の子の様子を窺うゆとりはなかった。女の子はすっかり隣席のお菓子に魅せられたようで、食い入るように見ている。すると数秒後、気づいた男性と目が合った。一瞬の間の後、男性は何を思ったか、特に表情も変えず、机に置かれたお菓子のひとつを手に取り、無言で女の子に差し出した（たしか食べきりサイズのスナック菓子だった）。

差し出されたお菓子を女の子は素直に受け取り、しばしまじまじと眺めて表情を和らげ、それから隣のお母さんに「ねえねえ、もらったー」と報告した。

せっせと下を向いて書類を書いていたお母さんは、女の子に声をかけられて顔を上げた。そしてお菓子を認め「まあ！よかったわねえ」と一瞬驚いたように声を上げ、でもすぐ切り替えて男性の方に顔を向け「すみません、なんだか～、ありがとうございます」と笑顔で礼を言い、続けて女の子に「ほら、お礼ちゃんと言った？」と促した。女の子はお母さんに言われて、ちょっと恥ずかしそうだが棒読み気味に「ありがとう…」と男性に向かって言った。

その時の男性の表情は、生涯忘れられないように思う。それまでどちらかというと無表情で、愛想笑いもなく、ちょっと上の空にどこを見ているか分からない視線だった男性が、親子から礼を言われた途端、生気がみなぎるような生き生きとした表情になり、堂々とした笑顔で丁寧に会釈を返したのだった。その姿は声こそ出さないものの（大丈夫ですよ。お気になさらず）と雄弁と語る印象で、まさに“大人のふるまい”といった貫禄があった。

その後、窓口の緊張感は一気に溶け、男性も落ち着いて必要な手続きを済ませ、不穏な様子にも一切ならなかったことは、言うまでもない。

時間にすればほんの5～10分ほどのことだったが、とても印象深い出来事で、この男性と親子に心から感謝を伝えたい出来事だった。

それは何も微笑ましい場面を見たからほっこりした、というだけのものではない。対人援助職を自認する私にとって、この出来事は「ヒトの可能性」「善意を受け取る行為の持つ力」など、様々なことを考えさせてもらう機会となったからだ。

最初は心配な様子でやってきて、不穏な動きを見せ、職員に大きな声まで出して周囲をピリつかせた男性。その時の男性は、コチラから見れば明らかに「支援対象者」であり、弱く・危うく・サポートの必要な存在として認知された。

だが、見知らぬこどもに自らの物を差し出し、素直に礼を受けてさりげない会釈で返した男性は、その場面では他者に善意を示し、見返りを求めずそばにいる隣人であり、親子にとっては「応援者」「サポーター」という立ち位置となった。そして彼が生き生きと振る舞い、表情良くくれたのは、圧倒的に後者の方だった。ヒトのエンパワメントに大切なことは何か？を、専門職としてまざまざと感じた瞬間だった。

もし、あの親子がお菓子を断っていたら？知らない他者とはできる限り関わらない昨今の風潮であれば、十分起きうる可能性だ。母親にとっては、ひょっとしたら迷惑だったかもしれない。アレルギーとか、お菓子に関するその家庭のルールもあり得る。だが、どんな思いがあったかは定かではないが、親子は男性の善意を受け入れた。想いを受け止め、関りを持つことを許容した。その上で「ありがとう」と、承認・感謝を伝えた。

私もときどき他者から助けてもらうことがある。電車で席を譲ってもらう、エレベーターで先に出してもらう、お店の出入り口でドアを開けて少し待ってくれる。ありがたいこともある反面、実は状況や場面によっては逆に通りづらかったり、ちょっと余計だったりすることもあるのだが、よほどの外れでない限り、「ありがとう」と伝えるようにしている。それは感謝を伝えることが相手の存在や想いを肯定し、勇気づけ、応援することになると信じているから。そして私たちの社会が他者に興味を持ち、善意でつながる習慣を持ち続けて欲しいと考えているからだ。

だからあのお母さんがお菓子を返さず、自ら感謝を伝え、さらにこども自身にも感謝を伝えるよう促してくれたこと。そしてそれを受けて男性が本来持っている力を発揮し、生き生きと笑顔で応じたことがとても嬉しく感じられた。

以前どこかで「頼りがいのある人は、元々頼りがいのある人なわけではない。誰かに頼られることによって、頼りがいのある人にしてもらうのだ」と聞いたことがある。支援や心配を受けやすい人が、その立場に慣れてしまう半面、誰かを支援したり心配したりする経験が積めないのは当然だ。支援の仕事をする人間として、肝に銘じておくべき言葉だと思う。

事件も変化も、相談室じゃなく窓口で起きる！？

何事も継続するのが苦手な私も、気づけば役所生活 20 年以上。おかげさまで忘れられない窓口対応の思い出も、いくつかできた。

同じ障害福祉窓口での思い出でいえば、何度も何度も息子の障害者手帳を紛失したと、再発行を繰り返す 80 代の女性のことは印象深い。月に 1 回以上手続きに来る中で話を聞いていると「自宅に幽霊が入ってくる」「炊飯器のご飯を食べたり、障害者手帳を盗って行く」との語りが。いきなり否定してもいけないので、話を聴きながら徐々に関係を作っていく、最終的に地域包括支援センターを紹介。認知症の支援や見守りにつなげることができた。今思えば、最近よく言われる「8050 問題」の実際のケースだった。

高齢福祉の窓口でも、いろんなことがあった。繰り返し制度へのクレームを言う男性に、粘り強く職員みんなで対応していたら、横に座った強面の別の市民が「うるさいよアンタ！」「クレマーか！」と一喝し、それまであんなに強気だった男性が、シュンとなって退散したこと。ホームレスのおばあさんを説得してなんとか受診させ、その間に持ち物から身寄りへの連絡先を調べて、弟さんが会いに来てくれたときの、おばあさんの穏やかな表情。どれも貴重な経験だ。

児童家庭相談の窓口にいたときには、児童相談所とはひと味違う支援の現場であることを思い知った。確かに家族支援に関する専門性や権限などは、児相に優位性があるが、児童家庭相談窓口では、「手続きのついで」や「買物に来たついで」に顔を出してもらえ、または声をかけて関りが持てるという、敷居の低さや日常性の高さがあり、その立ち位置が大いに役に立った。

例えば施設入所させているこどもの、引き取りへの葛藤を語るアルコール依存の50代の母親と、毎週1～2回は窓口で会話することができ、生活習慣の一部になっていたケースがあった。

母親は窓口に寄る度に、施設や児相に対するグチを話したり、依存症治療への不安を話してくれたりした。その中で作業所の紹介や、こどもの引き取りに向けた準備も話し合うことができた。この頻度や生活への密着度は、児相ではなかなか実現しにくいもので、他にも特段相談や用事は無くても、相談員と話したくて定期的に寄ってくれる保護者が何人かいた。その関係は「役所の人」というより、「たまに会いたい近所の人」というものに近く、まさに伴走し、寄り添う支援だと感じた。

突発的な事件も、思わぬラッキーな出来事も、なんてことない立ち話も。ごちゃまぜのおもちゃ箱のように、なにが出てくるのか分からないのが、「窓口」という開かれた場なのだろう。

そんな偶然性のある支援の場であるからこそ、起こる「ハプニング」が「支援の端緒」に変換できる力があるのだと思う。支援が専門分化し、整えられ、仕組み化する流れを否定する気は毛頭ないが、診察室や相談室のような、安全・ニーズ・契約に基づいた関係だけで、世の中の「支援」すべては語れない。それはもっと多様で、雑多で、自由かつお互い様的な、そんな懐の深い領域のような気がしている。



臨床のきれはし

SHEET34
浅田 英輔

The Compounding Detour

何人かの大学の先生から「臨床心理学科の学生が、心理学以外の話を聞こうとしない」という話を聞いた。「それは心理学に関係ありますか？」とか言われるようだ。まるで関係ない分野ならまだしも、社会学関連などもダメだったりするそうだ。

これも、コストパフォーマンス、タイムパフォーマンスの話になるのだろう。公認心理師の資格を取るだけであれば、社会学の勉強は不要なのかもしれない。ましてや、日常生活のことは試験に出ないのだろう。

でも、我々が相手にするのは生きている人、生活している人たちである。「精神病の人」が困っているのは、病気そのものだけではないはずだ。そもそも、その病気のことだって、「脳のこの部分が不具合を起こしているからそこを治す」というたぐいのものではない。社会、地域、家族なども考慮してかわる必要があることも学ぶ必要がある。むしろ、何を学んでも治療的かかわりの邪魔になることはないのではないだろうか。よりよい臨床家になるには、心理学の知識だけで足りるはずがなく、心理学のみ学ぼうとすることは、結果的に非常にコストパフォーマンスが悪いことになるのだ。

コスパ・タイパを求める話をよく耳にする。毎回、「それってほんとにコスパいいの??」という疑問が沸く。

仕事でも、「これって意味あるんですか?」とか「自分の成長に結びつかないですよね?」みたいなことを言う人はいる。もちろん、不合理で非効率なものはどんどん効率

化していけばいいのだが、「いまそういうやり方をしていること」だって、それなりに先人が工夫した結果であるともいえる。それを踏まえて考えてみたほうが、結局はコスパがよいことになるのではないだろうか。

いわば「表面的なコスパタイパ思考の人」-コスパニアンと呼ぶことにする-は、「今やろうとするものが、直接的に役に立つのか」という思考になるようだ。そういう人にとっては、実験心理などの基礎的な学問はタイパが悪いのだろうし、意味のあるものととらえられないのだろう。「イマドキの若者は」という論調で語られることも多いが、大人だって同じことをしていて、「通常業務が忙しいから外部研修に出さない」など、すぐ役に立つかわからないものからお金や時間が減らされていく。

世の中が表面的でわかりやすい因果関係のもとに動いているようにも感じられる。

コスパニアンは、目先のことにとらわれがちである。

「朝の挨拶なんて、コスパ悪くないですか? 中身ゼロです!」

たしかに「おはようございます」自体に情報量はない。でも、実は一番効くコミュニケーションだったりする。挨拶を省略した結果、その後の相談や報告がやりづらくなって、余計な気を遣う羽目になるなら、それは3秒をケチって、後で何倍もの時間を払っているだけなのではないか。実は、挨拶って一番コスパがよいのだ。

「職場の飲み会はコスパがわるい」

確かに億劫なことはあるだろうが、年2回くらいなら行ったほうがいい。お金はかかるし、おっさんの自慢話なんて聞きたくないけど、職場での円滑な人間関係を作っておいたほうが、絶対にコスパはいいはず。6割つまらないかもしれないけど、4割くらいは楽しいことも起きるのではないだろうか。「そんなことはない、10割すべてつまらん」ということであれば、そもそもそこはよい職場ではないのかもしれない。

「大学の授業なんて、やりたいとかじゃなくて、コスパよく単位がとれるかどうかでしょ」

大学って、専門の学部があるんだけど、そのほかの授業もとれるのが魅力である。専門で学んだこと以外の仕事についている人なんて、当たり前にとたくさんいるよね。幅を広げる機会を自ら捨てていつているかもしれない。

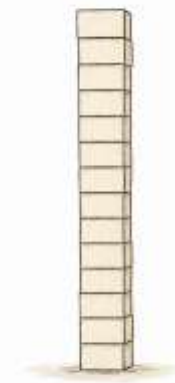
コスパニアンって、まず「それが役に立つかどうか」を考えているように思う。じゃあ、そうじゃない人ってどんな人だろう？

それは「おもしろそう」で動ける人なのだと思う。役に立つかどうかも考えたりするけど、まずは「なにそれおもしろそう！」で物事をはじめてしまう。結果として役に立つこともあるし、立たないこともある。「意味があるのかないのか」はあとからついてくるものではないだろうか。好奇心で動いちゃう人-キュリオニアン-としておこう。

キュリオニアンって、ぱっとみ、割に合わないこともたくさんする。寄り道もするし、仕事に関係ない集まりにも行ったりする。「なんとなく」とか「思いつき」で行動したり、誘われたらホイホイついていったりして、表面的なコスパはだいが悪いようにもみえるだろう。でも、そういう、とるに足らないものを、おもしろがってたくさんたくさん積み重ねて出来上がったものが大事なものであったりするのだ。必要なものだけを積み重ねたものはとても脆く、いわば、つぶしがきかない。うまくいかなかったとき、それしかないのでリカバリーが難しい。不要と思われるものも含めてたくさん積み重ねてあると、「こっちがだめならこっちいってみるか」ができるようになるし、それを楽しめる。

うまくいかなかったときだけではなく。いろんな人のいろんな考えが理解できやすくなるのだ。視野が広くなるといいだろう。自分の広さの土台を作るのが、そういう、一見コスパが悪そうにみえるものの積み重ねなのだろう。たぶん、キュリオニアンでいたほうが人生は楽しくなる。もちろん、よりよい対人援助をするには、キュリオニアンたれ。

コスパニアン



キュリオニアン



発達検査と対人援助学

②⑤ フランスでの学びから考える対人援助(2)

大谷多加志

前号は2月に訪れたフランスでの研修までの道中について書いてみました。当初の心づもりでは、今回から研修の中身について書いていこうと思っていました。しかし、研修から少し時間が経ってしまい、記憶や現地での実感はやや薄れ、日本での日常に埋没しつつある中で半年前の研修を思い起こして書いてみても今一つクオリティが上がらないような気もしてきました。そこで今回は、フランス研修でのことをメインに書くのではなく、フランス研修を経て今思っていることをつらつらと書いてみようと思います。クオリティという意味で、これはこれでどうなのかと思う部分もありますが、

少なくとも実感との一致度は高いかと思い、この方針で書くことにしました。

フランスを羨む？

現地で研修を受けていた時から、フランスの制度を直輸入したらうまくいく、というワケではないことは頭でわかっていました。ただ、現地の支援者の方々の熱量のこもった語りを聞いていると、とても羨ましいような、フランスの制度がとてもよいものであるような感覚をそれでも感じてしまっていたことは事実です。また、帰国して、現場の仕事をしながら、「ここにエデュケーターみたいな人がいてくれたら…」のように思うこともやはりありました。少し補足しておくのエデュケーターとはフランスにおける国家資格の名称であり、子どもや家族に対する教育的社会的支援を行う専門職で、必要な場合には子どもを学校まで迎えに行ったり、家庭まで訪問して子どもや家族と関わったりと、かなり近い距離で子どもや家族と関わりを持っています。日本でのケースでも、不登校などで家庭まで足を運ばないと子どもと関わるできない場合や、保護者も含めて家族全体の支援が必要と感じられる場合も少なくありません。一方で、日本は基本的には通所型の支援が中心であるため、孤立して最も厳しい状況に



置かれ、支援を必要としている方に支援が届きにくいという状況があります。そんなケースに出会うと、そういうことではないと頭ではわかりつつも、「エドューケーターがいれば…」みたいな思いが頭をよぎることはありました。

福祉を届ける

フランスの制度設計や運用にはひとつの大きな理念がありました。それが「福祉を届ける」という考え方です。さまざまな福祉制度や専門機関を作れば、それでただちに何かがうまくいくようになるわけではありません。本当に支援を必要としている人たちに支援が届くように、運用を調整し、見直していく必要があります。この「福祉を届ける」ところまでが専門職や公的機関の責任であると考えている点が、大きな違いであると感じました。

日本の福祉制度は「申請主義」と言われるように、基本的に支援を必要としている人がしかるべき窓口を訪れ、申請をし、時には本当に支援が必要なのかの審査がなされたのち、ようやく支援が開始されるという設計になっています。つまり制度設計上は、「届ける」という部分は利用者の方や現場に委ねられていると言えます。これを良し悪しで語るつもりはないのですが、制度設計や運用に大きな影響を与えている要因であると思われます。

後は運用

これらを踏まえて、日本の現状を見返すと、基本的に何かの制度が欠けていたり、大きく不足していたりするわけではないように感じられます。子どもの権利を守るため

の法律（児童福祉法や児童虐待防止法）もあれば、家族に対する支援に関する法律（子ども・子育て支援法）もあります。それらの具現化した子育て世代包括支援センターなども市町村に設置されています。しかしながら、実態として子育てを困難に感じる家庭は増え、実際に出生数も年々減少を続けています。つまり、法律や制度は整えられたものの、それらは目的に対して十分に機能できていない可能性があると言えるでしょう。

制度はある。けれど十分に機能はしていない。この状況を考えれば、後は現場でどう運用していけるか、という点で工夫をこらしていくしかないのかもしれないかもしれません。

実際、日本国内でも、不登校児童へのアウトリーチのひとつとして、看護師やPT、OTによる訪問看護の枠組みを利用する取り組みが一部で見られます。よい取り組みがあれば類似の取り組みが他の地域でも始まる…というのはよくある流れで、小さなひとつの取り組みが、制度の運用を変えられる可能性もあると言えます。



「表現」を大切にする文化があり、公園の何気ないスペースにも作品が展示されている

形骸化しやすい日本

一方での懸念として、日本では何かしらの制度を作る際に、形を整えることを優先し、適切に機能するか？という点が十分に考えられていない傾向があるように感じます。

特別支援教育がスタートした際にも、支援体制の軸となる「特別支援教育コーディネーター」を特別支援学級の先生が兼任するというケースがよく見られました（通常の特別支援学級の運営にプラスして、新たな役割を十分に果たせるのか、という懸念は現場にまると任される形になりました）。また、2028 年度に実施 100%を目指して実施が進められている「5 歳児健診」についても、現場からは有効性や実現可能性の懸念が多く聞かれています。

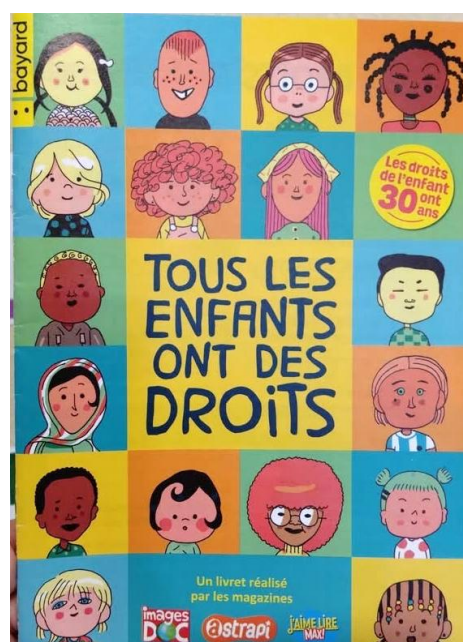
このような時、エドゥケーターからはよく、「ソルダリテ（連帯）」と「たたかう」という言葉が聞かれました。不合理や不平等と直面した時には、志をともにする人々と連帯し、そして声をあげる、ということです。この辺りは、日本の文化ではなかなか難しく感じるかもしれませんが、それゆえ、様々な制度や資格ができては形骸化する、ということが繰り返されているのかもしれません。

親をすることを支える

もうひとつ、印象に残ったことばが「親をすることを支える」というものでした。前提として「親をすることは誰にとっても難しい」という共通認識があります。子どもにはひとりひとり違う個性や特徴があり、親にも様々な事情や時には持病があったりする場合もあります。だから、どんな人にとっても子どもを育てること、親になることは簡

単ではないわけです。この前提があるからこそ、それぞれの親が親として機能できるように十分に支えることの必要性が認識されており、それが先に紹介したエドゥケーターのような資格や制度設計につながっているように感じます。

日本においても、「親をすること」が難しい（難しくなっている）ことは、少なくとも子どもや家族と関わる支援者の中では共通の認識になっているように思います。親を責めたり、改善を指導したりするのではなく、「親をすることを支える」ためにともに伴走すること。家族支援、子育て支援において、このような認識で臨むことができたなら、支援のあり方が少しだけよい方向に変わるのでは…という気がしました。



子どもにわかるように書かれた「子どもの権利」に関する冊子。壁面の掲示なども含めて、子どもにもわかる形で権利や尊重に関する説明が繰り返されている。

講演会 & ライブ な日々 ④7

古川 秀明

『般若心経とオープンダイログ 7』

毎晩続く私の夜叫に疲れ果てていた両親は、拝み屋さんから渡された“狐の絵”を、喜々として天井に貼り付けた。なぜかその狐の目だけが、朱色に塗られていた。

それを見た兄が、どこからか1枚のソノシートを持ってきた。

ソノシートは、雑誌の中の世界が紙の向こう側から飛び出してくるような、不思議な体験を与えてくれる。絵本をめくれば横で音声ドラマが流れ、登場人物がページの外から語りかけてくる。物語が、目と耳の両方からやってくる。当時の私は、「これは魔法だ」と本気で思っていた。

ソノシートは、高価なレコードを買えない子どもたちにとって“音の入り口”だった。雑誌を買えば音がついてくる。まるで紙に音声データが貼りついているようなものだ。今の言葉で言えば、QRコードを読み取ると音が流れる——そのアナログ版と言えるかもしれない。

朝日ソノラマは、アニメ主題歌や特撮ヒーローのドラマだけでなく、ニュース音源を収録した『月刊 朝日ソノラマ』という雑誌まで作っていた。ページをめくると、遠い国の出来事や社会の動きが“音”として届く。紙の雑誌が、世界の息づかいをそのまま運んでくる時代だった。

ペラペラの円盤は、子どもたちの部屋で、学校の教室で、友だちの家で、くるくる回りながら、たくさんの物語とニュースを届けていた。

そのとき兄が私に渡したのは、「妖怪・九尾の狐」という絵本とソノシートだった。

兄がプレーヤーに針を落とすと、何とも言えない気味の悪い効果音が流れ出した。1ページ目には、血のような赤い文字で「妖怪・九尾の狐」と書かれている。そこへ女性の声で「よ～かい～きゅうびのきつね～、ワハハハハ」と笑う声が入り、最後に「ぎゃ～」という悲鳴が響いた。

その時点で、私はもうおもしろそうだった。

絵と音声と効果音の“三点セット”は、幼い子どもの心を容赦なく驚愕みにした。

九尾の狐の物語の細部は覚えていない。ただ、千年生きるごとに尻尾が一本増える恐ろしい狐の妖怪で、夜な夜な町に現れては人を食い殺す——そんな話だった。

最初は美しい姫の姿をしているが、本性を現すと老婆になり、最後は九尾の狐となって人間をバリバリと食べてしまう。狐が人を食うとき、その目は赤く光る……。

兄が私に言った。

「天井に貼った狐の絵の尻尾を数えてみろ。何本ある？」

私は震える声で「9本」と答えた。

「そうやろ。この絵は、あの九尾の狐が閉じ込められてる絵や」

その言葉を聞いた瞬間、私は足ががくがくと震えた。

そういえば—— さっきの拝み屋さんのおばあさんは、妖怪・九尾の狐が化けていたのかもしれない。そんな仮説まで立ててしまった。

ただでさえ「死んだらどうなるのだろう……」という不安を抱えていたのに、そこへ“人を喰らう恐ろしい狐の妖怪に食べられるかもしれない”という新たな恐怖が加わった。

その夜、布団に入ると、父と母は狐のご利益を信じて、あっさり眠ってしまった。私は怖くて、天井の狐の絵をなかなか見ることができなかった。

しかも悪いことに、昼間に兄から聞かされた 朝日ソノラマの音声付き絵本の物語と効果音が、ヘビーローテーションのように私の頭の中でぐるぐる回り続けた。

この一連の体験は、子どもの心がどのように「恐怖」を学習し、どのように「意味づけ」を行うのかを示す、非常に象徴的なエピソードである。

まず、夜叫という“身体からあふれ出る不安”に対して、両親は「拝み屋さん」「狐の絵」という“外部の力”を導入した。これは、家族が不安に直面したときにしばしば起こる「説明を外側に求める」という行動である。

子どもは、親の不安や期待を敏感に受け取る。天井に貼られた狐の絵は、両親にとっては「守り」だったが、子どもにとっては「恐怖の象徴」になり得る。

そこへ兄が持ってきたソノシートが加わる。音声・効果音・絵という三点セットは、子どもの想像力を一気に増幅させる。特に幼少期は、「現実」と「物語」の境界がまだ柔らかい。そのため、物語の中の妖怪が、自分の部屋の天井に“いるかもしれない”という感覚が容易に生まれてしまう。

兄の言葉——「この絵は九尾の狐が閉じ込められている絵や」という“意味づけ”は、子どもの世界観に強烈に刻まれる。

ここで重要なのは、子どもは「事実」ではなく「語られた意味」を受け取るということだ。

そして、「死んだらどうなるのだろう」という根源的な不安に、「妖怪に食べられるかもしれない」という具体的な恐怖が重なると、心の中で不安が二重構造になる。

このような状態では、夜、布団に入った瞬間に不安が増幅しやすい。親が安心して眠ってしまうと、子どもは「自分だけが恐怖と向き合っている」という孤立感を抱く。

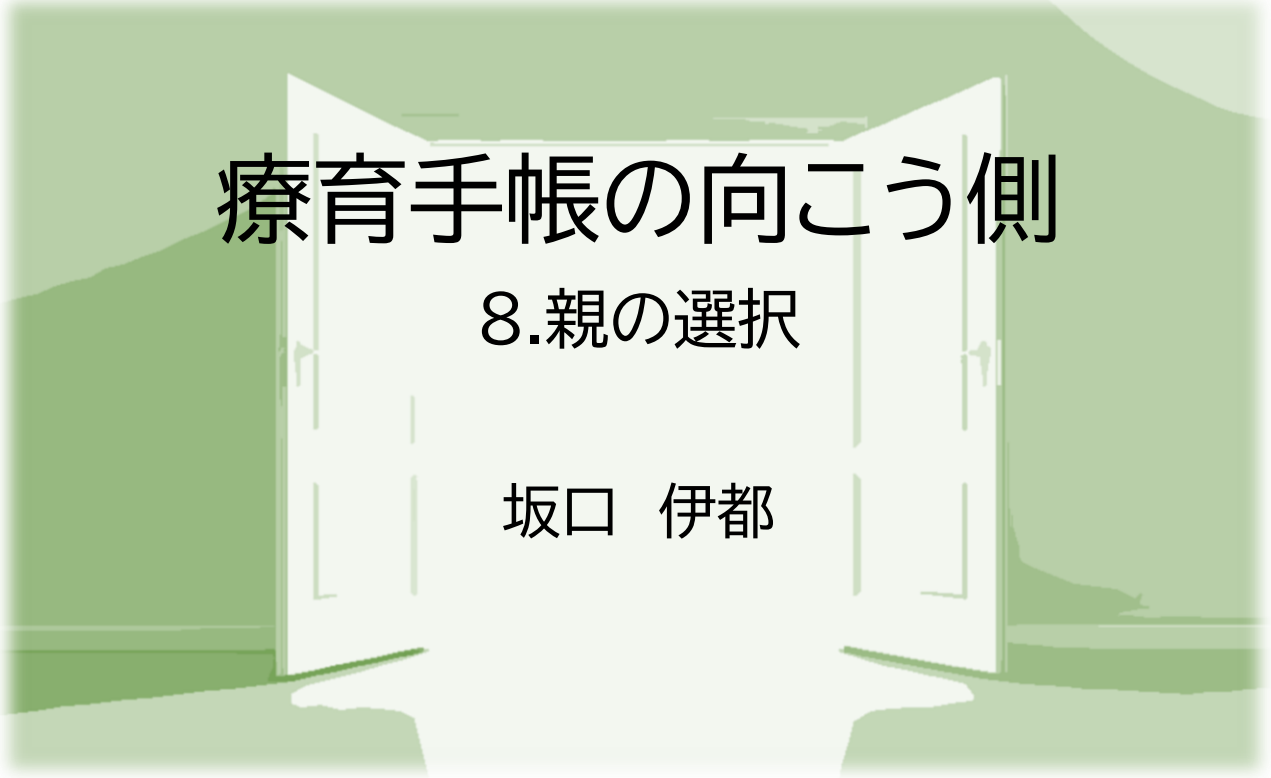
その結果、昼間に聞いた物語や効果音が、頭の中で“ヘビーローテーション”のように回り続ける。これは、子どもの脳が不安を処理できず、繰り返し再生してしまう状態である。

対人援助職としては、このような体験を語る人に出会ったとき、「そのときのあなたは、どれほど心細かっただろう」という視点を持つことが大切だ。

恐怖の内容そのものよりも、恐怖にひとりで向き合わされた“状況”が心の傷として残ることが多い。

そして、こうした体験を語ることは、当時の自分を再び見つめ直し、「孤立した恐怖」を「誰かと共有できる記憶」へと変換する大切なプロセスになる

シンガーソングライター
ふるかわひであき



療育手帳の向こう側

8.親の選択

坂口 伊都

はじめに

前は、「迷惑」について書きました。迷惑と助け合いは紙一重。人に迷惑をかけてはいけないからとお互いを遠ざけるのが良いのか、人は一人で生きていけないのだから他者に手を伸ばして生きるのが良いのかと尋ねられれば、後者を選択したくなるのではないのでしょうか。そこに知的なハンディキャップが加わると、意思疎通がスムーズにいかないからと敬遠されることがあります。学校等の集団行動の場で一斉指示では伝わらず、手をかけて説明をしなければならぬので周りを待たせてしまうと言われれば迷惑をかけてしまうと縮み上がり、自分だけがわからない、周りに馬鹿にされる、自分が悪いのだと自尊心を損ねていくことが起こり得ます。

スケジュールにそって動けないと林間学習での泊まりは難しいと言われた子がいました。その子は、用意していた着替えではなく、予備で入れていたものを着て何とかやりくりしてきました。慣れない場所、心細さもある中で試行錯誤をしてやってきたのは、その子の大きな頑張りです。

その一方で、大人と一緒に荷物から着替えの服を探す手伝いをするのは、難しいのだろうかと考えてしまいます。細かい事情がわからないので何とも言えませんが、周りにいる人に頼んだら助けてもらえるという体験は、世の中を信頼する第一歩となります。しょうがいがある子だけでなく、どの子にとっても周りには助けてくれる可能性があるを知っていくことが重要で、それが大人の責務ではないかと思います。

今回は、親の選択について取り上げます。療育手帳の聞き取りの場で、母ではなく父が子どもを連れてくることが増えている印象を受けます。総数でいえば母が子どもを連れてくることが多いですが、父母で来所される方も一定数います。中には父子家庭で、父が仕事をしながら家事と育児を担っている家族もありました。

援助者「仕事もして、毎日の夕ご飯も作っているのですか？」

父親「はい、大したものは作ってないです。同じようなものばかりで」

援助者「いや、大したことですよ。」

父親「子どものためですから」と言いながら頭を掻かれていました。

母性本能という言葉はよく聞きますが、子どもを守ろうとする父性もあるのだと感じました。女性なら必ず母性本能があるとは思っていませんし、家族を捨てて出て行く親もいますが、不器用そうな父親が慣れない家事に奮闘されている姿に頭が下がります。穏やかな父から、子どもを守り育てたいという決意が伝わってきました。その一つが晩御飯を自分で作ることなのでしょう。

家族が別に住む選択

家族の状況を記す書類に、同じ苗字で父親が別居していると書かれていることがあります。理由は離婚調停中、病気療養中、単身赴任等が考えられます。単身赴任と記入されず別居とだけ書かれていると、夫婦の不仲が原因なのかと想像してしまいましたが、「お父さんは別居なのですね」とお聞きすると、意外な答えが返ってきて、家族の印象がガラッと変わる瞬間があります。

ある家族は、母と子どもで引っ越してきて父は別居と記載されていました。離婚予定で実家の近くに引っ越してきたのだろうかと思っていましたが、

「父親は、転勤先に残って仕事をしています。〇〇支援学校にこの子を入れたくて母子で引っ越してきました」と言われ、意外な返答に驚きました。

転勤先の支援学校は重度しょうがいの子どものが多く、なかなかコミュニケーションが取りにくそうだと危惧していたそうです。〇〇支援学校には似たタイプの子どもの複数いて、この子にとって過ごしやすい環境だろうと感じ、引越しを決め、週末に母子で父に会いに行っています。「子どもが喜んで電車に乗れるからちょうどいいのです」と教えてくれました。

単身赴任は、戦後の高度成長期頃から企業の全国展開が可能になったこととマイホームを持てるようになり、父親だけが新たな勤務地に赴くことが増えたといわれています。日本はいろいろな経験を積むことで社内のキャリアアップをしていくため、人事異動を受け入れざるを得ない仕組みがあります。アメリカ等では転職が一般的で単身赴任という形になりにくいようです。

私の子どもの頃、父親が転勤族で、何度も転校したという話は珍しくはなく、転校生に憧れたことを

思い出します。実際は、友達関係が出来上がっている中に飛び込むしんどさがあると聞き、冷静に考えれば当然だとわかります。今も転校を繰り返す子どもはいるでしょうが、父が単身赴任をする話の方をよく耳にするようになりました。

単身赴任を選択する際、悩みに悩んでの決断なのではないでしょうか。住居が2か所になれば、金銭的負担もかかり、家事はそれぞれしていかなければなりませんし、子育ても片方が全面的に担う必要が出てくるからです。人事が家族より上位にあり、家族が振り回されている印象を受けます。

人事異動で家族が離れる際、父が一人で移動することが当たり前だと思い込んでいて、母子で移動する選択肢もあるのかと驚きました。子どもの経験を増やし、父の疲労感を軽減させ、母の家事負担も軽減しているようでした。また、新たな父の転勤が告げられれば、今の形は変化せざるを得ません。その時もまた、自分たちにあった選択を考えていくのでしょうか。



家族と一緒に住む選択

転勤や転職に伴って、家族で引越をする選択もあります。ある子どもさんは、新しい場所や知らない人と会うことが苦手で、引越し後の子どもの状態を心配し、何度も新しく通う学校までドライブを繰り返し、馴染みの場所にしていました。「子どもはドライブが大好きで、遠距離ドライブでも機嫌よくしていたので何度も出かけることができました。親の方は身体に堪えましたが、苦労した甲斐がありました」と笑っていました。

また別の家族は、父の職業が農家に変わっていました。無農薬製法のお米を作っているそうで、「作るのは大変ですが、できると皆が美味しい、美味しいって言うてくださるのです」と嬉しそうに話されていました。

前にお会いした時は、子どもとの関係の取り方がわからなくなって母子ともに俯き加減でした。その当時は、私の子どもはあれもこれも「できない」と嘆き、子どもに「しょうがい」と告げることを恐れていました。子どもは母の隣に座らず、部屋の隅に座って他者との距離を取り、社会そのものを信じていない様子が伺えました。

今回は、母から「子どもにできることが増えました」という言葉が真っ先に出てきて、母の表情が柔らかくなり、子どもの方もにこやかな表情で母の隣に座っていました。前は、父と子どもが交わる話題が出てこない印象だったのですが、今回は子どもと一緒に農業をする話題があり、親子で過ごす時間が増えていることが伝わってきました。

「できない」という前提で子どもを見ていると、子どもに直接言わなくても親の表情や放つ空気で感じ取ります。できることが増えたと語る母、子どもとの時間を持つとうとする父の背中が、この子に力を与えることだと教えられました。

母を労うと、前にお会いした頃が一番しんどい時期でしたと涙ぐみ、子どもが進学を機に積極的になっていき、自信を深めていった様子を聞かせていただきました。そして今後、何が子どものためになるのか悩んでいると相談を受けましたので、子どもの力が発揮できた環境について尋ねました。すると、学校での配慮があげられました。

子どものペースにあわせてもらえた
少ない人数の中での活動
そして、誰かの役に立っていると感じられた経験をした

という辺りがポイントになったようです。今後もその環境を作って行けそうな場所について話し合っていくと母の中で見通しが持てたようで「モヤモヤしていたものが、スッキリしました」と肩を撫でおろし、さらに優しい眼差しになっていくのが印象的でした。

選択していく力

日々の生活でトラブルをなくすこともできませんし、子育てに悩みが尽きることはありません。子どもが学校に行けないと、多くの親は心配します。

周りと同じように学校に行けなくなったら、将来どうなるのか心配だ。最初に頭に浮かぶのは、この辺りのことでしょうか。ここから、何とか学校に行かせようとするためにあなたなら何をしますか。まずは、「明日も学校なのだから、早く寝ないと朝起きられなくなるよ」と声をかけても、朝になると調子が悪いと行き渋る。

さあ、どうしましょうか。やはり学校に行かせないと世間の波から置いていかれるから何とか行けるようにしなければと頑張りますか、あるいはいじめられているのではないかと、担任との折り合いが悪いのではないかと行けない理由を探しますか。

学校に行けない理由が、インフルエンザに罹った時のウイルス検査のように一つの理由で起きているわけではありません。いじめを受けていることがわかり、加害者が謝罪する形になったが、次からは大人にばれないより陰湿な形に変わっただけだったという話をよく耳にします。いじめというと加害者と被害者がしっかりと別れているような印象を持ちますが、実際は加害者と被害者が入れ替わることもあります。人間関係の中で起きる現象ですから、複雑な人間関係の

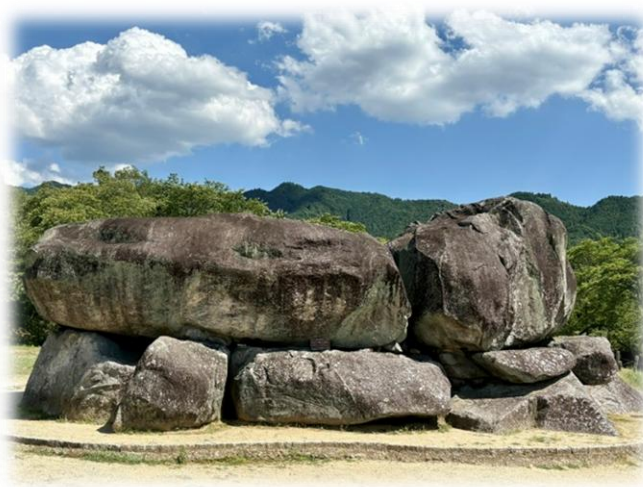


様相をしているものです。

でも、私たちは何か原因があり、それを取り除けば良くなると信じたくなります。上手くいかない理由を考え取り除こうしても、状況が良くならない経験を繰り返しても、別の理由を探そうとする。これは、人の思考の特徴だと言われているので、思考の癖だと言えます。

ある家族面接で、中学生の子どもが「学校に行けない」と相談に来られた際、話をしていく中で「今は、学校に行かずに休む時期にしよう」と決断をしました。「大学に進学をしたければ、高卒認定試験取得の道もあるし、高校に行きたくなれば行けばいい、今できることは何かを一緒に考え、できることを行動して行こう」と父親が話しました。まずは家族共通の趣味、「道の駅巡り」に出かける計画から始めていました。家族で「学校に行かない」と決めると罪悪感が減少し、家族が笑顔で話をしていくようになっていました。

会社からの人事異動を受け、家族の暮らし方で変化を迫られた場合、何を優先するのか。ここで紹介した家族は同じ選択をしたわけではありませんが、世の中の当たり前をそのまま飲み込むのではなく、家族に合わせた選択を実践していきました。能動的に動くと行動に責任を持つようになり、悲観しくなくなります。前を向いて生きる親の姿は、子どもにどう映り、どう影響していくのか今後が楽しみになりました。



周辺からの記憶 52

2024 年度 東日本・家族応援プロジェクト＋ 福島県沿岸部

村本邦子（立命館大学）

今年は定年退職の年なので、このプロジェクトでも、毎年開催しているシンポジウムで、この15年半の振り返りをすることにした。それで、8月末から9月にかけて、青森県むつ市、岩手県宮古市、宮城県多賀城市、福島県福島市・白河市と南下しながら、プロジェクトを協働してきた機関や人々を訪ね、座談会やインタビューを行っている。

どこを訪ねても、みなさん暖かく迎え入れて下さり、貴重なお話が聞ける。このような場を開くことができたことで生まれてくるたくさんの物語がある。まだまだ聴かなければならない物語がたくさん埋もれていて、時間と共にあらたに生み出されてもいるのだ。このような関係を続けて来られたことは私の人生にとって本当に大きなことだったなあとしみじみ思う。これからも細く長く関係を続けて行けたらと願う。



9月1日(日)民話の会との交流会

塩竈から常磐線で新地町まで移動し、小川観海堂にて、みやぎ民話の会、新地語ってみっ会、川島秀一先生との交流会を持った。

新地語ってみっ会の小野トメヨさんは、ちょうど百歳を迎えたという。トメヨさんは、70歳ぐらいから始めて、昔話を語っていたが、東日本大震災の時には、家も何もかもなくされ、東京の息子さんのところに避難していた。小野和子さんからの手紙に、「すべてされたけども、私には民話が残っています」と返事をされ、その言葉に皆が励まされたのだという。トメヨさんは、新地町の昔話を聞かせてくださった。

鹿狼山の手長明神

ここからだってね、あのすぐこう見るとね、こんな山があるの。これね、鹿狼山って言ってんだけどね、このお話ね、昔々の大昔。名前も何にもついてないただの山。その頃は土の塊の山だったかどうかもわからない。大昔のことだから。その頃ね、この山のとっぺんにね、手の長いね、老人が住んでおったんだと。白髪のおじいさんが。そしてね、そのおじいさんはね、鹿、白い鹿とオオカミ。そんなのをね、オオカミと鹿をね、いつも可愛がって手元に置いてね、その辺を、山を行ったり来たりね、いつでもその鹿とオオカミを連れて山で暮らしとったと。この山で。

そしたらね、ある時ね、おじいさんもね、あー、腹が減ったな、何か食うものがないかな、なんてね、この山に跨って四方をずっと眺めてた。そしたら、あっちの方にね、あー、蛤が見えた。ずーっと波たってね、蛤がずー

っとつられて。そこへね、山のとっぺんから手を伸ばしてね、そうしてね、こう探ってガーツとしてみたらね、貝がいっぱいあったんだと。それで、おお、なんだこれ、貝。で、取って食べてみっかな、なんて食べたら、あ、これは美味しい、になってね。それで殻、外は殻硬いから、中だけ、あー、美味しい、なつてれば、殻はあーこの山のとっぺんからポーンなんてしてね、またまたもっと取って、あ、この貝も美味しいね。またポーンとな。もうどの貝とってもね、あ、ハマグリ、アサリ、あー、こっちがいいなんていっぱいね。取っては食べて、ポーンと殻投げて、長い年月ね、育てて暮らしてたらね。

そのね、貝殻。山と海とのね。えー、ちょうど真ん中頃にね、その貝殻いっぱい詰まってるね、それ今に残っているね、あの小川の貝塚と言って、すぐその辺にね、もう二百メートルぐらい行ったところにね、山となったね、その跡が今に残っている。新地町のね、えー、貝塚、小川の貝塚といってね、国の史跡文化財として保護されて残っています。そしてね、この山はね、鹿とオオカミのね、連れ合って歩いてた山だからね、鹿と狼の山、ほら、鹿狼山という名前になってるの。そして、今はこれはね、福島県の緑の百景に選ばれてね、方々からね、あの登山に来る人がいっぱいおります。そんな山になってます。





早川の長者さん

でね、この山麓にね、早川の長者さんという人が住んでおったと、これ長者様つうんだからこれ。ええ、それはそれはね。蔵が三つもあって、ああ、ギナン(下男)、ギジョ(下女)をいっぱい使ってね、裕福な暮らししてるのよ。で、そこにね、一人息子があってね、年頃になったもんだからね、みんな世話をしてね、綺麗な嫁さんもらったんだ。で、みんなね、この息子も家族もね、ああ、よかったいい嫁もらってになってね、みんな喜んでたのね。

そしたらね、どうしたことかね、その嫁様ね、あの三年経っても五年経ってもね、子宝に恵まれねえんだと。ほんだからね、ああ、これ長者様、なんとか早くうちに孫が生まれればいいのにと考えたって、いつまでたっても生まれないから、もうね、世間の人たちね、あれ、長者様いうんでは四つに頑張れねえんではもうこんだけの字でおしめえどあるってね、噂が立ってしまった。いやー、長者様、そんなこんだい限りで終わりにしたくない。

ほんでね、この山の神様にね、鹿狼の山の神様にね、願をかけたんだと長者様。あー、そしてね、うちの嫁に言う、お宝が刺さるようにってね、願をかけた。そしたらね、

満願の日にね、長者様の夢枕にね、えーそんだらね、この鹿狼山の中に入っているとろろ芋を掘ってかけてみろなんていうお告げだったと。それで早速、ギナンに命じてね、山いっぺん巡らしてね、とろろ芋を掘らせた。ところがこれ、山にはえているとろろ芋っていうのは自然薯と呼ばれてあれ、山に一人ではえているんだから、掘るたってこれ木の根っこが邪魔になってね、それにも容易でなかったと。それでもこれね、何本か掘ってね、すりおろしてね、あの、すりおろしたって、これ畑で作っているとろろ芋と全然違うんだから、団子みたいになるのよ。すりおろしたら、それをよくすり鉢でね、すりこじ棒でよくゴロゴロゴロゴロ、それに味噌汁を少しずつ混ぜて、ゴロゴロゴロゴロ、一度に混ぜたら飲めないから、もうゆっくり時間をかけてね、伸ばして、いいあんばいに伸ばしてね、そうしてね、あーこれ、とろろ飯にしてかけてみたんだと、嫁さん。

そして浜、そこのすぐそこの浜にカレイなんていう魚もあるから、そんなのもかけてみたらね。なんせ体が丈夫になったんだね、精がついてね、次の年、早速子供が生まれた。また次の年も生まれた。また次の年もなってるね。まずね、十年のうちにね、いやいやいやいや、途中で二つ子なども生まれてね。十年のうちに十一人の子宝に恵まれ、いやあ、長者様のお喜び。それはそれはお喜びね。それからついこの間ね、その山麓にね、一軒の民宿屋ができてね、とろろ飯が有名になって、もうみんなね、山に遊びに来る人たち、その精がつくのにあやかりたくてね、もうとろろ飯みんな食べていた。昭和の時代まで大繁盛でした。その後において、今はね、時代が変わってその民宿もなくなりましたけれども

ね。はい、あれは今度レストランになって名前になったけどね。でもとろろ飯は昔はね、みんな大喜び。どこの家でもね、食べてましたよ。え、そんな話ね。そしてね、その周辺一体ね、早川の姓のついた名前がね、あそこの早川さん、あれ、あそこもあの曲がり角も早川さんなんてね、早川の姓のついた家がいっぱいあるのだから、その長者さんは今に栄えているんだね。おしまい。はい、失礼しました。

津波の話

あの3月11日ね。いや一驚きましたよ。突然の大地震だもの。その地震ね、今だからってね一経験しないね。昔の家っていうのはね、みんな、この家も昔の家だからね。これ柱っていうのがね、ここもちょっと、昔はね、家ごとにこう柱建ってたのよ。そう。その柱がね、もうね、こういう風にね、こう、ほら、90度の真ん中、45度、この辺までね、こう揺れるんですよ。今度はこっち、南と北に揺れたの。ほんで私がこう見てたんだけど、この揺れがこうなって、またこうなってね、この揺れのおっかなくてね、もう頭がもう麻痺してしまったんだね。今にも潰れそうだから。

もうそしてね、襖なんてあるでしょ、これ。こうするとね、こう揺れた時ね、バーンとね、すごい音たててね、一気にこのね、この角から角までこういう斜めに破けるんですよ。これ、ね、それがものすごい音なる。この昔のね、襖っていうのは糸が入ってるのよ。横に縦に。そして中まで紙だから、丈夫な紙で貼ってあるの。それがね、斜めにバーンとね、家でね、その音が何の音かわからないのよ。こんな揺れてるから気が動転してる。そうす

るとバーン、バーンって。こうしたら、こう見たらこんな斜めに。いやね、あの地震のすごいのにね。もう頭がね、麻痺して。

その後にはら、放送が、町でだって驚いたから、ああ津波が来る情報が入ったね。情報が入ったから、みんなね、いやあ、あんで津波がほら、その前からね、度々ほら、あの仙台大きい地震っていう大きい地震が近々来るらしいという、ほら、情報があったから、みんなね、そのつもりではいたんだけどもね。その時は、こういう風に避難する、こういう風にして指導されていたんだけどね。その揺れでね、もう頭が麻痺してしまうんだね。そしてね、避難する時にはね、えー救急袋って当座の食料品を詰めてたりね、そういうみんな町で用意してくれてたからね、そういうの裏にかけておくんですよ。ところがもうね、それを用意してたの。ところがね、そこにかけてあるのだっちゃ、もう気がつかない、頭が麻痺しちゃう、その揺れで。すごい揺れでした。

そしてね、もう何も持たず、避難する。今から大津波が来ますっていう放送があるのよ。その放送が聞こえた家と聞こえない家とあったの。ほら、今日の機械が故障したか何かでね、家には聞こえなかったからね。もうそれで早く大津波が来るから避難してください、こう言ってるからね。もう大急ぎでみんな避難したわけですよ。

だけどね、あー案外ね、おれ今まで大津波なんか来たことないからね、あー津波なんか、こんなこと、どんな津波だからってわざわざ逃げるつもりあるんだと。どんな津波だから、そんなこんなことしてられない。私らはさっさと避難したからね。うーん、でね、何にもね、ほら、放送する人でも大津波が来るっ

ていうことは興奮しているからね。大声でしょ、そういうのね、もう、もうちょっと何かね、皆さん冷静になって落ち着いてこういう風に避難してくださいとか言われればいいのに、ほら、放送する人だって興奮してるから、もう早く逃げないとダメなのかななんて思ってね。もうみんな何にも持たないでね、避難したんですよ。

いやー、ねー、本当にね、ああいう時はよく落ち着いてね。この前にはね、私もね、いざ避難する時には、ここのこれ、引き出しにいっぱい何か色々入って、この引き出し 1 本だけこう取れば大丈夫なんてね、それを持って逃げようなんて思ってたんだけどな。その場になったらね。それも思い出せねえんだよ。頭が麻痺してね。本当にね。あれはもっともっと強く強くあの、教育しておかなきゃダメだったなと思ってますね。

そんなわけでね、私はみんなはやばやと避難したからね。おかげで家族もみんなもね、あの、無事でしたけれどもね、ものは一切もう流れてね。あの二階なんかやっぱり、二階、今の作りで二階と下と分離するのね。表に、あの波でドーンとしたら、二階と下と分離して、二階だけプンプンと流れていったね。ずっと 200 メートルも、ずっとこの田んぼの中に二階がありましたよ、うちでね。

そしてその時ね、うちの娘のところの姑、おばあさんがね、90 歳の人が、95 歳ぐらいになったおばあさんいたの。そしたらそのおばあさんの家ではね、あー、情報が入ってなかったんだと。情報。なんかね、機械があるんだけどね、放送がわかんなかったんだ。そしてその時ね、あの若い夫婦はね、どっか用足しに出かけてね、おばあさん 1 人留守

番した。そしたらね、のんびりして、ほら地震になったから、あ、これではもうこんな時にはね、あーどこかに逃げていこうってね、あー、こういう時は水が必要だって、ボトルの 2 本ね、水をね、リュックに入れて背負ってね、表も逃げていこうと思ったらね、誰かね、そっち東の方でキャーッと騒ぐ大声した人があったんで、ひょっとこを見たらね 東から津波がそこに来たんだ。当然おばあさん急いでね、こっちの方にね、二階に上がろうかと思ったって。来てやつとここに津波が来て、大急ぎでこの小さい部屋にね、入り込んで、押し入れの小さいところに、タンスなんか入っていた小っちゃい部屋、そこを開けてそこに入って、戸をパチンと閉めた途端ね、その戸にドーンと津波が入って、ぶつかってね、戸がこんな斜めになったけどね、隙間からだんだんだんだんで津波が入ってきた。そのおばあさんね、そしたらね、自分がタンスに、とつつかむ、あの引き出しのこうつかまってね、そしたらだんだんだんだんこう上がってきてね、その津波がここまで来たの、こーしてね。あら、そういうふうにそのおばあさん言ったからね、私にすっかり語って聞かせたの。そしたらね、ここまで来たけど、津波だったからね、いつ引くだろうと、こう思ったって。そしてようやく、こう何か足でね、上がるものでもないかと思って足で探ったりしてね。ぐーっと来てたら、ここまで来た時にね、水が少しここまで来たり、しょっぱい水が。あ、やはり津波だと思ってね。ここまで来た時、今度だんだんと水がね、下がってきてね。そしてそのおばあさんも助かったってね。

私によく聞かせてくれました、ほんと。そんな話がありましたね。で、いろいろね、避

難の状態とか何かはね、それぞれ違うんですよ。うん。早くさっさと逃げた人から、あーこんな、あー、あの津波なんかここまで来ねえだろうなんて言う人だの、まちまちでしたけどもね。やはり大きな地震だったらね、やはり大津波が来るということは、これはよくね、心構えしとかなければならないということね。これつくづく私もね、反省しています。ね、本当に。

本当にそのおばあさんはしっかり者だったね。うーん、でね、そういう時は気持ちかね、もう狂いそうだったでしょうねって、私たちが。いやいやね、そういう時は案外落ち着いてるもんですって。冷静でね、いつかは津波は来くだろうって思ってね、我慢して辛抱していたっていうんだね。やっぱり自然と来て、ほら、ね、こうやって。そしたらガラガラになってね、外に出たら誰もいないね、もう死んだ気持ちになってね。その日いっぱいね、あー、自動車だ、ゴミだ、物だって、いっぱい瓦礫が流れてね。自分の家の屋上だって、あ、ベッドはこっちの方に行ったりね、ガラスは倒れたりね、大変なんね、うちで、その家ももうね、使えなくなったの、下のね、2階の方は残ったけど、下はダメだからね。そんな人が、そのおばあさん助かったお話ね。



トメヨさんのこと(島津さんより)

トメヨさんはご自分のことをおっしゃらなかったんですけども、前に聞いたお話では、小さなバググ一つ持って、それこそ用意してた救急箱とか、いろんなものを全部置いて、小さなバググひとつ、3つほど手提げ袋を持って近くにある三階建ての役場にみんなで逃げたそうです。少し奥まってるし、まさかそこまで水も来ないだろうなんて思ってたのに、案外一階がダメになり、役場の三階に逃げろってことになったそうです。トメヨさんは三階にいたので、直接様子は見てないんだよっておっしゃってました。そこでしばらく三階にいて、東京から迎えに来てくれた息子さんのところに連れて行かれて、しばらく向こうで過ごされたんですけども、やっぱり元は全然知った人もいない、こちらの様子もわからない。電話をかけようとして、あの家はどうなった？ それから庭にあった柿の木はどうなった？ って聞くと、全部ありませんって言われる。何にもありませんって言われるってということで、本当にその様子はトメヨさんですらご想像できないような状態だったんだと思います。

トメヨさんはその後、戻らないで、仮設住宅にしばらく住んでらして、今はそのすぐ近くの高台に調整した土地に建てたおうちに住んでいらっしゃる。そして語りをやっていらっしゃる。今聞いていただいてわかると思うんですけど、語りの力がありますよね。普段は少し元気ないなと思ってても、明日語りしなくてはいけないなとか、今日は例えば学生さん来るんだなっていうと、しゅっとなるんだよってという話で、もうそろそろやめましようかって言うんだけど、でもあのお話

あったよねとか言って、やり始めるとまたこう背筋がピンと伸びてくるような、そんな感じのお方です。本当に見習いたいような大先輩なんですね。

トメヨさんのことで私、覚えています。本当に何もかも流されちゃいましたよね。したら、片付けをしないと神様が言って、持って行かれたと話されたんです。その中に込められた思いは色々あると思うんですけども、そんな言い方をされて気のしっかりされた方だなあと思いました。

なんで語り始めるようになったかっていうと、2001年、福島県で福島みらい博っていう展覧会をやったんです。その中に民話の部屋がカフェになって、福島県内の語り手をいろいろ募集したんだそうです。その時に民話には興味はあったけれども、あんまり語ってはいなかったんだけどやってみようかなと思って、70歳で手を挙げられて、それから本当に勉強されて、そこでいろんな資料を読み込まれたり、人に聞いたり、そうやって今、トメヨさんがいらっしゃる。

そこにいらっしゃる村上さんもとても大変な思いをくぐり抜けてこられて、そのお話もちょっと聞いていただければと思います。



朝日館女将の7DAYS(村上さん)

今日は紙芝居を読みたいなあと思います。なんで私がしゃしゃり出てきたかっていうと、そういうおせっかいな性格っていうのもあるかもしれないし、一番心臓が強いっていうのも一つあります。もう一つは、メンバーの中で被災しているのは私一人なんです。他のメンバーは本当に幸いなことに被災しませんで、今回被災のお話をというお話だったので、紙芝居を読みながらいろんなお話をさせていただこうかなというふうに思います。

この紙芝居には、ここに広島、福島とあり、これは広島市民の方が、福島県も被災したところに作って送ってくださった紙芝居で、最初は、かつて放射能に苦しんだ経験を持つ広島市民として、今、放射能に苦しめられている福島の人たちに何か元気が出るものを贈りたい、何がいいだろう、自分の住んでいる街に住めなくて、よそに行かれている方も大勢いるって聞いたから、自分が住んでいた街の民話を住んでいたところの方言で紙芝居にしたなら、それを読んだら喜ばれるんじゃないかと、最初は民話の紙芝居が届きました。

今、トメヨさんが話してくれましたけど、一番先に届いたのはこの鹿狼山というお話で、トメヨさんのところに一番先に届いています。トメヨさんが、「私、高齢だからこれをもって利用のしようがないから、語ってみっ会はどうですか？」って言って、私たちの会のところに届いたんです。

最初のうちは民話が届き、もっと作るから民話を教えてくださいって広島から手紙来たんですよ。私、民話じゃなくて、今回の被災

体験をぜひ紙芝居にしてやりたい、なぜかっていうと、人間はすぐ忘れちゃうから。新地町の民話をいろいろ調べてみると、今から何百年前ですね、3月1日に1年に1回、大津波は800年、そのぐらいですよ。今回と同じぐらいの規模の津波が来てるんです。それは地質学の先生が調べても、地層の中で繋がって、ここまで津波が来たんだっていうのが昔話が残ってるんです。例えば船場沢っていう地名のところがあって、そこは津波の時にちっちゃい船が流されてそこでクルクルクルこう輪を描いていたので、船場沢って名前がついた。山の方には小鯨っていう地名もあるんです。そこはちっちゃいクジラが流されて、で、小鯨って名前がついた。さっきトメヨさんが言った鹿狼山のその向こう側に地藏守っていう山もある。そこは道端にお地藏さんが立っていたんだけど、津波が来て、地藏さんが流されそう。慌てて船にお地藏様を乗せた。船頭さんはいない。その船がずんずんずんずん川上に進んでって、山の中腹で止まる。で、その山の名を地藏守っていうふうに津波伝説に残ってるんです。

でも、私たち、それを本当のことだと思って今に語っていくべきときに、ずっと嘘話っていうか、昔話っていうか、聞いた話として語ってきて、だから新地にそんな風に昔も津波が来たっていうふうには語ってなかったんです。でも、今回の津波で、実際にその地名のところまで津波が来てる。だから実証されたんですよ。なんで私たちは、ここまで津波来たっていう昔話残ってるのに、そんなふうに語らなかったのか、津波って言ったら、ここより遠く逃げなくちゃいけないんだよって言わなかったのが、私は自分ですご

く申し訳なくて、その思いがずっとあったので、紙芝居を残したいと。私たち語ってみっ会のメンバーがいなくなったらね、あと、多分20年かすればもう誰もいなくなると思う。そしたら語る人がいなくなっちゃう。だけど、紙芝居にして残しておけば、誰にでも伝わると思う。今、小学生はもうすでに震災後生まれた子ばかりになってきたけど、新地にもまた津波来るからねって教えておけば、それが一番の防災になると思う。伝承が一番の防災になると思うので、震災のことを書いてくださいと。

その後、震災の紙芝居が100本に近いほどできたと思います。これは東北町物語、紙芝居化100本プロジェクトっていう名前の団体なんですよ。すでに100を超えるところに紙芝居が届けられている。さらに、その中から現在10本ぐらいをアニメとしても残してる。絵を描いて、声の出演は、その市町村の方たちが行って、漁師さんの役は漁師さんみたいな感じで、皆さんが自分の役をアフレコしたアニメがある。川島先生も出演をされています。

これは「朝日館女将の7days」という紙芝居です。朝日館女将っていうのは私です。私は山辺のところで明治の初めくらいから100年近く続いた小さな宿屋の女将をしています。あの時のことを紙芝居にしました。

意外と最初の1週間の記録がなかったんです。1週間過ぎると映像とか、体験談とかいっぱい残ってるんですよ。多分その時は私もそうですけど、最初の頃はあまりにも毎日自分たちが生きていくのに必死で記録が残ってないんですよ。本当に必死に生きていた、生活してたという感じで記憶が飛んでる。いろんな人の7daysがある。これは私

が文を書いて、この時はまだ広島市の職員だった福元さんが描かれた。これを私が読みたいと思いますので聞いてください。

（と紙芝居が披露された）

あまりに必死だったので、あちこちの記憶は飛んでいて、今こうして思い返しても現実なのか夢なのかと思える。まるで幻のようさえ思える。それまでは明日が来ることを信じてた。明日が来るとは限らない。今日しか今しか生きることができない。

震災の年の9月にお友達が東北遍路というのを立ち上げて、それを手伝っています。青森県から福島県まで21ヶ所の巡礼ポイントが選ばれました。それぞれにストーリーがある場所です。被災地4県手をつないで復興していこうっていうのは私たちだけじゃないかな。私はいつもすごく自慢に思っています。自分の今の体験を紙芝居だけじゃなく本にしようと思って、去年出しました。そして、福島民報新聞社民放出版文化賞っていうのをこの間、頂きました。



川嶋先生のお話

最初の小野トメヨさんの話、やはり100歳とは思えない声の張りと記憶力と話の展開の仕方っていうのは非常に驚きました。近所のばあさんから聞いた話もトメヨさんの中に入ると、あのくらいの迫力をもって伝えていく力を持ってるんだなということですね。だから、体験談だけでなく、体験した人から聞いて自分のものにしていくっていう力を持っている人だなということを感じました。

村上さんの紙芝居も、これは実は私初めて見せていただいたんですが、見事というほかなかったですね。やはり語り部の仕事をしていたから、そういう活動をしていたからこそ紙芝居も生きてくるんだってつくづく思いました。テーマが小さいセブンデイズ、実はこれは確かに大事なことだと思って聞きながら、私も七日間のことをうろ覚えに思い出していたんですが、覚えているのはだいたい地震直後のこと。それから津波が、私も津波自身は体験してないんですけど、津波が来た気仙沼の状態ですね。それから家がなくなっていたっていう、それも1週間の翌日から、それがわかった時、あとは携帯が繋がったっていうのが6日目でした。ドコモなんですが、私が持ってたのが、ちょうどある噂話で、あそこが通じるっていうから行ってみたんですね。そうしたら皆からメールがいっぱい入っていた。それからそこに私は毎晩行くようになって、職場に避難してたんですが、行くときはちょっとドコモマシン行ってくるからと、通知したものでした。そのいっぱいいたまっていた電話の中でやっぱり多かったのは各地の漁師さんですね。私は、それ

まで全国の漁業の話を聞いて歩いていて、例えば高知県の漁師さんなんかはもう十何回も入れていました。もう一人の方は、鹿児島県の沖永良部の漁師さんでしたが、一人一人ずつ返していったんですね。電話で。6日目でしたら、この返した時にその沖縄沖永良部の漁師さんたちは電話の向こうで泣いてしまってるんですね。で、私はそれまで涙を流すことが一つもなかったんです。家がなくなった時も、母親がもういないっていうことも知った時も涙は出なかったんですが、向こうの漁師さんが泣いてて、こちらがもらい泣きして、その時ちょっと何かが崩れたようになって泣いた覚えが、一緒になって泣いた覚えがあります。それが6日目だったと思うんですね。

その後も色々です。自分が何が立ち上がりそうと思った時とは、それは1週間過ぎてもう1ヶ月くらいだと思いますね、まあ母親のDNA鑑定するからって言って電話を頂いたときとか、関連したいろいろな思い出がありますが、やはり語り部をやっている人、文学をやってきた人、すでにそういうときにどうしたらいいかっていうことをやっぱり蓄えている気がするんですね。小説とか文学とか、それから語り物、噂話でもそうです。それは何よりも強さの元になるんじゃないかと私は今でもやはり、あの文化系の研究をやってきてよかったと思うのは、そういう部分ですね。

皆様、これからいろんな体験をすると思うんですが、同時にね。音楽の世界とか、そういうのをどんどん読んでですね、要するに人間を研究してほしい。つたない話ですが、私からのコメントという形でお話ししました。どうもありがとうございます。ありがとうございます。

ざいました。



鵜野先生コメント

トミヨさんの話もとっても心に染みまし、それからあの朝日館の女将さんですか、村上さんの紙芝居も、とっても心に染みまし。今、川島先生がおっしゃられた、あのドコモ橋の話を初めて伺ったので、ああ、そういうこともあったんだなって知りまして、本当にいい話を聞かせていただけたなというふうに思っております。

島津さんを始め、スタッフの皆様というか、今日の間を設けてくださって、そしてzoomの力というか、ありがたいことだと思って、えーそれも含めてあの皆様に感謝したいと思います。どうもありがとうございました。



参加者からのコメント

・民話っていうものを初めて聞いてみて、やっぱりいろんなメッセージが込められているんだなっていうのがわかりました。私は滋賀県出身なんですけど、自分自身の県の民話とか一切知らないんで、この機会にちょっと知ってみようかなと思いました。ありがとうございました。

・すごく臨場感のあるお話で面白かったです。ひとつ質問したいことがあるんですけど、本とか漫画とかいろいろ伝える媒体がある中で、なぜ紙芝居を選ばれたのか。肉声で届けたっていうのが、やっぱりちょっと違うような気がする。

⇒新地の紙芝居は、頼まれて日本全国紙芝居を担いで歩いて、400回以上、500回近く読んでるんですね。やっぱり肉声で届けるっていうのは、本を読むとは違う。50歳になってから医学界に入って研究してらっしゃる友人がいるんですけど、やはり肉声が一番いいと。なるべく紙芝居とか昔話、録音や録画じゃなくて、頑張って日本全国歩いて話してって言われたので、この紙芝居で声が届くようにしてきました。

・私たちみやぎ民話の会は、伝承の語り継ぎ、伝えられてきた語りを聞いてもらおうと民話の学校を開いていたんですよ。それがあの2011年に大きな大震災になって、その時に、あの3月に起こった地震のことを、8月に被災エリアど真ん中に南三陸町志津川で開きましよう、ととても早かったんです。そんなことできるのかと最初は思いました。でも、小野和子さん、去年のお話を聞かれた方もいらっしゃったかと思いますが、や

りましようということで、6人の方に体験を直接聞いてもらった。

全国から集まっても仙台から交通手段がなくて、バスをチャーターして行ってみたら、水がまだ出ないかもしれないと、そんな状態のところだったんです。なんとかギリギリ水は間に合って、200人、100人くらいの方が聞いたんです。川島先生にも関わって頂きました。死ぬ側でやるんだったら引き受けますっておっしゃってくださって、やっぱり直接見る、聞くこと、トメヨさんにしても、アイさんにしても、本当に今でもドキドキするような体験なのに、それをまたこう、皆を笑わせながら話してくださるんですよ。みんな涙流しながら笑ってるんですよ。そういう経験って本当に貴重なものだったなと思ひまして、参加して下さった方々に私たちは何もできないけれど、聞くことができますって言うて下さったのが心に残っています。そういうことで、本当に今は直接その話をする、語るっていうことが大事なんだなって思いました。



・私は岩手県の岩出町と竜泉洞っていうところを転々と歩いたんですけど、中学校時代をそこで過ごしたんですね。岩出小学校っていうのは20キロも離れた内陸にある学校だったにも関わらず、遠足だとか海浜学習

だとかに行くとね、どこどこに女の人が裸で絡まって死んでたとか、お寺さんの階段ここまで逃げた人は助かったとか、こっから下はみんな死んだよ、中にはおばあさんを送った嫁さんも踏んじゃって、ここにも届かない、早く早くって言っていて、流されて行ったんだとか、そういう話を子どもの時に聞いていて、もう夜怖くて眠れないぐらい。そういう風に津波の話を聞いて育った。一方、主人は、新地は津波が来ないいい町だと、逃げようって言っても、いやあ、津波来ないんだからいいんだ、新地に津波来たことないんだと逃げなかったのを、ギリギリ逃げた。やっぱり避難するっていうことを子どもの時からちゃんと教えておかなきゃダメだなと。たとえ空振りになったとしても、避難しないといけない。私は学校を中心にずーっと回って、自分の命を守るのは自分しかないんだからねって話をしていたんです。災害の時にみんなが自分の命を守ったら死ぬ人いないわよって。

・東日本大震災、30年のうちに必ず地震が来るっていうのは知っていて、私は今日から30年後だと思ってました。30年後は今日かもしれない、その感覚は私にはなかった。この頃、線状降水帯っていうのが最近毎日のように聞きますよね、台風19号でね、本当に今どこで何が起きてるかわからない。私は山の向こうの丸森っていうところに生まれたんですが、丸森には津波は来ないとみんなもそう言ってたんです。ところがその線状降水帯で、700ミリとか700ミリとかっていうものすごい雨が降って、山から崩れてくる山砂で一つの集落はまるっきりなくなっただけ、命を落とした人も何人もいます。本当

にどこで何が起こるかわからない。自分ごととして捉えるっていうことができるかが重要だと思っています。

・トメヨさんが話し始められたらすごいパワーを感じて、すごい面白くて笑っちゃう、なんか本当に包まれるパワーみたいなものを感じたりとか。村上さんの紙芝居も途中からすごく引き込まれて、時間を忘れる感覚がありました。本を先に読ませていただいてたんですけど、実際に語っていただくとなんかやっぱり質感が違うというか、さっきも肉声であることが大事というお話だったと思うんですけど、実際に目を合わせたり直接感じるなかで自分ごととして捉えられていくんだと思いました。

・ズームで参加させていただきまして、今日はありがとうございました。トメヨさんの話を聞いて、民話で土地の名前にゆかりのある話を聞くのは、とても興味深いと思いました。あと、紙芝居ですね、本当に切実な1日1日だったんだなと思って聞かせていただきました。どうもありがとうございました。

・同じくズームで聞かせていただきました。昨年は現地で参加させていただいて、話を聞きながら去年何の話を聞いたかなと思いはせていたら、すごく鮮明に覚えている。1年間慌ただしく過ごした中でも、こんなに民話って覚えてる、語り手の生き生きとした口調と合わせて覚えているものなんだなと改めて感謝をいたしました。

トメヨさんのお話もとても勉強になりました。川島先生もおっしゃっていたように、娘さんの嫁ぎ先のおばあさんのお話ですか

ね、避難するまでのお話が刻々とドラマを見ているような語り口調だったこともとても印象的でした。紙芝居も含めて勉強させていただいてありがとうございました。

・福島県に在学してて、僕は岩手県大船渡市に住んでいます。ドラマの力っていうか、お話を聞かせていただくことも、ものすごい力になると感じました。最初のお話もそうですし、映像で浮かぶかのような感覚を得ましたし、皆さんの考えも聞きたくて、本当に身につまされる内容でした。実際に生のお話を聞くことが、多分一番どうやって備えるか、どうやって自分の身に起きたら再現するのかを考える、非常にいい機会なんじゃないかなということを感じました。あと、面白いなと心に残ったのは、私たちは何かに守られてるんだなと。そういう感覚を非常に感じるころがあって。ありがとうございました。

・発災直後の 7 日間の物語を語っていただいたので、私にも 7 日間はどうかだったかなっていうこと、繰り返し頭の中で思い出すことができました。今日は本当に貴重なお時間をありがとうございます。

・このプロジェクト 2011 年に始まる時に、原発事故にしっかり見てこなかった自分への罪悪感もあって、中央と周辺の関係を見直したいと、支援とかではなくて証人になることを目標として掲げて活動をしてきたんですが、当初思った以上にたくさんのことを学ばせていただいています。とくに民話の会の皆さんとは、大学時代の同級生である鶴野先生を介してご縁があり、2014 年の民話の学校に参加したのが最初でした。それか

ら、いろんな機会に参加させて頂き、皆さん真剣に勉強されているレベルの高さに驚きながらここまでできました。

川島先生の 2011 年の基調講演も記録を読ませて頂き、海の近くで語るんだったら引き受けてもいいか、東北では亡くなった方に語りかけるのが供養になるという言葉がとても胸に残っていますし、今日のトメヨさんのお話や村上さんの紙芝居も初めて聞かせていただいて、ストーリーのひとつひとつがすごいなと心動かされました。また、加藤さんが紹介してくださいった、小野さんと車で移動していたら、別の車が反対車線から向かってきて、なぜか大きな力が動かしたかのように避けることができたという、紙一重の運とか縁なんでしょうけども、語り継ぐとか、人間の努力でできることと、でも最後はそんな大きな力で動かされていたんだな、人間はとあらためて思いました。川島先生がおっしゃった、そういう時に力が蓄えられていくという、そういうのが本当の学びだし、大学の教室で学べないことだと。皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。今後ともよろしくお願いします。

・今日は本当に皆さんようお越しくださいました。9 月の仙台がこんなに暑いなんていうのはあんまりないことなので、向こうから来た方は普通かなと思うか分かんないんですが、トメヨさんも体調をちょっと悪くされて、それでもあの元気さで語ってくださいました。私はトメヨさんが民話から力をもらったって言った時、民話を長くやってたのに、力って何？ と思ったんですよ。その後、本当に必死に勉強しました。真剣に向かい合わないと、民話って消えていくもんなんだなと。

小野先生に叱られてばっかし、今も 90 になる小野先生から活を入れてもらわないと、なかなか進めないかなと思いましたが、今日、トメヨさんにお話を聞いてもらってわかるように、本当に語る力っていうものが、人に訴える力っていうのを体験していただけてよかったなと思っています。民話の会は平均年齢がもう 90 の方が 4 人とか、私たちはまだ若い方、ちょうど団先生と同じ歳なんですけれど、皆さんにとっては古い人になってるんだけど、でも昔話って昔の話ですか？っていうことを軸に問いかけています。

そしてその話、おにぎりを数えたわけじゃないのに、偶然わけたらピッタシだったっていうことからなんか不思議な力、大きな力、もしかしたら亡くなった娘さんかもしれない。、そういうものに守られてるんじゃないかって思ったのは、東北に残っている縄文からの先祖を敬う、その人たちが守ってくれてるっていう思想が私たちの遺伝子の中にもあるっていうのを最近しみじみ感じてるのです。昔話として、今は、科学的でないとか、そんな話、嘘だとか、でも実際体験してるっていう人みんないると思うので、それを今日はいただいたなと思って。本当にありがとうございました。私たちもあの皆さんと出会わせていただくことってすごく刺激にもなるし、すごく感心するのは、東日本の応援プロジェクト。、普通はまあ年経ったからもういいかっていう感じで区切りがつくのかなと思ったんですけども、そうじゃなくて、まだ続いて来年もありそうだっていう、そのことってすごく大事だなってすごく思うんです。いわゆる被災した人たちは早く忘れたいという思いと、忘れて欲しくない、みんなに知ってほしいって思い、両方あると思うんですね。

でも、あの周りの方はやっぱり常にこう目を向けて、やっぱり自分事として明日自分のところに何かが降りかかってくるかもしれないという思いと、それからあの被災した人たちのその大変さみたいなのをね、両方をやっぱり感じていただけたらいいのかななんてすごく思います。このプロジェクトが本当にいろんな力になってるっていう風に思いますので、本当に暑い中で大変だったと思いますけども。ありがとうございました。



終了後、小高に移動、双葉屋旅館にチェックイン後、夕食を取りながら振り返りの会を持ちました。

9月2日(月)沿岸部フィールドワーク

おれたちの伝承館

朝一番、おれたちの伝承館へ行き、中筋純館長の説明も受けながら見学した。入り口を入ると、「原子力 明るい未来の エネルギー」の看板を外す時に最後まで残ったという「未来」の文字とともに、お腹を空かせた牛が柱を食べてまで生き残ろうとしたが死んでしまった悲しい物語のインスタレーションがあり、中筋さんは、「もの言わぬものたちの被害に目を向けてほしい」と言った。

それから写真家である中筋さんが撮影した巻き物になった町の写真を拡げて見せてもらった。写真は、建物を壊す前の街の風景を見ながら、ここにはかつて、人がたくさん暮らしていて、平穏な営みがあったことを映し出していた。

庭には矢印のオブジェが造られており、その矢印の先が、福島第一原子力発電所を指している。絶滅危惧種だったミズアオイが土地を掘り起こして出てきたそうだ。



双葉屋旅館・商工会女性部

双葉屋旅館に戻り、大広間で商工会女性部の皆さんから、小高での被災についてお話を伺った。小高は原発事故後避難区域に指定され、皆あちこちへ避難した。父が透析を受けられる病院を探さなければならず、その父も「小高へ帰る」と亡くなるまで毎日おっしゃっていたそうだ。

震災から5年後にやっと戻ってきて、その家の片付けに苦労された話や、商売を始めても以前の客が来ない、自分が高齢で後継者がいないという問題が重くのしかかり、復興を躊躇してしまう現実があった。ねずみが大量発生したことなど、ユーモアも交えて話されていたものの、その苦労は想像を絶すると思う。地元愛と切なさを感じるお話だった。

「小高の放射線量の数値は低かったけれど、近いし何があるかわからないから避難した選択は正解だった」とおっしゃっていた。放射能測定センターをボランティアでやっていて、毎年、空間線量を測っている。除染して、もう大丈夫だよと言われているが、除染したときは確かに低いけど、できないところは何倍も高いのが現実だから、そこをちゃんと見せて知らせていくのは私達の義務かなと思っているとのこと。南相馬市では、原発からの距離や避難指示区域の線引きによって、一番南にある小高区の賠償額が他区より多くなり、それが市民の間で大きな賠償格差や地域の分断という深刻な問題につながったうえ、2022年の追加賠償ではさらに格差ができたということだった。避難解除後、小高区では若手の起業家や移住者がお店や事業を立ち上げている。若い人たちをバックアップしたいと母親のような気持ちでやってい

る。土日はひまわりカフェをやっているそうだ。おれたちの伝承館の土地と建物も、商工会の方の紹介で開館することができたそうだ。



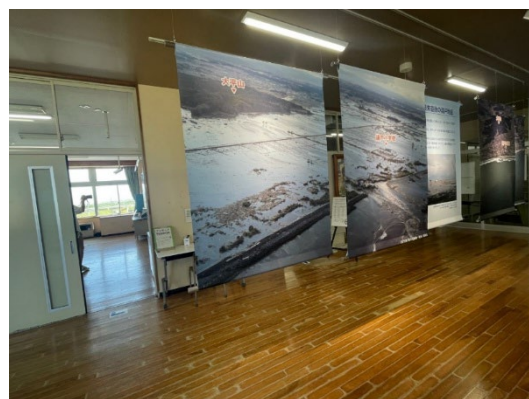
震災遺構浪江町立請戸小学校

双葉屋でおいしいカレーを頂いた後、午後からは、中筋さんの案内で、イノベーションコースト、請戸小学校、大平山霊園、原子力災害伝承館、双葉町、大熊町をフィールドワークした。

浪江にあるイノベーションコーストによる工業地帯は、人が住まなくなった土地に最先端のテクノロジーが入っている。このあたりには小高の山を削った盛り土が利用されているそうだ。さらに車で走っていくと、大規模なソーラーパネルの田んぼが広がり、震災遺構の請戸小学校を見学した。請戸小学校



の1階部分は津波の被害によって建造物の多くが大破し、廃墟と化していた。厨房の大きな調理器具が津波によって押し流されて壁に押し付けられたまま残っていたり、体育館の床が陥没していた。



東日本大震災原子力災害伝承館

東日本大震災原子力災害伝承館へ行った。伝承館では、高村さんの語り部講話を聞いた。高村さんはオープンから4年間ずっと語り部をやっておられる。実は、2019年に伝承館が開館して1週間後に訪れた時、お話を聴かせてもらったのも高村さんだった。

高村さんは南相馬市の出身で、地図を示しながら線引き問題を説明してくれた。避難指示があった20キロのライン。30キロ圏内は、当時、屋内退避後緊急避難準備区域だった。鹿島は30キロ圏外で、同じ街なのに、

このラインによって命の線引きがされた。一番大きな問題はお金で、賠償金がまったく違う。いろんな措置法で置かれた医療費が無料、あるいは高速道路も30キロ圏内の人間は来年の2月までそういった処置があるが、30キロ圏外の方たちには最初からない。賠償金もない。このラインで放射性物質が止まったわけではないにもかかわらず、線が引かれたことにより、地域の分断が今も心の中に残っている。もう口に出す人はほとんどいないが、昨年5次追補という賠償金があった。広く宮城や茨城の方まで5万円から8万円、そして20キロ圏内の方は1人280万というふうに金額が違った。どうしても住民同士で弱者にストレスが向かってしまうが、不満は国や東電に言えばいい。

高村さんは老人ホームで働いていたが、日本沈没するのではないかと思うほどの揺れを経験して子どもたちといたんは避難したが、東電で働いていたこともあり、安全神話どつぱりだったため家に帰った。翌日、十キロ圏内避難指示が出た。それから1号機爆発、20キロ圏内避難指示が出たが、避難と言っても自分のところが何キロなのか、どこへ行ったらいいのかわからなかった。親戚たちから逃げろと連絡が入り、逃げることにしたが、どこに逃げたらいいのか。とりあえず走れる方向は西しかなく、飯館村、川俣町、どこに行ってもだめで、道の駅で車中泊をした。子どもが寒い、お腹がすいたと言うので、いったん自宅に戻ると、携帯にたくさんのメッセージが入っていて、東電の家族が逃げた、老人ホームがたいへんとのことで、とりあえず会津に向かい、自分は職場に戻る決意をした。

子どもたちの父親が会津に着いたのは夜

中だった。そこで子どもたちと別れ、自分は南相馬に戻った。原町火力発電所が爆発したという放送が流れ、目の前には200人近い高齢者たちがいた。そして、全国放送が3号機の爆発を伝えた。時間を知らないまま普通に仕事をしていたが、大きな音を聞いた。職員が避難を始めたので、1人1人のケアができず、放置されたおばあさんは一気に痴ほうが進み、目から輝きがなくなっていった。やめることはできないと思ったが、上司に「正職員じゃないあなたに、これ以上責任は負わせられない、お帰りください」と言われ、正直ほっとした。放射能汚染が始まっていたが、自分たちは何も知らなかった。

同じシングルマザーの友人が連絡をくれた。避難すると思ったらつらいから、福島の温泉予約したから一緒に行こうと言ってくれ、地震から4日目、初めて笑った。生きていけると思った。原発が爆発をしても誰も助けに来ない。関東に電気を送り、原発が地域にあることが誉れと言われ、クリーンなエネルギー、未来のエネルギーと言われ続けた、私達が一体何をしたというのか。

ゴールデンウィークが過ぎて、東北新幹線に動き出し、やっと4歳の息子を迎えに行くと、息子は壊れていた。埼玉の保育園で、福島から来た子と遊ぶな、福島から来た子だと言われ続けたそうだ。泣くだけで喋れなくなっていた。自分を責め、津波で死んだ方が良かったと思うぐらいにつらかった。4歳の子供にそこで遊んじゃだめ、お花に触っちゃ駄目、駄目ばかりでおかしくなると思った。それからまた山形県に避難。いつまで避難を続けるのか。福島に帰るべきかと悩む。専門家や科学者、様々な人に聞いても、誰からも答えが得られない。

だから、翌年、ベラルーシ、ウクライナまで行った。同じ体験をしたお母さんたちに聞きたかった。どうやって子どもを育てたのか、何を食べてきたのか。お母さんたちは親切に教えてくれた。様々なことを学び、南相馬に戻ることを決めた。高村さんの体はベラルーシで850ベクレルという数字が出たが、低いのか高いのかもよくわからない。放射線は当たり前にある。そして後から様々なことを知らされる。

あのとき原発が爆発をしなければ、津波の犠牲者の方は助かったかもしれない。そういったことを後から後から知らされる。あのとき知っていたらと、ちょっと後悔し、そして、恨んでいる。そのようなことを語り、ずっと13年話し続けている。残念なことに語り部は増えない。逆に高齢の方はだんだん喋れなくなっていく、今福島県は高校生の語り部を作るといって動いている。でもみんな心に傷を持っている。

私は毎度、皆様をお願いをしている。私のようなものの話を聞いてくださり、そして伝承館の資料を読んで、そしてこの地域を見て、終わってますか、復興してますか。お戻りになってから、大事な方、お友達ご家族、周りの方にお話をしてくださいと。ご清聴ありがとうございました。



周辺のフィールドワーク

伝承館を後にし、廃校になった双葉高校、大熊町長者原中間貯蔵施設を遠望(線量が高いため)、大熊町 JR 大野駅周辺、大熊町新市街などを見て回った。

かつて大熊町の商店街だったところを訪れた。そこは現在、雑草が生い茂る空き地に電柱だけがポツンと残り、遠くに大型スーパー建設中であるのが見渡せた。中筋さんはそこに 2014 年にここで撮ったパノラマ写真の巻物を拡げて置いた。原発事故による立ち入り制限区域となって3年後の写真であるから、人は誰もいない。しかし、以前はここに人々の暮らしがあったことが想像できる。この写真がなければ、そんなことはまったくなかったことにされてしまうだろう。失われたものは、土地や建物だけではなく、ここで営んできた生活であり、関係であり、歴史である。復興とは歴史の塗り替えなのか。記録することの意義を大いに感じる機会になった。

この地域では自転車ロードレースなど復興イベントが開催される予定である。しかし、この道は線量が低いものの、今でも地元の人には汚染の危険性が高い山沿いは近づかない。私たちも、道を歩く際には茂みの中には入らない、道路のわきにたまっている砂には触れないようにと指導された。実際、中筋さんが道端の土に放射線測定器を当てると、 $0.23\mu\text{Sv/h}$ だった。

この日は新しくできた富岡ホテルに宿泊し、夜はみなで振り返りをした。



9月3日(火)沿岸部フィールドワーク

富岡町メガソーラー発電所

最終日は再び視察ツアーである。道中にはオープン寸前に震災が起き、オープンすることのなかったケーズデンキの大きな建物があつた。中に家電の箱がたくさんあり、震災後それを狙った泥棒が頻発したという。

夜の森の桜並木、夜の森駅周辺を見た後、富岡町のメガソーラー発電所 sakura を訪問し、視察担当の猪狩さんからお話を伺った。人が住まなくなり、農業が出来なくなった土地を地主から借り上げ、メガソーラーが建てられた。今はソーラーや風車ができているが、それぞれが環境問題を引き起こしている。20 年後は農地にできると言うが、20 年後にこの町はどうなっているのだろう。



ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館

その後、檜葉町の宝鏡寺にある「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を訪ねた。館長である安斎育郎にお話を聞く予定だったが、台風の影響を受け来れなくなったため、急遽、事務局長の丹治さんが迎えてくれた。伝言館は、「核」という視点から原発や原爆を捉え、過去を悔い、平和な未来へ向けて伝言していこうという施設である。

丹治さんは東京杉並区出身で、宮城の大学を出て県庁に 2 年勤めた後、東京に戻り映画会社に勤めていた。そこで知り合った音響の人がたまたま福島の人で、24 年前になるが、いわきに嫁いできた。いわき市は原発から 30~40 キロ、平成の大合併の前は日本一大きな行政府で、JR の駅が 13 もあった。12 年間幸せに暮らしていたが、原発事故が起こった。

いわき市のど真ん中、平という地域に住んでいて、2 時 46 分、車を運転していた。ドーンと突き上げる揺れで自分の車の天井に頭を打ち付けて、一瞬気を失う。意識が戻ったときには無意識に車のサイドブレーキを引いていたようで、車が側溝に軽くぶつかった状態で止まっていた。目の前にある日産の工場では、車と車がガチャガチャとぶつかり合っ、お互いに乗り上げるような状態だった。もう地獄絵図。大学 4 年のときに宮城県沖地震を経験していて、2 度目の巨大地震だった。

原発から 20 キロまでに避難指示が出、30 キロまでは屋内退避ということで、自主的避難区域ということになった。避難しないでいい。丹治さんの家は、原発事故から 34 キロのところにあつたので、自主的避難区域ということになったが、被害はないかと言え

ば、そんなことはない。今、いわきに戻って来たが、我が家の庭の土地は今 8 万ベクレルある。これは中間貯蔵施設と言われる場所の中に住んでいるのと同じ環境。ただ、空間線量で言うと、今朝は 0.06 ぐらいで、皆さんの住んでいるところをさして変わりがないが、土を触ろうものなら 8 万ベクレルということになる。

除染と言っても、表面の土を全部剥いで庭の隅っこに穴を掘って埋めて、レンガを乗せて土に触れないようにという努力はしている。環境省に電話して、こんなひどい汚染状態なのに、何もしてくれないのかと言っても、もう 13 年もたって、空間線量 0.06 だから心配ないですよと言われる。福島県は 3.11 以降ずっと緊急事態原始原発事故緊急事態宣言が発せられたまま。

1945 年 8 月 6 日、広島に原子爆弾が落とされました。この日、福岡県八女市の山本達雄さんという軍人が広島にいたおじさんを心配して家に行ってみたら、すべて燃えて何もなくなっていた。防空壕に行ったらおじさんらしき骨はあった。その脇でチョロチョロ燃えていた火を携帯カイロに採火して、悔しい、いつかアメリカを何としてもやっつけてやるんだということで自分の家に持ち帰って仏壇に供したそうだ。

平和な時代が来て、やられたらやり返すというようなことでは、戦争は終わらない。もう二度と広島、長崎のようなことを起こさないために、福岡県八女市の大きな塔の上で火が燃えている。

この火のことは初めて聞いたが、当初は「恨みの火」「復讐の火」として火鉢やこたつにひそかに保存していましたが「報復では永久に平和は来ない」と考えを改め、23 年後

の 1968 年星野村役場に提供し、以来同村は「平和の火」として保存されているそうだ。

その火は東京の東照宮にも分けられて燃やしていたが、年間 20 万ぐらいかかるので管理しきれないから福岡県八女市に返すということになったが、ご住職早川篤雄が受け継ぎ、2021 年 3 月 11 日、原発事故から 10 年後の 3.11 にここに来た。早川住職は私財を投げうって、立命館大学の安斎育郎先生と協力して伝言館を完成させた。2 人は原発反対運動から、40 年来の友人で、安斎先生が早川さんに送った手紙の文面がこれで、早川さんがこの文面を残したいと悔恨の碑を建てた。こんな碑は世界中探してもたぶんここにしかない。文案は安斎育郎さん、石はインドから持ってきたもの。ここは 600 年続くお寺の敷地なので、浄土宗の宗教法人に未来を託して残していく。広島・長崎・ヒキニ・福島という日本が被った核の被害全部を使って平和の大切さを訴えている、こういう資料館は他にないと思う。

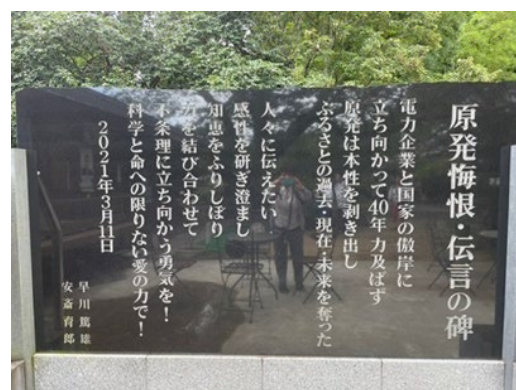
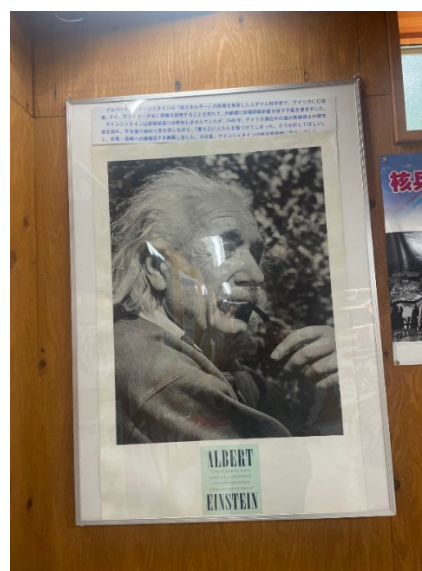
原発は燃料プルトニウム製造工場だから、エネルギー政策の議論だけでは原発はなくなる。核兵器をなくしていく。核兵器の製造工場が原発ということの視点に立たないと、原発はなくなっていく。差し止めの樋口裁判長がよく言うが、停電が起きただけで日本がオジャンになる、これが原発だ。車は地上を走っていてエンジンが止まったらそこで終わりだが、飛行機が一番高いところでエンジンが止まったらここから恐怖が始まる。まさに原発はそういうこと。エンジンが止まって、空の一番高いところで何万人何十万人と人を乗せた飛行機がエンジンが止まって一目散に落ちこちてくる。これが原発というものの事故のイメージだから、絶対に原子力

発電所なんていうものは事故があってはいけない。だけど、全部を今すぐ廃炉にできるか。今、第1原発では4000人の人が働いている。交代要員が必要だから倍ぐらいの人がいる。日本中の54基の原発を全部いっぺんになくして、全部同じようにやるとしたら、日本中の成年男女含めて廃炉作業員にならなければ終わらない。

ドイツは福島原発事故後に廃炉を決めた。原発の建物に太陽光パネルを貼り付けたりしている。要するに全部壊すのではなく、安全な状態にして、送電線は来てるので、再生エネルギーを作っている。チェルノブイリにも3回行ったが、今、ロシアとウクライナ戦争をしている。ロシアがザポリージャ原発を攻撃した。これ以上攻撃を受けると大変なことになる。原発っていうのはどこから考えても大変危険な建物だ。

もう一言だけ、福島被災地は東京23区半分の面積がまだ帰還困難区域になっている。東京で23区の半分か戻れなかったらどうでしょう。福島だったらいいのか。汚染水の問題も出てきた。海に何十万と何百万トンという水がどんどん捨てられたら、黒潮に乗って、日本中どころか世界中を回る。

その他、説得力あるたくさん話を聞かせてもらった。院生たちも考えるところがたくさんあっただろう。



原発災害考証館

最後の訪問先は、いわき市古滝屋にある原発災害原子力災害考証館。津波や地震と異なり、原子力災害では今もなお苦しんでいる方がいたり、知人が原発関連の仕事をしていたりと複雑な関係性の中にあるため、語りが人がない。特に実名で語ってくれる人は皆無であること、原子力災害のみにフォーカスして伝えている施設はないので、原子力について、公、民、住民の3つの立場の人で考え、そこで起こっていることを知り、対話したいという思いでこの施設を造られたそうだ。

ここの展示には、津波被害に遭われた木村紀夫さんのインスタレーションがある。木村さん一家は双葉町のフレコンバッグ群のさらに奥の沿岸部で津波被害を受け、妻、父が遺体で見つかったが、7歳の次女汐凧ちゃんが行方不明のままだった。地元の消防団によって必死の搜索が行われたが、原発の爆発前に搜索が打ち切られ、以後5年7ヶ月もの間行方不明となっていた。父である木村紀夫さんは、公的な搜索が打ち切られたあとも自らの足で家族を探し続け、5年以上経ったのちによろやくわずかな遺品を見つけ出され、考証館に展示されているのは、そんな汐凧ちゃんの持ち物だ。どんなにか無念であることだろう。

館長の里見さんによれば、原発事故が起こり、人がいなくなった福島沿岸部には豊かな自然がもどってきたそうだ。絶滅したとされる植物も芽吹いた。今、そこにコンクリートの大堤防の建設が始まっている。人は住まないのに、豊かになった自然を破壊してまでする必要のある工事なのか。

今年も複雑な思いを抱え、帰路に着いた。



つづく

精神科医の思うこと④②

発達障害(神経発達症)

松村 奈奈子

児童相談所の嘱託医をしています。年に2回ほど心理職や福祉職とのケースカンファレンスがあるのですが、担当職員と話し合っ、2年程前からケース検討以外に「職員からの質問に先生が答えまーす」という質問を募ってお答えするコーナーを始めました。

その中に「やっぱ『発達障害』。ケースで会う子も、里親で会う子も、ほぼ全員が『発達特性あり』で、もうすでに何が『普通』なのかわからない状態です。『特性』と気にせず『定型発達なんてありえない』と開き直った方がよいのではないかなと思うほどです。いろいろケースをみている先生はどうお考えなのか聞いてみたいです。」といういい質問があっ、これに答えた私の話に対してアンケートの反応が面白かったので、今回のテーマは「発達障害」

「発達障害(神経発達症)」、いやーほんまに精神科業界ではムチャムチャよく出るキーワードです。私が医師になった30年前は、ほとんど話題にも出なかったんですけどね。ASD(自閉スペクトラム症)はこだわりや言語や対人コミュニケーションがちょっと苦手な特徴があったり、ADHD(注意欠如多動症)は読んで字のごとく、不注意のうっかり屋さんだったり、落ち着きない行動とかとか、詳しくはネットで検索してみてください。真面目に説明しようとするだけでスゴイ量になっちゃいます。どちらも『典型的』なケースは就学前から特徴が目立ちますが、教科書的な特徴が全てそろう人はいなくて、こだわりは少ないけどコミュニケーションがうーんと苦手って人がいたり、多動より不注意がうーんと目立つ人がいたり百人百様です。だから、いろんな意味で、理解が難しいのかもしれませんが。発達障害には、LD(限局性学習症)といって、学習に必要な特定の能力が極端に弱い、というのもあるんですが、対人トラブルになることは少ないので今回はちょっとふれずにおきますね。

そんなテーマで話すとき、私はいつも5つほどの話をします。

1つ目の話。それは十年ほど前、発達障害関連の学会の学会長講演で「ほんま、大学教授でも3分の1は ADHD、3分の1は ASD、ほんとバランスのいい大学教授なんて3分の1いるかいないかですよ」と冒頭にお話しされ、専門家集団の会場が爆笑の渦となりました。「そうそうそのとおり！」とみんな思ってます。「大学教授」として何かを極めた人は、衝動的に何かに夢中になったりいろんな刺激に動かされたり、周囲の事は気に留めず専門分野にのめりこんだり、そんな能力が必要なんです。そうなんです、われわれみんな、個性があり、それが発達障害の診断チェック項目のいくつかを満たすんです。精神科の同期は5人なんです、飲み会では3人が ASD 系、2人が ADHD 系やなあなんてよく話していました。私は「こだわり」多めの ASD 系です、もう1人の仲良し女医さんは「うっかりミス」の多い ADHD 系です。若い頃からお互いの特性を理解しているので、ちょっぴり頑固な私を受け入れてくれているし、ADHD 系の友達との会食は私が前日に確認連絡をしたりと、お互い助け合って仲良くしています。

この1つ目の話には職員から「人は誰でも多かれ少なかれ ASD 寄り、ADHD 寄りなんですよ。『普段の生活ができていなら、あえて診断名をつける必要ない』と聞いて腑に落ちました。世間では発達、発達・・・と何かと発達障害に結び付ける傾向にある感じがします」と言う感想があり、そうそう、そうなんだよねーと思いました。

2つ目の話。ある時、20代の可愛い雰囲気的女性が初診で来られました。問診票の受診理由には「自分が ADHD かどうか知りたくて」と書いてあります。診察を始めると、自分はお片付けも苦手で、子どもの頃から多動と不注意が目立ち、周囲には「天然ちゃん」と言われてきたと言います。今は就職して仕事も楽しく、職場の仲間も大好きと話します。いろいろ聞いてみると「大人の ADHD」の不注意が目立つタイプに当てはまります。説明をした後「もしかして、お薬でも希望ですか？」と聞くと「いいえ、聞いてみたかったです」と笑って答えます。近々、恋人と結婚の予定で、自分の欠点は家族も恋人も職場も理解してくれていて、たくさん助けてもらっている。とっても感謝している。だから、困ったことはないと話して、診察は終わりました。女性からは、ADHD の欠点ともとれる特性を家族が本人の特徴として理解し、責めることなく上手にそして大切に育ててもらった感じが伝わりました。

3つ目の話は「自分の子どもが ADHD かどうか知りたくて」と来られた母親、聞けば就学前のお子さんは多動で ADHD の診断がつく様な感じです。私は、家族が子どもへの対応を変える事で困ることが少し減るコツと、それが書かれた書籍がたくさんある事、薬の作用・副作用を説明しました。「薬を飲ませる前にできる事があるなら、本を読んでまずやってみます」と母親は話し、診察は終わりました。その後、母親が診察に来ることはありませんでした。

そうなんです、ADHD だからと言ってみんなが処方を希望するわけではありません。もちろん、すべての症例に薬が不要なわけではなく、就学後のケースなどでは、薬の効果があって授業に

集中できました、という経過の事もあります。児相職員の感想に「薬を希望しないケースがあったり、家族の工夫で薬無しでもいけるケースもあると聞いて驚きました」とありました。そうなんです、我々は、家族など周囲の理解や対応の工夫で落ち着くケースも多々経験しています。児相にはなかなか難しいケースの相談が多いので、そう感じてしまいますよね。

4つ目の話。問診票には「自分は ASD なのかしりたくて」と書いてきた男子大学生の話。そしてその学生、自分で作成した「自分の特徴」というメモを持参してきました。『〇空気が読めない〇小説はつまらない。主人公の心情が理解できない〇自分なりのこだわりが強い』などなど箇条書きに1枚の紙にびっしり書かれています。心理学科の友達に一度精神科で ASD かどうか聞いてこいと言われたと言います。箇条書きされた文章は実に上手に ASD の困りごとが表現されていて、その男子学生の優秀さが伝わりました。その学生は自分の特徴をよく知っていて、ストレスがかからないように生活してきたとも話します。箇条書きの最後に『ネットで ASD の症状を読んでいて私が今まで苦しかった原因はこれだったんだとわかってすごく嬉しかった。こんなにも私の特徴を言葉で言い表すことができるのかと、すごく嬉しかった』と書かれています。ASD の診断を伝えるとき、必ず私は ASD のいい特徴も一緒に伝える事にしています。「私もあなたがメモしてきた内容は ASD の特徴だと思う」「あなたは変わる必要がない。そのままのあなたでいい。ASD はその特性から研究者や芸術家、IT 関係にも多いし他にも向いている仕事はある。むいた仕事をすればいい」と話すと、すでに大手 IT 系企業に就職も決まっていた学生は、安心した表情で帰りました。学生のメモは ASD の人の悩みを上手くまとめてあり、私自身が感動して「ASD を知るための勉強会などでこのメモを利用してもいいか」と聞くと、彼は「もちろん、使ってください」と言ってくれたので、ASD のテーマの勉強会などでは、配らせてもらっています。参加者の皆さんからは「ASD の本人の気持ちが伝わり、悩みがよく理解できた」と好評です。

そして5つ目。「発達障害」の話をする時、よくうちの旦那の話をしします。

結婚した時にはすでに旦那の両親は亡くなっていたのですが、親戚のおじさんの話では、親戚の子ども達の集まりがあっても、1人で地図帳を眺めていたり、歴史の本を読んだりで独りで過ごしていたとか、とにかく片づけができずズボンが足の二つの穴が開いたまま脱ぎっぱなしでいたりとか、とにかく変わった子どもだったと聞きました。旦那は歴史好きの延長で文化財保護の仕事をしています。お互いの職場の宴会に2人で参加する事もあって、私は旦那の同僚ともそこそこ仲良しです。ある時「うちの旦那、『あっ』が多くないですか？不注意でヌケが多くて」ときくと「はい、松村さん『あっ』多いですねー」「まあいいですよ、いつもの事ですし」と旦那の同僚は笑って答えてくれます。生活していても、やたら「こだわり」があって同じ歴史系統の本ばかり繰り返し読んだり、予定の変更は苦手だったり、ちょっとめんどくさいところありま

す。不注意も多く、切符なんかも紛失しちゃうので、電車では切符は必ず私が預かります。手先が不器用で包丁が上手く使えないので、旦那の手料理はあきらめています。ここまで話すと児相の職員は「なんでそんなおっさんと結婚したんですか？」という顔で私を見ます。この旦那、困った個性強めですが「ありがとう」と「ごめんなさい」がちゃんと言えるんです。これ、とっても大事です。私も含めて人は必ず能力にバラつきがあり、欠点のある動物です。自分を含め、人は努力では変化できない事も多々あると思っています。だから、お互い補いあって生活したらいいんです。ちょっとお節介で長女キャラの私にとっては、面倒見がいのあるおっさんです。たまに腹もたちますが、「ありがとう」と「ごめんなさい」を言われると「しかたないあー」という感じになります。そして仕事先でも、「ありがとう」と「ごめんなさい」を言いながら、愛されてなんとなくやっていける様です。もちろん、結婚したのは食の好みや旅行好きといった趣味が同じで、一緒にいて楽しいからですけどね。

発達障害をもつ子どものお母さんに「こんな不注意が多いと大人になった時どうなるか心配でつい怒ってしまいます」「部屋の掃除もできなくて将来が心配」とよく質問されます。そんな時、私は『ありがとう』と『ごめんなさい』がちゃんと言えると、助けてくれる人が現れるもんですよ」とうちの旦那のエピソードをよく話します。人は一人では生きていけないので、できない事を上手に助けてもらうテクニックがとっても大事だと思います。

実は虐待やネグレクトの家庭環境での養育が続くと「愛着障害(反応性アタッチメント症)」という診断がつき、愛着障害は ASD や ADHD の特徴に似たような症状を認めます。近年、「発達障害」の過剰診断についても学会などで話題になる様になりました。「愛着障害」を見逃しているのではないかと、家族の関りが上手くいかないと、「発達障害」の困った特徴がより強く現れたりする事もあるので、その結果ではないのか？など言われています。

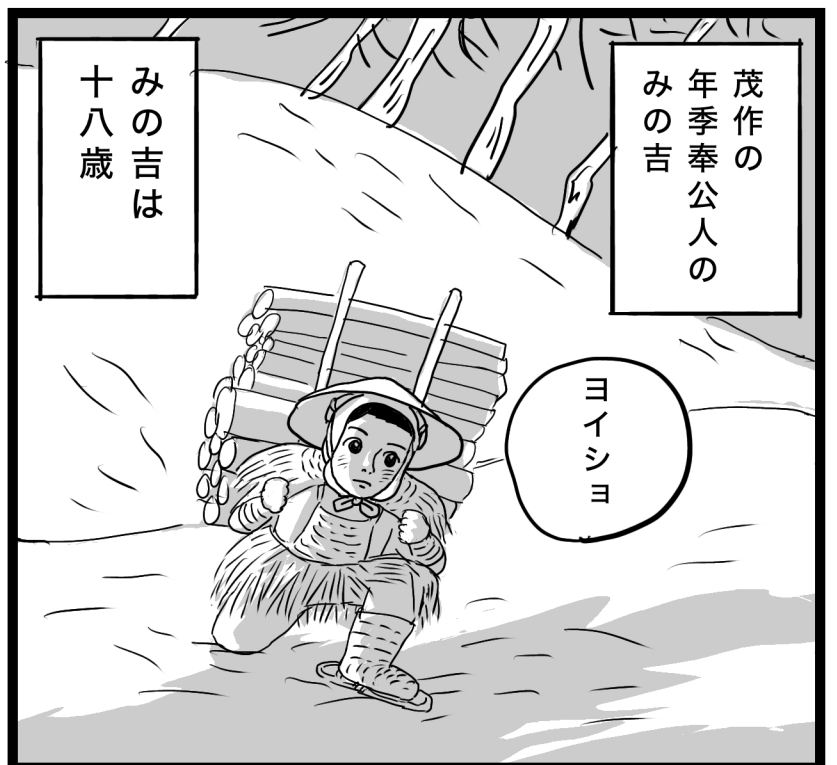
父親からの DV(家庭内暴力)がある家庭で、保育園で落ち着きなく ADHD じゃないか？と言われていた子ども達が、離婚で母子生活になり安定した環境となると、保育園での行動がみるみる変化して多動が無くなり、保育園もびっくり、てな感じはよく体験します。子ども達の行動は、ほんとうに環境に大きく左右されます。

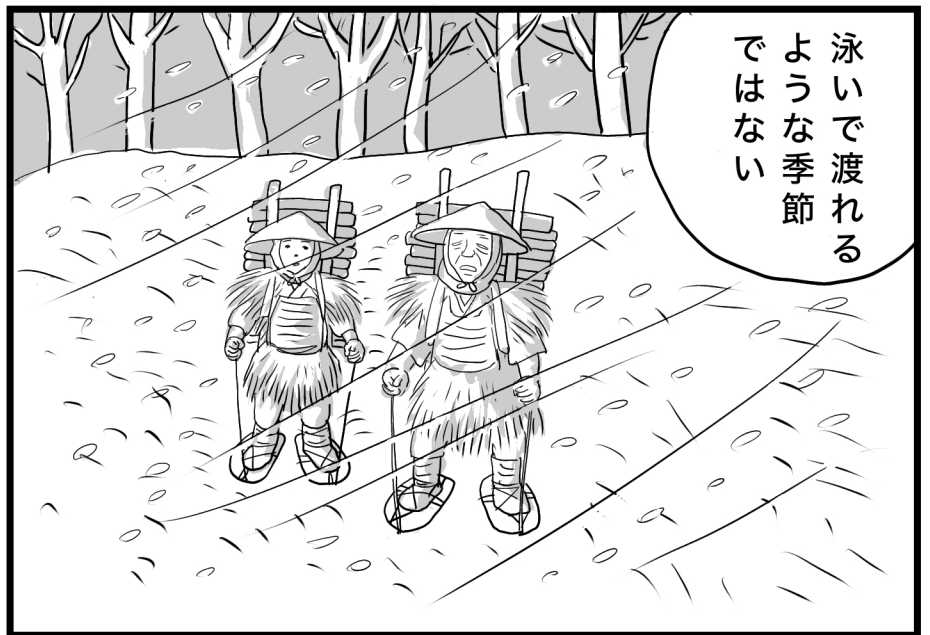
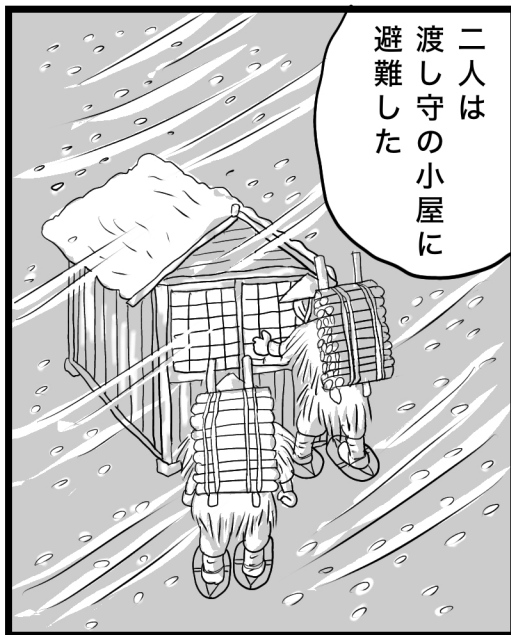
そんなこんなで、虐待の子ども達をみる児相職員が“発達障害”という言葉に飲み込まれている感じもしていたので、今回の冒頭の児相職員の質問はとっても的を射た感じがしました。

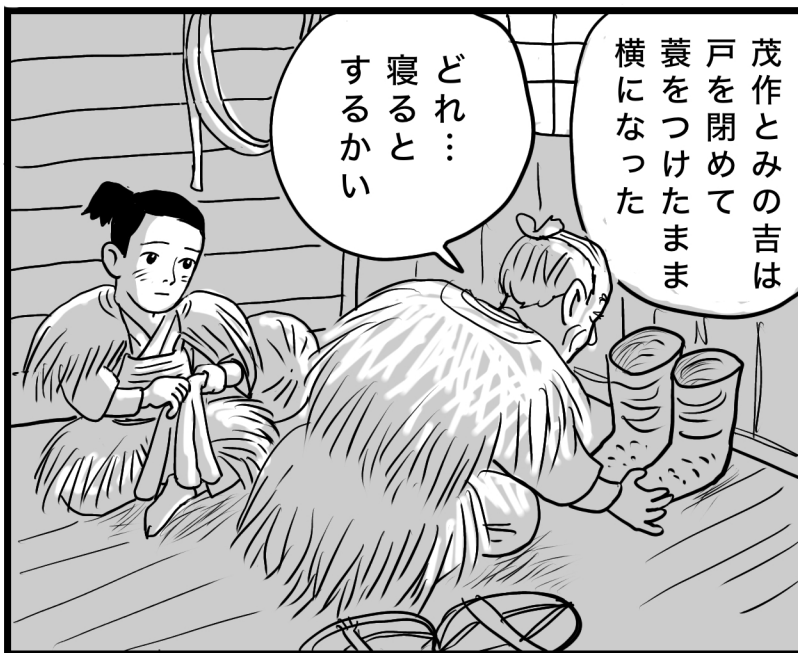
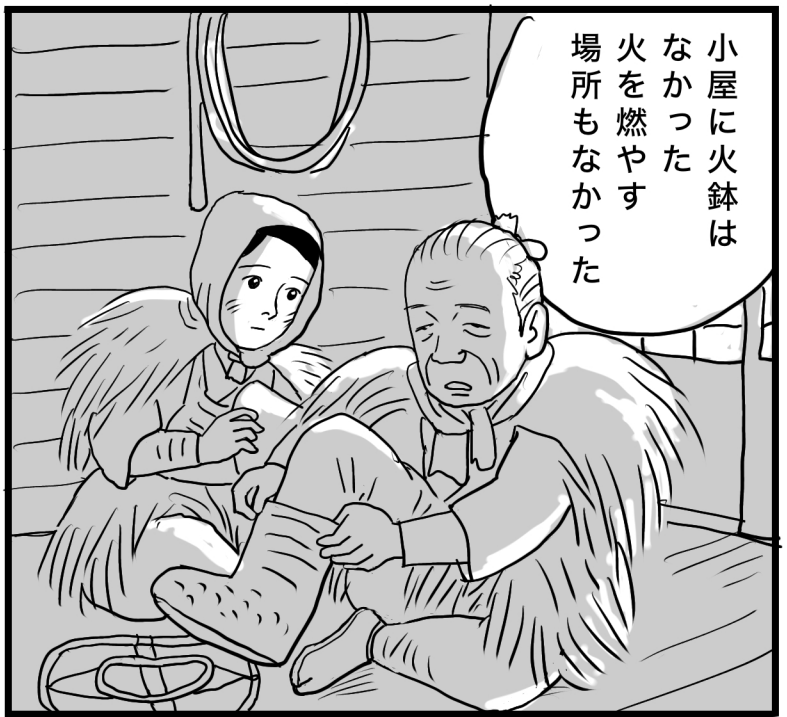
とにかく、騒がれ始めて30年に満たない「発達障害」。障害が重くてがっつり医療と連携が必要な子ども達もありますが、多くの場合は、家族がお互いを理解してちょっと助けあったり、「ありがとう」と「ごめんなさい」がちゃんと言って甘え上手になる事が大切だし、それでみんなが少し楽になれるのではないかなあと思っています。

雪女

「雪女」ラフカディオ・ハーン
脚色・漫画 柳たかを

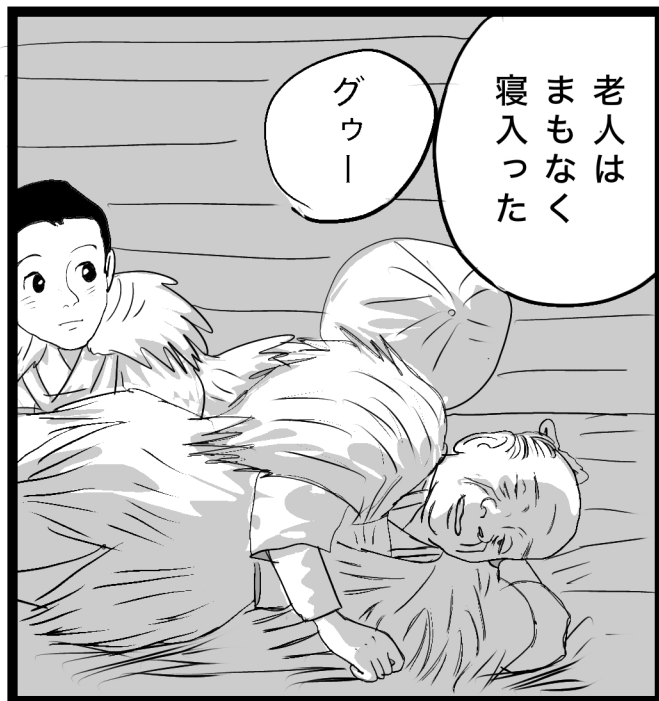








みの吉は
目を覚ました
まま



老人は
まもなく
寝入った

グー



川は
ゴウゴウと
鳴っていた



風と雪が
戸にあたる
恐ろしい音を
聞いていた

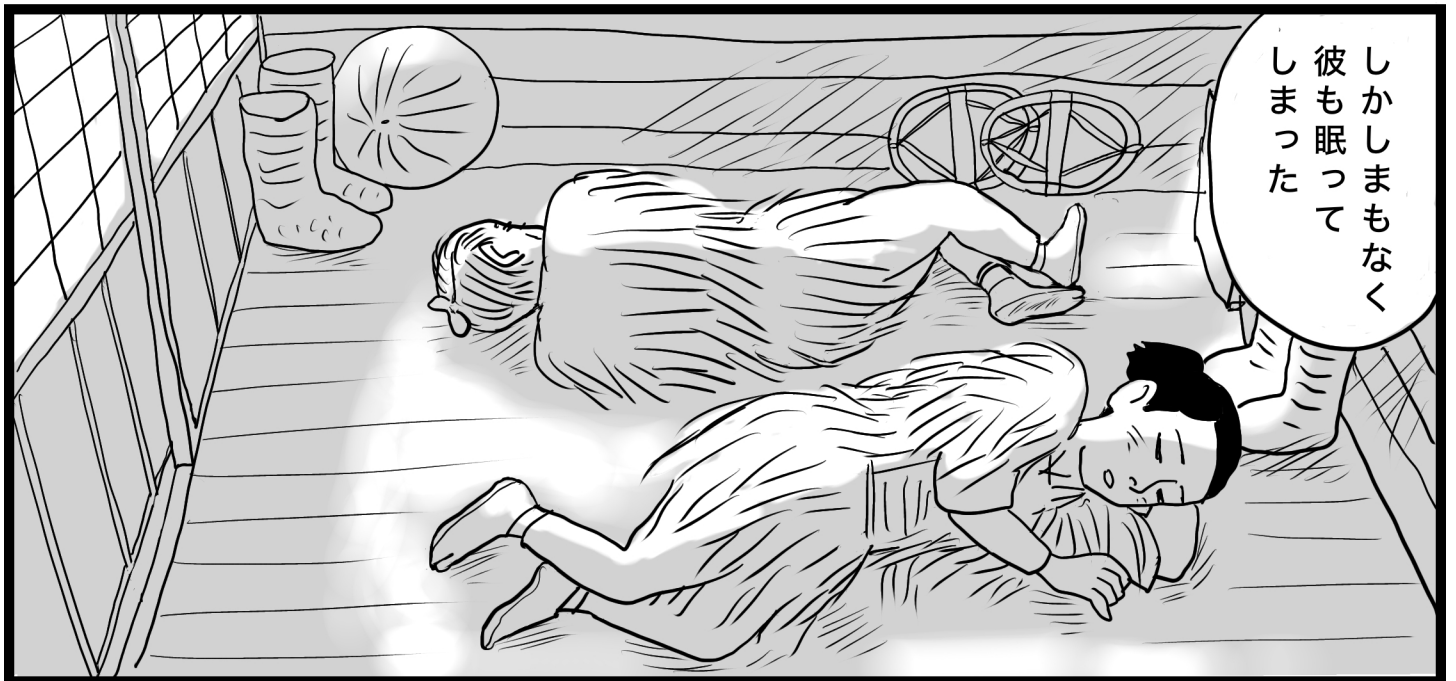
ヒュー



小屋は
海上に行く
小舟のように
ミシミシ音を
たてて
揺れた



ヒュー





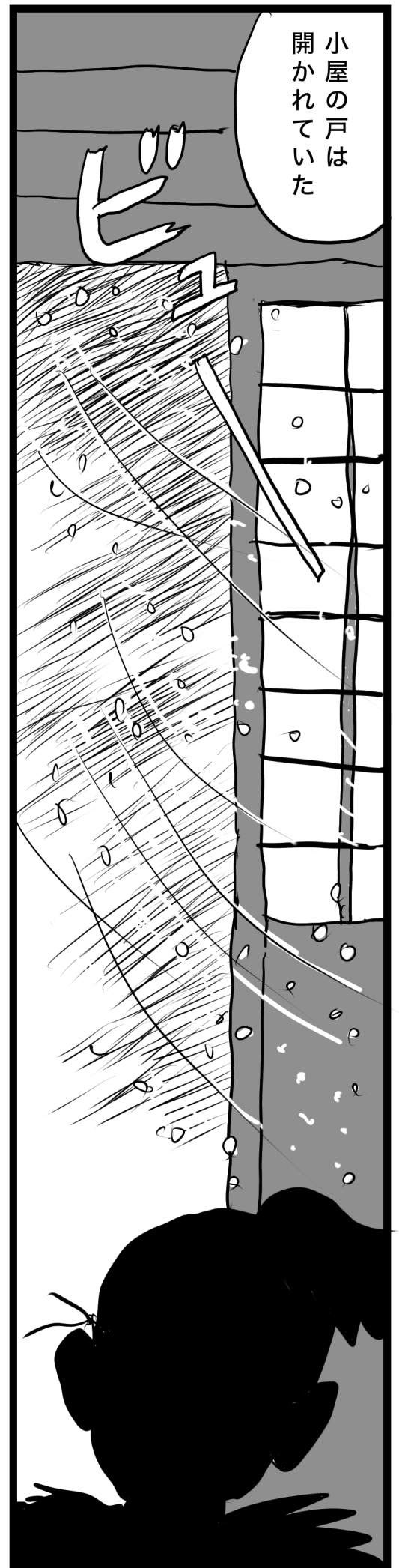
雪あかりで
部屋のうちにいる
白装束の女が
見えた



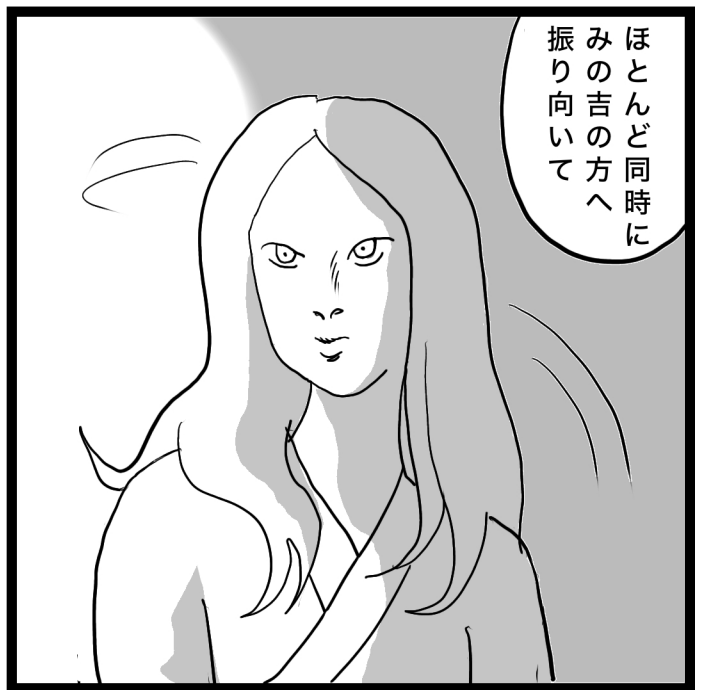
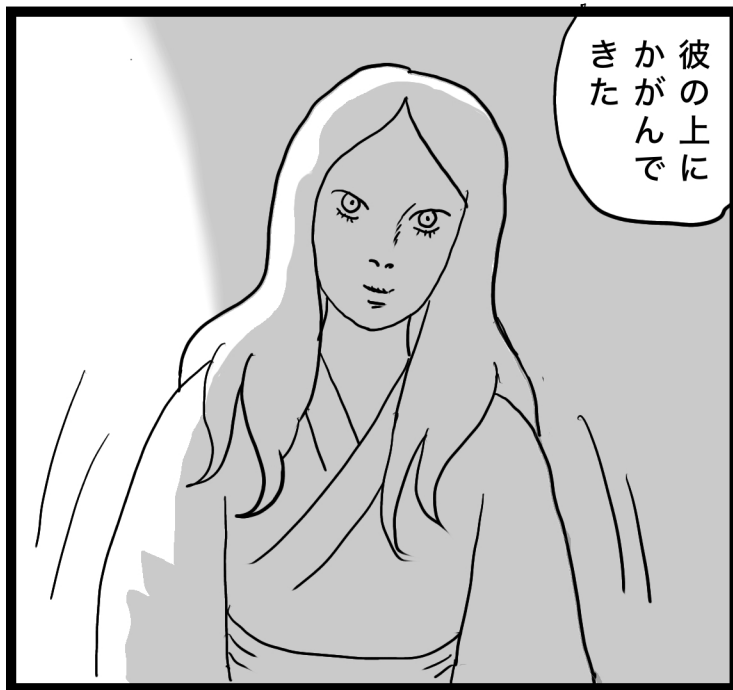
彼女は茂作の上に
かがんで
彼の顔に息を
吹きかけていた



彼女の息は
白い煙のようで
あった



小屋の戸は
開かれていた



心理コーディネーターになるために Vol.23

山下桂永子

☆ある会議への参加



夏のある日の午後、いくつかのファイルをカバンに入れてから玄関へ。靴を履き替えて振り向き、事務所内に向かって「通級会議、行ってきまーす」と声をかけると、「いってらっしゃーい」の声を背後に聞きながら扉を開ける。

暑い。午後 1 時過ぎは、軽く 30 度を超えている。眼鏡を度付きのサングラスに付け替え、アームカバーにつばの広い帽子、日傘をさして坂を下る。駅前の市役所までは、行きは下りで 10 分。帰りは上りで 15 分。

汗だくで歩きながら、「えーと、会議では今月の報告と、A 小の B 先生にあれを伝えて、相談員の C 先生から渡されたメモについては、会議の前に D 中の E 先生をつかまえて伝えて、えーと……」などなど、今日の会議で伝えることを頭の中で反芻する。

13 時 30 分の会議開始 10 分前に、市役所の会議室に到着。そこで、いくつかの学校園の通級指導教室担当の先生方と情報共有をしているうちに、会議が始まる。

会議では、その月の教育センターのケース数や状況報告をして、各学校園からの報告や教育委員会からの報告を聞く。時にはコメントを求められて答えていると、あっという間に 1 時間の会議は、定刻を少し過ぎて終了。

学校園の先生方は、この後も別のテーマの会議があるため、5 分ほどの休憩の間に私は席を立つ。すると、F 小の G 先生から「山下先生、ちょっとだけいいですかね。～の件で」と声をかけられ、短い情報交換と打ち合わせができた。

そんなこんなで、14時45分に市役所を出る。

やばい。15時からある教育センターでの面接にギリギリだ。

緩急織り交ぜながらずっと続く坂を、小走りに駆け上がる。会議への出席なので、いつもよりややフォーマルを意識して羽織っているジャケットの下を汗が伝う。

きついし、暑い。

「さすが、住所に『山』がつくだけあるわ。隣に城があったぐらいの場所だもんな。自転車を借りればよかったかなあ。でも、帰りは自転車を押して上がるだけだから、余計にしんどいんだってば。ていうか、教育センターに通ってきてくれるお母さんたちは、この坂を、時には子どもを自転車の後ろに乗せて上がってきてくれるんだよなあ。しかも月に2回も。大変だよなあ」

などと考えながら、14時58分に滑り込みセーフ。

エアコンの効いた事務所でお茶を一口飲んで、なんとか一息ついてから面接に臨む。

☆会議に出るということ

この数年、ひと月に1回、市内の通級指導教室の先生方が一堂に集まる会議に参加させていただいている。



個別のケース会議と違って、何か意見や心理的な見立てを求められることは多くないし、必要な準備もそう多くはない。

では、退屈で時間の浪費になっているかといえば、そうではない。

普段なかなか会えない現場の先生方と会えるので、情報共有や打ち合わせなどのコミュニケーションが取りやすい。むしろ、私は積極的に参加させてもらっている。

実際にケースについてじっくり話し込むほどの時間は取れないものの、教育センターの教育相談について理解してもらうきっかけになったり、学校での支援の方向性や見通しなどを短時間で共有できたりする、貴重な時間にもなっている。

「会議に出る」というと、何か意見を求められたり、専門的な見立てを伝えたりすることをイメージするかもしれない。

でも、私にとって会議に出ることの一番の意味は、そこで先生方と「顔を合わせる」ことなのかもしれない。

☆会議に参加するまで



とはいえ、最初からすんなり参加できたわけではない。

当初、通級指導教室の会議に出席させてほしいとお願いした時、すぐには OK が出なかった。

会議では個人情報扱われることもある。そのため、学校園に所属しているわけでもなく、スクールカウンセラーでもない心理士が参加することを、「はい、どうぞ」というわけにはいかなかったのである。

そこで、教育センターの教育相談にとって、学校園の先生方と連携することの重要性や、心理の専門職として、その会議に参加することの意義を上司に説明していくことから始めた。

その後、上司から会議の開催元にも説明してつないでもらい、許可をもらって、開催元から会議参加の依頼状を出してもらって……うんぬんかんぬん。

と、いろいろやっている間に、結構な手続きと時間を要した。

「いや、なんでこんなに面倒なの？」と、チャレンジしたころは思っていた。

しかし、その過程で、いろいろな会議や行政の仕組みを知ること多かつたし、行政の面倒な手続きにも(是非はともかく)いろいろな意味があるんだなあ、などと思ったりもした。

そして何より、「参加したい」と思ったら、ただ待っているだけではなく、自分からその意味を説明し、周りの人に理解してもらうことも、心理職として大切な仕事なのだと気づいた。

☆つながるひと手間

そして最近では、通級指導教室に限らず、他の会議にもよく参加している。

生徒指導担当者会議、支援コーディネーター会議、市の福祉関係部署との心理職連携会議などなど。参加は年に数回のものから、月に1回程度のものまでさまざまである。

その都度、参加する意義の説明や手続きの手間は必要である。



でも、学校園の先生方と実際に顔を合わせて話をする、多くの気づきや学びがある。そして、そのことを教育相談に活かせる場面も多い。

会議というと、「情報を共有する場」「何かを決める場」というイメージがある。

もちろん、それも大切なものだけれど、私にとっては、それだけではない。

いろいろな場に顔を出して、先生方と顔を合わせて、ちょっとした話をして、「また何かあったら、いつでも連絡くださいね。」と伝える。

そんな小さなやり取りの積み重ねによって、いろいろな場で教育センターの教育相談活動の内容を知ってもらうことができる。

そして、結果的には、そうやって教育センターについて現場の先生方が理解を深めてくださるなかで、学校園の先生方と教育センターとのお互いの信頼関係が、少しずつ積み上がってきている。

以前は、会議に参加するためにも、その都度いろいろな説明や手続きが必要だった。

それが今では、「教育センターの相談員の先生も来れますか」と声をかけてもらえたり、「このケース、教育相談につなげたほうがいいですかね」と気軽に相談してもらえたりすることも増えてきた。

会議への参加も、先生方との連携も、以前よりずっとスムーズになってきたという実感がある。

そう考えると、あの時「なんでこんなに面倒なの？」と思いながら始めたひと手間は、決して無駄ではなかったのだと思う。

心理コーディネーターの仕事は、相談室の中だけで完結するものではない。

時には暑い坂を上り下りしながら、会議に顔を出す。

そこで誰かと話をして、名前と顔を覚えてもらう。

そして、また何かあった時に「ちょっと相談してみよう」と思ってもらえる。

そんな一つひとつの「つながるひと手間」が、子どもたちや保護者を支えるための連携につながっていくのだと思う。



先人の知恵から

53

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

今回は「め〜も」まで以下の8つ。残すは「も」の残りと「や行、ら行、わ行」のみ。今年度中には終わりそう。あと少し。

- 名馬に癖あり
- 目は口ほどに物を言う
- 目は^{じょうもう}毫毛を見るもその^{まつげ}睫を見ず
- ^{めんじゅうこうげん}面従後言
- 面面の蜂を払う
- ^{もうぼさんせん}孟母三遷の教え
- 物は相談
- 物は試し

<名馬に癖あり>

すぐれた才能を持つ者には、普通の人にはない癖を持つ者が多いことのたとえ。また、大人しくて個性が無いようでは、非凡な

働きは出来ないということのたとえ。名馬と言われる優秀な馬には何かしら癖があるということから。「名馬に難あり」ともいう。

完璧な人間などいない。世の中、何をとっても完璧などということはないはずだ。しかし、どうも完璧主義が横行していると感じる現代においては、運動や絵を描くこと、字を書くことが苦手だったり、動作が遅かったりと、「何かができない」ということだけで、まるで欠陥があるかのように扱われることがある。

何かに秀でている分、別の何かが悪くしているというひともいる。得意不得意の「でこぼこ」があるのは当たり前のことなのに、なぜ人は他人に完璧を求めるのだろうか。

保護者は子どもに、先生は生徒に、夫は妻に、妻は夫に完璧を求める。何でも100点でなければいけないのだろうか。

「文武両道」という言葉があり、学問にも武道にも秀でた人がいないわけではない。しかし、それはほんの一握りである。

我が子や身の回りの人に完璧を求める前に、自分自身も完璧ではないことを自覚し、子どもに対しては得意分野を伸ばすように心がけてほしい。そんな思いを込めて、私はこの諺を伝えている。

欠点は目立ちやすいものだが、そこばかり見ていては長所を見逃してしまう。良い面を見て長所を伸ばし、平均的で平凡な人間ではなく、何かに秀でた人間を育ててほしいと思う。

<目は口ほどに物を言う>

情を込めた目つきは口で言うのと同じくらい相手に気持ちを伝えるということ。また、嘘をついたりごまかしたりしても、目を見れば真偽のほどがわかってしまうということ。「目も口ほどに物を言う」ともいう。「目は心の鏡」「目は心の窓」「目が物を言う」「目は人の^{まなこ}眼」はすべて類語。

人の感情を読み取るには、その人が発した言葉だけでなく、さまざまな情報をキャッチして初めて理解できるものだ。その中でも、目は実に多様な感情を表してくれる。

「人の話を聴くときは、目を見て聴きなさい」と、小学校のときによく先生に言われたものだ。しっかり注意を向けなさいという意味だとは思いますが、目を合わせるのは緊張を伴うし、ずっと目を見続けるのはしんどいと感じる人も多いだろう。

常に見つめ合うという意味ではなう、」嘘をついたりごまかしたりすれば「目が泳ぐ」し、怒っているときは「きつい目」「吊り上がった目」になる。「目尻が下がる」と嬉しそうに見え、笑っているときは目が細くなるが、時には「目だけが笑っていない」こともある。このように、目があらわす感情は多い。

人の感情を読み取るのが苦手な子どもたちには、目や表情を手掛かりに、感情を読み取る練習をしてもらうことがある。言葉が通じなくても、目や表情を見ることで伝わる者はある。

発語の遅れがあるお子さんや、病気や障害で言葉を話せない人でも、表情や目の動きから意思を読み取れることがある。。そういう意味でも、私たちは日々の目つきや表情を大切にしたい。

言葉が通じなくても、目や表情を通して伝わるものがある。だからこそ、人と向き合う時には、言葉だけではなく、その人の表情や目にも目を向けてほしいと思う。

英語では・・・

The eyes have one language everywhere. (目は万国共通のことばを持つ)

<目は毫毛ごうもうを見るもその睫まつげを見ず>

人のことは小さな欠点まで良く見えるが、自分自身のことはわからないものだということだ。目は細い毛のようなものまで見る事ができても、自分のまつげを見ることができないという意から。毫毛＝ごく細い毛。「目で目は見えぬ」も類語。

出典 史記

自分のことを棚に上げて、他人の悪口ばかり言う人がいる。自分を客観視できない人に対して、この諺を使うことがある。

自分の睫を見るのが難しいように、自分自身をしっかりと見ることは案外難しいものだ。自分を知るには、自分だけではなく、他人の目を通して初めてわかることもある。

他人から自分の欠点を指摘された時には、一度立ち止まって考えてみてほしい。できれば他の人にも聞いてみて同じようなことを言う人がいるかを確認する。そして、「自分がそのように見られている」という事実を受け止め、必要であれば修正していくことが大切だと伝えている。

最近の友人関係では、関係性を維持するために、本人の欠点をあえて指摘しないことも多い。しかし、自分自身で気づけないとき、誰がそのことを教えてくれるかといえば、親しい友達か家族くらいしかいないだろう。それなのに、友達も保護者も子どもを褒めるばかりで、欠点や改善したほうが良いところをまったく指摘しなければ、

本人は自分の課題に気づけないままになってしまう。

もちろん、ただ欠点を指摘すればよいというものではない。良い方やタイミングは大切だ。しかし、本当のことを言ってくれる人、自分では見えないところを教えてくれる人がいることは、とてもありがたいことだ。

自分の欠点に気づき、修正するのは早い方がよい。大人になって、あるいはかなり年齢を重ねてから指摘されても、それまで「自分は上手くやってきた」と思っている人にとっては受け入れがたいだろうし、修正することも難しくなる。

本当のことを言ってくれる人、自分の悪いところを指摘してくれる人こそ、自分のことを思ってくれる人なのだと、この諺とともに伝えるようにしている。

<面従後言めんじゅうこうげん>

その人の面前では服従するように見せかけて、陰では悪口を言う事。面従＝人の前でだけ服従すること。後言＝かげで非難すること。「面従背毀めんじゅうはいき」「面従背否めんじゅうはいひ」「面従腹背めんじゅうらくはい」「面従腹誹めんじゅうらくひ」も類語。

出典 書經

子どもたちは、大人の言うことになかなか逆らえない。もちろん大人の方が体も大きく力もあり、口も立つから仕方のない面はある。

しかし、同年代だったらどうだろう。

友人関係において、相手に服従する必要はない。関係性は本来対等であるはずだ。とはいえ、相手の方が力が強い、体が大きいなど、「勝てない」と思うと卑屈になってしまうことがある。その結果として「面従」になり、陰で愚痴を言い、非難することになる。

学校の先生に対して表面的には良い子を演じ、裏では先生の悪口を言いまくる、ということは子どもたちの世界では珍しいことではないかもしれない。しかし、同年代の友達同士でそれをする、悪口は思わぬところから相手に伝わり、関係性が一気に壊れてしまうこともある。

人の悪口というのは必ず伝わるものだ。だから、まず悪口は言わないこと。そして、自分の思いを我慢して、相手にばかり合わせるのもやめること。

嫌な事は「嫌だ」と言ってい。納得できないことには「それは違う」と伝えてい。対等な人間関係を作るためには、相手に合わせるだけでなく、自分の気持ちを伝えることも大切なのだと、この諺を通して伝えている。

<面面の蜂を払う>

人のことを批判する前に、まず自分の欠点を反省しなければいけないということ。人のことをあれこれ世話するより、自分のことをきちんとせよということ。「頭の上の蠅を追え」は類語。

二つ前の諺とも関連するが、自分の欠点がわかれば、それを反省し修正することが大事である。他人の批判が先に来てはいけない。

また、おせっかいと言えないこともないが、自分のことは棚に上げて、他人のことばかりあれこれと世話を焼く人がいる。誰かの世話をしている自分しか認められない人は、このパターンに陥りがちだ。そんな人には、まず「誰かの役に立っていない自分」も含めて、「それ以外の自分」を認めることから始めてほしい。

学校では互助精神というか、お友達と助け合うことが推奨されており、それ自体はとても大事なことだろう。しかし、自分のことが終わってもいないのに、他の子の世話を焼きたがる子がいる。そういう子どもたちにはこの諺を伝え、その意味を丁寧に説明している。

大人になっても、誰かのためになっている自分でしか存在価値を見出せない人間にはなって欲しくない。人を助けることと、自分自身を大切にすること。その両方ができる人になって欲しいと思う。

<孟母三遷^{もうぼさんせん}の教え>

子どもの教育には、良い環境を選ぶことが大切だという教え。「孟母の三遷」「三遷の教え」ともいう。 出典 古列女伝

この諺は、孟子の母親が子どもの教育のために最善の環境を求め、3度も住まいを移したという逸話から生まれた。

子どもの教育のための「最善の環境」とは何だろう。

これは、よく考えねばならない。決して贅沢な環境という意味ではないだろう。その子の持つ資質もちろん大事であり、孟子であれば、きっとどんな環境でも立派に育ったのではないかとも思う。

しかし、子どもにとって明らかに「悪い環境」というものは存在する。毎日のように大人がお酒を飲んで騒いでいるような環境や、両親が大声で喧嘩したり罵り合ったりする様子を見ながら育つことは、子どもにとって決して良い環境とは言えない。

以前、学校に不適應感を持ったお子さんの母親から「今の学校が良くないから別の学校に行かせる」と相談されたことがあった。どこを考えているのかと聞くと、遠く離れた寄宿制の学校だった。ホームページを見て教育方針が良いと思ったという。しかし、その地域に知り合いはおらず、母親自身もその地域に行ったことがないと言う。

子ども自身が行きたいと言っているのなら一つの選択肢ではあるが、その学校の良さは、実際に行ってみなければわからない。母親から離れて寄宿生活をする不安も楽しみもあるだろう。決めるのは母子家庭なので、母親と本人である。このケースの場合は、母親の干渉が少し強すぎたため、

子どもが一度母親から離れてみるのも良いかもしれないと思った。しかしそれはあえて口にせず、まずは本人とよく話し合うこと、一度一緒に見学に行ってみることを勧めた。

この母親のように、「いじめにあった」「不登校になった」と言っては学校を替えたいと相談してくる保護者は少なくない。その子の状態によっては、いじめが酷い場合など、他の学校に替わることも「選択肢としてある」とは伝え。しかし、転校したからといって絶対にいじめにあわないという保証はないことも同時に伝えている。

どの保護者も子どものために一生懸命になるのは当然のことだ。しかし、環境を変えるというのは、最後の手段として考えるのが良いと筆者は思う。できることをあれこれやった上で考えないと、安易に環境を変えることで問題から逃れるというパターンを身につけてしまうかのうせいもあるからだ

では環境調整で大事なことは何か。

それは費用や設備などの豪華さだけではない。バランスの良い食事があり、勉強ばかりでなく体を使ったり、興味や関心を育てたりできる環境。そして何より「親の思いの押し付けではないこと」ではないだろうか。

その子に合った環境を模索することが親の務めであり、それは必ずしも親が望む環境とは一致しないかもしれない。

親が「良い」と思う環境ではなく、その子にとって「良い」環境とは何か。

そういう多角的な視点を持てる保護者であってほしいという願いを込めて、この諺を伝えることがある。

<物は相談>

一人で考えこんでいないで、誰かに相談してみると、案外うまくいく場合があるということ。また、相手に話を持ちかけたり知恵を借りたいときの前置きの言葉。「物は談合」は類語。

子どもたちの中には、人に相談できない子が結構な割合で存在する。

「どう話し出したらよいのかわからない」

「こんなことを相談したら笑われるのではないか」

「自分の恥を晒すようで怖い」

などと考え、結局一人で抱え込んで煮詰まってしまうのだ。

学校で困ることがあったとき、誰に相談できるか。それは不登校になるかならないかの瀬戸際で、とても大事な視点である。

担任が信用できれば担任でもいい。養護教諭でも、信頼できる他の先生でもいい。もちろん親兄弟、友人、塾の講師など、自分の周りにはいろいろな人がいる。その中

で話せる人が一人でもいれば、問題が小さいうちに解決に至るもこともある。

人は自分の悩みや問題を誰かに話すことで、気持ちを整理したり解決の糸口を見つけたりする。話すだけでスッキリすることもある。解決そのものが目的ではなく、「誰かに話せた」という体験自体が重要だったというケースも多々ある。

LINE や SNS での相談から始まり、最近チャッピー（ChatGPT）など AI に相談することも増えた。相手が AI であっても誰にも相談しないよりは一歩前進なのかもしれない。ただ、できれば生身の人間との関わりも持ってほしいと思っている。

親にもなかなか相談できず、友人もそこまで信用していない、先生などはもってのほか……という子どもたちにとって、相談できる先はオンライン上の友人かチャッピーになってしまうのかもしれない。少し寂しい気もするが、それでも「誰かに相談する」という経験そのものは大切だ。

相談を持ち掛けるときには「物は相談なんだけど……」とこの言葉をクッションにするといいよ、ときかけ作りとして伝えている。

<物は試し>

どんなことでも、やってみないと結果はわからないものだから、最初からだめだとあきらめないで、とにかくまず試してみるべきであるということ。

失敗を恐れる子どもたちに、この諺を伝えることは多い。

失敗から学ぶことは多いのだが、失敗しないようにすればするほど失敗が怖くなり、新しいこと、初めての事にチャレンジする気がなくなってしまう。

大人になってからの失敗は確かに痛手が大いものだ。しかし、子どもの頃の失敗は「恐るるに足らず」である。エジソンのフィラメントの話なども出しながら、やってみたいこと、興味を持ったことは試してみようと伝えている。

最近の子どもたちは、無難に過ごすことばかりを考えていて、元気がないように見えることがある。もっと前向きで、活発な子どもたちになって欲しいと、常々思っている。何でもかんでもとは言わないが、できればいろいろなことを試して、失敗もして、成功もして……。

そんな豊かな経験を積み重ねながら、自分の世界を広げて行ってほしいものだ。

出典説明

新約聖書・・・

1世紀から2世紀にかけてキリスト教徒たちによって書かれた文書で、「旧約聖書」となるキリスト教の正典。27の書が含まれるが、それらはイエス・キリストの生涯と言葉（福音と呼ばれる）、初代教会の指導者たちによって書かれた書簡からなっており「ヨハネの黙示録」が最後におか

れている。「ギリシャ語聖書」と呼ぶこともある。イエス誕生前までを旧約聖書、イエス生誕後を新約聖書がまとめている。

史記・・・百三十巻

中国古代の史書。最初の正史。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏・殷・周・秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本紀（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「紀伝体」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。

書経・・・

五経の一つ。太古の伝説上の帝王^{ぎょうしゆん}堯舜から春秋時代までの、模範となる帝王の^{しやうちよく}詔勅を中心に政治理念などを記した歴史書。孔子が百編にまとめたと言われるが不詳。秦の^{ふんしよ}焚書によって散逸し、現存するのは東晋の^{ばいさく}梅賾による「^{こうあんこくでんこもん}弘安国伝古文尚書」といわれる。本書は先秦時代には「書」、のちに「尚書」と呼ばれていたが、宋代以後「書経」とよばれるようになった。

古列女伝・・・七巻

中国古代の女性の伝記。撰者は前漢の^{りゆう}劉向。古代から漢代までの烈女（節操が固く、^{きやう}気性の激しい女性）を母儀（母の模範）・賢明・仁智・貞順・節義など七目に分類し、各十五人ずつの伝記を記したもの。『列女伝』ともいう。

うたとかたりの対人援助学

第37回「みちのくの女たち 持続する志」

鵜野 祐介

序

大江健三郎は38歳の時に発表したエッセイ集に『持続する志』という題名をつけた。学生時代から小説家として活躍する一方、早くからヒロシマ、沖縄、核基地、憲法など社会的・政治的な発言を行い、集会やデモにも参加してきた彼は、このタイトルを選んだ理由について同書の冒頭に次のように綴る。

まず、ぼくの場合、学者としてその専門領域を鋭く限り、深めてゆくような人々とちがって、また実践家としてそのものの考え方を行動の壁をのりこえ、のりこえることによって確実にし、タフにする人々とちがって、ひとりの小説家としてエッセイを発表してゆく人間には、自分の書くすべての文章に、歪みと崩れたバランスがあらわれればあらわれたなりに、またそれを回復し平衡をとりもどすことができれば、やはりそれなりに、持続した責任をとりつづけることのほかに、仕事のすすめようがないといわねばならないということである（「この本全体のための最初のノート」より）。

学者や実践家としての生き方や考え方を体現しつつも、小説家として歩いていくことを決意した大江は、三足の草鞋を履くことによって、自身の文章に「歪みと崩れたバランス」が表れようとも、「持続した責任をとりつづける」と宣言し、自らを鼓舞しようとした。そして88年の生涯をかけて「持続する志」を貫いた。

今年8月25 - 27日、岩手県と宮城県を訪ねて、

3・11を機に発足した立命館大学東日本・家族応援プロジェクト（村本邦子代表）の15年の活動の中でお世話になった方々と再会し旧交を温めた。小文では、その中から4人の女性にスポットを当てて、彼女たちの「持続する志」の源や原動力となったものは何かについて、インタビューを元に考察してみたい。（以下敬称略）

1. 遠野民話の語り手、大平悦子^{おおだいら}

初日（25日）の朝9時にいわて花巻空港に到着し、レンタカーを運転して、今回のフィールドワークの最初の訪問地、大平悦子のご自宅へと向かった。

遠野市青笹町に住む大平は、遠野で生まれ育ち、高校卒業と同時に東京の大学に進学。卒業後は神奈川県内で小学校教師をしていたが、小澤俊夫主宰の「昔ばなし大学」に参加し、語り手としての研鑽を積んだ。定年を待たずに退職し、語り手としての活動を本格的に始める。日本民話の会に所属し、全国各地さらには海外でも公演を行う他、DVDブック『大平悦子の遠野ものがたり』（悠書館2014）を刊行している。10数年前に、夫と一緒に遠野を生活の拠点に移し、離れには茅葺き屋根の古民家を移築して、果樹や野菜に囲まれて暮らしている。



（写真はたかむろ水光園の曲がり家で学生たちに民話を語る大平、2019年8月27日鶴野撮影）

私は2014年8月に宮城県丸森町で行われた「第9回みやぎ民話の学校」ではじめてお目にかかって以来、ゼミの学生たちや前述の村本プロジェクトメンバーの教職員や院生たちとコロナ禍前の2019年まで毎年のようにお会いしてきた。

語り部の活動をはじめてから20年、古稀を迎えることとなり、「集大成」ということを意識するようになったという大平は、佐々木喜善の民話集を元に、遠野の民話の再話集を出版することにしよう。

「日本のグリム」とも呼ばれる佐々木喜善は、柳田國男『遠野物語』（1910）の元となる話を柳田に語って聞かせたことで広く知られるが、自身でも1920年代以降、『江差郡昔話』（1922）、『老嫗夜譚』（1927）、『聴耳草紙』（1931）をはじめいくつもの民話集を刊行している。

喜善が書き残したのは標準語に「翻訳」したものである。例えば、3・11後に注目を浴びた、津波で妻を失った福二が翌年夏の夜更けに再会する話（『遠野物語』第99話）を、喜善は「縁女綺聞」（1934）に次のような冒頭文で綴る。

「遠野物語」にも其の大筋は載つてゐるが、極く私の近い親類の人で、浜辺に行つて居る人があつた。明治二十九年かの旧暦五年節句の晩の三陸海岸の大海嘯の時、妻子を失つて、残つた子女を相手に淋しい暮しをして居た。……

大平はこれを遠野の土地言葉に「翻訳」という。「むがーず、あつたずもな……」。そして、遠野の土地言葉と標準語が対訳されて、両方を比較しながら音読できるような体裁を取る予定だという。それによって地元遠野の子どもからお年寄りまで、それから遠野の言葉に馴染みにない人たちにも楽しめる「昔語りの本」が出来上がる。

20年も遠野の民話の語り続けてこられたのは何故か？ 今回、遠野の昔語りの本を出版しようと

思いついたきっかけは何か？ 私の問いかけに大平はこう答えた。——生まれ育ったこの遠野という土地が好きだからだと思う。佐々木喜善が遠野や周辺の民話をあれだけ多く本にしたのも、遠野を愛したからだと思う。

実は、喜善は作家を志して10代で故郷を離れて上京している。20代半ばに病氣のために帰郷し、民話蒐集の傍ら土淵村の村会議員、39歳には村長を務めたが、心労が重なり退職し、多額の負債を負い家財を整理し仙台に移住して、困窮の中、47歳で病没した。「ふるさとは遠きにありて思ふもの そして悲しくうたふもの」（室生犀星「小景異情—その二」より）を痛感した人生だった。

大平もまた、高校卒業とともに故郷を離れて都会で長く過ごし、喜善の心境は我が事のように感じられたに違いない。古稀を迎えて自分の人生の集大成を残したいと考えた時に、喜善民話の再話による「大平悦子の遠野昔語りの本」を構想したことは、ある意味で必然的な成り行きだったのかもしれない。

そして、大平における「持続する志」の源となったのは「土地の力」ではないか。遠野という土地の風土、歴史や文化や大自然が、そこに生まれ育った喜善や大平に与えた力なのではないかと思われる。

新著の刊行を楽しみにしたい。

2. 障害者支援施設わかたけ学園園長、^{さぎた}鷺田敦子

8月26日午前、プロジェクトのメンバー5人と一緒に、宮古市崎山の障害者支援施設わかたけ学園を訪問し、園長の鷺田敦子に話を聞いた。

2014年11月に東日本・家族応援プロジェクトの一員として宮古市を訪れた際、共催の一つである社会福祉法人若竹会・多機能事業所すきっぷの職員、当時30代初めだったという鷺田と初めて出会った。口数の少ない誠実な人柄という第一印象を受けた。それからコロナ禍が起こるまで、毎年11月上旬に現地を訪れたが、いつも丁寧な受け入れてくれたのが鷺田だった。

コロナ禍の間はリモートでお会いすることになり、その後、移動制限が解除されてからも私自身が体調を崩して訪問できなかったため、今回が8年振りの対面での歓談だった。

2011年3月11日、鷺田は職場の事業所で被災した。銚子地区にあった自宅は津波で流失したが、「家のことは気にせず、利用者さんのことを優先させなさい」という両親の言葉に従って行動した。

以来、配置換えや所属先の移動はあったが、この間一貫して社会福祉の現場で働いてきた。特に、震災直後の避難所では、ダウン症や自閉症などを抱えた利用者が精神的に不安定になって、パニックになり暴れ出したりトイレに閉じ籠ったりするのに対応するのが大変だったという。「ここを思いっきり噛み付かれました」と腕を見せながら笑って振り返った。

「どうしてこの仕事を続けることができたのでしょうか？ その原動力は何だったと思いますか？」私の質問に、鷺田はこう答えた。「周りの人のおかげです」。上司・先輩・後輩が、同僚として結束し、目の前の困難に向かって力を合わせて進んでいくとしてくれたから、「それでも前に進めるものなんだ」と思えたのだと。特に、上司が背中を押してくれたことがありがたかったと、私もお顔を存じ上げているかつての上司・M氏の名前を挙げて微笑んだ。

広い敷地に約80名が長期入所している3階建ての施設を案内して下さった後、現在、学園長という管理職的な立場に置かれ、「これまでは経験しなかった種類の仕事に頭を痛めています」と笑いながら鷺田は話を結んだ。これからもきっと彼女は、周りの人の力を上手に引き出しながら、結束して、「それでも前に進め」ていこうだろう。そう確信して施設を後にした。



3. 宮古「学ぶ防災」語り手、佐々木純子

記録を繙くと、2015年11月に宮古市田老地区の「学ぶ防災」に参加した時、語り手として案内してくれたのが佐々木純子だった。強い潮風に吹き飛ばされそうになりながら、「万里の長城」と呼ばれた防潮堤の上で説明してくれた。それ以来2019年まで毎年11月にお会いした後、コロナ禍や私の病気などのためにブランクがあり、今回8年振りの再会だった。

15年間の「学ぶ防災」での活動を振り返り、変わったものと変わらないものの両方について語ってくれた。まず、変わったものは、見学者の客層である。特にコロナ禍以降顕著だが、国内エージェンツが撤退したためか、近隣の客が減り、海外や九州からの客が増えた。豪華客船のリッチな高齢の客も来るようになり、階段の乗降により一層気を配るようになった。

変わらないのは、震災遺構「たろう観光ホテル」の存在意義だ。これがあるから津波災害が起こったことを実感し、追体験することができる。

地元の子どもたちも参加してくれるが、知り合いの母親からこう言われたという。「自分は子どもに語らない。まだ語れないんです。だから純子さんに語ってもらえるととても嬉しい」。学校から「学びの防災」に参加してくれることの意義を感じたという。

学校や教師の役割が重要だが、熱心な教員とそうでない教員に分かれる。最近特にそういう傾向が強くなったと感じる。

もう一つ、変わらないものは、「伝承は人だ」ということ、人と人のつながりだと思う。

この仕事を続けて来られたのは、話を聞きに来られた方から、いろいろな質問を受けて、それにきちんと答えようと必死に勉強してきたからだと思う。参加された方それぞれが、異なる関心や疑問を持って質問される。年齢も被災体験の程度も国籍も違ふし、歳月の経過も違う。その場その場で、臨機応変に語る内容も変えていかないといけない。参加された方と一緒に学んできた15年だった――。

佐々木の言葉に私は、みやぎ民話の会顧問の小野和子がよく話す「聞き手あつての語り手だ」という言葉が思い浮かんだ。

民話の「聞き手」として 50 年余りを過ごしてきた小野の、聞き手と語り手の関係性について綴った文章を、少し長くなるが紹介しておこう。

民話を語ってもらうとき、わたしはいつもその人の背後に、それを語った先祖の面影を見るし、その声を聞く。わたしのところまで、いま、語り手をとおしてきてくれている「物語」は、語る人の「単声」としては聞こえてこない。時代を経た無数の先祖の声であり、それは共同体とでも言うべきものの複数の声として聞こえるのである。

そして、語り手と聞き手のあいだには、（それが信頼しあつた仲であるときはいっそう）「親和力の漲った場所」とも言うべき空気が流れるのを何度か感じてきた。ふしぎに透明で独特な空気が流れ、それにうながされて語る人と聞く者は、手を携えて自由奔放に二人の世界へ入っていくのである（鶴野『うたとかたりの人間学』2023 p.373）。

合わせて、民話の「語り手」だった筒井悦子の言葉にも耳を傾けてほしい。

聞いている子どもの目や顔や体全体の表情から私に送られてくる無言のサインを私が聞き取ることができたとき、子どもの心は解放され喜びに満ちているように思います。子どものその喜びは、語り手が語ることによってのみ感じられるものです。『語ること』は私にとっての『ききみみずきん』だったのではないかと気がつきました」（同上 p.378）。

ここでは「語り手」と「聞き手」の立場が逆転し、「語り手」が「聞き手」となり、「聞き手」が「語り手」となる。「聞くこと」は、自分の外にある音や声をただ「聞く」ことではないと筒井は言う。「自分の内から外に向かって、ときには自分自身の内なる心に向かって意識的に耳を傾けて『聞く』ことこそ大切なことではないかと思っています」（同上）。

小野や筒井は、民話の「語る・聞く」世界について説明しているのだが、これは一般化することができるに違いない。

「学ぶ防災」という場においても、語り手と聞き手が出会い、互いに語らい、時に語り手と聞き手の立場を逆転させながら、「親和力の漲った場所」や「手を携えて自由奔放に二人の世界」へと歩んでいける。そのためにも、語り手の「聞く力」が求められるのだ。

佐々木にとっての「継続する志」の原動力は「聞く力」にあったと、私には感じられた。



結び

旅の終わりに、仙台に住む小野の家を訪れた。50 何年も民話の採訪を続けてきたのは何故かと聞いた。小野の答えは「馬鹿だからでしょう」だった。これに次いで、同席していたみやぎ民話の会の後輩（といっても 70 代）の加藤恵子と島津信子に向けて、「この人たちはまだ馬鹿じゃないのでダメなんです」と笑った。齢 92 の小野の言葉にふと「大愚良寛」が浮かんだが、これもまた、「だからダメなんです」と一笑に付されるに違いない。



ああ、 結婚！

—婚活日記—

第 39 回

黒田長宏

2026年

<5月4日>

38回の原稿を送った。振り返りの文章も加えてみたが、これからどうすればいいんだろうなあ。

<6月9日>

本来、今日は Youtube『マーサとクッピーのチャレンジトーク』のロケだったのだが、私が緊急入院してしまったので、延期で残念。

だけど、すぐに退院。心臓のカテーテル検査のオペレーターは若い女医だった。年齢や性別で区別するなというけど、凄いなと思う。

<7月15日>

今回は緊急入院の頃にしたんだっけ。日記ではなくて月報ペースであるが、あれから、手術先から、かかりつけ医に情報が伝えられて、薬が1種類増えた。あながち、勇み足で緊急入院したわけでもなかった。

マーサとクッピーのOKダンサーズの活動は増やしている。そのきっかけでアクアラインを運転したり、マーサと活動していなければ経験しなかったのは、日本ハムファイターズの公式戦もそうだが、いくつも出てきている。それをしなかったら、録画したドラマを観ていたのだが。

<8月8日>

現在の私は59歳になっているが、いちおう結婚は人生に大事だと思い続けていたから、それでも48歳で初婚に成功したのはしたのであった。これだって、対人援助にはならないとしても、そういう年齢まで結婚できない人にとっての勇気づけにはなったと思う。ところが、超早期離婚となり、裁判をさせられ、そのほうが新婚生活より長いという悪夢のようなひとときを人生に記録してしまった。

現在はYoutubeとTiktokという2本立てのSNSに希望を見出して定期的にアップしているわけだけでも、この、対人援助学会に入会させていただいたのも、結婚という制度が対人援助的なものだと信じていたからである。

だが、さすがに59歳にもなると絶望的な気持ちや投げやりな気持ちも出てきているのだ。だいたい生物は個体とともに種族の維持で成り立っているのに、自分自身は途切れてしまう。

そういいながら、子孫は無理だとしても、

結婚に公的も私的もないような気もするが、若干公的機関気味のところだけまだやっている。連敗続きだ。まったく公的ではないようなマッチングアプリはやめている。

だが、現在SNSでコンビを組んでいる人はマッチングアプリで知り合ったのだが、異性的パートナーとしてではなく、パフォーマンスの相棒のような存在となっている。



このところは、マーサとクッピのOKダンサーズとしての活動が人々に勇気でもなんでも希望を与えられるようなパフォーマンスをSNSでみせられることが、対人援助と言えるものではないのかなと考えている。想定外にOKダンサーズの活動が有名になればなるほど、対人援助学会の私への注目度も大きく変わってくるだろう。世の中はそういう風に出てきている。

〔PBLの風と土 第38回〕

あれから25年、手段と目的とを区別して

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・京都大学防災研究所教育研究機関研究員＜私学修研員＞）

〔前回までのおさらい〕

1974年の開学時から全学でPBLを導入するデンマークのオールボー大学での学外研究を契機に、2017年に本連載が始まりました。PBL以外にサービス・ラーニングなど、参加型学習の理論や方法論を紹介してきました。

そして2026年には再び学外研究制度を利用する機会を得ました。京都大学防災研究所の研究員として、令和6年能登半島地震で被害を受けた七尾市田鶴浜地区で滞在型のフィールドワークを続ける中、連載10年目は「参加を通じて人は何を学ぶのか」という問いに立ち返り、筆者が関心を向けてきた学習観を再整理していきます。

1. 草津で地域通貨を題材とする前に

前回は、大学4回生のときに書いた卒業論文を、ほぼ30年ぶりに読み返した。1997年12月に京都で開かれたCOP3をめぐる市民活動への参加をもとに「市民参加に基づく環境教育の効果」と題して立命館大学理工学部に出した論文であった。分析や研究方法には粗さがあったものの、改めて読むと、環境問題そのもの以上に、そこに集まった人々が何を学び、どのような関係をつくり、それが活動後にどう残るのかに強く関心を向けていたことがわかった。

今回は、その翌年に大学院へ進んだ筆者が、何を研究しようとしていたのかを読み直す。手がかりになったのは1999年1月14日付の「修論構想」である¹。そこには「環境インターンシップの推進による地域活性化のための人材育成」とあり、[大学コンソーシアム京都](#)のインターンシップ・プログラムをフィールドに、「アクションリサーチ」を行う構想が記されていた。そこには日本NPO学会での発表要旨も添付し、インターンシップ前後のゼミを「学びのコミュニティ」と捉え、現場での経験を持ち帰って振り返り、他者と共有することに着目していた。

つまり、この段階では地域通貨を研究題材にすることは想定されていなかった²。関心があったのは、学生が地域社会の活動に参加することで何を学び、大学と地域がどうつながるのか、という問いである。修論構想には、インターンシップは「目的ではなく手段」とも記してい

た。体験させること自体ではなく、その経験を通じて学生が社会と出会い、自らを捉え直し、他者との関係の中で学んでいくことに意味を見いだしていたのである。

それでは、なぜ修論論文は地域通貨を扱うことになったのか。そこには、すでに草津で共に活動していた人々との関わりがあった。同期入学の内山博史くん（現在は谷内博史さん）とは、びわこ・くさつキャンパスの1期生として学び、阪神・淡路大震災後に設立された「立命館大学ボランティア情報交流センター」など、学生時代から多くの活動を共にしてきた³。

さらに1997年には、草津市の生涯学習課、自治振興課、[草津市コミュニティ事業団](#)などが関わるまちづくり集団「草津塾」の設立準備が進み、市民参加やワークショップに取り組みんでいた研究室の学生にも声が掛かった。当初のスタッフには筆者の名前も残っている⁴。つまり、地域通貨「おうみ」を研究する前から、すでに草津のまちづくりに足を踏み入れていた。

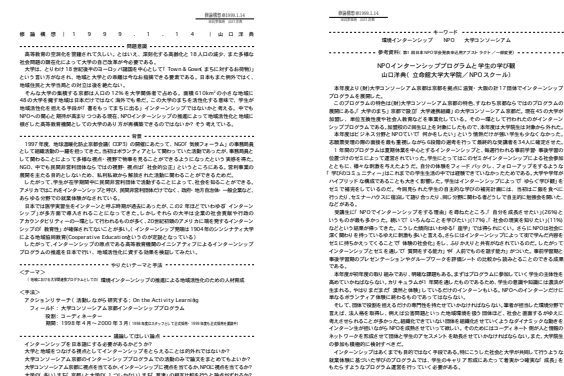


図1：修論構想をまとめた資料（1999年1月14日）

こうした草津での人間関係と実践の積み重ねの中で、草津コミュニティ支援センターにおける地域通貨の導入準備へと関わることになった。卒業研究に続いて、修士論文の題材もまた、机の上で選んだというより、現場で人と関わる中から立ち上がっていったのであった。

2. 実践に酔っていたのではと疑念に

では、地域通貨「おうみ」は、どのように始まったのか。きっかけは、内山くんが1998年4月、集英社『週刊プレイボーイ』（4月28日号、No.17）に「今こそ『オレたちの通貨』を作れ！」という記事を目にしたことであった⁵。京都から草津へ通勤していた内山くんが、「こんなのを草津でもできるといいね」と興奮混じりで筆者に話を持ちかけてきたことは、今でもよく覚えている⁶。ただし、すぐに地域通貨が始まったわけではない。

草津コミュニティ支援センターは、1998年5月に「公設市民営」を掲げて開館した。地域通貨「おうみ」は、その理想と、市民自身で施設を運営する現実の難しさとのあいだで、先のアイデアを具体的な仕組みに変えていったものである。つまり、課題が先にあって地域通貨を探し出したのではなく、「こんなことができたらおもしろい」という発想が、センター運営の中で見えてきた課題と結びついたのである。

こうして始まった「おうみ」を、筆者は修士論文の題材にした。1999年1月にはインターンシップと学生の学びを研究するつもりだったが、翌2000年3月には「活動拠点施設における地域通貨導入による地域活性化に関する研究」を提出している。前回と同じく、まず目次から眺めてみることにしよう。



写真1：おうみ発行当初の紙券（1999年）
（5おうみ裏は使用者の裏書き有、1999年10月13日スキャン）

1999年度立命館大学大学院理工学研究科修士論文
「活動拠点施設における地域通貨導入による
地域活性化に関する研究」

（6123980140-3 山口洋典）

第1章 序論

- 1.1 研究の背景
- 1.2 既往研究の整理
- 1.3 研究の目的

第2章 研究の方法と研究対象地

- 2.1 研究の方法
- 2.2 研究対象地

第3章 民間非営利活動および市民活動に関する整理

- 3.1 市民活動と民間非営利活動の関係性と本研究における市民活動の定義
- 3.2 民間非営利活動の歴史
- 3.3 民間非営利活動の類型
- 3.4 民間非営利活動の発生要因
- 3.5 民間非営利活動支援団体に関する整理

第4章 地域通貨に関する整理

- 4.1 地域通貨と国民通貨の相違点と本研究における地域通貨の定義
- 4.2 地域通貨の歴史
- 4.3 地域通貨の類型
- 4.4 地域通貨の発行要因
- 4.5 地域通貨と民間非営利活動との連関
- 4.6 民間非営利活動団体支援方策としての地域通貨

第5章 草津コミュニティ支援センターと地域通貨

- 5.1 草津コミュニティ支援センター設立の経緯と経過
- 5.2 地域通貨導入に至る経緯
- 5.3 おうみシステム構築の概要

第6章 「おうみ」システムの効果

- 6.1 センターにおけるおうみシステム導入の効果
- 6.2 センター使用団体におけるおうみ利用の効果
- 6.3 個人登録者及び地域への効果

第7章 まとめ

- 7.1 結論
- 7.2 今後の課題

謝辞

こうして目次だけを眺めれば、研究対象が地域通貨へと急転したわりには、ずいぶん律儀に研究らしい体裁を整えようとしていたことがわかる。第1章で研究の背景と目的を示し、第2章で研究方法と対象地を定め、第3章で民間非営利活動と市民活動、第4章で地域通貨について整理する。その2つを第5章で草津コミュニティ

支援センターというフィールドに重ね、第6章で「おうみシステム」の効果を検証し、第7章でまとめるという構成である。

まず第1章で掲げていた研究の目的は、地域通貨そのものを研究することではなかった。論文の題名のとおり、市民活動支援施設を拠点に地域通貨を発行することの効果、導入の段階、新たな地域内コミュニティを創造できるか、循環にあたってどのような地域資源を活用すべきか、という4つを検証課題としていた。前章で紹介した修論構想では、インターンシップについて「目的ではなく手段」と書いていたが、研究対象が地域通貨に変わっても、手段と目的の関係についての考え方そのものは、それほど変わっていなかったようである。

続く第2章で研究方法を「アクションリサーチ」とし、第3章では民間非営利活動と市民活動の整理を試みた。ここは1998年12月の特定非営利活動促進法の成立から程ない時期ゆえに、日本における制度の歴史を概括した上で、その最後に「インターメディアリー」という言葉を置き、市民活動と個人・企業・政府を「つなぐ」活動や市民活動を支える拠点に関心を向けていた。そこに市民活動支援施設の設置・運営形態について、公設・民設と公営・民営・市民営を組み合わせて分類した。そして1998年には鎌倉市市民活動センターなどで「公設市民営」型の活動拠点が登場したことに着目した。

草津コミュニティ支援センターは、まさにその「公設市民営」を実践しようとした施設だった⁷。管理人を置かず、登録した利用者に電子錠の鍵を渡し、入退館も含めて利用者自身が自主管理するスタイルが採られた。つまり、社会教育施設としての公民館とは大きく異なる施設となったのである。

このことを踏まえて第4章の「地域通貨に関する整理」を読み返すと、数ある地域通貨の中で、筆者たちがイサカアワーに惹かれた理由も、改めて見えてくるように思う。当時の修論では、地域通貨を一括りにせず、LETS、時間預託、イサカアワーなどを、発行単位、流通範囲、決済方法、発行形態、管理形態によって分類していた。LETSは通帳や小切手を用いて当事者間で財やサービスを交換するのに対して、イ

サカアワーは「時間」を単位として紙券を発行する仕組みとして整理している。

草津では、市民が自発的に運営するという理想に対して、現実には誰かの時間と手間を必要とした。掃除をする、受付をする、会議に出る。そうした、従来は無償のボランティアとして扱われてきた時間や手間を、センターへの貢献としてどう受け止めるか。そう考えると、時間を名称と基準に据えたイサカアワーが、当時の筆者たちに魅力的に映ったのも不思議ではない。そのため、後に地域通貨の1つとして広く知られることになる「おうみ」は、センターに貢献する人々の時間に対し、「[センターくん](#)」と人格化した存在から「ありがとう」のしるしとして渡される利用クーポンという位置づけで導入することとした。

そうした実践の渦中で書いたのが、修士論文の第5章「草津コミュニティ支援センターと地域通貨」である。そこでは、すでに終わった実践を外から観察したのではない。自分自身がセンターの事務局次長として仕組みをつくり、広報し、利用者に説明し、改良を続けている最中の出来事を研究対象として記述していた。第2章では研究方法を「アクションリサーチ」とし、第5章では草津コミュニティ支援センターで「参与観察」を行った、と書いている。

このように捉えた上で第6章「『おうみ』システムの効果」を読み返すと、前号で卒業論文を読み返したときとは少し違った問題が見えてくる。累積の「支払総計」が右肩上がりになっているグラフが掲げられ、15人への質問紙調査の結果が百分率にして円グラフで示され、度数分布も折れ線グラフで提示されていた。ここで「されていた」と受動態で書くのは、少々アンフェアだろう。他でもない、当時の筆者がそうしたのである。どうやら当時の筆者は、自分が感じていた「おうみ」の効果を何とか目に見える形で示そうと、その手応えに都合のよいグラフの種類を選んでいたように思われる。加えて、センターの利用率が上がったことや、新聞やテレビに数多く取り上げられたことも、「おうみ」の効果を示す材料として並べていた。

ちなみに、再読した修士論文の本冊には、指導教員の笹谷先生による赤ボールペンでの修正

指示が入ったものであった。しかし、今回読み返して最も気になったのは、前述した統計処理の拙さそのものではなかった。修論発表の概要で、当時の筆者は「おうみ」を「現在、国内で最も成功した事例」とまで書いている。さらに、地域通貨の導入によって、センターに関わる人々、センター外で「おうみ」を使う人々、地域に根ざして暮らす人々という「3つのコミュニティが創出した」と結論づけていた。果たして、何をもって「成功」としたのか、何をもって「コミュニティが創出した」と判断したのか、25年あまりが経過した今、これらの判断基準にこそ、執筆した本人が疑問を抱かざるを得ない。数字の扱い方以上に、そもそも何を効果として捉え、それをどのような根拠から判断しようとしていたのかが問われるべきなのだ。

「おうみ」という実践が注目されればされるほど、その実践の社会的な意義と、自分の研究の学術的な意義とを重ねてしまう。実践者として見たいものを、研究者として証明しようとする。今なら、それはアクションリサーチに携わる研究者が最も慎重にならなければならない問題の一つだとわかる。

もう少し平たく言えば、当時の筆者は「実践に酔っていた」のかもしれない。自分たちで考えた仕組みが動き始め、利用する人が現れ、新聞やテレビにも取り上げられる。その渦中にあることのおもしろさと、「おうみ」が地域を変えているという手応えとが重なっていた。その手応えを疑うよりも、それを示す材料を集めることが「研究」になっていたとすれば、そこには自己満足だけでなく、研究が実践の内部で自己完結してしまう危うさもあった。

ただ、第7章まで読み進めると、当時の自分自身も、その危うさにまったく無自覚だったわけでもないことがわかる。なぜなら、「地域通貨はあくまで手段であって目的ではない」と書いているからである。少なくとも、この関心が25年以上前の筆者にもあったことは確認できた。研究対象は短い期間のうちに大きく変わったものの、手段そのものを普及させることなく、それを媒介として人が何を経験し、どのような関係をつくるのかに関心を向けようとしていたことだけは変わっていなかったようだ。



写真2：草津コミュニティ支援センターでの筆者の様子
(1999年12月9日放送、NHK総合「未来派宣言」より)

3. 先行研究に、もう一度教わる

では、当時の筆者は、地域通貨について何を読んでいたのだろうか。修士論文の第4章では、地域通貨の定義、歴史、類型、発行要因と順番に整理し、それぞれに先行研究を引用している。日本語の文献が現在ほど多くなかった時期だけに、手に入るものを集め、何とか研究対象を位置づけようとしていたことは伝わってくる。しかし、それを「25歳になる前にこれだけ読んだ」と懐かしむだけでは、また同じことを繰り返す。そこで、修士論文で引用した文献もまた再読することにした。

まず、西部忠によるLETSについての論考である。修士論文では、LETSがどう機能するかの説明に引用していた。しかし西部(2000)が論じていたのは仕組みだけではなく。経済的な信用だけでなく、地域や人々への信頼、自律的な判断を重視し、LETSを「文化・社会運動のためのメディア」(p.141)と捉えていた。どうやら地域通貨を「メディア」として論じていた議論を、当時の筆者は「システム」の説明書だと読んでいたらしい。交換を成立させる仕組み以上に、その前提にある人々への信頼や、自らそのコミュニティに加わろうとする判断に目を向けた議論だったにもかかわらず、である。

丸山真人による論文にも、今回になって目に止まった一節がある。LETSの仕組みや歴史を説明した上で、丸山(1998)は「もしそれだけだとしたらLETSの可能性について多くを語る必要はない」(p.3)と記している⁸。修士論文を書いていた筆者は、まさにその「それだけ」を

熱心に研究していたのではなかったか。地域通貨がどう動くのかを整理し、導入の段階を示し、利用が増えたことを「効果」として測ろうとしていた。しかし丸山の問いは、その仕組みを説明するだけではLETSの可能性を捉えたことにならない、と当時の筆者に問い返してくる。

同じ文献なのに、読む場所が変わったのは、自分の問いに使えるような言葉を探すだけでなく、その文献を書いた人が何を問い、何を論じようとしていたのかに着目したからだろう。無論、現在の読み方の方が「正しい」のではない。修士論文を書いていた筆者が自分たちの実践を説明するために先行研究を読んでいたのに対し、現在の筆者は、むしろ先行研究に、自分たちの実践を別の角度から見直すための補助線を求めたようなものである。

ところが、そのことに26年も経ってから初めて気づいた、というわけでもないらしい。修士論文を提出した直後の2000年4月、環境NGO「環境市民」のニュースレターから依頼を受け、筆者は初めての依頼原稿として地域通貨について文章を書いている⁹。そこには、「重要なものは、地域通貨というのは『通貨』ではなく『地域』に主眼を置いているということである」とあった。さらに「別に地域通貨でなくとも構わない」が「社会的・文化的に豊かな地域」をつくるには人々の生活や関心をつなぎとめ、広げていく必要を訴えている（山口, 2000, p.3）。

修士論文では地域通貨の「効果」を証明しようとしていた筆者が、その直後には、地域通貨そのものはなくとも構わない、と書いていたのである。どうやら、自分たちがつくったシステムを発展させることと、それによって地域が豊かになることとは同じではない、と気づき始めていたらしい。ただし、環境市民のニュースレターへの寄稿文でも、人やモノが地域内で循環すれば「サステナブル・コミュニティが創出される」（山口, 2000, p.2）と、かなり唐突に主張している。「通貨ではなく地域」と考え始めてはいた。しかし、それを研究としてどう捉えればよいのかについては、まだ十分な言葉を持っていなかった。そのことを自覚するまでには、もう少し時間が必要だった。

4. 「研究」を学び直すために

「おうみ」のその後については、草津塾の仕掛け人であり、草津コミュニティ支援センターの設立からその展開に関わった山本正雄さんが、「『おうみ』の経緯と展望」として記録を残している。そこには、「『地域通貨とはかくあるべき』というような発想ではなく、現状や課題の問題解決のため必要に応じて改良を加えていった結果できたもの」（山本, 2013, p.194）とある。「おうみ」が最初から完成されたシステムとして設計されたのではなく、実践の中で姿を変えていったことを、山本さんはその後の展開も含めて記している。そこで本稿では、「おうみ」のその後を追うのは山本さんの記録に譲りたい。むしろ今回、修士論文とその前後の文章を読み返した上で記したいのは、「おうみ」のその後ではなく、それを研究していた筆者自身がどうなったか、である。

修士論文では、自ら実践に関わりながら研究する方法として「アクションリサーチ」を掲げていた。しかし、今回読み返してみれば、実践の手応えをそのまま「効果」として示そうとし、自分たちがつくった仕組みが動き始めたことと、地域社会に変化が生まれたこととを、あまりに近くに置いていた。一方で、修士論文の直後には「通貨ではなく地域」と書き、地域通貨そのものはなくとも構わない、とも考え始めていた。実践については何かが見え始めていたものの、それを「研究」としてどう捉えればよいのか、まだ判然としていなかったのだろう。

その後、筆者は2002年に大阪大学大学院人間科学研究科の博士後期課程に社会人大学院生として入学した。その年に書いた研究ノートには、冒頭から「単なる実践報告に止まらないような内容にしたい」と掲げ、続けて「現場を抽象化する、あるいは抽象化した理論を現場に導入することとおして理論と実践をつなぎたい」と、再び大学院で学び始めた理由を記している（山口, 2002, p.191）。ずいぶん力の入った文章ではある。しかし、修士論文を読み返した直後の今なら、なぜこんなことを書いたのかはよく分かる。「おうみ」の実践から得た手応えを、そのまま研究の成果とするのではない。現場を別の角度から捉え直し、そこで何が

起きているのかを考えるための理論と方法を学ぶ必要があると感じていたように伺える。

そして興味深いことに、この研究ノートでも筆者は再び地域通貨を取り上げている。ただし今度は、その「効果」を証明しようとはしていない。「地域通貨は地域の灯台である」と、メタファーを用いて語り直している。地域通貨の利用者を船舶、地域の課題を顕在化させることを灯光、発行主体を灯台に見立てた上で、「灯台は瞬間的には『地域全体を照らすことはできない』」とし、「同様に、地域通貨も地域全体の課題に対処することはできない」と記していた（山口, 2002, p.196）。

修士論文では、地域通貨を導入することで何が生まれるのかを示そうとしていた。それから2年後には、地域通貨が照らし出せるものと、照らし出せないものを考えようとしていたので

ある。灯台というメタファーを用いたからこそ、地域通貨という道具の可能性だけでなく、その限界も語れるようになっていた¹⁰。

とはいえ、研究の方法がこれでわかったわけではない。修士論文では研究方法として掲げていた「アクションリサーチ」も、大阪大学で改めて学び直すことになった。実践に深く関わることは、研究としての甘さを許してくれる免罪符ではない。かといって、研究するために現場から離れればよいわけでもない。実践することと研究することを、どう結びつけばよいのか。この点が決定的に重要である。次回は、地域通貨から少し離れ、筆者が大阪大学で出会い直したアクションリサーチを手がかりに、実践と研究のあいだをもう少し探してみたい。

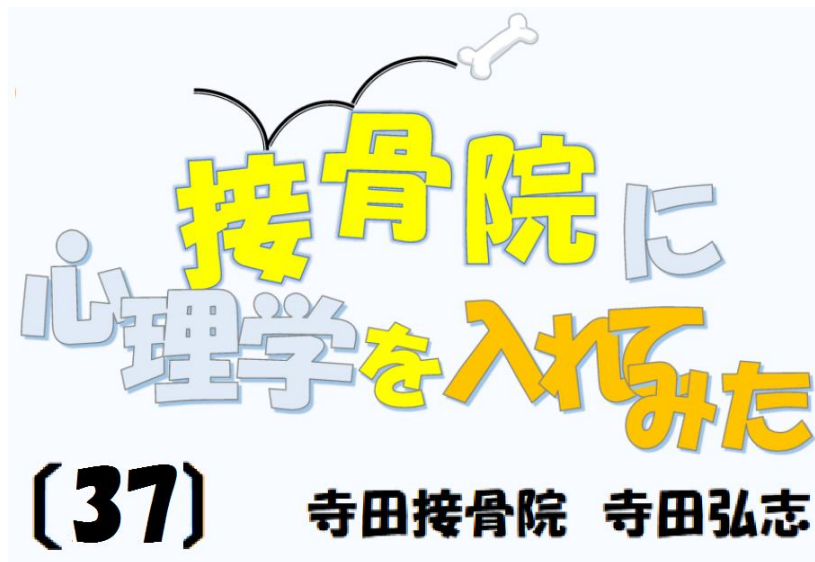
(gucci@fc.ritsume.ac.jp)

【引用文献】

- 泉留維. 2006. 日本における地域通貨の展開と今後の課題. 専修経済学論集 40, 97-133.
- 丸山真人. 1998. 循環型経済と地域通貨. 地域開発 411, 1-5.
- 西部忠. 2000. 地域通貨LETS：貨幣・信用を超えるメディア. 柄谷行人(編), 可能なコミュニズム (pp.69-162). 太田出版.
- 谷内博史・高見良一・赤澤清孝・山口洋典・松井かおり・甲賀光秀・齋藤重. 2012. 座談会「阪神・淡路大震災」と学生ボランティア活動. 立命館百年史紀要 20, 141-209.
- 山本正雄. 2013. 「おうみ」の経緯と展望. 西部忠(編), 地域通貨 (pp.193-197). ミネルヴァ書房.
- 山口洋典. 2000. 環境への配慮を促し社会的な公正を導く地域通貨. 環境市民みどりのニュースレター 2000年4月号 (No.83) 2-3.
- 山口洋典. 2002. モデル化とメタファーを通じた協働的実践の理論化：まちづくりと地域通貨に関する人間科学によるアプローチ. ΣYN：ボランティア人間科学紀要 3, 191-200.

【注】

- ¹ 修士論文本体はAdobe PageMaker6.5で作成しており、現在の環境では元ファイルを直接開けなかった。修士論文本文は「地域通貨おうみ委員会」のウェブサイトの資料室 (<https://www.kaikaku21.com/ohmi/data/gucci.htm>) で閲覧できる。
- ² 博士前期課程の標準修了年限は2年であり、この構想をまとめていたのは、その1年目の終盤にあたる。また、学部時代に続き、笹谷康之先生を指導教員として景観計画研究室の市民参加班に所属していた。
- ³ 立命館大学による阪神・淡路大震災の救援ボランティア活動と、筆者がBKCからその動きに関わった経緯については、当時の学生たちによる座談会（谷内ら, 2012）に詳しい。
- ⁴ 草津塾設立当初の記録に、1997年8月の会議を記した「草津塾運営スタッフ通信<第1号>」があり、The Wayback Machineで閲覧 (<https://web.archive.org/web/20030826232939/http://www.kaikaku21.com/juku/staf1.html>) できる。
- ⁵ この点は、泉 (2006)にある「それを見て地域通貨の導入を思い立ったそうである」(p.110)という記述とも符合する。
- ⁶ 内山くんは卒業予定が延びたことを契機に、草津市コミュニティ事業団コミュニティ振興課の嘱託職員として勤務していた。
- ⁷ 同センターの建物は、JR草津駅周辺のマンション開発に伴い開発業者から草津市へ寄贈され、市が所有し、財団法人草津市コミュニティ事業団が管理していた。
- ⁸ ここで丸山 (1998)が「それだけ」とするのは、LETSを「単に現金不足を補い市場経済を円滑に運営する補助手段」と捉えることである。
- ⁹ 前年に米国ニューヨーク州イサカ市を訪ね、イサカアワーの使用、関係者への聞き取り、理事会の傍聴を行った経験を執筆した。訪問に際してはNHKのBS1「エンデの遺言」のイサカ部分のディレクター、鎌仲ひとみさんに大変お世話になった。
- ¹⁰ 山口 (2002)では、灯台のメタファーからさらに「灯台もと暗し」という限界も指摘している。地域通貨によって地域の課題を照らそうとする一方で、発行事務局の内部やその周辺ほど状況を把握しにくくなり、「地域通貨で何とかすることができない部分もある」と記している (p.197)。



セラピーごっこの雰囲気

ＪＲ茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

「セラピーごっこ」という名前を考えてくださった患者さんとの会話です。

「セラピーごっこやっていますか？」

「私はここに通っているので、最近はしていませんが、娘と孫はちょくちょくやりあっているようです。お陰様で、それで調子がいいみたいです」

「そういえば、最近お二人ともお越しにならないですね。セラピーごっこで落ち着いていらっしゃるのならうれしいです」

「先生の声色までまねて、『こっちがらくですか？　こっちがらくですか？』とささやくように聞きながらやってみますよ」

「え、私の声、ささやくみたいな感じですか？」

「ええ、物静かな話し方ですよ」

「患者さんにはそんな風に聞こえてるんですね。あんまり意識してなかったなあ。でも、けっこうそれって大事かもしれない」

心理療法をするとき、セラピストの声のトーンやリズム、ペースなどは大事な要素だと言われています。

体に施術するときも落ち着いた声で話すのがいいでしょう。

相手が元気そうならこちらもテンションを上げて、相手がしんどそうならトーンを下げます。

はじめは患者さんにオープンに患者さんのペースで語っていただきますが、セラピーに入ると「こっちがらくですか？　こっちがらくですか？」とクローズドクエッションが増えていきます。

時間が限られている場合、たくさん質問をしないといけないので、ペースが速くなります。

もちろん時間がたっぷりある場合は、ゆっくりのペースで構いません。

患者さんのほうも要領をわかって来られたら、テンポが速くなり、施術にリズムが出てきます。

患者さんと息が合うというのか、掛け合いのように施術がはかどることもあります。

初めは患者さんに合わせて、そこからだんだんこちらのペースについてきていただく感じです。

これは心理療法や催眠療法にも通じるものがあります。

痛みがとれて、体がらくになったことを確認してもらって終了となります。

体に施術するときは、会話だけでなく、体を動かしたり、さすったり、もんだり、押したりします。

どれくらいの強さで、体を動かしたり、さすったり、もんだり、押したりするのがいいのかは、私の施術を受けていただくと、いちばんよくわかると思います。

もし、施術を受けなくても、見ていただくだけでも、百聞は一見にしかず、見ると聞くとは大違いで、格段にイメージしやすくなると思います。

さて、当マガジン読者の皆さまにも、セラピーごっこを見たり、体験したりできる機会のお知らせです。

「第 18 回対人援助学会」に参加し、ワークショップで痛みやこりを改善できるセラピーごっこ講座を開催したいと思います。

開催できるかどうかは、理事会の決定によるため、当院のホームページまたは大会事務局のホームページでご確認ください。

日 程： 2026 年 11 月 21 日（土）～22 日（日） この内、22 日の 12:55～14:25 を予定しています。

会 場： 京都橘大学

以下は大会事務局にお送りしました企画概要です。

当院では、私から受けた施術をまねて、自分や家族に施術をしておられる患者さんが少なくありません。

ある患者さんが、それを「セラピーごっこ」と呼んでおられたので、私も「セラピーごっこ」と呼ばせていただいています。

「家で何かできることはありますか？」と質問されることが度々あります。そんなときは、セラピーごっこの仕方を惜しみなくお伝えしています。

セラピーごっこで、「調子がいい」とか、「接骨院に来ることが減った」とか、そんな報告を聞くこともあります。たまに「自分でやってもうまういかなかったので来ました」と何年ぶりかで患者さんが来られることもあります。接骨院に来る患者さんは、非常に重篤な症状の方から軽度な症状の方まで多種多様です。

多いのは、中等度の症状の患者さんで、軽度の方はあまり来られません。

自分で湿布をはったり、温めたり、運動したり、セルフケアをすれば治ってしまわれるからです。

「いつまでたっても治らない」「湿布を貼っても治らない」「痛み止めでは治らない」「自分でマッサージしても治らない」・・・当院の患者さんは、そういう中等度の症状の方がほとんどです。

たまには、骨折だとか、激しい炎症が起きているとか、内科的な原因があるとか、そういう重篤な患者さんも来られます。

そういう場合は、医療機関に紹介するか連携しながら対応していきます。

軽度の患者さんには、セラピーごっこはとても有効なセルフケアの一つになります。

中等度の患者さんには、通院しながら、さらに家で回復を早める補助手段となります。

重篤な症状の場合、回復期になれば、補助手段になる場合もあります。

セラピーごっこを実家の親にしてあげたといった話をうかがうこともあり、セラピーごっこは人から人へ拡張していく可能性をもっています。

セラピーごっこの知識を、対人援助学の一つとして多くの人に知っていただきたく、体験的ワークショップを企画しました。

2019年に立命館大学茨木キャンパスで対人援助学会があったときも、ワークショップをさせていただきました。ワークショップのタイトルは「体の対人援助の新展開---術者ファーストから患者ファーストへ、単独療法からハイブリッド療法へ」でした。

大会テーマに合わせて、こんなタイトルをつけてしまったので、説明が長くなり、ワークの時間が短くなってしまいました。

このときのワークは、デモンストレーションもなく、いきなり参加者にペアになっていただいて、肩こりのある人に施術をしていただくということをしました。

7組同時進行で、みなさんそれぞれ、7人7色の肩こりがあり、改善する方法も同じではないということが明らかになりました。

終了後のアンケートを見ると、効果は感じていただけたようなのですが、施術する人とされる人の交代があってもよかったかなと感じました。

今回は施術の体験に時間を割いて、時間が余ったときだけ自己紹介や開発経緯などもお話ししたいと思います。

前回はベッドを持っていかなかったので、座って施術ができる肩こりに症状を絞りましたが、今回はできればベッドを持って行って、範囲を絞らずにやってみます。

今回は、デモンストレーションをしながら、途中で参加者に交代して、施術を続けてもらうリレー形式にしようかと思います。

施術を受けた人が、次の人に施術をして、うまく行かないときは私が手助けをし、また参加者に続きをしていただく、そんなワークショップを考えています。

今年の対人援助学会に参加される方は、当ワークショップものぞいてみてください。

セラピーごっこの拡張

今回の大会テーマは「対人援助学を拡張する」

施術の仕方をあんまりまねされては、商売あがったりなのですが、商売を抜きにすれば、それは喜ぶべきことです。効果がなければ、まねされることもありません。

患者さんが接骨院に来なくても大丈夫にするのが、柔道整復師の使命です。

お陰様で10月に開院30周年を迎えます。

30年間、患者さんたちに鍛えられて、我ながら腕は上がったなと自負しています。

しかし、年々体は老化していき、年金をもらえる年にもなり、いつ閉院しようかなと考えています。

患者さんからは「やめんといて」とか「ずっと続けていてください」とか言われますが、いつかは引退する 때가来ます。

真の援助とは、魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えることだと言われます。

治すことも大事ですが、治し方を教えることも大事です。セラピーごっこは、専門知識がなくても、家庭でできる体の不調の改善方法です。

あと何年接骨院を続けられるかわかりませんが、いつ廃業しても大丈夫なように、セラピーごっこをいろんな人に伝えていきたいと考えています。

セラピーごっこは何歳ぐらいからできるかというと、たぶん3歳ぐらいからできます。

お医者さんごっこもそれぐらいからできるのではないのでしょうか。それと同じです。

私の三男が、3歳ぐらいのころのことです。

私が接骨院で患者さんに施術をしていると、三男がそばにやって来ました。

おもむろに患者さんの手を取って、「こっちがらくですか？　こっちがらくですか？」と見よう見まねでやりだしました。

お手伝いがしたかったのでしょう。

患者さんも私も笑って、しばらくやらせていました。

患者さんは「とても気持ちがよかったよ。ありがとう」とうれしそうに言ってくれました。

小さな子どもでも、だれかを気持ちよくしたい、喜ばせたいという気持ちがあるのだと思います。

もちろん3歳の子どもに、痛みが取れるかということ、それは無理でしょう。

それでも構わないのです。

小さな手でさすったり、たたいたりしてくれたら、治らなくても、すごく癒されるのです。

喜んだり、ほめたりすれば、子どもが大きくなったときに、上手にセラピーごっこをしてくれるかもしれません。

私の子どもたちは、だれも接骨院を継がず、それぞれに自分で選んだ仕事をしています。

たまに帰ってくるとセラピーごっこをお互いにもすることもあります。

プロに対してはやりにくいらしいですが、私は高いレベルのセラピーを求めているわけではありません。

下手でもいい。人にやってもらうのは気持ちいいものです。

「患者さんはいいなあ。患者さんになりたいよー」とつぶやいています。

痛みやこりがとれることも重要ですが、思いやりや優しい気持ち、お互いにほめることや感謝することも大事です。たとえ治せなくても、治そうとする思いに触れたり、手を当てたりするだけでも、人は癒されることがあります。

この春、孫たちがセラピーごっこをしてくれました。

（肩をさすってけている孫が4歳、脚をもんでくれている孫が7歳）

「ここにねてくださーい」

「わかりましたー。なんかしてくれるの？」

「このへんがいたいですかー？」

「はい、せんせー、そこいたいでーす」

「こうすると、らくですかー？」

「はい、せんせー、めっちゃらくでーす」



孫たちに施術をしたことはないのですが、どこで覚えたのでしょうか？

孫たちは長男か長男の嫁にセラピーごっこをしてもらったことがあったのかもしれませんが。

子どもさんが当院に通院中で、「子どもが先生のまねをしてやってくれたのが気持ちよかったので」と、親御さんが来院されたこともあります。

子どもは先入観がなく、好奇心も強く、ごっこ遊びも好きなので、セラピーごっこにとっつきやすいかと思います。

いつかだれかが、セラピーごっこを広げて、そしてだれかがセラピーごっこをもっとブラッシュアップして、拡張してくれればうれしいです。

ではまた

現代社会を『関係性』という観点から考える③⑧

食事と「関係性」～「ごはん」が育むもの

更生保護官署職員 三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

今回は標記について私見を述べさせていただきます。

「現代社会を『関係性』という観点から考える」というテーマでの連載です。これまでの連載一覧については末尾に記載しています。

1 はじめに

令和8年6月から5回にわたり放映された『ムショラン三ツ星』（NHKドラマ10）は、『めざせ! ムショラン三ツ星 刑務所栄養士、今日も受刑者とクサクないメシ作ります』（黒柳桂子 朝日新聞出版 R5.10）を原作（原案）とするドラマでした。

この書籍は、少年刑務所の炊場（すいじょう）担当法務技官として採用された管理栄養士の黒柳氏が自身の体験をレシピも添えて綴られたものです。常に掲載された元矯正局長、元矯正管区長の方々の暖かい推薦コメントに魅かれた私は発売直後に購入・読了し、以後相当量の熱量をもって同僚・友人・親族郎党にお勧めしてきた次第です。

刑務所や少年院に関する書籍は、書店では刑事政策や犯罪心理学等の専門書のコーナーに置かれていることが多く、新書等の形態を除けば、専門家以外の一般市民の目に触れる機会はさほど多くないのではないのでしょうか。

そうしたなか、書籍『めざせ! ムショラン三ツ星 刑務所栄養士、今日も受刑者とクサクないメシ作ります』は、一般書籍のコーナーに並び、多くの人々の手にとられ、ドラマ化に至っています。矯正局・矯正管区採用のプロパーではなく、社会人として長年学校給食等の現場で働いた後に刑事施設に入職された黒柳氏が、「一般社会の人の目」から見た率直な驚きも含めて、あたたかなトーンで綴られていることもその所以と考えています。「みょうがはどこまで剥くんですか？」と受刑者から質問されるくだりなどは、ユーモアに満ちており、「こんな、炊場で働く受刑者だけではなく、男子あるあるやん」と感じ入りました。

なによりも、「食事」「料理（調理）」という、人間の生活に欠かせない営み（当然ながら刑事掲示施設内でも行われている）を切り口として、刑事政策だけではなく、食育その他幅広い知見が得られることも、この書籍の魅力だと感じています。

今回は『食事と「関係性」～「ごはん」が育むもの』を軸に私見を述べさせていただきます。

2 子どもたちの成長と食生活

非行や犯罪からの立ち直りには、「本人自身の更生に向けての意思」だけではなく、「本人とその意思を支え、受け入れる社会」の存在が非常に重要です。そのため、実際の処遇場面だけではなく、各種広報啓発活動が活発に行われています。

「保護観察中の遵守事項を守るよう指導監督するだけでは、社会の一員として更生し非行・犯罪からの離脱を図ることが難しい」ということを説明する際、たとえば、学校関係者の

方に対しては、「最低限の衣食住が確保されていない状態では、落ち着いて通学し勉強することは難しいのではないのでしょうか」と言い添えると、学校現場での経験に即したイメージをつかみやすいと感じています。平成後期以降、子どもの貧困が注目されるようになり、バランスの取れた食事、食を通じての様々な体験を得ることが難しい子どもの存在について、日常生活のなかで注意が払われるようになったのではないのでしょうか。

たとえば、「非行」に限らず、下記のようなケースは、子ども世代が健康的な食事を探ることは難しいことは容易に想像できると考えられます。

○両親、小学生の子2人の世帯。父は非常に支配的で、母は最低限の生活費を手渡すだけで、何かにつけ母を叱責することが常態化している(経済的DV、面前DV)。

○両親ともに働いているが家計管理が不得手であり、給料日前には欠食となることもある。

○疾病のためひきこもりがちな母にあわせて家庭全体が生活リズムが昼夜逆転し、子は欠食、通学もしぶりがち。

つまり、「食事」には、単に経済的な貧困だけではなく、家庭の状況や家族の関係性も反映されていると考えられます。

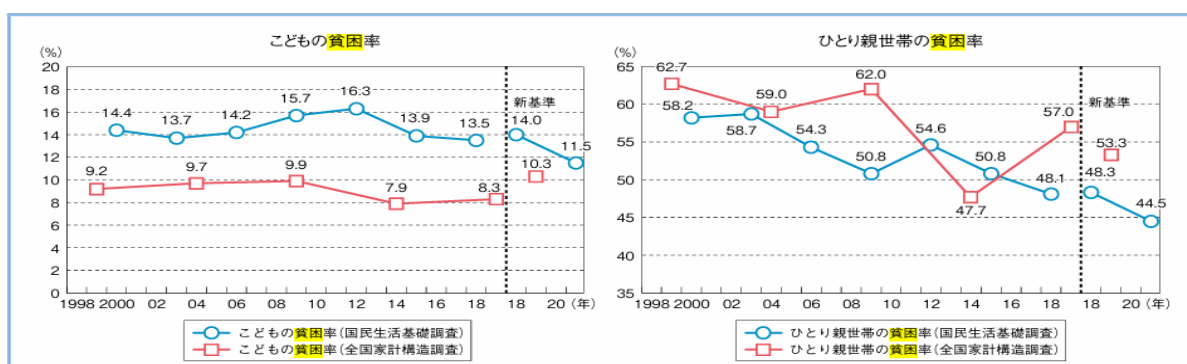
子ども世代の健康や成長に好ましい「食事」を準備するために必要なものは、経済力だけではありません。料理を用意するための時間やスキルはむろんのこと、いまや「情報」も不可欠です。インターネット検索ではなく、ちょっとした悩みを打ち明けあうことのできるリアルな人間関係のなかで得られるものは、単なる情報に留まらない、生活に密着した「知恵」として大きな支えになると考えられます。

細かなデータを提示することは本連載の趣旨ではありませんが、令和8年版こども白書及び令和5年版犯罪白書から、該当部分のデータを提示します。「こどもの貧困率とひとり親世帯の貧困率」(令和8年版こども白書110頁より抜粋)はまさにタイトルのとおり経済的な「貧困」に焦点をあてたものですが、令和5年版 犯罪白書 第7編(非行少年と生育環境)第5章(特別調査)「非行少年と生育環境」の特別調査については、「食事の頻度」に焦点をあてています。

○こどもの貧困率とひとり親世帯の貧困率(令和8年版こども白書110頁より抜粋)

国民生活基礎調査に基づく相対的に貧困の状態にあるこどもの割合は11.5%となっており、特にひとり親世帯の貧困率は44.5%と高い。ひとり親世帯では、食料が買えなかった経験がある割合が21.1%、衣服が買えなかった経験がある割合が19.0%と、こどもがいる全世帯(それぞれ12.1%、13.8%)と比較し高くなっている(国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合いに関する調査」(2022年)よりこども家庭庁算出。)

こどもの貧困率/ひとり親世帯の貧困率



生活困窮が非行・犯罪の背景にある場合、まずは日常生活の立て直しのため、更生保護の制度の枠組み内において緊急的な対応を行いつつ、福祉制度の活用も念頭においた対応を行っていく必要があります。対象者がDVや虐待の被害を受けている場合には、緊急的な対応が必要になります。

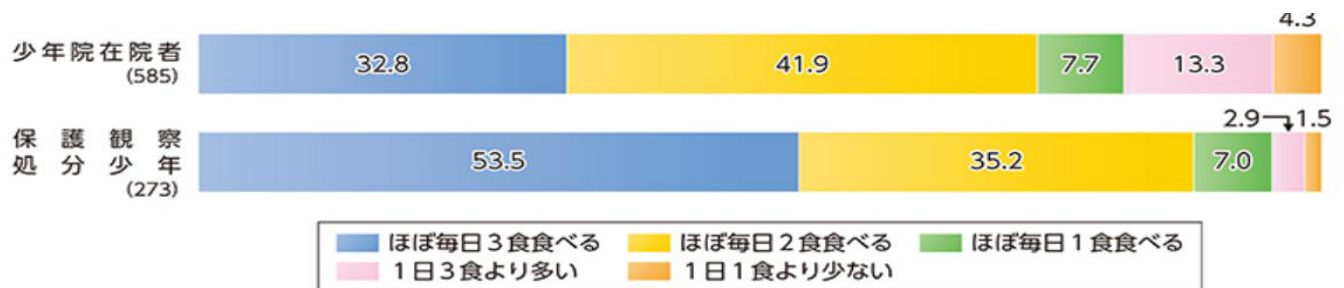
○令和5年版 犯罪白書 第7編(非行少年と生育環境)第5章(特別調査)より抜粋

2 日常の生活状況

(1) 食事の頻度

7-5-2-2 図は、平日(学校や仕事に行く日。以下この章において同じ。)の食事の頻度について見たものである。少年院在院者では、「ほぼ毎日2食食べる」(41.9%)の構成比が最も高く、次いで、「ほぼ毎日3食食べる」(32.8%)、「1日3食より多い」(13.3%)の順に高かったのに対し、保護観察処分少年では、「ほぼ毎日3食食べる」(53.5%)の構成比が最も高く、次いで、「ほぼ毎日2食食べる」(35.2%)、「ほぼ毎日1食食べる」(7.0%)の順に高かった。

7-5-2-2 図 少年に対する調査 食事の頻度



- 注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 食事の頻度が不詳の者を除く。
 3 () 内は、実人員である。

東京都が実施した調査によれば、平日の食事の頻度を尋ねた項目(「ほぼ毎日3食食べる」、「ほぼ毎日2食食べる」及び「ほぼ毎日1食食べる」から選択)の16・17歳の結果では、「ほぼ毎日3食食べる」の構成比が86.1%であり、少年院在院者、保護観察処分少年共に、一般の少年よりも構成比が低かった。一方、同結果では、「ほぼ毎日2食食べる」の構成比が12.5%、「ほぼ毎日1食食べる」の構成比が0.7%であり、いずれも少年院在院者、保護観察処分少年共に、一般の少年よりも構成比が高かった(東京都「子供の生活実態調査」(平成28年度)による。)。回答の選択肢が異なることには留意を要するが、一般の少年と比較すると、少年院在院者及び保護観察処分少年において、1日3食の規則正しい食生活を送っている者は少ないことがうかがえた。

3 「食事」について、「食べること」以外の面から考える

ここでは、向田邦子の名エッセイ『父の詫び状』に収められた『ごはん』という一編から、食事と関係性について考えていきます。

東京大空襲でからくも生き残った向田一家は、「最後に腹いっぱい食おうじゃないか」という父の呼びかけで、白米とさつまいもの天ぷらという、当時にとっては「魂の飛ぶようなごちそう」を一家で囲むことになります。普段は厳しい父のやさしさ、母の明るさなどが淡々とし

た筆致で綴られています。昭和、それも戦前の父の典型のように描かれることの多い向田邦子の父は、平素は父の威厳に隠れて見えづらいものの、子どもへの愛情は非常に深い人でした。食事、それも被災した近隣を気遣いながら最後の昼餐とでもいえる「魂のとぶようなごちそう」を囲む場面では、そうした父の率直な愛情が発露されています。私が初めてこのエッセイに触れたのは小学校高学年時でしたが、子どもながらに深い感銘を受けたものです。

私がこのエッセイに触れるまで、料理を含む家事全般は、「お手伝い」という位置づけでした。しかし、向田邦子一家がどんな思いで「最後の昼餐」を用意しそれを食したのかを考えると、「料理」「作る」「食べる」だけのものではないと思います。向田邦子の他のエッセイも読み進め、高等女学校時代から料理や家事を切り回しをしていたことを知り、その生き方に憧れを持つようになりました。書籍『向田邦子の手料理』に掲載されているレシピはもちろんのこと、昭和期後半に次々と発刊されたカジュアルな家庭情報誌に掲載されたメニューを試すなどして、バリエーションも広がっていました。部活等で友人に料理を振舞う機会も増え、家族以外から「おいしい」と呼ばれる喜びも体験しました。

社会人となってからも料理を楽しんできましたが、40代前半に特発性膵炎を発症しました。

体質的にアルコールを全く容れない私にとっては全く想定外のものであり、痛み以上に厳しい食事制限は堪えるものでした。そのなかでも、家族のために料理をすることは続けており、その時間が気持ちの安定に大きく寄与していました。良医に恵まれたこともあり、服薬と食養生のおかげで現在は再発なく生活しています。

私にとって、向田邦子の『ごはん』に匹敵するのは、先輩職員が持参してくださったお弁当です。まだ20代の頃、母がクモ膜下出血で救急搬送・緊急手術となりました。2度の開頭手術を受けたものの「歩いて家には帰れない」と宣告される厳しい状態でした。憧れの更生保護官署に奉職し、異動(転勤)を重ねながらなんとか家庭と仕事を両立してきたものの、介護離職もやむなしというところまで追いつめられていました。

そんな折、先輩職員がお見舞いに来てくださいました。保護観察官としての心得や業務のいろはを教わった、女性職員のパイオニアともいえる方でした。先輩は「えらい痩せたな。ちゃんと食べてるか～」とまず手作りの御弁当を勧めてくださいました。「大変やけど、今辞めたらもったいないで」「なんとか両立できるよう、応援してるで」と声かけをしながらいただいたお弁当の味は、おかずの一品一品まで鮮明に覚えています。実際にその先輩が中心となって、介護と仕事の両立のための配慮もいただき、出向先からスムーズに復帰することもできました。

何よりも、「仕事に穴をあけてしまったら」「介護と仕事の両立をどうすればいいか」という、「将来のこと」で頭が一杯になっていた私にとって、そっと差し出された先輩の「ごはん」は、「いまここ」という日常生活を大切にするという視座に私自身を引き戻すものでした。

困難な状況にある人に対し、心理的なサポートはもちろん必要ですが、体を養うこと(安全を確保したうえで十分な食事・睡眠をとること)が何より重要であるということは、入職直後に大規模被災地での業務に従事した経験からも、非常に腑に落ちるものでした。あのときの「ごはん」は、「先々のことはいろいろと不安だが、まずはしっかり食べること」「日常生活をまずしっかりと営み、自分のできることからこつこつ取り組むこと」「自分を気遣ってくださる人の存在に感謝すること」を再認識させてくださった、私にとって忘れがたいもののようです。

4 こども食堂から食事と関係性を考える

その地域では初めてといわれるこども食堂を創設され、その後、子どもの食事だけではなく子育てを支援するネットワークを展開されている方と御縁ができたことをきっかけに、私も支援の端に加えていただいて10年以上になります。

調理に参加する時間は捻出できないため、大口の支援から漏れやすいものをリクエストしてもらい随時お送りするなど、現場での活動を微力ながら支えることが今の自分の役割だと考えています。生の果物を食べる機会が少ないことをお聞きして以降は、「東北の生協から10～12キロの巨大スイカを安価に調達すること」と「和歌山からミカンを安価に調達すること」が、我が家の恒例行事となっています。もちろんこういった品物の寄付は、必要な時期や量、保管場所に留意を払う必要があり、主催者側と連携ニーズを把握すること、気まぐれな支援とならないようにすることが必要だと感じています。

食事と居場所の提供から始まったこのこども食堂では、コロナ禍においては、お弁当と日用品を家庭訪問の際に手渡すアウトリーチを展開され、こども食堂に出向けない親御さんへの声かけを行い、ニーズを細やかに汲み上げておられました。その結果、今では、地域のこどもだけではなく、親世代はじめ様々な世代への支援が展開されています。他のこども食堂や学校、行政機関とゆるやかにつながりながら、地域における基幹的なこども食堂となっています。支援を受けたこどもたちが無事高校等に進学し、今度は後輩たちのために学習支援等のボランティアに入るなどの好循環も発生しています。

つまり、「こども食堂」は、単に食事の提供だけではなく、多様な人間関係や多様な体験に触れることができる場でもあるといえます。家庭や学校以外の「居場所」「サードプレイス」として機能しているこども食堂も多くなっています。「毎日開催されていないこども食堂が、子どもたちの食生活を十分に支えられるのか」という見方もあるかもしれませんが、こども食堂で提供されているのは、単なる「食事」ではなく、支援につながるための「関係性」でもあるといえます。

開始当初は「今時、食事に困るような本当に子どもがいるのか」と懐疑的な声もあったと聞いていますが、活動の展開とともに「地域の子どもたちに、声を掛け合い気を掛け合う」という関係性が醸成されるようになっていきます。この「こども食堂」においては、食堂が開設されている物理的な場だけではなく、それが設置されている地域社会やそこに生きる人々の関係性についても、良い影響を与えていると考えられます。

5 食事と「関係性」～「ごはん」が育むもの

食事については、その量や質、回数が適切であることはもちろんのこと、食事に関する場面での関係性が重要であると考えます。先述した「こども食堂」でも、ただ用意された食事を子どもたちが食べるだけではなく、その場に参加している子どもたちに対し、スタッフやボランティアの見守り、声掛けが行われ、子どもたち同士のよりよい相互作用が行われています。

こだわりの食材を使用した手の込んだ料理が並ぶ食卓であっても、食卓を囲む家族等における関係性が子どもの成長にとって望ましいものでない場合、それは真に心身を養う食事とはいえないのでしょう。

たとえば、夕食の食卓で一日のことを振り返ることもあると思われそうですが、そこが叱責・反省メインの「反省会」となってしまうのでしょうか。もちろんマナー等の「しつけ」は必要と考えますが、過度に強い態度で子どもに接したり、子どもに全く無関心であることは、望ま

しいとはいえないと私は考えます。

「料理は必ず手作り」「家族全員がそろって食卓につく」ということは、親世代のライフスタイル、子どもの学齢によっては、現実的とはいえないでしょう。料理の得手不得手を論じたり、食材・献立にこだわるよりも、食事の時間が感謝と楽しみのものになるよう、作り手だけではなく家族メンバーの協働が必要でしょう。

冒頭で言及したドラマ『ムショラン 三ツ星』においても、それぞれのレシピのなかに、炊場で作業している受刑者の暮らし(成育歴)や思いが盛り込まれていました。

「出所したら家族に作って食べさせてあげたい」という思いが吐露される場面が複数盛り込まれているのも、「関係性」の大切さを示唆するものでもあると感じています。

参考文献

『めざせ! ムショラン三ツ星 刑務所栄養士、今日も受刑者とクサクないメシ作ります』(黒柳桂子 朝日新聞出版 R5.10)

ムショラン三ツ星(NHKHP)

主演・小池栄子×刑務所×料理で描く社会派コメディードラマ

NHK 土曜ドラマ「ムショラン三ツ星」

『父の詫び状』(向田邦子 文春文庫)

これまでの連載

30号:連載1:更生保護制度とは何か

31号:連載2:更生保護を支える人々

32号:連載3:つながる・つなげる ～現代社会とボランティアについて～

33号:連載4:「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性 「遠野物語」から考える(前)

34号:連載5:「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性 「遠野物語」から考える(後)

35号:連載6:介護は誰が担うべきか～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～

36号:連載7:対人援助の場面における「専門家」と当事者等との関係性について
～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～

37号:連鎖8:「地域」を支える縁のかたち 血縁・地縁,そして「新たな縁」

38号:連載9:「29人と19人」～この数字が示すもの

39号:連載10:血縁あるいは家族について

40号:連載11:対人援助職が家族のケアを担うとき(1)

41号:連載12:対人援助職が家族のケアを担うとき(2)

42号:連載13:「開く」と「閉じる」こと

43号:連載14:『「開く」と「閉じる」こと』

44号:連載15:『つながりが支えるところ』

45号:連載16:『「見える」と「見えない」こと』。

46号:連載17:「地域社会」との「関わり方」を考える

47号:連載18:「地域社会」で生きるということ

- 48号:連載 19:「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ
- 49号:連載 20:『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について
- 50号:連載 21:Society から Home へ矮小化していく社会
- 51号:連載 22:「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について
- 52号:連載 23:自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ
- 53号:連載 24:「知らないことが不安や排除につながる」ということ
- 54号:連載 26:「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか
- 55号:連載 27:「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものなのか」
- 56号:連載 28「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることのできる社会へ(連載 29 と記載していますが 28)
- 57号:連載 29「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」
- 58号:連載 30 改めて「介護は誰が担うべきか 家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察」
- 59号:連載 31:非行とは行うものなのか巻き込まれるものなのか」
- 60号:連載 32:家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったか」から考える
- 61号:連載 33:みまもり「みまもる」ということば
- 62号:連載 34:「若者と薬物依存」について、地域社会でどう向き合うのかと
- 63号:連載 35:薬物依存症当事者の方の経験と人生に触れる
- 64号:連載 36:家族のなかの秘密と嘘 映画「どうすればよかったか」から考える・続
- 65号:連載 37:「呼び名と役割」そして「関係性」

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 35～

<組織>

杉江 太郎

～変化する組織～

個人経営者でない限り、何かしらの組織に属している。そしてその組織には変化が付き物である。変化しない組織はない。人事異動、退職、休職、産休、育休、新規採用など、変化のきっかけは様々である。毎年、3月から4月にかけて、異動の話題で持ちきりになる組織も多いだろう。毎年、4月1日に、新聞の教職員の異動一覧を見て、ざわつくこともあるのではないだろうか。

組織が変化するということは、良い時期だけが続く保証がないということである。逆に悪い時期だけが続くこともないのかもしれない。でも出来たら良い時期だけが続くことを期待するというのが人の性であろう。感覚的には、良い時期が一転して悪くなるのは一瞬であるが、その逆は簡単ではないのではないかということである。良い時期が続くためには、その組織の中でその工夫が行われているからだと感じている。

変化する組織の中で、良い時期(=組織の健全性)を継続するために、組織に属する一員として何が出来るのだろうか。

今回の原稿ではそのようなことを考えていきたい。

～組織の健全性～

組織である以上、複数の職員がいて、その性格や能力も様々であり、それぞれがそれぞれの組織に対する思いを抱いている。では、どのような組織であれば、健全性が高いと言えるのであろうか。

社会全体を見渡してみると、〇〇ハラという言葉が乱立しており、職員が実際にパワハラやセクハラで処分されたという組織も報道などで目にする機会が多い。

組織の健全性の高さのためには、まずは自分の意見を安心して言えることが大前提である。特に対人援助である以上、他者の感情に触れる機会が多く、その感情は怒りや悲しみなど、ネガティブなものを多く含む。その感情に触れたとき、いくら専門職であったとしても、自身の感情にも影響を与える。その影響、特にネガティブな影響を受けた際に、そのことを安心して話せる相手がいるかどうかは、その組織の健全性を大きく左右する。組織の中で安心して話せるためには、ま

ずはどんなことを話したとしても責められない関係性が必要である。そしてこのことを実現するためには、日々の中で、日常の何気ない会話もお互いの関係性を気にせず、遠慮なく、互いに安全感を持って話せる環境が必要である。

例えば、失敗を咎められる、または、咎められるかもしれないような状態では、ネガティブな話題を発信することも出来ないだろう。また自身の言動が他者からどう見られるのか意識できていなかったり、ハラスメントを恐れて何も会話が為されたりしない関係性では、日常の会話も成立しない。余裕のある場面で、日常会話が健全に行える余力が残されている組織は、健全と言えるだろう。

～組織としての決定～

組織には上下関係が付随しているものである。組織である以上、決定は組織として行われるべきである。これは、戦国時代のように、上様の命に従うしかないという訳ではない。これでは、組織としての決定ではなく、上席の決定（鶴の一声）である。

組織として決定するということは、その決定に際して、上下関係を問わず、組織に属する者により、目的や方針のために意見交換が行われ、その中で最適な決定が組織の責任として行われるということである。組織の責任とは、即ち上様の責任を意味する。

戦国時代のように、成功すれば褒美が与えられるが、失敗すれば首を落とされるような組織は、決して健全とは言えないだろう。失敗をしたとしても個人の責任が追及される可能性があるのと、その失敗を隠そうとしたり、失敗を恐れて本来のパフォーマンスが発揮できなかったりするかもしれない。

さらに上様の責任と言っても、失敗したときに上様の首を晒す必要があるというわけでもない。失敗をしたときでも、組織としてその対応の振り返りが行われ、一度失敗した者が、再度挑戦するのか、それとも次回は別の者が挑戦するのかなど、目標達成のための最善の策を、組織として再設定、再評価できるようなマネジメントが必要である。

～勉強会の意義～

以前の原稿で、職場内で勉強会をしていると書いた。その勉強会は今もメンバーを変えて続けている。勉強会の冒頭には、1人1分間のフリートークを設けている。その時間は、テーマではなく、何を話しても良いことにしている。休日の過ごし方を話す人もいれば、仕事でうまくいかなかったことを話す人もいる。このことは、このメンバーの中では何を話しても許させるという体験をしてもらう意味も込めている。（後付けだけど）

勉強会が近づくと、何を話そうかと頭の思考が少しだけそちらに振れる。仕事

をする上でその余裕は必要ではないかと思っている。頭の中が業務だけで占められていると、それ以外をかんがえる余地がなく、うまくいけば問題がないかもしれないが、そうでなかったときには疲弊しか残らない。業務以外の何かに目が向いて、この話をあの場で話すとウケるかもしれないとか、業務の話であったとしても、あの場で共有が出来ると思えるだけで、少し余裕が生まれるのではないだろうか。

私自身はと言えば、日々の仕事で考えたこと、気づいたことを共有する場として、勉強会を活かしている。これは、自身の体験や知見を共有するという目的でもあるが、自身の仕事を振り返る機会にもなっている。自身の健康や、その属する組織の健全性の向上に役立っているのではないだろうか。

～カフェの運営を通して～

短信の中で、カフェ de スギエのことに触れることがある。なんてことはない、代表してコーヒーを仕入れ、皆とシェアしているだけである。私の異動と共に場所も移転することになる。飲むか飲まないかは自由である。期限が迫るとタイムセールも行う。（皆に無料で配る）仕入先はもっぱらア○ゾンさんである。発注すれば翌日には配送してくれる。

4 月にはそのマシンの使い方をめぐり、経験者とそうでない方の対話が生まれる。

商品がなくなれば、そろそろ頼んで欲しいと顧客との交流が生まれる。期間限定の味が出るとすぐに仕入れ、その味を巡り、感想がシェアされる。（たいてい美味しくない。それでも毎年買ってしまう。）来所者（お客様）がいればそのマシンを使い、すぐに温かいコーヒーの提供ができる。先ほど、無料で配ることがあると書いたが、強制的に配ることで、そのマシンの利用者が増える可能性を高める。そして配る店主との交流も生まれる。たかがマシン1台ではあるが、多くの交流のきっかけを生み出している。これも組織の健全性に役立っていると言える。

～まとめ～

組織の運営について書いてきたものの、私自身が運営するほどの立場ではなく、組織の健全性にいかに貢献している（つもりな）のかを書いた文章になってしまった。ただ、こうして機嫌よく、好きなことをして組織に属しているということは、ある意味、健全な組織と言えるのではないだろうか。仲良しなだけの組織が良いとは思わない。ただ、それぞれが個人で決定できる範囲を知り、その範囲で主体的に行動し、その結果や責任を上位者が負う、そんな組織になれば良いと思う、工夫を凝らしている。日々の中で組織に貢献できることはたくさんある。そんなことをそれぞれが主体的に考えられる組織を作っていきたい。



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

— 名前のなかった役割 ③ —



松岡園子

「止めても大丈夫」と知るまで

「自分がやらなければ」と思うことが、少しずつ減ってきた。
そう気づいたのは、何か大きな出来事があったからではない。
ごく小さなことだった。

以前の私は、一度決めた予定は多少体調が悪くても、
できるだけ変えないようにしていた。
行くと決めたのだから、行く。
約束したのだから、守る。

自分の都合で予定を変えることには、どこか申し訳なさがあった。
だから、無理をしてでも行っていた。

けれど最近は、少し違う。
体調が悪ければ、相手に相談する。
今日は休ませてもらう。
予定を変更する。
あるいは、早めに帰る。
「そうしたい」と伝えてみる。

それでいいのだと、少しずつ思えるようになってきた。
もちろん、今でも迷う。
相手はどう思うだろう。迷惑ではないだろうか。
そんな考えが頭をよぎることもある。

それでも以前とは違って、
「自分が我慢すれば済む」という 1 つの答えだけを選ばなくなった。

相談する。
相手の都合も聞く。
自分の状態も伝える。
その間に、いくつもの選択肢があることを知った。

母との生活を振り返っても、同じようなことに気づくことがある。
子どもの頃の私は、家のことでも、母のことでも、
先回りして「自分がしなければ」と考えていた。

私がやらなければ、生活が回らない。
そう思っていた。
実際に、私が担わなければならないこともあった。
だから、その感覚は決して根拠のないものではなかった。
けれど大人になってから振り返ると、
すべてがそうだったわけではないことにも気づく。

自分がやらなかったら、母がやっていたこともあった。
家事でもそうだった。
私が先に気づいて、先に動いていただけで、
母ができることまで私が引き受けていたこともあったのだと思う。

それに気づいたとき、少し不思議な気持ちになった。
「あの頃の私は、本当に全部やらなければいけなかったのだろうか」
そんな疑問も浮かんだ。
けれど、だからといって「あの頃の自分は間違っていた」とは思わない。

12 歳の私には、12 歳なりに見えていた現実があった。
母と離れたくなかった。
母と 2 人で暮らすことを選んだ。
そして、その生活を続けるために、できることをするしかなかった。
その中で身につけた力が、今の私を支えている部分も確かにある。
だから私は、過去の自分から何かを取り上げたいわけではない。

ただ、もう必要のなくなった役割まで、今の自分が持ち続けなくてもいい。
そう思えるようになってきた。
自分がやらなくても、誰かがやることがある。
自分が行かなくても、予定はまた組み直せる。
自分が少し休んでも、関係が壊れるとは限らない。
相談してみれば、相手と一緒に別の方法を考えることもできる。
そんな当たり前のことを、私は大人になってから少しずつ覚えている。

子どもの頃の私は、「止めない」ことで生活を守った。
だから、止めることは怖かった。
けれど今は、少しずつわかってきた。
止めることと、投げ出すことは違う。
休むことと、責任を放棄することも違う。
誰かに相談することは、弱さではない。
そして、自分がやらないことで初めて、相手にできることが見えてくる場合もある。

あの頃の私は、家庭を止めないために自分が動き続けた。
今の私は、自分が止まっても大丈夫な場所を、少しずつ増やしている。

それは、あの頃の私を否定することではない。
あの頃、精いっぱい役割を果たしていた自分に、
「もう、全部をあなたがしなくても大丈夫だ」
と伝えることなのだと思う。



原田牧場 Note

page 23

携帯やパソコンで検索すれば、どんな情報でも出てくる時代ですが、田舎は違います。情報や口コミが集まる場所は、昔も今も美容院（理髪店）じゃないかと思っています。大阪から引っ越してきた当初、アレルギー持ちの私は、定期的に通院する病院を探していました。牧場の母さんが「美容院で聞いてきてあげるわ」と言ってくれて、ん？美容院？と首を傾げましたが、名古屋から来た先生でよく話を聞いてくれるらしい！と情報をもらい、大阪で受けていた診察を引き継いでもらえる病院がすぐ見つかりました。

美容院に行くと、ひととき日常を離れてリラックスでき、いろんなことを話します。髪と健康状態は繋がっているので、最近の体調の話から、身体に良い食べ物の話、整体院、病院の口コミ話にもなりやすいのかなと思います。美容師さんと一対一なので家族の話や困りごとの話もしやすいですね。今回も、美容院からの情報で解決に向かった話をしたいと思います。

我が牧場の関係会社に、子牛の哺育センターがあります。人手不足なので随時求人を出しており、いろんな方の応募があります。その中のひとり、私と同世代の女性で、試用期間で終わった方がいました。元は家業の牧場手伝いをしていたのですが、牧場を廃業されて働きに出たら、どこも続かないとのこと。哺育センターは、子牛も人も多く、スピード感も必要だったので、構成員の個人牧場なら家族的な雰囲気働きやすいのでは？との提案でしばらくはアルバイトされていましたが、そこも任期満了になったと聞き、気になって声をかけに行きました。「次の働き口はどうするの？」と聞くと「病院へ行ってみた方がいいのかな、って」「何かありましたか？」「酪農の仕事が難しくて、考えてるうちに遅いって怒られたり、ミルクやる順番間違えちゃったり…不安が大きくなってきて」

確かに、酪農はその家々でちょうどいい塩梅が異なります。子牛の寝藁を変えてくれと言われても、藁は押さえつければなんぼでも入るのです。どれくらいフワツとなのか？目安が曖昧。水槽を洗ってくれと言われて、隅々の小さな汚れも丁寧に洗っていたら、まだやってるの？そこまでやらなくていいんだよ！と。早くキレイにできるなら完璧にやって欲しいけど、時間がかかるならそこまでは結構、と。その家の望む感覚を掴むのが難しい。

「コップにすり切りいっぱい、のように誰でもわかる量が決まっていればできるのにね！」「そうなんです。乳房炎とか子牛の不調も難しくて。」と眉間にシワを寄せて本当に困った、という顔をしていました。

とにかく精神的な不安の解消が第一優先だなと感じて、次の仕事の話はせずに、その日は別れました。数日後、散髪の日だったので、美容師さんに何気なくその話をしていると、同級生がそういう相談にのってくれる施設職員だよ、と紹介してくれることになりました。田舎の心療系の病院予約は2ヶ月待ち。病院じゃなくてもすぐに話を聞いてもらえたら、彼女の不安が楽になるかな、と思って話してみると「行ってみます」とのこと。彼女のご家族にお伺いも立てずに差し出がましかったな、と後で思いはしたけど、体が動いていました。面談当日は、施設職員の方がフランクかつとても丁寧に質問してくださって彼女もするすると話をしてくれました。私以外にも、友達の紹介で別の町の施設に相談に行った、との話も出て、施設と施設は情報共有もしていますよ、と。彼女にも笑顔が出ました。酪農のように家主の感覚に左右される仕事じゃなかったら、不安にならずに持てる力をもっと発揮できるのかもしれない。でもやっぱり、家業で慣れた酪農の方がいいと思い直すかもしれない。決めるのは彼女だけど。「元気になって、次の仕事が決まったら、たこ焼きパーティーしましょうね！」と約束して帰路につきました。

（道中の雑談で私が大阪人だと言ったら、好きな食べ物はたこ焼きです、と言ってくれたので）

施設職員の方のお話では、昨今離農が増え、彼女のように家業が廃業して外へ出たら、仕事が続かない方が増えている。北海道では冬道を運転しての通勤も難しいため家に引きこもってしまう状況も増えている。地域によっては送迎付きの就労支援牧場もあり。いろんな人の手を借りて地域で見守っていかれたら！と思います

ここで書くことの意味をずっと考え続けて23回目。
皆さんの連載を読むうちに、私の中でじわじわと広がったものが今回の行動になったと思います。対人援助マガジンと酪農。どんなに遠く離れたものでも相互理解が生まれるものと信じて、もうしばらく書かせていただきます。



面談終わってホッとしてパフェ
緊張がとけてからの雑談、
楽しかったです

筆者 原田 希

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年 北海道農業士に認定 北海道指導農業士の夫とともに新規就農者の支援を担当

<連載>対人援助学マガジン No. 66

70の手習い・めいきんぐ

横書き都々逸

②

そだちと臨床研究会

川畑 隆

試運転をあとふたつ

貢献寿命

貢献寿命を耳にした時
尽きた人生があったものだから
途切れぬ命のことだと思った

亡くなった後も心に残り続ける
人の命に限りはなく
閉じた人生も区切られただけ

でも 貢献寿命を紐解くと
それは亡くなるまでのこと
尽くせる年月を数えていた

これまでどれほど注いだか
あとどれほど刻めるか
そう問い詰められたりして

いや 貢献寿命は緩くていい
寿命はあるよりないがいい
一人よがりの夢をみる

生きてるだけだと言われても

息が途切れたその後もずっと
静かに笑って貢献している (筆者)

「あなたの写真に また手を合わせ
わたしの心に コピペする」
「貢献寿命と せかされたなら
自分に貢献 していない」
「貢献寿命は 締め切りがない
まったく慌てる ことはない」

アーティスト

詩を書く人は詩人で
作詩家とは言わない
歌詞を書く人は作詞家で
詞人とは呼ばない

詩は人となりにもで及んで
詞はそこに並べられたコトバ
詩はポエムとも言うてもらえて
詞は他に呼びようがない

歌人は短歌を詠む人で
歌(詠)うのは歌手や詠み手
俳人は俳句を詠む人で
川柳を作るのは川柳作家

差異は自分の独自性を主張し
同時に格差も醸し出す
格差をなくそうとの呼びかけに
差異の感覚が静かに立ちこめる

急に増えたかアーティスト
芸術家と訳しさえしなければ
下剋上には無理があっても
抵抗勢力のひとつかもしれない (筆者)

「芸術家だと 呼ばれる人は
アーティストでも 似合ってる」

「みんなタレント テナントみたい
四文字は軽いし 借りやすい」
「わたしを誰だと 思ってるてか
あ・な・ただけでは 足りぬかい」

＊

「ホントの父じゃ ないんだホント
言えたらよかった そうだよね」

事件の被害者となった子どもの「発言」と「いきさつ」として切り取られ報道されたものを材料にしていますが、その報道されたものに私はこう反応しました。

相手の言葉の意味を理解して「そうだよね」と思うこともあれば、理解はまだ曖昧でも「そうだよね」と受けとめた後から、「そうだよね」と気づくこともあるんじゃないでしょうか。

「コメントしないと コメントしたら
ベストコメント ワイドショー」

取り上げられたその事件の背景への陳腐な憶測が飛び交い、ひとりのコメンテーターの居心地の悪さが画面ににじみます。そして言動一致のアンチ・コメント宣言…ワイドな意見でまさにワイドショー。私にとって、いやきっと多くの人たちにとって、「それぞコメントありがとう」でした。

社会的に生きている以上、自分の置かれている「立場」の認識は必要なのだと思いますが、そのことと「自分であること」とをどう両立させるか、その葛藤に鈍感でなかったのが新鮮でした。

＊ ＊

前号に「七・七・七・五に縛られる不自由じゃなくて自由を試してみたい」と書きましたが、字数に合わせる工夫が自由かどうか、言葉を選ぶ自由を実感しています。字数が自由だと最初に用いた言葉がそこに居座ってしまうのです。字数が合わず選ばざるを得なくて選んだ言葉は、やはり選んだ甲斐があるように思います。

『「そうだよね」と受けとめた後から、『「そうだよね」と気づく』のにも、「形から入る」メリットという似たところがあるかもしれません。

(了 2026.9)

いざ、本運転、すたあと

「よそはよそだと あきらめさせて
よそが得すりゃ 尻たたく」

2026年5月5日朝日新聞朝刊の読者欄に高校生が投稿していました。「『あの子は持っているのに…』とねだると『よそはよそ、うちはうち』と言って買ってくれないのに、テストの点が悪かったら『あの子の点数はよかったらしいけど…』と返ってくる。その矛盾を突くと『それとこれとは別の話』と片づけられる。『よそ』ではなく昨日の私と比べて」と訴えています。

ホント、そうです。この投稿は子どもの日の子から親への逆のプレゼントですが、こんなことを書けるようにまで成長したわが子に向けられる満たされた顔が、親から子への正のプレゼントになればいいなと思います。

「それがダメだと 切り捨てないで
これがいいよと 教えてる」

その「『よそ』ではなく昨日の私と比べて」と訴えた高校生、「これがいいよ」と言ってあげたらよかったのにと後悔ばかりの私たちに、いとも簡単に（ではないかもしれませんが）そう言えることの眩しさを感じさせます。

批判を願いや期待に変換できれば、コミュニケーションは変わるんだと思います、その努力の最初にはぎこちなさが伴うにしても、願いや期待を届けたい相手への信頼感はホントなのですから。

応援、母ちゃん！26

～ 対人援助とお金の話——助成金と寄付の実践から ～

たまむら ふみ

玉村 文



想いを実践に変え、支援を続けていくために

対人援助の実践には、営利を目的としていなくても活動費が必要です。けれど、対人援助職を目指すとき、「人を援助する技術」について学ぶ機会はたくさんあっても、「援助を続けるためのお金をどう集めるか」ということについて学ぶ機会は、なかったと言っても過言ではありません。かくいう私自身も、就職活動をしていた頃、対人援助職が「数字を追う」仕事になるなんて思っていませんでした。もちろん、それをやりたいとも思っていませんでした。

私の中には、どこか「援助に関わる費用は国や自治体が支払ってくれるもの」というイメージがあったのだと思います。だからこそ、そうした仕組みの中で働ける職場を選びました。ところが、実際に仕事をしてみると、「もっとこうしたい」「こんな取り組みがあつたら、子どもや若者にとって良いのではないか」というアイデアが生まれても、そこで立ちはだかるのが「では、その活動費をどうするのか」という問題でした。過去には、組織の蓄えを少し使わせてもらい、新しいチャレンジをしたこともあります。

私が所属する組織は子どもや若者を対象としていることもあり、できるだけ参加費を低く抑え、参加のハードルを下げるのが暗黙の了解になっています。自治体や国から予算をいただいて事業を行っている部分も大きい。つまり、構造的に見ると、私は「子どもや若者のために働いている」一方で、組織を通して自治体や国からお金をいただいて仕事をしていることになります。

そこに気づいたとき、少し見え方が変わりました。「誰のために仕事をしているのか」と、「誰からお金をいただいているのか」は、必ずしも同じではない。

そして、その構造を理解しないまま「もっと良い援助を」と考えていると、活動の可能性が資金面で行き止まってしまうことがあるのです。

対人援助と「お金」をどう考えるか

対人援助とマネタイズについての専門性としては、ファンドレイザーという職種・専門領域があります。

私はファンドレイザーとしての専門性を持っているわけではありません。ただ、第二子の産育休から復帰した職場で、ここ5年ほど、助成金を獲得して事業を展開する経験を重ねてきました。助成金の提供先が求めていることを読み取り、その内容に沿って「私たちがやりたいこと」を表現する。実現可能な計画を立て、予算を組む。採択されたら、実際に事業を実施し、子どもや若者、ボランティア、支援者に還元する。そして、成果を報告する。こうした一連のプロセスには、戦略を立てること、伝え方を工夫すること、実行することが含まれています。

振り返ってみると、私の「向学心」「創造性」「戦略的思考」「目標達成思考」といった強みを使うことができ、意外にも、私はこの仕事を「まんざら嫌ではない」と感じていました。むしろ、面白い。

助成金は、採択されればお金が振り込まれ、不採択なら振り込まれない。結果が比較的わかりやすいことも、私にとっては良かったのかもしれません。成果がすぐには見えにくい子どもや若者との関わりや対人援助の仕事をしているからこそ、別のところで「やったことの結果」が比較的わかりやすく返ってくる仕事がある。そのことが、仕事の中に一つのリズムをつくってくれているようにも感じます。そこで今回、「対人援助とお金」というテーマについて、私自身の実践を振り返ってみることにしました。

対人援助学の中で「お金」はどう位置づけられているのか

私が予備的に調べた範囲では、対人援助とお金については、大きく三つの視点から考えることができそうです。

一つ目は、**対人援助職の報酬と燃え尽き**です。

給与や報酬が仕事の満足度にどう影響するのか。あるいは、給与だけではなく、ワークライフバランスや働き方が援助職の継続にどう関係するのか、といったテーマです。

二つ目は、**援助を受ける人とお金**です。

給付や金銭管理そのものが援助の中心となる場合があります。また、お金を本人の選択肢や自己決定を広げるための資源として捉える視点もあります。

そして三つ目が、**対人援助のマネタイズ**です。

社会的な事業では、援助を必要としている人自身には支払い能力がないことがあります。その場合、寄付、助成金、行政委託、企業による負担、有料サービスとの組み合わせなど、さまざまな方法で活動を支える必要があります。

一方で、カウンセリングやコーチング、講座などのように、援助を受ける本人が直接対価を支払うモデルもあります。

ここでは、「**誰が困っているのか**」と「**誰がお金を払うのか**」を分けて考えることが重要になります。

今回、私が考えてみたいのは、この三つ目の「対人援助のマネタイズ」です。特に、企業などからの助成金と、一般市民からの寄付について、私自身の実践から考えてみます。

助成金を獲得するという仕事

この5年間、私は企業などから助成金や現物寄付をいただきながら事業を展開してきました。現物寄付というのは、企業からケーキやお米をいただいたり、農家の方から野菜を提供いただいたりするようなものです。私の職場では、子ども食堂のような取り組みも行っているため、食材という形で寄付も集まります。

現金でいただく助成金については、まず募集要項を確認します。「子ども食堂を対象としているか」「自分たちが行っている活動は対象になるか」、「使いたい費目が助成対象になっているか」などを確認し、条件に合いそうな助成金を選びます。その上で、応募書類を作成します。

私はこれまで、年間 5～6 件ほど申請してきました。採択されれば助成金が振り込まれ、申請した計画に沿って執行していきます。助成金の多くは、食材費、交通費、保険料などに使うことができます。一方で、人件費や研修参加費など、人材育成に使える助成金はまだ少数です。だからこそ、私は「人に使えるお金」を得ることにも関心があります。ボランティアや職員の待遇に還元したい。人が活動を持続けられる環境をつくりたい。そう思うので、条件に合う募集があれば応募するようにしています。

助成金獲得は「コミュニケーション」なのかもしれない

助成金を出す企業や団体にも、社会貢献活動として「どのような成果が生まれたのか」を示すことが求められます。年度末に収支報告書を提出するだけではありません。助成金がどのように使われたのか。どんな人に届いたのか。どんな変化が生まれたのか。写真などのビジュアルを使って示したり、SNS で発信したりすることもあります。私は、こうした一連の取り組みも、コミュニケーションなのだと感じるようになりました。しかも、必ずしも相手と直接顔を合わせる必要はありません。文章を書く。写真を選ぶ。活動の成果を数字にする。こちらのやりたいことを、相手が理解できる言葉に翻訳する。こうした行為そのものが、相手とのコミュニケーションになっているのです。

実際、助成金の申請時と事業実施時では、状況が変わることもあります。「設備費が思ったより抑えられたので、その分を食材費に回したい」そんな希望が出てきたときには、助成金の担当者に連絡します。現在の状況を説明し、こちらの希望を伝え、先方の意向を確認する。そして、必要に応じて計画を変更する。こうしたやり取りの中で、柔軟に対応していただけると、「応援してもらっている」という実感を持つことができます。単に「お金をもらって、報告する」という関係ではありません。相手が求めていることを理解し、自分たちがやりたいことに引きつけて表現し、実践し、その結果を返していく。そう考えると、助成金獲得は、一種のコミュニケーション実践なのだと思います。

「営業」と「対人援助」は、意外と近い？

助成金獲得を経験する中で、私は営業活動にも少し似ていると感じるようになりました。営業というと、「売り込む」「数字を追う」というイメージがあり、対人援助職の私にとっては、以前は少し距

離のある言葉でした。でも、よく考えてみると、「相手が抱えている課題は何か」「その課題に対して、自分たちは何を提供できるか」「その価値を、相手に伝わる形でどう提案するか」ということを考えている点では、共通する部分があります。こちらの活動を一方的に「応援してください」とお願いするだけではありません。助成する側が何を大切にしているのかを理解し、そのニーズと、自分たちが実現したいことを重ね合わせていく。その提案がうまくいけば、活動資金という形で支援につながる。そう考えると、「営業」と「対人援助」は、思っていたより遠いものではないのかもしれないかもしれません。

現在では、私自身の実践を職場の同僚にも伝えたいと思い、「助成金活用講座」を実施するところまでできました。「釣った魚をくれる先輩」になるよりも、「魚の釣り方を教えてくれる先輩」になりたい。私自身が先輩たちからそうやって経験を引き継いできたように、次の人にも方法を渡していきたいと思っています。

今年は「ふるさと納税型クラウドファンディング」に挑戦

そして今年度、新しいチャレンジをしています。孤食や貧食の予防を目的とした食堂「ひまわりカフェ実行委員会」の事務局として、ふるさと納税を活用したクラウドファンディングに挑戦しています。京都市の募集に応募して採択され、2026 年夏から冬にかけて、30 万円の活動費を集めることを目標にしています。

ふるさと納税の仕組みを活用した事業指定寄付なので、返礼品はありません。その代わり、寄付をした方には税制上のメリットがあります。私にとって、一般市民の方に向けて寄付を呼びかけることは初めての経験でした。まず取り組んだのは、寄付募集サイトの作成です。京都市が委託している企業の方から、サイトの作成についてアドバイスやフィードバックを受けました。そこで教えてもらったのは、

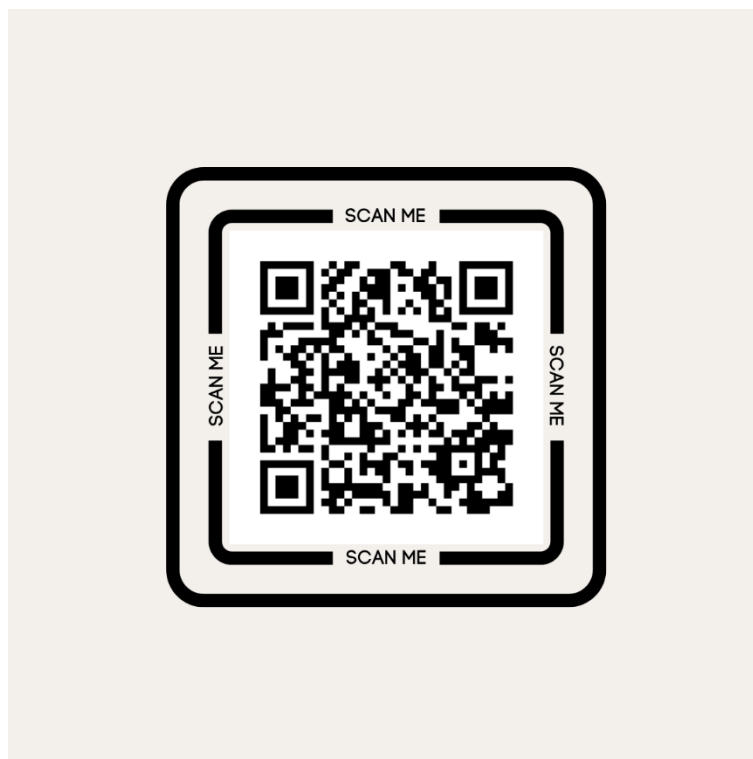
- ・写真を加工して、活動の雰囲気を伝える
- ・長い文章はビジュアル化する
- ・数字を入れる
- ・具体的な事例を描く
- ・応援コメントを 5 名以上からもらう

といったことでした。

特に面白かったのが、事例の「4 コマ化」です。これは私の思いつきでやってみたのですが、文章だけで説明していた活動を 4 コマ漫画にしてみると、思いのほか好評でした。「伝える」というこ

とは、文章を書くことだけではない。どうすれば相手に届くのかを考え、表現方法を変える。そんなアウトプットのスキルも、この経験を通して少し身についたように思います。サイトは 2026 年 8 月から 12 月まで公開されています。ぜひご覧いただけたらうれしいです。

【ふるさと納税型クラウドファンディングのサイト】



「寄付してください」と言うことの難しさ

サイトを公開してからは、SNS でカウントダウンをしたり、応援コメントを紹介したりしながら、周知を続けています。一方で、寄付型のクラウドファンディングは、関係者や知り合いからの寄付が中心になりやすいということも教えてもらいました。そこでチラシをつくり、関係者をお願いしたり、身近な人に周知したりしています。

そんな中、知り合いから、「少しですが寄付しました」というメッセージが届くことがありました。そのたびに、私はうれしくなると同時に、「私もこんなふうに、軽やかに人にお金を使える人になりたい」と思うようになりました。そこで今年度は、練習の意味も込めて、自分自身も 3 団体にクラウドファンディングで寄付をしてみました。すると、少し不思議な感覚がありました。お金を使ったことで、「お金がなくなった」という感覚よりも、「大事なことにお金を使えた」という感覚のほうが強かったのです。

浪費したわけではない。自分が大切だと思う活動に、お金という資源を渡すことができた。そのことに、少し誇らしささえ感じました。お金を「減るもの」としてだけ見るのではなく、「大切なものに循環させるもの」として見る。私自身の中で、お金に対する感覚が少し変化した経験でした。

「返礼品がない」ことから見えてきたもの

一方で、今回の取り組みを通して、寄付を集めることの難しさも感じています。ふるさと納税を利用している人は年々増えていますが、その大きな魅力の一つは「返礼品」です。今回のような事業指定寄付には返礼品がないため、「返礼品はないの？」と少しがっかりされたこともありました。「自分に何が返ってくるのか」が見えにくいことは、やはり寄付のハードルになるのだと思います。けれど、対人援助の多くは、すぐに目に見える「見返り」があるものではありません。だからこそ、「あなたのお金が、こういう活動になりました」、「この活動によって、こういう人に届きました」という循環を、できるだけ見える形にしていけることが大切なのだと思います。

寄付とは、単に「お金をください」とお願いすることではなく、お金がどこへ行き、何を生み出すのかという物語を共有することなのかもしれません。

お金より「労力」のほうが差し出しやすい？

もう一つ、今回とても印象に残った出来事があります。クラウドファンディングのサイトを公開するためには、応援コメントを5名以上から集める必要がありました。スケジュールの関係で、3～4日ほどの短期間で、コメントとプロフィール写真をお願いしなければなりません。正直、私はかなり悲観的でした。「皆さん忙しいのに、こんな無理なお願いをして大丈夫だろうか」、「数日でコメントを書いてもらうなんて難しいのではないか」と思っていました。

ところが、お願いしてみると、皆さん驚くほど早く送ってくださいました。思っていたよりも、ずっと簡単に集まったのです。そこで気づいたのが、「寄付のほうが、ハードルが高いのかもしれない」ということでした。もちろん、これは私の今回の経験から得た一つの実感にすぎません。

応援コメントを書くことにも、写真を準備することにも、相当な時間と労力がかかります。時給換算すれば、寄付金よりも大きな「資源」を差し出している人もいるかもしれません。それでも、「お金を出す」という行為には、別の心理的なハードルがある。「お金は自分の手元からなくなるもの」という感覚が、私たちの中に強くあるからなのかもしれません。一方で、時間や労力なら「応援」として差し出しやすい。なぜなのでしょう。

お金と労力では、私たちの中でどんな意味づけが違うのでしょうか。そして、対人援助の活動を持続させるためには、「時間」「労力」「専門性」「お金」といったさまざまな資源を、どう循環させていけばいいのでしょうか。今回のクラウドファンディングを通して、私はそんな問いを持つようになりました。

「お金を集める」ことも、対人援助なのかもしれない

これまで私は、対人援助と「お金を集めること」は、少し別の仕事だと思っていました。援助する人と、お金を集める人。現場と、経営。支援と、営業。そんなふうに分けて考えていたのだと思います。

けれど、実際に助成金を申請し、寄付を募り、活動を伝え、支援者とやり取りしてみると、その境界は思っていたより曖昧でした。私たちがやりたいことを伝える。相手の価値観やニーズを理解する。お互いにとって意味のある形を探る。いただいた資源を、必要な人に届ける。そして、その結果をまた伝える。これは、対人援助の実践そのものと、かなり似ています。対人援助の技術だけでは、援助を続けられないことがあります。想いがあっても、資源がなければ実践できない。

だからこそ、「お金を集めること」を対人援助の外側に置くのではなく、**援助を持続可能にするための一つの専門性**として捉えてみてもいいのではないのでしょうか。そして、お金を「奪い合うもの」ではなく、「大切なものへ循環させる資源」として捉え直すこと。それは、援助する側だけでなく、寄付する側にとっても、豊かさにつながる可能性があります。

私自身、まだまだ実践の途中です。助成金、寄付、行政、企業、そして受益者。「誰が困っていて、誰が支払うのか」、「誰が、何を応援したいと思うのか」、「そのお金は、どんな未来につながるのか」。これからも、実践しながら考えていきたいと思います。

もしこの記事を読んで、「ひまわりカフェの活動を応援したい」と思ってくださった方がいらしたら、ぜひクラウドファンディングへのご寄付・ご協力をお願いいたします。一人ひとりの小さな応援が、子どもや若者の食と居場所を支える活動につながっていきます。

鬼の念仏

大津絵の中で一番よく知られているもの。
僧衣姿をした鬼が念仏を唱えながら町を
歩く姿を描いて偽善を風刺している。
なぜか赤ん坊の夜泣き止めや魔除けのお
守りとして重宝がられた。

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長



大津絵 **CARTOON**

大津絵は江戸時代に天津周辺で売られていた手描きの民画で、その表現は現代にも引継がれ
多様なグッズ商品展開もなされています。

元々は各地から京都や大阪を訪れた旅人たちが旅の土産としてに買い求め各地に広がりました。
定番のテーマや登場人物があり、教訓的なものや風刺的要素の盛り込まれたものもあり、そこ
から飾り的な要素より縁起物として護符（お守り）的な要素が強くなりました。

ここではその中で有名な10種類をモチーフとして私流のひねりを入れた1コマ漫画にしてみました。

釣鐘弁慶 (つりがねべんけい)

比叡山の釣鐘を奪い、かついで逃げたとされる弁慶の姿はその怪力ぶりから身体剛健のお守りとされている。

三井寺の釣鐘には弁慶が引きずって来たときに付いたとされる傷が残っているという。



鷹匠

鷹を使って獲物を捕まえる鷹匠の姿を描いた物。

利益を逃さず手に入れる。失くしたものが見つかる。というご利益があるとされた。



槍持奴 (やりもちやつこ)

大名行列の先頭を歩く奴が大名の威光をバックに威張っている姿を嘲笑するように描かれたものだが道中の安全を祈るお守りとして旅人たちに好まれた。

矢の根五郎

父の仇を打つために矢の根（矢じり）を研いでいる曾我五郎時政の姿。

歌舞伎荒事の大表作だが正月の夢に出て来た兄のお告げを聞いて兄の元に駆けつけるという話。勝負運、仕事成就、厄除などを願うお守りとされた。



藤 娘

藤の花の精が娘の姿で現れ踊る姿は良縁成就や恋愛成就のお守りとされ広まり、それが歌舞伎の演目となっても広まった。



瓢箪鯨 (ひょうたんなまず)

瓢箪を使って鯨を捕まえようとしてもどうにもならない事を描いてつかみどころのないことを表現している。

鯨を描いている事から水難除け、地震除け厄除けのお札とされた。

座 頭

現代では目の不自由な人に対する差別的なイメージから描かれることも少ないが、江戸時代には按摩や音曲で生活する者とそれらを統括し富や権力を持った『検校』という存在があった。

見た目で人を判断してはいけないという戒めもある。



雷光の太鼓釣り

雷神がうっかり太鼓を落としてしまい、それを釣り上げようと苦労する姿を描いている。

権力への風刺を描いているが、雷除けの縁起物とされた。



外法大黒

寿老人と大黒天の絡みで『寿命』と『財』を風刺している。

高慢の長い頭に大黒が梯子をかけて登り頭を剃るという姿だが芸事の上達や商売繁盛の縁起物とされた。



川下の風景②

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【足るを知る者は富み、強めて行ふ者は志有り】

“足るを知る”方だった。元行政職で、財政や人事、福祉部局を渡り歩いた。定年後は、地域に請われて市議会議員を務めたこともあったようだが、あまりそのことは多く語らなかった。行政システムのことを良く知っているだけではない。何より、人というものを良く知っておられた。要支援の方だったから三カ月に1回の訪問時、よく世の中のことや、「人」について教えて頂いた。最後にお会いしたのは、亡くなる3日前。今思えば、ご自身で死期を悟っておられたのだろう。孫に本を送ったこと、定期的に子供たちと鰻を食べに行くこと。これまでそんなことを尋ねられたことはなかったが、「どうなるんやろうね。米津さんはご存知ですか？」吐血の症状について尋ねられた。珍しいことなのだ。40歳で妻を亡くされてから、自分は60歳で死ぬだろうと常々語ってこられた。それが16年も余分に生きさせてもらった、と。だから悔いも思い残すこともないし、大病を繰り返し、その都度救って頂いたが、もう二度とメスは入れない、と最後にも語っていた。それが、「自分はどうなるんだろう」と尋ねるのだ、私に。

自宅の洗面台には吐血した痕跡があったという。そのままベッドで亡くなられた。家人や救急車を呼ぶことだってできただろう。過去にはそうして生きながらえた。しかし、今回はそれをしなかったのだ。

「もう、十分に生きさせてもらった」そう思いながらベッドで、一人眼を閉じる光景が思い浮かぶ。足るを知る者は富み、強めて行ふ者は志有り。お金は沢山あっただろう。もっと贅沢しようと思えばいくらでも出来たはずだ。日々、ラジオを聴き、料理をこさえ、気が向けば本を読み、ステレオを聴き・・・そんな穏やかな日々の意味を知る人だった。

最後の訪問時、珍しく、彼と私の間に本が一冊置いてあった。ブックカバーが掛けられ、中身はわからなかった。いつもなら尋ねただろうが、その時は何となく藪蛇のようで聞くことがなかった。

今思い返せば、尋ねておけばよかったと思うし、知らぬままで良かったとも思う。

【埼玉川口のケアマネジャー事件について】

被害者が同業者であるケアマネジャーであるが故に業界に広がるショックは大きい。

亡くなった方々のご冥福をお祈りすると共に、詳細な事実を知らずに憶測だけで事件を評価することは差し控えたい。

一方で、自宅を訪問することが義務づけられている中で、密室内で援助関係という特殊な二者関係を築く業務であるが故に、今回のことを事件としてではなく、専門性から見立てておかないと、「ケ

アマネジャーの仕事は危険、怖い」と勝手なレッテル貼りが横行してしまうのは、この仕事のやりがいや挫き、人材不足に拍車をかける恐れもあるため、いくつかの視点から考察を試みたい。

以下は、一般的な考察であり、今回の事件の真意を問うものではない。

1. 援助関係という特殊性

事件の加害者と被害者の関係性が単なる援助関

係であったか、それ以外余地があったかは定かではない。

どちらかが一方的な感情を抱くということも往々にしてある。

ケアマネジャーに限らず、援助関係とは一般的な人間関係とは異なる特殊性を帯びている。

まず、そのことを援助者は忘れがちである。

困っているクライアントを助けたい、という利他的精神は福祉の根源であるが、これは利己的感情に昇華されやすい。

「せっかく一生懸命にやってるのに」

「なんでこんなことも出来ないのか」

援助者である「私」の思いに応えないことが許せない。

これは、逆も然りであって、クライアントから求められる承認欲求にも表れやすい。

いずれにせよ、円滑な援助関係を初期段階から形成しようと援助者が思うほどに、援助者は安易に信頼を勝ち得ようとする。

それは「寄り添い」や「共感」という援助スタンスに現れるが、果たして本来のその意味を援助者はどこまで理解しているのだろうか。

その理解の仕方によって、クライアントとの援助関係は大きく変化するし、冒頭のそれ以外の感情余地が入り込む隙間を与えかねない。

2. 家族システムへの関与という視点

当該事件の家族構造に限らず、世の中的には「8050」「9060」という高齢の親と、未婚の子世代が二人で暮らす家族構造に着目されやすい。

そこに注目が集まるのは、子が介護問題を抱え込み、追い込まれた先に親を殺める事件が後を絶たなかったり、親が子の将来を悲観して事件を起こすことが報じられることが多いからだ。

問題は、なぜそうなるのかという着眼である。

家族システムの視点で視れば、高齢の親子関係は

閉鎖的なシステムに陥りやすい。

高齢の親に介護が必要になれば、四六時中、介護者である子が付き添っていなければならない。

そうなる仕事は出来ない上に、経済的な困窮に陥りやすく、介護サービスの利用控えに繋がることで、物理的にも社会環境との接点が減少する。文字通り、自宅の家屋が強固な家族の境界線となり、その境界を跨ぐことが困難となってくる。

援助者は、その境界を越えて行く。

閉鎖的な家族システムにインプットを送り込み、家族内の相互作用に変化を起こそうとする。

問題は、そのインプットの仕方なのだ。

「もっと介護サービスを使いなさい」

「独りで抱え込んでダメ」

「介護者の負担を減らさなければ」

これらの正論は、誰にとっての正論だろう。

援助者側の勝手な正論は、家族システムにインプットされた途端、時に意味づけを大きく変える。

「もっと介護サービスを使いなさい」

⇒「きちんと介護が出来ていない」

「独りで抱え込んでダメ」

⇒働かず、良い歳をして親の介護を抱え込んでいる事への不安

「介護者の負担を減らさなければ」

⇒家族内の役割の喪失

家族システムの見立ては、家族歴の見立てでもある。

なぜ、今の現状に至っているのか。親の思い、子の思い。不安、愛情、憎しみ、役割変化。何事も第三者が言うのは容易い。それは、システムの外にいるからだ。逆にシステムの外にいるからこそ視えることがある。

3. 共依存という視点

老々介護、親と子の介護。

時に援助現場では「共依存」という言葉が当たり

前のように語られる。

その共依存は、大方、否定的に語られることが多いが、この言葉は非常に定義付けも曖昧で、言葉の使用者によって解釈も異なる。

「共依存」における関係性の視点として

- ・個人が抱える依存性
- ・ケアを中心に据えた相互関係性

つまり、依存関係性は、相互の期待と役割において保持されているし、時に個人の病理性によって強く縛られている関係性かも知れない。

援助者による「共依存」＝悪という論調による介入は危険だ。

そこにある根深さを理解せず介入することで、クライアントシステム内で保持されている相互関係を壊しかねない。

エコロジカルな視点で考えれば、変化しないものなどない。

例えば時間

この1秒と、この先の1秒では世界が違う。

つまり、クライアントシステムがどれだけ変化を拒んだとしても、変化は必ずやってくるのだ。

永遠に続く共依存関係などあり得ない。

ケースの緊急性によるだろうが、今、目の前の関係性に短期介入しなければならないのか、それとも中長期視点で関わりながら徐々に変化を誘発するのか。

私の経験上、短期介入で上手くいったケースなどない。

4. 終わりに

今回は、事件の初報に触れて、同業者であるが故にいくつかの視点で考えたことを記述した。

恐らくワイドショーは好き勝手に解釈するし、SNSでは、根拠のない個人情報の暴露が進むだろう。

そんなことをして何の意味があるのか。

罪は罪として、真実は法場で解決されればよい。

私たちが考えなければならないのは、どうすれば防げるのかだ。

バス車内で起きた対人トラブルで、高齢者が刃物を振りかざす時代だ。

なぜ、街中を歩くのに刃物がいるのか。

トクリュウなどに見られる昨今の社会情勢が自衛意識を高めているのかも知れない。

だったら、こちらも自衛すれば良いのか。

防護服を着て訪問しても防げるものではない。

また、人材不足は今後5～10年で拍車がかかる。複数人数で訪問する余裕なども無くなるだろう。

ケアマネジャーは介護保険サービスシステムでは要の職種とされる。

だからこそ、その専門性と人材育成、確保は欠かせない。

2026.8.25 米津達也

こころ日記「ぼちぼち」④

まちの保健室の役割

地域の子ども・若者の居場所「まちの保健室「ちむちむ」」を開室して6年がたった。

主な活動は月2回の開室、相談がある人は予約制で無料。性に関わるからだやこころに特化しているので、たくさんの方が来室するわけではないが、少しずつではあるが、保健室の存在が知れるようになってきた。

保健室は2年間自治体の助成金をもらったので、子どもに関わる悩み相談のリストとして登録されている。そのことでも認知度が上がってきたのだと思う。喜ばしいことだ。

他の活動として、年5回の「すべての人のための性と生の基礎学習講座」を開催している。年間累計約70名以上の人たちがこの学びに参加している。参加者の職種は、教員、SSW、学校のSC、行政の子ども支援課職員、発達障害に関わっている人、障がい児・者施設職員、養護施設職員、学童指導員、放課後データービス支援者などだ。中には思春期の子どもを持つ親の参加もある。

内容は、今よく聞く「包括的性教育」について、子育ての中の性教育、障がい児・者の性教育など。参加理由を尋ねると、口々に性についての学び場がなく困っていると返ってくる。多くのおとなが、科学的なことを含め性のことをちゃんと学んでこなかった現実、ため息しか出てこない。

最近は発達相談センター、障がい者施設などからの相談も増えている。

思春期にはたいていの子どもは、からだや心が成熟していき、二次性徴を迎える。しかし発達に障害がある子や様々な障

がいのある子どもの思春期について、どうも支援する側の大人の理解度がとても低いと感じる。そういった子どもたちには、二次性徴が来ないと思っているのか、来ないほうがよいと思っているのか、と考えてしまう。

悩み相談の多くは、人との距離感で困っている、施設内での恋愛行動、性被害、性加害がほとんど。

このような問題は、障がい児・者の施設では昔からよくある事例だと言われるが、いつまでもそのようなことが、支援する人たちの困りごととして継続されてよいはずはない。何が問題で、何に困っているのか、本当に困っているのは誰なのかを考えなければならないと思っている。

「恋愛どうする？結婚どうする？」

今、知的障がいのある青年たち7人のサークルに関わっている。青年と言っても平均年齢は40歳そこそこ。昔青年だった人たち？40代から70代後半までの男性ばかりで、正直おっさんサークルだ。結成して16年になるという。結成のきっかけは、自分たちの未来について考え実践していくこと、楽しく生きるためのノウハウを身につけることなどさうだ。月一回の会議を持ち、年一回は福祉関係の大学に出向き、一泊二日の学生との研修と交流会を開催している。私たち保健室メンバーも、彼らの活動場に出向き、性に関する話をすることがある。

先日、「恋愛どうする？結婚どうする？」というテーマで勉強会を開くというので、誘いを受けた。ぜひアドバイスなどしてもらえると嬉しいとのことで参加した。

「恋愛について、日ごろ思うことを語ってみよう」というテーマから始まった。

司会進行は、二代目代表の H さん。

★今までに恋愛したことがある人は？

「あれが恋愛だったかどうかわからないけど、過去に好きな人と話すことはあったな」

★じゃあ恋愛するきっかけってどんなことがあるかな？どうやって出会う？

「ヘルプで出かけた先で、同じヘルプ利用者とばったり！なんて」

「作業所の仲間」

「カラオケで出会った人」

「SNS、ネットサークルでの出会い」

「居酒屋」

「旅先で…出会うかも」

「でも、正直作業所では、人とは話さない、特に男女口を利いてはダメと言われることがあるからなあ」

「マッチングアプリは、ちょっと怖い。障がいがある人が、よく騙されたりしているから」

★恋愛、結婚のこと考える？

「恋愛はしたいけど、きっかけがない」

「しゃべるくらいはできるけど、そこからどうなるかどう発展するのか？何を話せばいいの？」

「恋人は考えないけど、遊び相手がほしい」

「恋愛の先に、結婚は当たり前のようになっていくと思う。結婚の形にも悩む。一緒に暮らすの、別々など…」

「彼女ができたなら、映画や食事もしたいな」

「やっぱり友達、仲間と違う特別なつながりがほしいな。彼女がほしい」

「結婚、恋愛は自由をうばわれるとよく聞くけど、どうなん？」

「まあ結婚するかしないかは、その人の自由だな」

「今度は結婚したい！今から色んなことが始まるから楽しみ！」

「一緒に時間を共有できるのがいいな」

今回の恋愛や結婚をテーマにした話し合いは、初めてだったそうだ。今までサークルでは、仲間同士でもそのような話はしなかったという。

一人ひとりが口々に語る恋愛談義に花が咲き、聞いている私たちも、思わず突っ込

んで質問したり、アドバイスをしたり、笑ってしまう場面もあった。その後、デートのシュミレーションをして、大いに盛り上がったのだった。

最後に具体的なことを考えることになった。結婚しなくても、一緒に暮らすとなればどんな準備がいるかな。家事は誰がするのか？経済的なことは？お互いの家族への理解は？子どもは持つの？などなど、どんどん話が膨らんでいく。できる、できないは別にして、想像してみるものの大切さを共有できたひとときだった。

彼らの一人ひとりの環境は違う。実家にいる人や、グループホームで暮らす人。働く場所も家族も様々。お酒が好きな人、タバコが好きな人、ユチュウバーとして発信している人などなど…。

ほとんどの人は、一人では出かけられない。しかし社会的資源をうまく使いながら、できるだけ自分のしたいことを実践している。そしてもう若くはない彼らは、今でも恋愛や結婚にあこがれを持っている。未来について思うことがたくさんあるのだということが、伝わってくる。良い出会いがあるといいなと思う。

勉強会のあと、40代の R さん、

「親を安心させるために結婚したい。子どももほしい。今は実家暮らしだけど、グループホームにいたから、家事はバッチリ！でも、なかなか出会いが…」

30代後半の S さん、

「うちの母親はうるさいねん。デートしたら絶対ついてくると思う。信用されてないねん」

今年 50 代になり糖尿が心配な M さん、

「俺の部屋汚いからな、友だち呼べへんねん。しかも恋愛の話はするなって親から怒られるし…」

いろいろだな…。

サークルの今年の目標は、今後も継続できるように、若い仲間を増やすことだと聞いた。素晴らしいことだ！

つづく



miho Hatanaka,

同じ看護学生でも、看護師になることを目指している学生と助産師を目指す学生とでは視点も少し異なる。もちろん、心理学を担当する1年生と、助産学の特別講義で会う4年生との違いもあるだろうが、「いのち」について学ぶ動機の違いは大きいと感じる。今回は助産学生への講義の話と、彼女らによる「いのち」の“詩”を。



【第23話 いのちのうた 8 : 大人のコトバ】

以前、京都の大学で助産師を目指す学生に対して「親役割援助論」という科目の講義を受け持っていた。その当時携わっていた厚生労働省の「こんにちは赤ちゃん事業（乳児家庭全戸訪問事業）」の仕事や区役所での母子保健指導等の経験を踏まえた内容を担当した。家庭訪問は生後早期の乳児のいる母子が対象で、「様々な不安や悩みを聞き、子育て支援に関する情報提供等を行うとともに、母子の心身の状況や養育環境等の把握及び助言を行い、支援が必要な家庭に対し適切なサービス提供につなげる」とうたわれている。病院等の施設では分娩を中心としたケアがメインになるので、卒後、多くは施設で働く学生に“お産を終えて家に帰った母子の現実”に触れさせることは意義がある。母子にとってはそこそが“日常”となる場で、助産師がどのように関わることができるかを考える授業でもあった。必須となっている分娩介助などの実習もほぼ終え、年が明けたら国家試験のための勉強が始まるという時期の講義では、学生もこれまでに学んできたことと照らして理解しようと努めて熱心であった。

出産という大きな仕事を終えたばかりの母親にとって、型どおりにはいかない育児は特に初期では戸惑うことも多く、“生命の誕生”という“崇高な”場に目を奪われがちな学生には母親からこそ多くのものを学んでほしいと願う。「指導」を掲げて向かうと、必要なものは届かないように思う。教科書に書かれていないことがそこにはある。

「いのち」

作：K大学の皆さん

赤ちゃん であり 高齢の方。
“か弱い”もの であり 強いもの。
白くてふわふわしているもの であり 黒くて冷たいもの。

何のためにいのちがあるのか
答えはわからないけど、
それを見出すためにいのちがあるんだと思う。

「いのち」は、
神秘的なもの
輝いているもの
ろうそくの火。

あったかくて、ゆらゆらしてて、
周りを明るくしてくれる…
でも、
一瞬で消えてしまったり、
蠟が溶けていずれ火が消えてしまう…
決して必ずあるものではなくて、儚いもの。

誕生して初めて外界の空気を吸った時から、
最期息を引き取る瞬間まで
いのちは続いていると思う。

生きているみんなが平等に持っているもの
いのちの重みは同じであると思う。

ご先祖さまの誰がかけても、
私は産まれてくることができなかった。

とても尊いもの
守られるべきもの
重いもの

「いのち」は、
かけがえのないもの、
他者が脅かすことをしてはいけないもの。
普遍的なもの。
生命であり、精神活動であり、人や物事の本質。

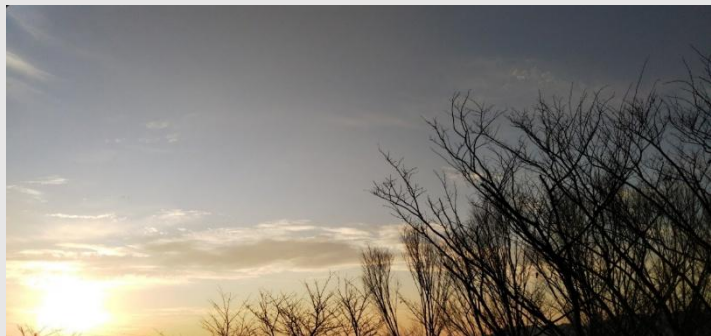
過ぎ去っていくもの、
止まらない時間の流れ。

「いのち」がなくなるということは、
「死」を意味する気もするし、
かといって、
イコールでは結ばれないような気もする。
物理的に死んでしまってもいのちは残る。

「いのち」は、
自身の生き方そのもの。

一つの存在ではないこと、
他のいのちとのつながり。

何にも変えられない 大切なもの



dawn

他者を支えようとする欺瞞に浸った自分からの再生の旅路

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

人の役にたつという生き方とは

「人様の役に立ちなさい」と教わったのは、いつのことだったのか。

原っぱをかけまわり、やたらと昆虫をおいかけた、物心がつくころ？

大好きだった幼稚園に通っていたころ？

それとも小学生時代？

・・・まあつまり、子供の頃だろう。母から言われたのだろうか。あるいは、今は亡き祖母に言われたのだろうか。まったく思い出せない。

でも、「人の役にたつ」とか、「人を支える」ということが、かけがえない大事な生き方として、私の人生につきつけられたことは、狂いようもない事実だったと思う。

子ども心ながら、「人の役に立つとはなにか」と考え始めて、何度も迷って、今に至っていると思う。

「役に立つ」ということは、人に喜ばれる生き方をすること。

「役に立つ」ということは、世の中で喜ばれる生き方をすること。

例えば、ノーベル平和賞受賞が目指せるような生き方とか、芸術・スポーツ・科学などの領域で活躍ないし貢献して、多くの方々に感動や夢を与えられるような生き方だと思う。

でも、「役に立つ」ということは、美して、尊くて、カッコいいだけではない。

「役に立つ」ということは、両義的だ。

「役に立つ」ということは、何かの、または誰かのために、自身の身を挺すること。

「役に立つ」ということは、何かの、または誰かのために、自身を消耗すること。

「役に立つ」ということは、献身、滅私、挺身、犠牲を回避できない。

それは、時に悲しかったり、辛かったり、あるいは、損を感じる生き方かもしれない。

私にとっての「役に立つ」とはどんな生き方なのか、という問いは、若かりし頃の大きな悩みであり、課題でもあった。

やがて私は、警察官とか、保育士という職業に目をつけた。

街の平和をまもりながら、自分の生活を謳歌すれば、きっとそこそこ楽しく生活できるのではないかと考えた。あるいは、無邪気な子どもたちの笑顔をみて、慈しみをもって彼らの成長にかかわれば、それは充実した人生と言えるかもしれないと感じた。

でも、結局、そのような道を、選ぶことはなかった。

騙し合い、せめぎ合いを避けるために

私が生きた青年時代には、高度経済成長期の絶頂と崩壊が蠢いていた。

バブル崩壊、連日の自殺報道、その背景には家族離散現象。

そんなニュースを横にみて、私は、経済システムを背骨に持つ社会の本質は、利益追求にあるようにみえた。その本質は副次的に、人の騙し合いやせめぎ合いを強め、「生き馬の目を抜く」ように、「生きたまま目をくり抜く」ような人間関係が蔓延っていきように感じた。そして私は、とても弱い人間だった。騙し合い、せめぎ合いが蔓延る社会で、到底生きていけないと臆していた。

「いい大学にはいって、いい会社にはいって、出世する」とか、「スポーツや芸術で、道を究める」という選択肢を、私は早々と放棄していた。そのような選択肢を選べば、その競争過程の中で、過剰に傷つき、過剰に自身を失い、自分がボロボロになると思っていた。それが事実かどうかはよくわからないが、少なくとも私は、そのように感じていた。本当に私は弱すぎていた。傷つくことの耐性が、とても低かったのだと思う。

ここで具体的に、私の弱さの現れを1つ、告白したいと思う。

もう30年以上たつ、はるか昔のエピソードである。そして、私が背負った罪の1つである。そしてこのエピソードは、私の罪と同時に、私の中に生まれた人間不信の大きな萌芽だったような気がする。

高校を卒業して新たな学生時代が始まる春。

新しい出会いの中で、ある、新しい友人となるWが、私を含めて、近くにいた数名に声をかけてくれた。

「今からみんなでコンビニに行こうぜ」と。

なんなくの流れで、徒歩数分先のコンビニエンスストアに出かけた。いわゆる「友達づくりのプロセスとしての、なんとなくの流れだ」。

今ではまったく覚えていないないが、名前なんていうの？とか、どこ出身なの？とか、ニックネームはなに？なんて呼べばいい？みたな会話をして、7～8名で歩いたと思う。

やがてコンビニにつき、Wは、「今日は俺がみんなにアイス奢るよ」といつてくれた。

その時私は、Wに対して、「そういうふうに気前のいいところをみせてくれて、みんな

が仲良くできるようにしてくれているんだな」とか、「優しい人なんだあ」と感じた。

Wの誘いにみんなのって、おのおのアイスをつづつ購入し、コンビニの隣りにあった公園に移動し、アイスを食べながら談笑した。そして、皆でアイスを食べ終えた瞬間、Wが次のように発言した

「これで、みんな、共犯な」と。

この発言は、いったい、どういうことなのか。

実は、Wは財布を拾い、その財布にはいていたお金で、みなにアイスを奢ってくれていたのだ。そして、その事実を、すべて食べ終わった後に告白してくれたのだ。

私はひどくショックを受けた。その財布の持ち主が誰なのかと、Wに問うた。

Wは「知らない」といったが、私がその財布を奪って中を見てみると、学生証が入っていた。財布は、私たちの1つ上の学年の、見知らぬ学生のものであったのだ。

Wは財布を公園のゴミ箱に捨てようとしたが、私は、「せめて財布そのものと学生証は返そうよ」と意見した（なぜか、お金を返そうとは言わなかった。言えなかった）。

しかしWは何も答えず、むしろ、私の発言で、私たちを取り巻く空気が大きく変わってしまった。きっと私は、彼らの中で、浮いてしまったのだ。

誰かが小さな声で私に、「真面目かよ…」とつぶやいた。おそらく、私は皆に、白い目でみられたのだ。そこに居づらくなった私は、その財布と学生証を拾って、まるで逃げるように、遺失物取り扱い所にそれらを届けにいった。

その後のことはよく覚えてない。

はっきりしているのは、その日以降、私は学生生活で誰かまわす、距離をおいた人間関係しか作れなくなってしまったことだ。上で述べたアイス事件でひどくショックを受け、「人って信じられない」という疑心に浸ってしまったからである。

事実、私は、学生生活で少なくない、騙し合い、せめぎあいを目の当たりにした。

恋愛という名の裏側で蠢く、嘘、偽り、裏切り。心移り、二股三股、不倫。

お金や名誉のためなのか、窃盗、詐欺。

友達と思っていたけど、平気で他者を陥れる世界。

「心の友」とか「親友」とか「友情」というものが、まるで漫画の世界でしか存在しないような感覚を、生まれて初めて得た。やっぱりこの社会には、「生き馬の目を抜く」ように、「生きたまま目をくり抜く」ような人間関係が蔓延していると強く、強く感じていた。

そんな世界にうまく順応・適応できない自分を守るために、私はただ、距離を置くことしか出来なかった。つまり、「自分はその世界の住人ではない」というような感覚を稼働して、自分を保っていたのである。逆にいえば、そうでもしなければ、悲しくて、辛くて、やりきれなくて、耐えられなかったのである。

読者の方は、私に（いろいろな意味で）あきれるかもしれないが、アイス事件が大きな躓きとなって、私は、社会に適応できなかった、できなくなったのである。

対人援助という美辞麗句に溺れて、流され

まともに社会に羽ばたける気がしなかった私は、障害福祉領域に、自分の生き方を求めるようになった^{注1}。ボランティアや実習を通して、知的障害者とかかわりの世界では、上で述べた「騙し合い、せめぎ合い」がほとんどみられないと思ったからだ^{注2}。

知的障害を持つ方々の支援を通して、「人の役に立つ」生き方をしようと決心した。まだ、愛情とか、人の可能性というものを、盲目的に信じていた。

この後、私は、障害者施設に勤務しながら、職員による虐待案件と関わるのだが、それについては、「対人援助実践をリポートするこの一冊」の第1回で述べた。

詳細については、対人援助学マガジン第45号（2021）を御覧いただきたい。

⇒<https://humanservices.jp/wp-content/uploads/magazine/vol45/59.pdf>

さて、以降も私は、ずっと悩み続けることになる。きっと今も悩んでいる。

虐待は良くない！と、強い思いをもって仕事に励んだ私だが、かくゆう私も、「虐待とは一体なんなんだろう」とわからなくなったり、あるいは、「自身の援助が虐待というものと決定的に違うと、なぜいい切れるのだろうか」と、いろいろとためらいを感じるようになったり、とにかくわからないことの多さに先が見えなくなることが少なくなかった。

そして、また、幼少期からの重大な課題が私に眼の前に立ちふさがった。

「人の役に立つ」とは、どんな生き方なんだろうか。

人に喜ばれることを生業（仕事）にするのならば、人に喜ばれることによって対価報酬を得ることとなる。そうとなれば、そこでの手助けは、ある意味、お金のための手助けであって、本来的な手助けと、ほんの少しだけ、意味が変わるかもしれない。

自分は、知的障害を持つ方々の支援に携わっているが、それは本当に、「人の役に立つ」生き方なんだろうか。知的障害を持つ方々の支援と、知的障害を持つ方々を管理することは、一体何が異なるのだろうか。

わからないことが多すぎて、私はよく、それこそ頻繁に、落ち込んだ。

もしかしたら私は、対人援助という美辞麗句に溺れて、何もわからないまま、ただ飛び込んで、そんな自分の無知無能ぶりにあらがえず、虚しくて悲しくて辛かっただけかもしれない。そして、時に、ナニモカンジナイとする自分すら、創るようになった。

ナニモカンジナイとする自分でなければ、悩みや迷いに振り回されて、ろくに仕事ができなくなってしまう…そんな怖さが生じるようになったからだ。

読者の方はまた、お気づきであろう。なんともはや、私は、弱いのである。

子どもの頃から、そして、大人になっても、私はずっと弱いままであった。

注1 障害者福祉領域が「まともではない」とする趣旨はない。あしからず。

注2 知的障害があろうがなかろうが、人がかかわる世界においては、「騙し合い、せめぎ合い」は、あるところではあるし、ないところではない。それが自然なのだが、当時はそのように考えられなかった。

人の役に立つとは、自分を支えることでもある

やがて、私は、漫画「サ道」と出会った。

ご周知の方もいると思うが、ドラマ化もした、サウナの漫画である。

なんと、ひたすらサウナにはいるだけの漫画である。

ただ、サウナにいて、水風呂にはいて、外気浴する（だけの）漫画である。

エンターティメントというより、フィクション、あるいは、ドキュメント漫画といったほうがよいかもしれない。なにしろ、実在するサウナ施設、実際の経営者や従業員もガンガン登場するのである。

その漫画の中で、私と同じ中年である主人公が、ひたすらサウナに通いながら、ひたすら自身と向き合うのである。

ネタバレをさけるためにこれ以上詳しくは語らないが、私はこの漫画を通して、自身が模索してきた生き方の、隠れた一面をみつけた気がした。

それはつまり、「人の役に立つ」という生き方は、「己の役に立つ」、すなわち、「自身を支えるために、自身のために、自分自身で、自身を支えることが必要」ということであった。

私はこの気づきを得て、ちょっと反省した。

「人の役に立つ」ということを、偉そうに考えていた自身の傲慢ぶりに気づいたからだ。

弱い、弱すぎる私が、まるで「自分ならできる」とばかりに偉そうに、「人の役にたとう」としていたことこそが、私の盲点だったのである。

まず…、自分をしっかり支えなくては。

サウナに行こう。私は涙して、そう思った。

きっと私は、「人の役に立つ」なんて立派に語れる、立派な生き方をしていない。できていない。

でも、それでもいい。

やりたかったらやるし、できなかつたら、できないだけである。

それよりも、まず、自分をしっかり支えて、自身をもうちょっと強くして、それからまた、ゆっくり、しっかりと、考えたいと思う。

サウナに行って、何もかも、流してしまつて。

—つづく—

タイトル名「対人援助実践をリポートするこの一冊」

第 42 回：第 4 章-その 14-

日本三國と志（こころざし）

著：二階堂哲
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

対人援助には自己犠牲が必要か？

今回は、職場の同僚に紹介していただいた漫画を「日本三國」を取り上げたい。この漫画の舞台は、核戦争、天災、政治的な混乱によって、文明の崩壊した未来の日本である。

未来の日本では、大和国、聖夷、武凰の 3 つの独立国があり、それぞれの国が天下統一の野望を抱いて交戦状態にある。そして主人公の三角青輝（みすみあおてる）が、大和国の奇才軍師として日本統一を成し遂げていくストーリーである。

この漫画の魅力は、個性的な登場人物が織りなす人間模様にある。

そしてこの物語の中では、大義のためには自分の命をも犠牲にすることが美德として描かれている。この点に私は多少の危うさや、私たちが生きる時代（社会的随伴性）の変化を感じることもある。その懸念はひとまず置いておくにしても、主人公の三角青輝は、この美德を体現した志の高い青年として描かれている。

彼の志は、日本人が平和で安心して生活できる「泰平の世」を実現させることにある。そのためには、愛妻が腐敗した権力者に殺害されようとも、自分が敵陣の中で首を刎ねられそうになっても、大義のために平静さを保ち、言葉を武器にして、大きな夢に向かって突き進んでいくのである。

対人援助職にも、このような自己犠牲を伴う志が必要なのだろうか。

志とはなにか？

この志に近い概念として、私が知っているのは、アクセプタンス & コミットメント・セラピー（以下、ACT）の「価値」の概念である。ACT とは、第 3 世代の認知行動療法の一つであり、関係フレーム理論という行動分析学に基づく言語行動理論が土台となっていて、慢性疼痛や不安症、抑うつなどに効果があるとされている。

この ACT は、言葉の力を利用して困難な状況に対処していく。例えば、「自分はダメな人

間だ」という思考が生まれた時は、『自分はダメな人間だ』と思っている」と言い直して、思考と距離を置いたり、その時に感じた不快な感情を、言葉を介さずに、じっくり観察してみたりする。こうすることで、言葉の持つネガティブな側面から少し距離を置くことができる。一方で、言葉のポジティブな側面も利用していく。それが価値の明確化である。

ACT では、自分の目指す価値を明確化して、それに向かって困難なことに挑戦していく。例えば「他人から尊敬される人間になる」という価値を選択した場合、他人から尊敬されるために、多少困難に感じて、他者への奉仕を以前より積極的にするかもしれないし、話し方も丁寧になるかもしれない。この価値を決める行為が ACT においては非常に重要である。

自分にとって意味のある価値を定めて、困難を内包しながらも、人生を意義のあるものにしていくことが ACT の目指すところである。

対人援助には志が必要か？

対人援助職においても、この価値（志）を明確にする行為は必要なことだと思う。経済的合理性が重視される現代社会の中で、自分自身の行動規範としての価値（志）を持たない支援者は、支援される側を経済的な視点で捉えるような一種の傲慢さを身につけてしまう危険性もあるように思う。

人の価値が生産性という単一の指標で測られてしまいがちな社会の中で、対人援助者が、経済的合理性以外の価値（志）を行動規範として持っておくことは、これまで以上に重要となっているような気がする。経済的合理性の側面からみれば非効率と感じるようなこともある対人援助の場で働くからこそ、このことは心に留めておきたいと思っている。

偉そうなことを書いておいて、自分自身のことを振り返ってみると、その価値を見つけることがとても難しい。「私はどのように生きたいのか」という人生観に関わる問題だからだ。

「安心してもらえる支援者でありたい」、「成長を実感してもらえる支援者でありたい」など、表面的には思いつくのだが、三角青輝のように明確な価値をまだ持っていない。今後も支援者としての仕事を続けるならば、日本三國に登場するキャラクターのように明確な価値を持つ努力をしなければと思う。

—つづく—

尊き人の陰陽

著：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

自身の初期衝動の原動力

私はしばしば他の方から、「フットワークが軽い」「バイタリティがある」などと評価していただくことが多い。自分ではあまり自覚はないのだが、たしかに障害児支援のみならず教育活動や研究活動など、振り返っていれば多様な仕事を積極的にしている。その振る舞いの原動力は様々なもので構成されていると考えているが、そもそも「なぜそれほどまでに対人援助に関わる活動に関わるのか？」という自身の初期衝動を考えた時、一つの作品、ひいては1人の作者が確実に影響していることを思い出した。それは「からくりサーカス」であり、その作者である藤田和日郎氏である。

人の陽のきらびやかさ

「からくりサーカス」とは、1997年から2006年まで週刊少年サンデーで連載されていた冒険活劇といったジャンルの漫画である。莫大な遺産を相続したことによって命を狙われることとなった主人公が、拳法家の青年や人形使いの女性と共に、数奇な冒険を辿るという、文章だけだと想像し難い内容である。群像劇のような物語の構成をしており、話が進むごとに、物語の主軸となる人物が立ち替わり、だからこそそれぞれの登場人物の背景や心情が詳細かつ熱を持って語られている。

本作品は全43巻あり、数多くの登場人物と関連エピソードがあり、作品の魅力をつぶさに伝えようとすると誌面に収まりきらないほどである。ただ、乱暴なまとめではあるがそれぞれの登場人物やエピソードに通底するテーマは、「人間愛といった人の陽の側面を、清濁あわせて激烈に描く」ことのように感じる。それぞれの登場人物の動機は様々だが、多くの場合に共通するのは友情や愛といった人の営みの根源たるものから由来している。詳細はあえて伏せるが、いわゆる黒幕、ラスボスの動機すらも、ある側面で純粹無垢な”愛”なのである。誰かを愛し、愛されたい、同性間や異性間、あらゆる愛を求め、求められる、その行動原理の現れたるエピソードが、私にとっては人の生、陽の部分のきら

びやかさとして頭に残っている。そして同時に、そういったきらびやかさに憧憬の念を抱くようになったきっかけでもあると、振り返ると思う。

人の陰の清々しさ

上述した”愛”といった陽の部分は、容易に”憎しみ”や”執着”といった陰の部分にも通ずる。「愛の対義語は無関心である」という言説は、みなさん聞いたことがあるだろう。一方、「憎しみは愛と表裏一体である」という言葉こそ、本作品に通底する2つ目のテーマのようにも思える。上述したラスボスの動機は純粋な”愛”である。ではなぜ、悪の象徴たるラスボス的な役割となってしまうているのか。それはその愛を叶えるため、ただその一念を純粋に、決して諦めず、必ず叶うと信じて行動して”しまった”ためである。詳しくは作品を読んでいただきたいが、下記の画像にある「夢はいつか必ず叶う」という古今東西あらゆる作品で金科玉条のように紡がれる言葉が、本作品ではことさら特別な意味を持つ。それは、清々しさを感じるまでの人の陰の部分の体现である。ラスボスは、愛は必ず報われるという夢を信じて、筆舌に尽くし難い悪行を、純粋に実行するのである。



からくりサーカス第14巻より抜粋（藤田和日郎, 2018）

人の陰陽の尊さ

私は本作品を通じて、人の陽と陰の部分は表裏一体であり、不可分であり、清濁が合わさり、故に人を強く惹きつけるのではないかと、読んだ当時感じたことを記憶している。だからこそ、対人援助を实践する上で、対象児やその家庭の陽の部分だけでなく、陰の部分もまた、評価するのではなく丁重に、尊重すべきだという考えに至っている。人の陽の部分だけでなく、陰の部分、むしろ陰の部分があるからこそ、人の尊さがより色濃く浮かび上がってくるように思う。本原稿を書くにあたって久しぶりに「からくりサーカス」を読んだが、いまなお、私の対人援助観をリポートしてくれる作品であることを改めて実感した。

—つづく—

新・島根の中山間地から Work as Life

第9回

「ベトナム・レポート①」

野中 浩一



1. ベトナムは 34.4 歳、日本は 50.8 歳

表 1. ベトナムと日本の基本情報の比較

項目	ベトナム	日本
面積	33 万 1,212 平方キロ	37 万 8,000 平方キロ
人口	約 1 億 159 万人	約 1 億 2,310 万人
首都	ハノイ	東京
人口が多い都道府県 (省・中央直轄市)	1.ホーチミン市 (約 1,300 万人)、2.ハノイ市 (約 1,000 万人)、3.タンホア省 (約 370 万人)、4.ゲアン省 (約 350 万人)、5.ドンナイ省 (約 330 万人)	1.東京都 (約 1,400 万人)、2.神奈川県 (約 920 万人)、3.大阪府 (約 870 万人)、4.愛知県 (約 740 万人)、5.埼玉県 (約 730 万人)
政治	社会主義共和制 (ベトナム共産党)	立憲君主制 (議員内閣制)
国内総生産	4,940 億米ドル	約 4 兆 4,400 億米ドル
GDP 成長率	6.5% (2024-2025 年予測値)	1.0% (2025 年予測値)
一人当たりの国民総所得	4,970 米ドル	3 万 8,340 米ドル
平均寿命	74.7 歳	84.1 歳
戦後〇年	51 年	81 年

出典：総務省統計局『人口推計』、内閣府『国民経済計算』、およびベトナム統計総局 (GSO)『統計年鑑』等のデータをもとに筆者作成。

※基本的に 2025 年の実測値に基づいているが、項目により調査年に多少のばらつきあり

※人口に関して、日本には在留外国人約 412 万人を含み、対してベトナムの在留外国人は約 1~2 万人程度

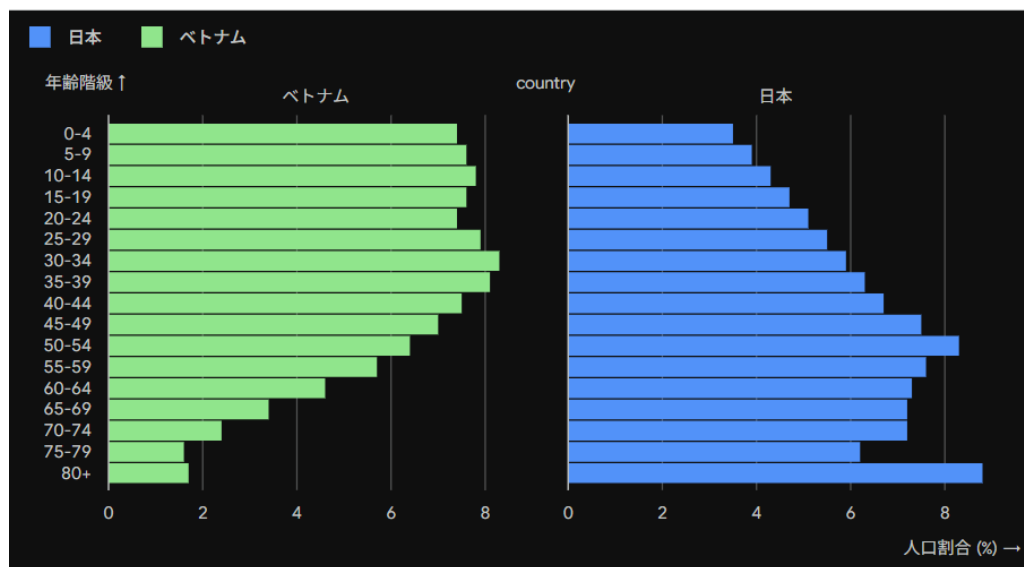


図 1. ベトナムと日本の「人口年齢構成」の比較 (2025 年)

出典：世界人口推計 2024 年改訂版 ※年齢の中央値 ベトナム 34.4 歳、日本 50.8 歳

＜コラム① 交通サバイバル＞

ベトナムに来て、まず日本との違いを感じたことは、道路におけるバイクの多さと、無秩序にも見える車とバイクの群れの動きである。事前の訓練（ベトナムでの生活の注意事項）において、ベトナムではバス＞車＞バイク＞人のように、大きくて強いものが優先するところがあると聞いていた。また、ベトナムのバイクは、歩道に乗り上げたり、歩道を走ったりするとも。実際にベトナムでは誰もが、歩道の奥にあるお店までバイクを走らせて乗りつける。

実際にベトナムで生活してみると、車やバイクでも歩行者に注意を払い、ぶつからないよう減速したり避けてくれるものも多い。一方で、まったくお構いなしに凄いスピードで突っ込んできたり、減速せずに右左折するようなものも少なくない。交通マナーがかなり属人的である。そうした様々な動きをみせるバイクや車や自転車や人が入り交じりながら、お互いにすれすれを行き交いながらもそれなりに事故を回避しているように見えるのは、ベトナム人のその場の動きに合わせる即興性や運動能力も関係しているのだろうかとも思う。

＜コラム② 工事ダイナミクス＞

表 1 と図 1 を見てもらうとわかるように、ベトナムは人口増加と経済成長が著しい。それもあってか、ベトナムの都市部（私が見てきたのは北部ハノイと中部ダナン）はとにかく工事が多い。日本の社会常識で想像される範疇ではない。私が泊まっていたホテルは、入室時から隣の部屋の内装がバキバキにはがされてリフォームの真っ最中であった。また、そのリフォームが 1 週

間ほどで終わると、次は 1 台しかないエレベーターの中に工事道具が置かれ、段階的に壁紙がはがされたり、電気のコードがむき出しになっていたり、ときに作業員 2～3 名が常に作業した状態で数日乗り降りしていた。日本では考えにくい、生活と営業と工事とが同時進行である。

道路では電線を埋める工事をしているそうで、いたるところで歩道全体が数十メートルから百メートル程度の幅で、まるまる掘り返されている。また、学校や家もリフォームだらけで、私がお世話になった語学の先生の家も隣が増築工事で、日中ずっと作業音が響き渡るのみならず、足場が先生宅のベランダまではみ出していたり、先生宅の玄関にくぎやビスが（上空から）落ちてきていたり、語学の授業中に「チョイオーイ！（ベトナム語でオーマイガッ！うわマジか！といった意味）」の音が何度も聞かれるほどであった。

＜コラム③ 戦争や貧困を経験した世代の存在＞

今のベトナムの発展を語るうえで、戦争の影響や貧しさの反動を抜きにすることはできないと感じている。戦後まだ 51 年。しかし、今の私はまだその影響について語るだけの感触や言葉をもたない。

2. なぜベトナムに「懐かしさ」を見るのか

表 2. ベトナムと日本の「自営業率」の推移

年	ベトナムの自営業率（推計）	日本の自営業率
1970 年	—	34.5%
1990 年	85%	21.8%
2010 年	62%	11.2%
2025 年	48%	9.0%

出典：ILO（国際労働機関）、日本総務省「労働力調査」、ベトナム統計総局（GSO）の自営主および無給家族従業者を基にした概数値

※日本の自営業率は自営業主と家族従業者を足した、広義の自営業率です。

▶年代別、ベトナムの自営業

1990 年：圧倒的に小規模な米作・水産などの農業。都市部では市場の露店販売、家内手工業、個人持ちの移動手段（シクロ等）による個人輸送。

2010 年：農業（依然として大半）、街頭の飲食店（フォー店やカフェ）、個人商店（個人商店「タップホア」）、個人バイクタクシー（Xe Om）、小規模建設・修理工。

2025 年：農業割合が減少する一方、ライドシェア・配達ドライバー（Grab 等）、SNS や E コマースを通じた個人販売（ライブコマース等）、個人経営のカフェ・美容関連、フリーランスエンジニア・デザイン業など多様化。

▶年代別、日本の自営業

1970 年: 米作などを中心とする農林水産業のほか、街の個人商店（八百屋・魚屋・豆腐屋・酒屋など）、町工場（下請け小規模製造業）、大工・工務店（建設業）、喫茶店や大衆食堂などの個人飲食が主力。夫婦や子どもが手伝う「家族従業者」の割合が極めて高かった（全体の約 15%）のが大きな特徴。

1990 年: 農業・漁業のほか、個人商店（酒屋・八百屋等）、町工場（小規模製造業）、建設業、個人経営の飲食店が中心。

2010 年: 農業や個人商店が減少。建設、飲食・宿泊業、個人の医療・福祉（マッサージ・鍼灸等）、サービス業に移行。

2025 年: 伝統的な店舗型自営業が減少し、IT・Web クリエイター、フリーランスのコンサルタント・士業、軽貨物配送ドライバー、美容・サロン経営など専門職やプラットフォーム型の自営が拡大。

＜コラム④ 個人商店の存在感＞

表2のとおり、ベトナムは自営業率がとても高い。ハノイやダナンの道を歩けば、自営の小さな食堂や飲み物とお菓子・おつまみを売る個人商店が軒を連ねている。カフェやジュースを売る店、服や鞆を売る店、おもちゃと文房具を売る店などもある。

日本と違い面白いと思うのは、その売り物が限定されていることが多いことである。例えば、日本であれば家具屋のように椅子、机、タンス、ベッドなど色々取り揃える傾向にあるが、ベトナムでは椅子だけ売る店、ベッドだけ売る店などがある。また食堂にしても、フォー屋、ブンチャー屋、バインセオ屋、チャー屋など、個人商店では売り物が限定された店が多くみられる。

もちろん、人を雇って営業しているスーパーやコンビニのような店、ショッピングモールのような大型店もあるにはある。ただし、自営業率を見てもらうと分かるように、ベトナムではまだまだ狭い商品カテゴリで勝負している個人（または家族経営）のお店が存在感を示している。

かつて日本の個人商店や商店街の多くは、大型店の出現を前になすすべなく消滅していったが、ベトナムでは今なお元気な商店が多い。その理由について、私は「単品の柔軟性」「3 倍の価格差」「ベトナム人の食習慣」が関係していると推察する（この3点の詳細については、またの機会に考察したい）。

ただ一方でベトナムに住む人たちの目には、こうした個人商店の数や街の姿が、近年の規制や都市化によってまさに大きく移り変わっていると映るようである。

＜コラム⑤ 昭和ノスタルジー＞

近年、日本にいと寂しさを通り越して、無念を感じることもある。私がこれまで暮らしたことがある都市、東京は変わらず輝いている。名古屋や福岡もそうだ。京都は大きく変わったが、良いか悪いかは別として新たな賑わいを見せている。

一方で 20 年暮らしてきた島根県はどうか。コロナ禍以降、多くの歩道が大草で覆われ、手入れされていた田畑や山林は生い茂るままの野生となり見る影もない。思春期を過ごした千葉県の銚子市はどうだろう。シンボルだった百貨店やショッピングモール、何度も通った、本屋、ゲーム屋、CD ショップ、ゲームセンター、定食屋、たこ焼き屋、塾、30 年経った今ではあるが、何一つ残っていない。シャッターが閉まったままの店、廃墟のようになった建物、人通りがなく車のみが通る道。今の地方の姿だ。

こうした日本を一旦離れ、ベトナムに来た。私はそこで不思議な感覚にとらわれることがある。言葉もほとんど通じない、民族も異なる、でも懐かしい。この懐かしさはどこからくるのだろうと、ことあるごとに考えている。街に若者や子どもが沢山いること、個人商店が多くお客も多いこと、身近な買い物やサービスに触れ合いや手作り感があること、雑然として混沌とした余地があること、公園や街中に噴水や池などの水場が多いこと、お店の棚に商品がびっしり並んでいること。

懐かしさとは、人、場所、もの（しつらえ）とが混然となって五感を刺激して織りなす幻想ではないかと思っている。そうした意味において、今の島根や銚子よりも、目の前にあるベトナムが懐かしい。

3. 人口減少の現実と、おおらかな『公私^{こんこう}混淆』の文化

表 4. ベトナムの「出生数と合計特殊出生率」と「死亡者数」（推計）

年	出生数（合計特殊出生率）	死亡者数
1990 年	約 200 万人（3.6）	約 43 万人
2000 年	約 153 万人（2.25）	約 43 万人
2010 年	約 145 万人（2.0）	約 58 万人
2020 年	約 155 万人（1.96）	約 62 万人
2025 年	約 148 万人（1.93）	約 66 万人

表 3. 日本の「出生数と合計特殊出生率」と「死亡者数」

年	出生数（合計特殊出生率）	死亡者数
1990 年	約 122.2 万人（1.54）	約 82.0 万人
2000 年	約 119.1 万人（1.36）	約 96.2 万人
2010 年	約 107.1 万人（1.39）	約 119.7 万人
2020 年	約 84.1 万人（1.33）	約 137.2 万人
2025 年	約 67.1 万人（約 1.15 - 1.18）	約 160.5 万人

出典（表3及び表4）：厚生労働省「人口動態統計」、ベトナム統計総局（GSO）「人口動態統計」、国連人口基金（UNFPA）推計データをもとに筆者作成。

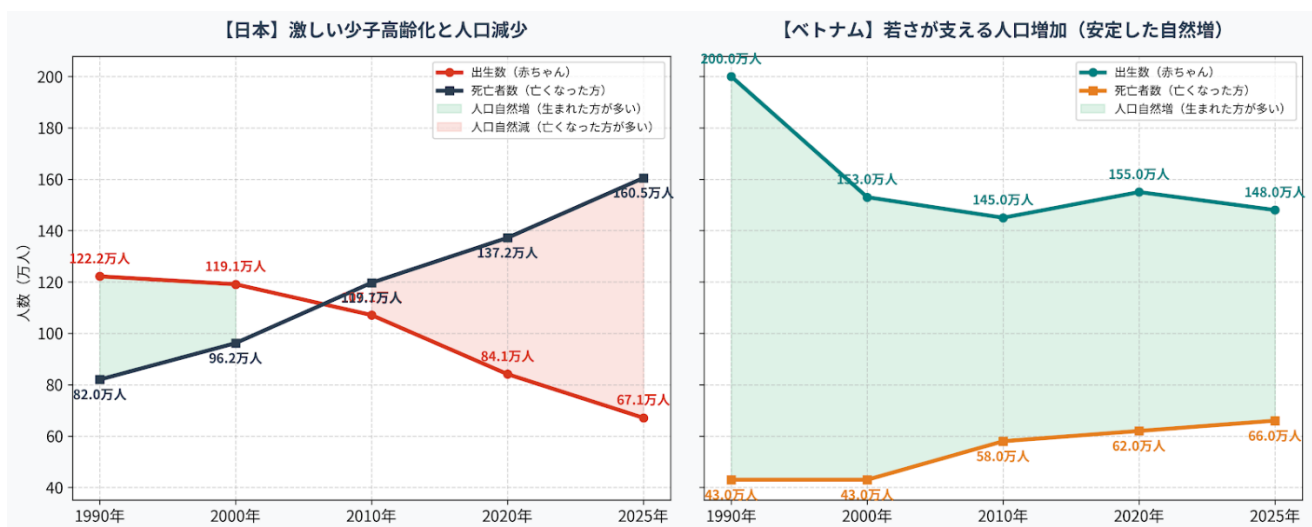


図2. 日本とベトナムの出生と死亡の対比

＜コラム⑥ 昼寝と休憩の妙＞

ベトナムに来てから、佇んでいる人をよく見る。朝、商店の軒先でプラスチックのカラーイスに座って何をするでもなく過ごしているオジサン。カフェでひとり、何をするでもなくじっと座っているオジサン。中には2～3人連れだったり、スマホをいじったりスマホゲームで戦っていたりという人もいる。このように日中にもかかわらず、街中には休憩している人たちの姿を多くみかける（私の目からは20～50歳くらいの男性が多いように見える）

ベトナムには昼寝の文化があるらしい。お昼にたっぷり休憩時間をとって、場合によっては家に帰って寝る。営業中の店先の椅子で寝ている人もよく見かける。食事や休憩にしても、とても臨機応変である。夕方、私がハノイの街中にある服屋を覗いたとき、中で2人の店員がお店のど真ん中に座りこんでお弁当を食べている場面に出くわした。また、従業員が10人以上いる洋風な飲み屋で夜の食事をしていたときには、やる業務がなくなったタイミングで従業員がスマホを触りだして、明らかに休憩モードに入っていた。声がかかってやることがあればしっかりやるが、それ以外の時間は様子をみながら休憩する。そんな感じに見える。

こうしたベトナムの光景を見ていると、私の祖父母がいた田舎の村や、私が住んでいた島根県の里山で、農作業や奉仕作業の合間に自在に休憩をとっていた日本の村人を思い出す。今日中に何をどのくらいやるのか、それは各自の責任において頭の中にあり、だからこそ作業の進み具合を見ながら、その日の天候や一緒に働く人の様子もみながら適宜休憩をとる。その日その日でお茶の時間（人によってはお酒の

時間）をとったり、漬物など塩分をとったり、ときに人のうちでお呼ばれしてたっぷり話をしたりする。

日本ではよく公私混同という言葉が使われる。この言葉が使われるときは「仕事（公）において、自分の用事や都合（私）を持ち込むな」という禁止の意味で使われる。戦後急速に雇われサラリーマン社会となった日本で活用された言葉であり、公と私に分けるべきだという暗黙の社会的倫理観が含まれている。しかし元々の日本は自営業が中心であり、公私混淆（こうしこんこう）の柔軟性が持ち味だったのではないだろうか。だからこそ誰もが主体性をもって家業や地域の役に励み、それらが相互作用をもたらした面があったのかもしれない。ベトナムの商店や市場を見ていると、ふと、そんなことを考える。

<コラム⑦ 日本の減少幅は、本当に 93 万人なのか？>

図2の出生数と死亡者数が交差する点に注目してほしい。日本では2005年に出生数が死亡者数を下回り、その後2007年から先はずっと下回り続けている。表3と表4のとおり、直近の2025年に日本では人口約93万人が減少しているのに対して、ベトナムでは約82万人が増加している。

ただし、この日本の減少幅を93万人と捉えない方がいいと私は考えている。図1が示すように高齢者の割合が多い日本においては、160万人が亡くなるその同時期に100万人以上の方が社会的な労働や役割（それは会社で働くという意味だけではなく、地域の保全のための雑務も含む）からリタイヤしていたり、大病や認知症等で労働や役割が果たせなくなって介護・介助生活になっている可能性を示唆している。つまり、社会的には年間200万人程度の減少幅があると考えるのが妥当ではないだろうか。

4. 日常生活と性を取り戻す試み

表5. ベトナムの婚姻件数と日本の婚姻件数の比較

年	ベトナムの婚姻件数（推計）	日本の婚姻件数
1990 年	約 40 万～50 万件	約 72 万 2 千件
2000 年	約 45 万～55 万件	約 79 万 8 千件
2010 年	約 50 万～60 万件	約 70 万件
2020 年	約 50 万件	約 52 万 5 千件
2025 年	約 50 万～55 万件	約 48 万 5 千件

出典：厚生労働省「人口動態統計」、ベトナム統計総局（GSO）「ベトナム統計年鑑」、および国連人口部門（UN）推計データ

表 6. ベトナムの婚姻年齢と日本の婚姻年齢の比較

年齢	ベトナムの婚姻年齢（推計）	日本の婚姻年齢
20 歳未満	夫 約 1.5% / 妻 約 6.5%	夫 0.2% / 妻 0.4%
20～24 歳	夫 約 22.0% / 妻 約 38.0%	夫 7.5% / 妻 12.0%
25～29 歳	夫 約 42.0% / 妻 約 34.0%	夫 36.5% / 妻 41.2%
30～34 歳	夫 約 18.0% / 妻 約 12.0%	夫 26.8% / 妻 22.5%
35～39 歳	夫 約 16.5% / 妻 約 9.5%	夫 12.1% / 妻 10.3%
40 歳以上		夫 16.9% / 妻 13.6%

出典：厚生労働省「人口動態統計」、ベトナム統計総局（GSO）「人口住宅国勢調査」および「中間人口住宅調査」

ベトナム（2025）の平均初婚年齢は**男性 29.3 歳、女性 25.5 歳**

日本（2025）の平均初婚年齢は**男性 31.1 歳、女性 29.7 歳**

＜コラム⑧ 少子高齢化と人口減少はどこから来るのか？＞

私と世代が近いベトナムの方と話をしていると、この先ベトナムで問題化するであろう高齢化や少子化を心配する声が聞こえてくる。特に日本や韓国を知っていてニュースに精通している人であれば、よりそのような懸念が生じるであろう。実際にベトナムでも婚姻年齢が次第に高くなる傾向があるとともに、離婚率も以前より上昇しているようである。ここでは、高齢化や少子化がベトナムより先行している日本の現状を、私の解釈を交えて伝えたい。

人間科学の観点から私が考える人口増の条件は、①初婚および初産の年齢、②出会いと性行為の機会の多寡、③ストレスバランス（不安・緊張—緩み・ひま・リラックス）である。

日本においては、女性の社会進出や高学歴化に伴って初婚や初産の年齢は高まり続け、また、不妊治療件数も 55 万件を超えている（日本産科婦人科学会、2024 年の体外受精・ART 実績より）。当然のことながら、初婚の年齢によって妊娠率は変わり、母子の健康、子どもの障害の有無などの確率が違ってくる。中国やベトナム、古くは日本においても、25 歳頃までに結婚していなければ、家族や親族から心配され・催促され・斡旋されたりする文化風土があった。この働きかけは現在の先進各国の少子化の現状に照らせば、生物的に理にかなったことであつたろう。一方で、こうした社会風土は一部の男女（特に女性）に圧迫感や疎外感や不満をもたらし、しかし多数の男女に婚姻生活と子どもがいる人生をもたらしたと考えられる（そのシステムに問題を感じていない場合、意識化されたり主張されたりしない。サイレント・マジョリティである）。

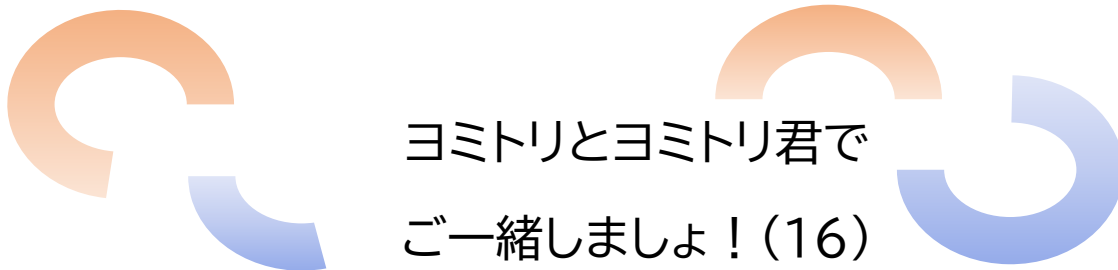
また、出会いや性行為に至る過程において、現代はハラスメントや性被害などネガティブな情報が溢れている。そのため、こうした情報に触れる機会が多い人ほど、身体接触および性行為に至る過程で心理

的な委縮を経験する可能性が高いと考えられる。相手との関係において十全に同意が得られて、万全に事が進行することなどあるのだろうか。特に 10 代や 20 代前半のまだ経験が少ない若者において。

加えて、近年の日本では「性暴力」「性被害」など、性がまるで犯罪的でいかがわしいもののよう扱う風潮が急速に強まった一方、スマホの普及等によって AV のような性行為を映す動画にいつでもアクセスできるようになっている。さらに日本はデリヘル・ソープ・各種ヘルスなどの対面型風俗の利用が元来活発で、市場規模は年間で 2 兆円を超えている（経済誌等による独自試算。映像・ネット配信・グッズも含めた市場規模は約 5 兆円と試算）。加えて SNS やマッチングツールによる個人間取引も盛んである。つまり、男性が本来持つ生物学的な性欲（射精欲求）が、身近な女性との関係構築が委縮する中で、動画や風俗といった代替的で快楽的・娯楽的な性に方向付けされやすい実態がある。ヒトがもつ本来的で自然なりゆきである「日常の営み」としての性は大きく遠ざかり、反対に暴力的で卑猥なものとしての性と、快楽的で娯楽的な性ばかりが身近で強調されている状況が今の日本の姿ではないだろうか。

最後にストレスバランスについても述べたい。社会が成熟するとともに、雇用が大半となった現代において、雇われて働くということ自体が時間的な自由や言動の自由をある程度において拘束する面があり、そこにストレスはつきものである。さらに人手不足によって 1 人あたりにかかる負担が増えやすい状況にあることや、有能な人ほど仕事を抱えやすくなる構造もある。心身ともに疲れた状態においては、たとえ結婚していたとしても、性行為に至る頻度や妊娠に至る確率は相対的に下がるものと考えられる。加えて日本全体の高齢化による介護や保育に関する負担など、夫婦共働きで仕事中心の社会ゆえに家庭内のストレスをうまく消化（昇華）できずに日々を送る人も少なくない。

今後の日本そしてベトナムがどう変化していくのか。一見、少子化対策のためには①～③を改善すればいいように思えるかもしれないが、実際にはそうではない。文中にある①～③を阻害している要素、それは飽くなき経済成長や飽くなき個人の権利（少数派の大きな声）と分かちがたく結びついた怨念との対峙でもある。もちろん、少子化や人口減少に対して、対策や改善を働きかけることが必要かどうかは別議論である。



ヨミトリとヨミトリ君で 一緒にしましょ！(16)

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。心と技能と技術を繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

「広がる夢と希望」

2013 年に介助付きコミュニケーション「指筆談(ゆびひつだん)」による意思疎通支援の取り組みを始めて
今月(2026 年 9 月)で丸13年となりました。

前号の投稿から 3 か月。この 3 か月の間に、13 年間の活動の中でも特別にうれしい出来事がありました。
うれしいことはまだまだ続きます。そして驚きの展開も！

■驚き編「高木さんほどじゃなくていいから」

心肺停止からの蘇生後低酸素脳症の後遺症による遷延性意識障害の診断を受けているAさんを意思疎通支援で訪問しました。いつも奥様がそばに寄り添って親身にお世話されています。お訪ねした時、お一人ヘルパーの方が入っておられました。

奥様が言うてくれました。

「高木さん、本当にありがとうございます。夫はきっと意識があるのだろう。なんとなくわかっているのではない。わかっていると信じたい、そういう気持ちで、ずっと介護してきました。でも脳の画像とか見せられて、医学的には覚醒は難しいと言われるでしょう。やっぱりそうなのかなと、いろいろやっても無駄なのかなと、つい思ってしまうこともあったんですよね。でもたとえずっとこのままでも、生きていてほしい。私と一緒にいてほしいと思って、日々暮らしてきたんです。

そうしたら、意識があるなんてものじゃなくて、高木さんに手伝っていただいて、こんなに書けて、普通に話ができるじゃないですか。ものの言い方とか、口癖とか、本当に倒れる前の夫のまま、そのままの話し方なんです。最初にそれを見た日は、びっくりと嬉しさで夜まったく眠れなかったです。

私は言いました。

「よかったです。とにかく、『あなたがわかっていること 伝えたい』という、その思いだけでやっていますので。ご家族によっては、長く寝たきりで意識の有無もわからなかった当事者の方が言葉を書かれることを、あり得ない、どうしても信じられないと、認めてくださらない方もおられますので。ずっと長い間、毎日手を握っ

でも握り返してくれないその手でそんなすらすら字が書けるはずがないと。お気持ちはわからないではないのですが、当事者の方は、やっぱりようやく思いを伝えることができ喜んでおられるので、なかなかそこが認められないと、私がどうかより、当事者の方がお気の毒だと。

奥様が、Aさんがわかっておられることをそのように喜んでくださって、私も本当にうれしいです。あ、いけない。まずAさんのお言葉を聞かなくちゃ、ですね。Aさん、こんにちは。体調はいかがですか」

「ありがとうございます。私が意識があるとわかってから、こいつがすごく喜んで毎日はりきっているのがよくわかるので、それが一番うれしいです。」

控えて立っていたヘルパーさんも笑顔です。若い世代の優しくそうな良い感じの方です。Aさんが続けました。

「高木さん、ヘルパーのBさんです。Bさん、いつもありがとうございます。あなたは本当に良い人で、いつもとても丁寧に優しく接してくださって、私はとても感謝しています。いつかお礼を言いたいとずっと思っていたけれど、この状態ではなかなかそういうわけにはいかなくて。

でも今日は高木さんがいるので、こうして直接お礼が言えて、本当にうれしいです。

Bさん、私がこんなふうで、動けなくて話せなくて、わかっているかどうかもわからない状態でも、いつも明るく話しかけてくれて、ありがとうございます。皆さんちゃんと介護してくださるけど、なかなかそういうふうに自然に話しかけてくれる人はいないから。本当にありがとう。」

Bさんが答えました。

「Aさん、すごいです。びっくりです。いやあ、いいなあ。そんなふうに言っていていただいて。涙が出そうです。でも当たり前に行っているだけですから。」

それから高木に向かって言うてくださいました。

「それにしてもすごいですね。初めて見ました。こんなやり方あるんだ。Aさんの言葉がどうやってわかるんですか。」

「手は動いていないように見えますが、Aさんが字を書こうとするわずかな動き、微小動作、マイクロムーブといいますが、随意的動きが確かにあるので、Aさんの手を下から支えて重力からなるべく開放して、その指先の動き、荷重の増減や移動の方向を私のもう片方の手のひらで感じて、接触圧のセンシング。文字の、ひらがなでお願いしていますが、一画一画を認識して文字として読み取ります。介助付きコミュニケーションの一つで、指筆談というのですが、この動作原理を利用した意思疎通デバイスももうできているし、実用新案も取っているんですよ。論文も書いています。」

こういう時のたびに、対人援助学会で論文を採択していただけたことに心から感謝し、ドヤ顔になることがセットとなっております。それにしても高木、もう少しわかりやすく説明できないものか。

Bさんが言いました。

「なんか専門用語がいっぱい…難しそうですが…。でもすごい。確かにAさんが書かれていると思います。Aさん、よかったですね。言葉を読み取ってもらえて」

奥様もうれしそうです。

私は再びAさんの手を取って話しかけました。

「Aさん、良いヘルパーさんが担当してくださっていて、よかったですね。」

「そうなんです。この人は本当に性格が良くて、人気があるんです。裏表がないから、みんなBさんのことが大好きなんです」

えー、みんなって、そんな、ここにいる時以外のBさんのこともわかるんだ。まぶたは上がりにくいし、見えにくいはずなのに、まるで見てきたような感じで言われて、すごいな…。まあ、でも当事者の皆さん、けっこう感覚鋭くて、いろいろわかっている感じがするしな一。

と、私はAさんの手を取ったまま、感心していました。するとAさんがまた指先を動かす微かな兆しがありました。ヨミトリ開始。

「高木さん、今日はちょうどいいところに来てくれました。実はこいつに言いたいことがあって」

奥様のことを「こいつ」とおっしゃるところに、愛を感じる高木です。奥様が一步近づいて言いました。

「何よ」

「おまえ、うるせえんだよ。声がでけえんだよ。声がお・お・き・い・の。頼むからもう少し小さな声でしゃべってくれ」

「あら、そんなに大きいかしら。」

確かに、奥様、艶と張りのあるお声がよく通ります。良い意味で。

高木、その場をとりなそうと、Aさんに言いました。

「Aさん、すみませんでした。私も、今日来る道々、そういえばお耳の聞こえ具合を伺っていなかったなと。今日はちゃんとお聞きしなくちゃって思いながら来たんです。今更ですが、私の声は、大きさはどうですか」

「まあいいです。でももっと小さくてもいいです。」

「え、普通に話しているつもりでしたが…。このぐらい？」

「もっと小さく」

「このぐらい？」

「それでも十分聞こえます」

「えーっ！ そんな小さな声で聞こえるの？ あなた！」

「うるせえ。でかいて言ってるだろ」

Bさんが、もう可笑しくて耐えられないという感じで笑いをこらえています。

「Bさん、Bさんものです。」

「え」

「Bさんも声が大き過ぎ。Bさんはすごく良い人なんだけど、他に何も言うことないんだけど、頼むから声だけ小さくしてください。」

笑っていたBさん、神妙な顔つきになりました。Aさんが続けました。

「おまえとBさん、声がでか過ぎなの。あ一言えてよかった。まったく、二人とも、たくさん話しかけてくれるのはいいんだけど、とにかく声が大きくて、たまらんと思っていたんだ。おい、おまえ、わかったか」

奥様とBさん、二人並んで、学校で先生に怒られた生徒のようにちょっとしゅんとして、立っています。ご家族の何年ぶりの親子げんかの真剣勝負なども含めて、人が怒ったり怒られたりする場面に立ち会ってしまうのは、しかも当事者がガンガン言うのを読み上げるのは私、という、なんとも、どうしていいか困ってしまう時もあるのですが、でも 2 人一緒に怒られるのは、見ていて気が楽というか、何につけてもお連れがいるというのは心強いもので…怒られたお二人もいつの間にか一緒に笑っているし。

とにかくAさんは、とりあえず懸案事項の一つを（他にはあまり無いことを願いつつ）解決できたので、先ずはめでたしめでたと。

私は、一応確認をと思って、Aさんに尋ねました。

「他にはどうですか。何か困っておられる事、伝えたい事とか、ありませんか。」

「おまえ、すごくよくやってくれてありがたいんだけど」

奥様に対してでした。

「何？」

「いつもきちんとしていてさすがだと思うんだが、きちんとし過ぎというか…。」

「何が？」

「俺のいろいろ備品とかあるだろ。タオルとかおむつとか。みんな出したり入れたりするし、整理してもぐちゃぐちゃしてくるんだからそんなにいちいち気を遣わなくていいんだって。」

「遣ってないわよ。」

「もっと手を抜いていいんだよ。おまえの、自分の身の回りだって、いつもすごくきれいに片づけてて」

「いいじゃない。そういう性分なんだから」

「それにしても、洋服も、別にみんな仕事で出入りしてるんだから、家にいるんだからそんなにきちんとした身なりでなくていいんだよ。もっとラフなのでもいいじゃないか」

うう。なんて優しいご主人。私なんていつも「少しは片付けろ」「もう少し格好考えろ」って言われてばかりなのになって、高木、そこは反省すべし。そういえば、奥様いつも本当にきちんとしているもんなー。

Aさん、なおも続けます。

「一人でいる時とか、もっとだらだらしていいんだよ」

そうかー、人の目がない時も、ちゃんとしていらっしゃるんだ。すごい。ん？ 待って。一人でいる時？ 一人でいる時って、もしかして A さんも見ていない時？ え？ でも見えているの？！

「高木さんほどだらだらしてなくてもいいけど、もう少しリラックスしてほしいんだよ」

なんですと？！

「ちょっと、Aさん、すみません、確かに私、家で、ものすごくだらだらしていますけど」

「高木さんほどだらしくしていいとは言わないけど」

ぎえー、やめて。Aさん、どうしてわかるんですか。

「あ、あの、Aさん、確かに私はものすごくだらしなくて、ズバリ賞なんですけど、」

奥様は、といえば、目が点になっておられます。固まってる…。でも、なおも

「高木さんほどだらしなくて困るけど」

と続ける A さんに、奥様は、次第に私に対する憐憫の情と慈愛が湧いてこられたのか、何かが堰を切ったように、ぷっと吹き出し、笑いが止まらなくなっていました。

それを見て、私もなんだか可笑しくなってしまう、

「もう A さん、はるばるバスを乗り継いでやってきて、こんなに一所懸命貢献しているのに、勘弁してくださいよ」

と笑いながら突っ込みを入れてしまいました。そして続けて言いました。

「ひょっとして、見えてますか？」

「…。」

A さん、手を動かされませんでした。

私の問いには答えず、A さんは続けられました。

「少し手を抜いて、気楽にやってくれ。俺は生きていたい。長くお前に面倒を見てもらいたいから。元気でいてほしいから。よろしく頼む。」

静かな時が数秒流れました。

それからまた、A さんが別の話題で書き始めました。他の当事者の人たちはどうしていますかとか、どこか外出したいなとか、さっきのべらんめえ口調(文字)で、世相一刀両断とか。

ひとしきりみんなで歓談して、笑って、そしてまた来月の訪問をお約束して、おいとまして来ました。

意識は清明なのに、全身のマヒ、発語不能のためにすべての能動的な体の動きを制限され閉じ込められた極限の状態に長くおられる日常の中で、当事者の方々が唯一随意で制御できる「感覚」という機能が研ぎ澄まされて非常に鋭敏になられていることは、当事者の方々と対話を通して以前から感じていたことでした。

そして、そういう鋭さ、繊細さとは別の、いわゆる感覚代行とか感覚拡張といった、そういう領域に収まりきらない、何か特別な知覚を持っておられるのではないかと感じることも、実のところ、あるのです。

門のところまで黙って私を送ってくださった奥様が、別れ際に口を開かれました。

「高木さん、さっき A が言ったことね。」

「私がだらしない生活態度だということですね(苦笑)」

奥様も笑いながら

「本当にごめんなさいね。でも、私ね、最初はこの人いったい何を言ってるんだろうと思ったんだけど。

主人が失った体の機能はすごく大きいけど、人間ってその分、健常者が発揮できない能力が備わって、私たちが想像できないぐらいのすごいレベルでいろいろわかってたりしているんじゃないかって。

そして、高木さんを引き合いに出してしまって申し訳なかったですけど、あんな風に私を見て心配していてくれて、自分ができることで役に立とうとして。

なにか人間の不思議っていうか、すごいものを見たなっていう感じがしてきたんです。

それを普段は誰にも伝えられない状況にあるわけで、やっぱり、意思疎通はどうしても必要なことだって。

「ありがとうございます。私も、これまで、『あなたがわかっていること 伝えたい』をモットーに活動が続けて来たと、今日も申し上げましたけれど、これからは、『あなたがとんでもなくわかっていること 伝えたい』に変えなくてははいけなくなってます。すごく良いきっかけになりました。」

うれしくて笑いながら言った私に、奥様もにっこり笑ってくださいました。そしてまた言われました。

「これまで、私はAの体の機能が少しでも回復するようになって、リハビリや鍼灸の本を読んだり、自分でマッサージを工夫したりいろいろやってきたんですけど、意思疎通に関しては、まばたきできない、手も握り返してこない、どうにもできないって、あきらめたというより、ただ、どうしていいかわからなくて、途方にくれているという感じだったんです。

でも高木さんが指筆談をやられているのを見ていて、これはすごい技術だと。思いを伝えたい、知りたい当事者の人、ご家族がたくさんいるはずだから、意思疎通の可能性のあることを、たくさんの人に知ってほしいと思うんです。

私もAと言葉で意思疎通できるように勉強します。よろしくお願いします。」

Aさん宅を後にした私は、奥様の熱い思いが心に沁みて、こみ上げるものを抑えることができませんでした。

■指筆談への思い

介助付きコミュニケーションの指筆談における介助者の務めは、当事者の方が書かれた通りに一字ずつ読み上げる、ただそれだけです。

ただ読み上げるだけでなく、当事者の方の美しい言葉も、怒りや悔いの、こちらがたじろぐほどの激しい言葉も、その方が書きたい速度で、書きたい優しさ、力強さで、書きたいように、言いたいように、自在に書けるように。私は一体となって走るような伴走ができるように、ただそれだけを思って、技能の向上を目指して来ました。

そうして技能を突き詰めて実践を重ねていく中で、自分の指筆談の取り方に、ある変化が生じていることに気がつきました。

それは、書字の連続により、字(ひらがな)が連なって一つのかたまりになった結果として名詞や動詞や形容詞が判明するのではなく、一見単なるストローク(画)の組み合わせに見える動作の微かな接触圧の増減や方向そのものが書き手の気持ちを乗せて伝わってくる、そんな体感でした。

そして、ひらがなの画像が私の脳に映ると同時に、むしろそれより一瞬早く、当事者の方が無意識に発話想起する声のような振動も、併せて私の体感が捉えるような感覚。

そんなふうに取り取るようになった頃から、当事者の方々から「すごく自然に書ける」「言いたいように書ける」と言われるようになりました。

微小動作を接触圧のセンシングにより認識する。

この指筆談のメカニズム、動作原理は確立しています。

ここをしっかりと習得することで、当事者の方が書く文字の読み取りの正確性が確保されます。

でも、文字の「形」を認識するだけでは意思(気持ち)の疎通は難しい。

介助者の好むスピードや美意識をベースに取り取ろうとしている間は、当事者の方の本当の気持ちはキャッチできません。

能力の不足によって当事者主体にできない場合は、そのことを真摯に詫びて、当事者の方の許しを得て習得に協力していただく。私も13年間ずっとそのようにやってきました。

私はピアノが大好きです。小さい頃から習っていて、一時は音楽学校への進学を考えたこともありました。結局、もう一つ大好きだった外国語を専攻する道を選び、ピアノは趣味として続けることになりました。

何人か先生が変わりましたが、一番慕っていたピアノの先生は、残念ながら幼い子どもながらも、演奏はあまり上手くない人だと感じていました。生意気な生徒ですよ。でも、レッスンでは、弾くということの基礎を子どもにもわかりやすく優しく教えてくれました。その時のレッスンの場合は、複雑なテクニックを磨く世界ではなく、シンプルな旋律を繰り返し練習することで、鍵盤を叩けば特定の高低の音が出るという最も基本的なメカニズムから、どう叩けばどういう音が出るか、出せるかという音色の広がりといった、新しい領域に進んでゆくところでした。

ところで、著名なピアニストともなると、鍵盤に指をそっと置いただけで、鍵盤を叩いても押してもいない、

いないように見えるのに、静謐の音が聞こえてくるような、そんな繊細な特別な演奏をする人も現れます。「演奏から心がゆさぶられるほどの何かが伝わってくる」、演奏家を評してそんな言葉が聞かれることもあります。

長々とピアノの話をしてしまいましたが、実は指筆談とピアノとの関わりはよく似ていると、いつの頃からか思うようになったのです。指筆談は支援媒体であり、芸術ではないといわれるかもしれませんが、でも、ピアノも、それを弾くこと自体は芸術とはいえないと思います。

技術を極めて、それが自分の体の一部となって自在となった上に、美の探求や人生の精進を経て得た感受性や感応性のすべてを昇華させて、舞台上で名演を提供するだけでなく、演奏を媒体として聴衆と双方向で一体となれる、そのような域に、私は指筆談の領域で当事者の方々と共に到達してみたいです。

誰でも一定の技能を習得した後は、それぞれの技能と目的に見合った努力と活躍をすればいいという見解の基に、私はピアノも指筆談も、同じ道の広がりを感じます。

病気や事故による中途障害、先天性、または出生時・出生後の事故や病気による乳幼児期からの障害、あるいは神経難病の方など、広義で閉じ込め症候群の状態にある方がたくさんおられます。

指筆談の技能を極限まで高めて、そのような障害当事者の方々が、大切な誰かに思いを十分に伝えられるに足る有能な介助者になれるように。

同時に、指筆談を媒体として、当事者の方々に「高木と話をしたい」と思っただけのように。

私はこれからも休むことなく精進を続けます。

私にしかできない指筆談を目指したいです。

■ヨミトリ君最前線！

指筆談宣言！とばかりに、つい力んでしまいましたが、なんだか指筆談のことばかりで、「私のヨミトリ君の紹介はどうなっていますか」と開発者の岡田さんからクレームが来そうな状況です。

そういえば、前号の投稿でも、後から気が付いたら、ヨミトリ君についての記述は、「■理学療法士の先生は神でした」の項の、

「ヨミトリ君も、開発者の岡田さんがいつも当事者の方のヨミトリ君操作の計測データをしっかり取っておられることを見てはいましたが、今回自分の体験から「記録する」ことの大切さがよくわかりました。」の

わずか 2 行…(汗)。

というわけで、大いに反省し、今号ではヨミトリ君の今を、大々的にご紹介させていただきます。

といっても、実は東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」の会報に毎号掲載している、「ヨミトリ君

最前線！」から、許可を得て転載する方式です。

手抜きするな。自分の言葉で書け。

ご指摘はごもっともなのですが、決して言い訳ではなく、ヨミトリ君がデバイス、ソフト、アプリのすべての面で、3Dプリンター、AIの導入等により異次元の進化を遂げており、もう中途半端な受け売りの説明はできなくなってしまったのです。

だからこそ、岡田さんが自ら書いたヨミトリ君紹介文です。

「ひまわり」の当事者、ご家族を対象に、「体験してね」を念頭に、わかりやすく書かれていて、とても好評です。岡田さんは、今年度の対人援助学会年次大会にも恒例の一番乗りを目指して早くからポスター発表に応募済みですが、早くに出し過ぎて、その後にヨミトリ君が大幅に改良されたために、ポスターvs「ひまわり」会報で、情報の更新度に差が出てしまったという皮肉な結果に。また、会報は、読んでいただく説明文なので、岡田さんの「人間」味が感じられます。

ぜひ、以下をご覧ください。



支援と開発
がんばって
います！

ヨミトリ君最前線！

開発開始から5年、7代目の機材が完成しました。試作機も含めれば数十台を試作。（開発費は概ねレクサス 1 台分）
最新研究結果を含めて報告します。

■ヨミトリ君7号機登場



7 号機一式

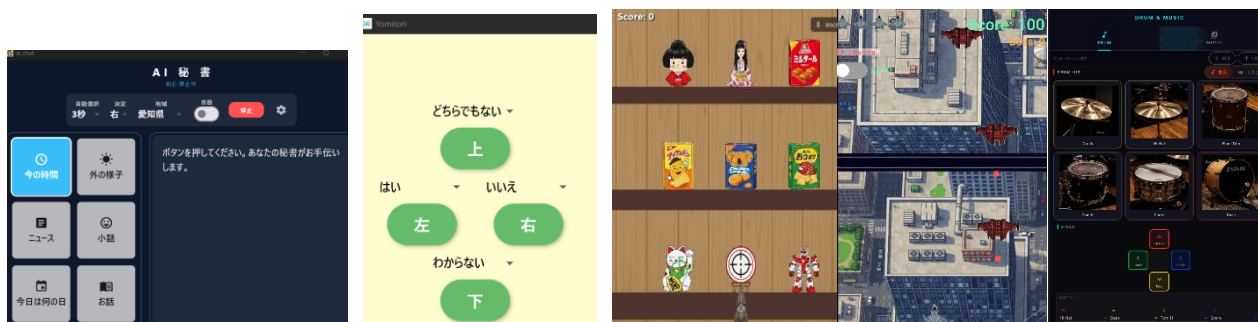
手を乗せるタイプ



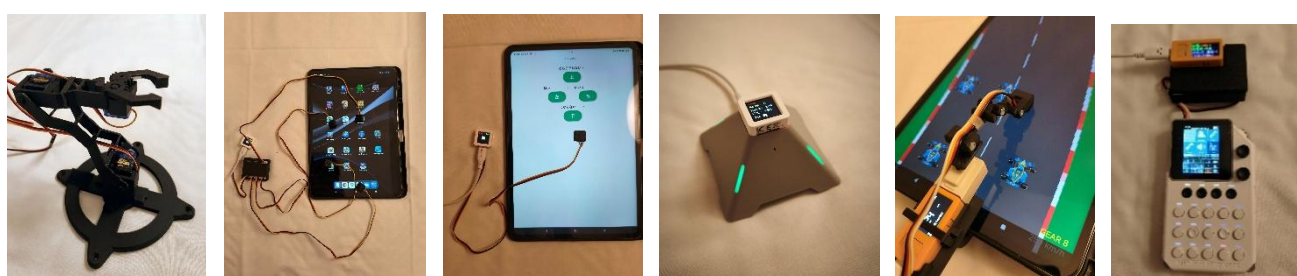
外骨格タイプ

3D プリンタを導入し
センサー形状は手の
形状に合わせて自由に
設計可能

開発に3D プリンタを導入。手を乗せるタイプの本体の厚みは約 2cm。外骨格タイプはどのような手の状態でもフィットします。デバイス全体もさらに小型軽量化が進んでいます。



意思疎通アプリ 3 種、ヨミトリ君専用ゲーム14種、AI で当事者を補佐する支援アプリ 2 種を開発。すべて Android、Windows、MAC に対応。アプリ開発に AI を導入し、支援アプリ開発が爆速化しています。AI で作曲するアプリで曲作り、シンセサイザーやドラム演奏で音楽も楽しめます。

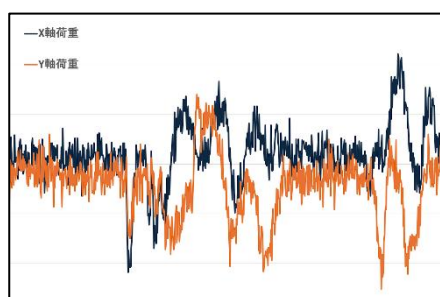


ヨミトリ君 7 号機用のロボットハンド、画面の任意場所のタッチ/ドラッグ、楽器制御などアプリ以外の操作にも複数対応。振動機能付きのドラムで音楽を体で体感することなどもできます。「やってみたい」という物があれば言ってください。作っちゃいます！

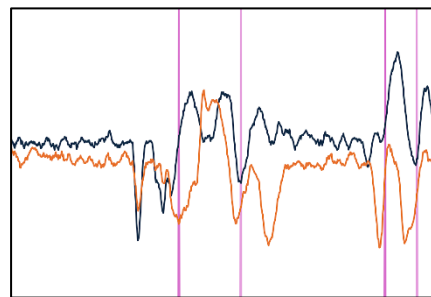
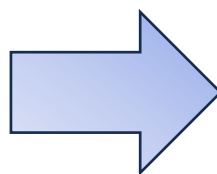
最新の意思疎通アプリと組み合わせることで、状態のいい方であれば「はい」「いいえ」の意思疎通も 60～70%程度はできるようになりました。
7 号機はすでに 15 名の方に提供し使っていただいています。

■不随意運動対策(7 号機に組み込み済み)

今までは不随意運動がある方はヨミトリ君の操作が難しかったのですが、
AI 開発に使用する演算式をヨミトリ君に導入(私は普段の仕事で AI そのものの開発もやっています



不随意運動を含んだセンサーの動き



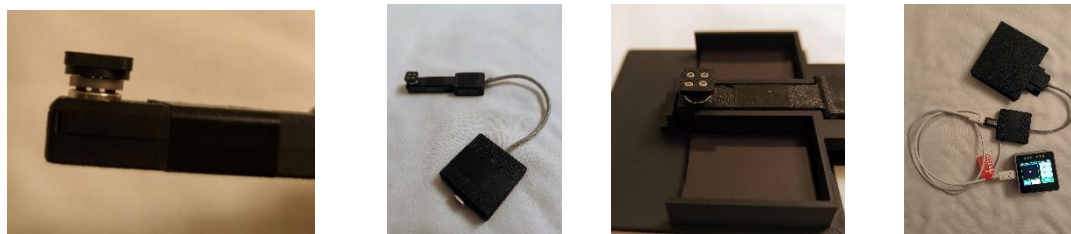
不随意運動の中から操作信号を識別(ピンクの縦線)

特殊な演算式で、不随意運動の中から操作信号を抽出することに成功、

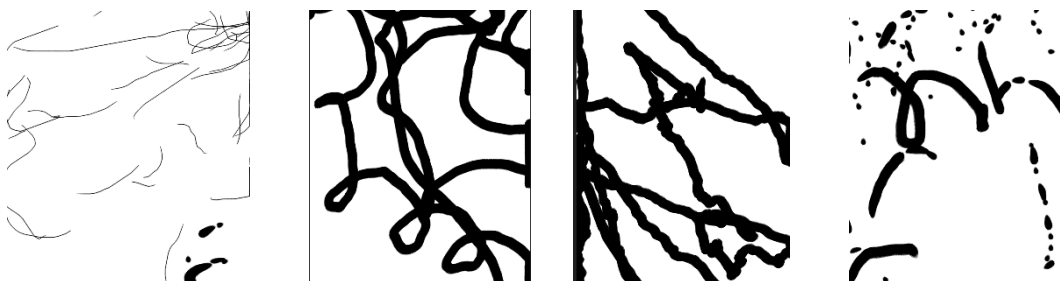
ある程度の不随意運動や呼吸等の入力の外乱がある状態であっても操作できるようにしました。

■書字認識システムの開発（研究中 試作段階）

当事者の微小な動きで書字できるシステムこそがヨミトリ君が目指している指筆談のデバイス化の最終形です。このデバイスはまだ研究段階ですが、デバイスで書字ができるようになってきています。



最新型の小型 6 軸荷重センサーを導入。高性能ヒューマノイドロボットなどに使われているセンサーをヨミトリ君に組み込むことで、32 方向の識別を可能とし書字認識を行います。



当事者の書字のサンプル

文字の書字まではできていませんが、手の書字動作の識別は全方向でできるようになりました。当事者が書いた文字が認識できるように研究を継続中です。

ヨミトリ君開発は止まることなく開発継続中です。最新機材を体験してみてください。以前に体験済みの方もぜひ最新機材に触れてみてください。以前よりも簡単に色々出来るようになっていきます。うまく操作できなければ操作できるよう研究し、改良を進めていきます。ヨミトリ君の開発に是非ご協力ください。支援のご依頼をお待ちしています。



■「あなたがわかっていること つたえたい」の広がり

遷延性意識障害や閉じ込め症候群の状態にある障害当事者の方々との 13 年間の意思疎通の取り組みの根幹には、いつも「あなたがわかっていること 伝えたい」という願いがありました。

当事者の皆さんとの一緒に活動としては、指筆談の介助により思いを語るお話会の開催、書字介助により紡いだ文章の発表、在宅介護を受ける当事者の方の担当者会議に参加する機会をいただき、医療・介護従事

者の方々に思いを伝える、等を行ってきましたが、この度、東海地区の拠点病院と東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」の連携プログラムが開始しました。

既に何人かの遷延性意識障害当事者の方が、画像診断や脳波、嚥下・呼吸器などの各種検査・診察を受け、症状の改善への取り組みを始めています。

当事者の方々が自らの言葉で、日々の生活の中での悩みやリハビリへの思いを伝え、専門の医師の先生方と話し合っ、方向性を見出しておられます。

第1陣の検査が10月中旬まで続きます。

次号で、その取り組みの詳細と成果をお伝えさせていただきます。

9月の半ばには、重症心身障害児の支援団体の施設をお借りして、初めてお子さん向けに指筆談とヨミトリ君の体験会を開催します。言葉を紡ぎ、ヨミトリ君を操作してゲームや意思疎通アプリを楽しんでいただけるよう、ヨミトリ君プロジェクトはがんばります！新登場のカメ太君の活躍もお楽しみに！！

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性は常にあります！

あなたがわかっていること伝えたい。

情報を必要としている方、表出しているのにまだ伝わっていないあなたの大切な方に、指筆談とヨミトリ君が届きますように。

ご一緒にしましょ！

<https://www.goisshoshimasho.com/>

ヨミトリ君HP

<http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitol-kun-project/>

東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」

<https://pvs-himawari.wepage.com/>

<筆者プロフィール>

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「指筆談ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。「ご一緒にしましょ」代表。ヨミトリ君プロジェクト。東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」役員。第52回NHK障害福祉賞優秀賞。ヨミトリ君共同考案者。

備忘録～理事長の独り言⑥～

鳴海 明敏

8月某日

青森県内での「カウンセリング」の学習が、どんなふうに行われてきたのかを振り返るということをしてきたが、今回はそれを一休みして、先月開催された弘前カウンセリング研究会の「一日ワークショップ」に、講師として頼まれたことをきっかけに思いついたことを書き留めておくことにする。

弘前カウンセリング研究会は、県内では青森カウンセリング研究会に次ぐ歴史をもち、現在も会員がいて月例会やワークショップを開催するなど、頑張っている研究会である。しかし、ここも会員数は減少し、高齢化・固定化していることに変わりはない。

その弘前カ研から、今回の一日ワークでは「フォーカシング」をテーマにしたいので講師を引き受けて欲しいと依頼があった。私は出来るだけ多くの人に「フォーカシング」を理解して欲しいと思っているので引き受けることにしたが、ペアでのフォーカシングのセッションの実際も見せて欲しいというリクエストもあったので、毎月青森で開催している「フォーカシングの会」で相棒として一緒に活動してくれている“おひげの K さん”と、二人で講師を引き受けるということで引き受けた。

当日はまず、私と K さんが自己紹介をし、それぞれがどのようにしてフォーカシングと出会い、フォーカシングをどのように学んできたのかについて話した。それから、私がロジャーズとジェンドリンの関係やカウンセリングとフォーカシングの違いについて簡単に説明したあとで、K さんがフォーカサーになり私がリスナーを務めて、15 分くらいのデモンストレーションを見てもらった。昼食後に参加者の中からフォーカサーを体験してみたい人を募ったら、お二人の参加者が名乗り出てくれたので二つのグループに分かれて、私と K さんがガイドをして、やはり 15 分くらいのセッションを体験してもらい、その様子を見学してもらった。

ワークが始まる前に私が持っていた今回のワークの目的は、フォーカシングについて知るだけでなく、「弘前カ研のメンバーが大事にしているエンカウンター・グループの活動に、フォーカシングをトッピングして貰えたらいいなあ」というものだった。私はその時点で「エンカウンター・グループに、フォーカシングをトッピングする」ということについて、

「話し手は、自分自身の“フェルトセンス”に触れながら話し、聞き手は、自分自身の“フェルトセンス”に触れながら話を聞くこと」が出来ようになったら、フォーカシングをトッピングすることになると思っていた。つまり、“フェルトセンス”というキーワードをワークの参加者に理解して貰うことが、「フォーカシングをトッピングする」ことになるのだろうと思っていた。この点については、ワーク中の質疑で、一人の参加者が「いままで、自分たちが“かんじ＝感じ”と言っていたものが、“フェルトセンス”なんですね」と言ってくれたので、ある程度目的は達成したのだろうと思っていた。

しかし、ワークが終わってしばらくしたら、私の中に「“フェルトセンス”という言葉を知ることが、トッピングではないだろう！」という思いが湧いてきた。

実際のエンカウンター・グループでは、話し手が自分自身の「かんじ＝感じ＝フェルトセンス」に触れずに、事柄・事実関係だけを延々と話続けることがしばしばある。このような時に、「聞き手が、軌道修正の必要性に気づき、話し手の軌道を修正出来るようになること」が、「エンカウンター・グループにフォーカシングをトッピングする」ということなのではないかと思えてきた。

フォーカシングの場合、フォーカサーがフェルトセンスに触れるのが難しい場合（初めてフォーカシングをする場合など）に、ガイド役がフォーカサーに「提案」をするという方法で、フォーカサーの取り組む方向を指し示したり軌道を修正することが、「技法」として整理されているが、エンカウンター・グループの場合は、聞き手が、話し手の軌道を修正するように働きかけることが方法として意識化されていない。

これは、エンカウンター・グループでは、話し手は誰でも、自由に話すことが出来さえすれば、おのずから話し手は自分自身のフェルトセンスに触れていき、そのフェルトセンスを言葉にしてくことでフェルトセンスが変化し、フェルトセンスの変化にともなって話し手自身が変化するのだということが、暗黙の前提とされているからなのだと思う。しかし、この「話し手は、誰でも・・・」という前提は、ジェンドリンたちの、話し手の中には「これが出来る話し手と、出来ない話し手が居る」という調査研究によって否定されているのである。

だから、エンカウンター・グループで、「聞き手が、話し手の何をどう聞いていくのを明確にし、それを技法化してくこと」が、つまり、「エンカウンター・グループにフォーカシングをトッピングすること」になるのだと思えてきている。

そうすると、聞き手は、話し手の話す内容（事柄・事実関係）に注目するのではなく、話し手の語り口・話し方に注目することになり、そこで、体験過程尺度が必要になってくるといふ事なのだろう。ここが、今のところの到達点である。

（了）



はじめに

前回、「どうやったら人は動き始めるのだろうか」という問いから、違和感を安心して持ち続けられる関係について書いた。今回はその問いを、もう少し「場」の側から考えてみたい。人が自分で考え、選び、動くことを私たちは「主体性」と呼ぶ。しかし、主体性とは本当に個人の内側にあり、本人が獲得していく能力なのだろうか。人が主体でいられるかどうかは、その人を取り巻く人や環境、そこで生まれる関係によって変わるのではないだろうか。

一人ひとりが主役の組織は可能か

8月30日、「新しい組織／コミュニティのカタチを模索する1day Gathering」をAtlya参宮橋との共催で開催した。タイトルは「NOT A COMMUNITY BUT A …?」。第1部のテーマは「一人ひとりが主役の組織は実現可能か?」。Atlyaから井尾さん、細野さん、そして宮城の大石さん、それぞれの実践を聞き、考える貴重な時間となった。従業員、経営者、母親、支援者など、私たちはさまざまな役割を持って生きている。しかし、その役割を外したところに「本当の私」がいるわけではない。むしろ私たちは、相手や場との関係によって異なる自分を現しながら生きている。対話のなかで出た「本音」の話も興味深かった。本音でいるとは、感じていることをすべてさらけ出すことではない。誰とどのような関係にあるかによって、何を話し、何を話さないかを自分で選ぶことができる。「本音／建前」「本来の自分／役割としての自分」と分けるのではなく、どちらも関係のなかで現れるその人の一つのあり方なのだと考えると、本音もまた、個人の内側に固定された「真実」ではなく、関係によって現れ方を変えるものなのかもしれない。そう考えると、主体性についての見方も変わる。どこでも同じ「本当の自分」を貫くことではなく、関係によって変化する自分を引き受けながら、その場でどのように自分を現すかを選ぶことも主体性なのではないだろうか。「一人ひとりが主役の組織」も、個人を組織より優先することではない。人と人との関係によって組織が変わり、その組織との関係によって個人も変化していく。リーダーも完成した答えを持って人を動かすのではなく、自分の違和感を場を開き、他者から影響を受けながら考え続ける。「管理から共創へ」とは、管理か自由かという二者択一ではなく、個人と組織の関係を固定せず、そのあいだに起きる変化を引き受けることなのかもしれない。

「つくる」のではなく、つくられていく

第2部はゲストを場の提供者である医療法人である伊東さん、そして高校生と大人を出会わせ続けている山崎さん、そしてはみだすラボから3名の実践者。特に興味深かったのが「中動態」という話だった。私たちは行為について、「自分がする」という能動と、「誰かにされる」という受動に分けて考えやすい。教育でも、「自分で考える」「自分で決める」「自分から行動する」ことを主体性として評価することが多い。しかし、実際に人が動き始める過程は、それほど明確に能動と受動に分けられるものではないのかもしれない。誰かと出会う。知らなかった生き方を知る。何かに違和感を持つ。誰かの言葉が残る。そのような出来事との関係のなかで、それまで動かなかった何かが「発動してしまう」とことがあるという話があった。人は完全に自分だけの意思によって動くわけでも、誰かによって一方的に動かされるわけでもない。人と環境とのあいだで影響を受けながら、行為そのものが生まれてくる。だがそれは、自分自身を徹底して観察できるようになってこそ、「立ち現れる」ものでもあり、「わたしはどう感じているのか」も重要な軸だということも語られた。医療現場が現在の形になるまでの話もあり、最初から完成形を目標として設定し、そのための計画を10年間遂行してきたわけではないという。現場で対話を続け、その都度起きていることを考えながら、10年後にどうありたいかを考え続けてきた。その積み重ねの結果として、振り返れば今の形が実現していたという話だった。ここには、「目標を設定する→計画する→実行する→達成する」という直線的なモデルとは異なる、組織や場の生成の仕方がある。未来を考えていないわけではない。むしろ未来を考え続けている。しかし、その形をあらかじめ固定しない。目の前で起きることに応答し、対話し、必要であれば変え、その連続のなかから次の形が生まれていく。人が育つことも、組織が育つことも、誰かがあらかじめ設定した完成形へ近づいていくことだけでは説明できない。

場を開くということ

8月30日に集まった人たちは、同じ仕事をしているわけでも、同じ考えを持っているわけでもない。一日だけ同じ場所にいて話し、それぞれの場所へ帰っていく。しかし、異なる人の言葉を聞くことで、それぞれのなかに何か残り、また別の場所で次の動きが生まれていく。そう考えると、必要なのは一つの強固な所属をつくることよりも、複数の人や場所との接点が開かれていることなのではないかと思う。そして、これは私が「すみあそび」でしてきたこととも、それほど離れていない。真っ白な紙と墨を前に、自分でもまだ言葉にならない感覚と共にいる。そこで起きることは、本人がすべてを意図して生み出しているとも、外から何かをさせられているとも言い切れない。紙や墨、身体、その場にいる人、その瞬間に現れた線によって次の動きが生まれ、結果として一つの表現が立ち上がる。場についても同じことが言えるのかもしれない。私が場をつくり、そこにいる人を動かすのではない。場を開く私自身も、そこで起きる出来事や対話によって動かされ、場そのものも変化していく。「場を開く」とは、完成形をつくることなく、そこにいる人と環境とのあいだに何か生まれ続ける状態を開いておくことなのではないだろうか。して見ることができるのかもしれない。もう少し実践を続けながら考えてみたい。

朱紅icco (櫻井育子) | 生涯発達研究所TANE代表・はみだすラボ主宰
宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。対話的書家・教育デザイナー。書と対話を通して、人と関係性の生成について探究している。Art Play Worker養成講座、第3期募集中。
研究参画者も募集中です。
<https://ikuko-sakurai.com/>



コソダテノシンリ (14)

中谷陽輔

連載第 14 回目です。ここ 3 回ほどは、コソダテにおける「余裕」について書いてきました（[第 11 回](#)・[第 12 回](#)・[第 13 回](#)）。親の「余裕」は、あると嬉しい贅沢品ではなく、子どもを守るためのインフラであること。そしてその「余裕」は、親個人の心がけだけでなく、労働環境、経済状況、保育・教育・福祉の仕組みなどによって、増えたり削られたりするものであること。そんなことを考えてきました。

「父親の育児参加」について考え始めてみる

今回からは少しテーマを変えて、何回かにわたり、「父親の育児参加」について考えてみたいと思います。

……と書き始めてみたところで、早速ながら、「父親の育児参加」という言葉は、なかなか不思議な言葉だな、と感じました。「母親の育児参加」という言葉と比べてみると、その不思議さが、より明確になるように思います。

「母親の育児参加」という言葉は、あまり耳にしません。「母親」は最初から育児をする人とみなされ、「父親」は、もともと別の場所にいる人が、後から育児という活動に“参加”してくる。そのような前提が「父親の育児参加」という言葉への違和感につながっているように思えます。

ただ、この少し不思議な言葉が、これほど一般的に使われていること自体、日本の父親と育児の関係をよく表しているようにも思います。

「父親の育児参加」が、そもそも存在しない家庭もある

「父親の育児参加」について考える前に、触れておきたいことがあります。

当然のことながら、すべての子育て家庭に、育児をともに担う父親がいるわけではありません。離婚、死別、未婚、別居、父親と連絡が取れないことなど、さまざまな事情によって、母親一人が主となって子どもを育てている家庭があります。また、家庭内に父親という存在はいても、実際の生活や養育にはほとんど関わっていない、という家庭も少なくないでしょう。

そのような家庭では、「父親がどのくらい育児に参加するか」という問い自体が、最初から成立しないことがあります。

仕事をする。子どもの世話をすること。食事や洗濯、保育園や学校との連絡、病気になったときの対応、家計の管理、進路や生活上の判断。そして、子どもの気持ちを受けとめながら、自分自身の不安や疲れにも対処すること。

…本来であれば、複数の人で担った方がよいことが、一人の親に集中します。

もちろん「シングルマザーだから子育てがうまくいかなくなる」という話でも断じてありません。一人で子どもを育てながら、子どもとの安定した生活を築いている方も数多くいます。反対に、両親がそろっていたとしても、家事や育児が一方に集中し、実質的には一人で家庭内のことすべてを担わざるをえなくなっている方もいます。

問題なのは、家族の形そのものではありません。子育てに伴う時間、身体、経済、判断、感情の負担が、一人の人に集中し続けること。そのことが親の余裕を奪い、親子の生活を不安定にしやすいのだと思います。

「コソダテノシンリ」の連載の[第1回目](#)で、私は「孤育て」について書きました。

ヒトの子育ては、もともと複数の人が関わる共同養育を前提としてきたのではない。一人の親だけが、子育ての責任と負担を背負い続けることには、そもそも無理があるのではない。か…そんな問題意識から、この連載を始めました。

そのように考えると、「父親が育児に参加する」ということの重要性は、単に男女平等や家事分担の話だけではありません。

父親が育児に関わらなかったとしても、その分の育児が消えてなくなるわけではないのです。多くの場合、その役割や負担は、母親、祖父母、きょうだい、あるいは保育・教育・福祉の支援者など、別の誰かが引き受けることになります。ただ、誰も十分に引き受けられなければ、一人の親が、自分の睡眠や健康、仕事、生活の余白を削って、その不足を埋めていくことになります。

だからといって、「子育てには父親が絶対に必要だ」という話にしたいわけでもありません。子どもや主たる養育者にとって必要なのは、必ずしも父親という特定の性別や立場の人だけではないでしょう。[第6回](#)で紹介した「子ども一人を育てるには一つの村が必要(It takes a village to raise a child)」という言葉にあるように、父親が子育てに関わっている家庭であっても、さらに別の誰かと一緒に子育てできたほうが良いといえます。

必要なのは、子どもと養育者を孤立させず、子育ての責任と負担をともに引き受ける人や仕組みがあることです。

とはいえ、父親がいる家庭では、父親がその重要な担い手になり得ることも事実です。それにもかかわらず、父親が仕事などを理由に子育てから外れ、母親がほぼ一人で育児を背負っ

ているとすれば、家族の中に父親がいても、「孤育て」が起きている状態だと言えるのかもしれませんが。

父親が育児の側へシフトすること

私自身、第一子が生まれた 2018 年に、約 1 年間、週に 1 日のみ出勤する形で育児休業を取得し、その後も時短勤務を続けました。第二子が生まれた際にも、2 か月の育児休業を取得し、時短勤務をさらに数年続けました。

育児休業を取得した当時、仕事はかなり手いっぱいでした。このまま子どもが生まれれば、自分の足元にある家庭は必ず疎かになる。このままの仕事のスタンスではいけない。そして、自分なりに胸を張って「父親」になれるようでありたい。

…第一子の誕生を、自分の仕事と家庭を含めたキャリア全体の転換期として受け止めていました。育児休業を積極的に取りたいというより、このタイミングで立ち止まらなければならぬという、焦りにも似た気持ちがあったように思います。

ただ、この個人的な経験を、特別な父親の物語として語りたいわけではありません。

むしろ重要なのは、父親が育児に関わるためには、気持ちだけではなく、実際に仕事の時間を減らし、生活の重心を育児の側へ移す必要がある、ということです。

「子どもを大切に思っている」「妻を支えたいと思っている」という気持ちだけでは、日々の育児は担えません。

子どもが泣いている時間に、その場にいること。保育園の送迎時間に、仕事を終えること。子どもが発熱したときに、予定を変更すること。食事、入浴、寝かしつけ、洗濯、翌日の準備といった、繰り返される生活の中に、自分の時間を差し出すこと。

父親が育児に参加するということは、単に気持ちの問題ではなく、父親の時間の使い方や働き方、生活の優先順位を、育児のある生活に合わせて組み替えていくことなのだと思います。

「イクメン」から始まった、男性育児の後押し

父親の育児参加が、社会的に推奨されるようになった流れを振り返ると、「イクメン」という言葉を避けて通ることはできません。

厚生労働省は 2010 年 6 月、男性の子育て参加や育児休業の取得を促進するため、「イクメンプロジェクト」を始めました。当時の厚生労働省は、「イクメン」を「子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性」と表現し、働く男性が積極的に育児をしたり、育児休業を取得したりできるように、社会全体の気運を高めることをプロジェクトの目的に掲げていました。また、育児をす

ることは、男性本人だけでなく、家族、会社、社会にも良い影響を与えるというメッセージも発信されました(厚生労働省, 2010)。

プロジェクトのウェブサイトでは、男性自身が「イクメン宣言」を行ったり、企業や団体がその取組を応援する「サポーター宣言」を行ったりする仕組みが設けられました。さらに、育児休業の体験談を紹介する「イクメンの星」や、男性の仕事と育児の両立を推進する企業への表彰なども行われました。個人の意識だけでなく、企業や職場を巻き込みながら、「男性も育児をする」という社会的な雰囲気を作ろうとした取組だったといえます。

当時としては、「男性が育児をすること」を分かりやすい言葉にして、社会に見える形で打ち出したこと自体に、大きな意味があったのだと思います。

一方で、改めて考えてみると、「イクメン」という言葉にもまた、どこか不思議なところがあります。当時もたびたび指摘されていましたが、母親が日常的に子どもの世話をしても、特別な名称で呼ばれることはありません。しかし、父親が育児をすると、わざわざ「イクメン」と名づけられ、称賛の対象になる。そこには、男性が育児をすることが、まだ例外的で珍しい行為だった時代の空気も表れています。

つまり、「イクメン」という言葉は、父親の育児参加を後押しした一方で、父親を育児の中心的な担い手というよりも、育児に積極的に加わる“特別な男性”として位置づける面もあったのかもしれません。

それでも、男性が育児休業を取りたいと思っていても、職場や周囲に言い出しにくかった時代に、国が「男性も育児をしてよい」「育児は男性本人や会社にとっても意味がある」と明確に発信したことは、決して小さくなかったでしょう。

「父親は仕事、母親は家庭」という分担が根強く残る中で、まずは男性を育児の側へ動かすために、「イクメン」という分かりやすい旗印が必要だったのだ、とも考えられます。

「イクメン」開始から 8 年——育休をとる父親は 16 人に 1 人

2010 年に国を挙げたプロジェクトが始まったからといって、男性の育児休業がすぐに一般的になったわけではありません。

私が第一子の育児休業を取得したのは、先に書いたように 2018 年です。イクメンプロジェクトの開始から約 8 年が経過していましたが、その時点でも、男性が育児休業を取得することは、まだかなり少数派でした。

私が最初の育児休業を取得した 2018 年当時、男性の育児休業は、社会の中でどのような位置にあったのかを具体的に振り返ってみます。

厚生労働省の「平成 30 年度雇用均等基本調査」によると、当時の民間事業所における男性の育児休業取得率は 6.16%でした(厚生労働省, 2019)。単純に計算すれば、育児休業を取得する父親は、16 人に 1 人ほどです。

イクメンプロジェクトが始まった 2010 年の男性の育児休業取得率は 1.38%でした。その後、取得率はじわじわと上昇し、2018 年度までに 5 ポイント弱ほど増加しました。それでも、男性が育児休業を取得することは、まだまだ少数派だったといえます。

しかも、育児休業を「取得した」といっても、その期間はかなり短いものが中心でした。

同じ平成 30 年度調査では、調査前年度に育児休業を終えて復職した男性のうち、「5 日未満」が 36.3%、「5 日～2 週間未満」が 35.1%でした。合わせると、男性の育児休業取得者の 71.4%が、2 週間に満たない期間で復職していたことになります。一方、半年以上の育児休業を取得した男性は全体の 5%にすら満たない状況でした。

これらの数字から見てくるのは、当時、男性が育児休業を取ることで体が少なかっただけでなく、取ったとしても、生活全体を育児に合わせて組み替えるほどの長期取得は、さらに少なかったということです。

数日や 1 週間程度の育児休業であれば、出産直後の手続きや家事を担うことはできるかもしれませんが、日々変化する子どもの状態や、睡眠不足を含む家庭生活の継続的な負担を、生活者として経験するには、ある程度の時間が必要です。

育児休業の取得率だけでなく、どれくらいの期間、父親が育児生活の中にいたのかを見る必要があるのは、そのためです。

二人に一人が育休を取る時代へ

2018 年度からおよそ 7 年を経て、状況は大きく変わりました。

2026 年に公表された「令和 7 年度雇用均等基本調査(厚生労働省, 2026)」では、男性の育児休業取得率は 50.9%となりました。現在では、対象となる男性のおよそ二人に一人が、育児休業または産後パパ育休を取得しています。2018 年度の 6.16%と比較すると、8 倍を超える水準です。

なお、現在の取得率には、2022 年に制度が始まった「産後パパ育休」も含まれているため、2018 年度と完全に同じ条件での比較ではありません。それでも、男性が育児のために仕事を休むことが、この数年間で急速に広がってきたことは確かでしょう。

変わったのは、取得する男性の割合だけではなく、同じく令和 7 年度の調査では、育児休業を終えて復職した男性の取得期間について、「1 か月～3 か月未満」が 30.3%と最も

多く、次いで「2 週間～1 か月未満」が 28.0%、「5 日～2 週間未満」が 14.1%となっています。「5 日未満」は 6.8%まで低下しました。

2018 年度には、育児休業を取得した男性の 7 割以上が 2 週間未満でした。それが現在では、2 週間以上取得した男性が多数となり、最も多いのは 1 か月から 3 か月未満となっています。

一方、最新調査でも、「10 か月～12 か月未満」は 2.4%、「12 か月～18 か月未満」は 1.8%です。合わせても 4.2%であり、1 年前後の長期取得は、以前より増えているとはいえ、今なお少数です。

もちろん、1 か月や 3 か月という期間が、育児の長い道のりの中で十分かどうかは、また別の問いです。母親の育児休業期間と比べれば、今なお大きな違いがあります。また、「何日休んだか」という数字だけで、その人が実際にどのくらい家事や育児を担ったのかまでは分かりません。

それでも、この数年で、「男性も育児休業を取ること」、そして「数日ではなく、ある程度まとまった期間を取ること」が、急速に現実的な選択肢になってきたのだと思います。

育休を取った後、どう働くのか

ただ、父親の育児参加を考えると、育児休業を何日取得したか、だけでは捉えきれないものがあります。

育児休業は、ある意味で分かりやすい制度です。「取得したか、しなかったか」「何日取得したか」を数字にできます。一方、その後、日々どのように働くかは、それほど注目されません。

育児休業が終われば、子育ても一区切り……となるわけでは、当然ありません。

むしろ、保育園への送り迎え、子どもの発熱、通院、食事、入浴、寝かしつけ、洗濯、翌日の準備など、日常的な子育ては続いていきます。育児休業を取ること以上に、復帰後も、子どものいる生活に合わせて、仕事の時間や働き方を調整し続けることが必要になります。

しかし、男性が育児のために時短勤務をすることは、育児休業を取ること以上に、まだ一般的とはいえないようです。

厚生労働省の委託調査では、小学校 4 年生未満の子どもを育てる男性正社員 1,000 人のうち、育児のための短時間勤務制度について、「利用したことはないが、利用したかった、あるいは利用したい」と回答した人が 21.6%いました(日本能率協会総合研究所, 2023)。

育児休業を取ることが少しずつ一般的になっても、復帰後、育児に合わせて労働時間を短くすることには、また別の難しさがあるのでしょうか。

…周囲に迷惑をかけるのではないか。自分の評価やキャリアに影響するのではないか。男性が時短勤務をすることを、職場からどのように見られるだろうか。収入を減らしてまで、自分が時短勤務をする必要があるのだろうか。

いろいろな思いが生じることは、想像に難くありません。

また、育児休業は「取る」という一度の決断で始められますが、時短勤務は、毎日、「早く帰る」「仕事を残して職場を出る」「自分がいない時間の仕事を誰かに頼む」という選択を繰り返すことになります。

そう考えると、父親の育児参加を考える際には、育児休業の取得率だけでなく、「父親が、子どものいる日常に合わせて、どのくらい働き方を変えられているのか」という視点も大切なのだと思います。

「父親も育児をする」は、反論しにくい正論になった

今の時代、「父親は育児をしなくてよい」と公に主張する人は、それほど多くないでしょう。父親も子どもと関わった方がよい。妻だけに家事や育児を任せるべきではない。育児休業も、取れるなら取った方がよい。

こういった考え方には、私自身も基本的に賛成です。これまで述べてきたように、父親の育児参加が増えていることは、基本的には歓迎すべき変化だと思います。

…ただ、何かが「正しいこと」や「良いこと」として社会に広がるときには、少し注意も必要だと考えています。

「父親も育児をした方がよい」という大きな方向性が正しいとしても、どれくらい育児をすれば参加したことになるのか。どのような関わりが、子どもや家族にとってプラスになるのか。父親が育児をすることで、夫婦関係は本当に良くなるのか。父親自身は、育児を通して何を得て、何を失うのか。そして、夫婦ともに働き、夫婦ともに育児をすることで、二人とも疲弊してしまうことはないのか。

こうした、より具体的な問いについては、意外と十分に考えられていないように感じます。

さらにいえば、「育児休業を取得した」という記録のみによって、「育児に参加した父親」と呼べるのでしょうか。

たとえば、育児休業中も仕事の連絡ばかりしていたり、いつまでも妻から一つ一つ指示を受けなければ動けなかったり、家事や育児を効率よく進めようとするあまり、妻や子どもに自分のやり方を強く求めたりしていたとしても、「育児参加」には違いありません。

逆に、育児休業は取得できなかったとしても、限られた時間の中で、子どもの様子を気にかけて、パートナーと話し合い、家庭の運営を自分事として引き受けている父親もいるでしょう。

だとすると、育児休業の取得率や家事・育児時間という「量」は重要だとしても、それだけでは見えない「質」の問題がありそうです。

父親の育児参加が増えてきた今だからこそ、次に問われるのは、「父親が、どのように育児に関わるのか」ということなのだと思います。

「育児は仕事の役に立つ」という発想

私がこの連載を始めた際、参考文献の一つとして挙げた本に、浜屋祐子・中原淳著『育児は仕事の役に立つ——「ワンオペ育児」から「チーム育児」へ』があります。

今振り返っても、なかなか印象に残る題名です。

育児と仕事は、一般的には、時間やエネルギーを奪い合う関係にあると捉えられがちです。育児を優先すると仕事ができない。仕事を優先すると育児ができない。どちらかに時間を使えば、もう一方が圧迫される。いわゆるトレードオフの関係です。

しかし、「育児は仕事の役に立つ」という題名は、育児と仕事の関係について、別の方向から光を当てています。

確かに、育児では、さまざまな力を使います。

自分の思い通りにならない相手と関わる力。予定外のことが起きたときに、優先順位を組み替える力。自分一人で何とかしようとせず、誰かに助けを求める力。正解が分からないまま、とりあえず試してみて、うまくいかなければ修正する力。言葉にならない相手のサインを読み取り、状態を想像する力。自分とは異なるやり方をするパートナーと話し合い、折り合いをつける力。

……こうして並べてみると、確かに仕事にも役立ちそうです。

むしろ、子どもや家族と本気で関わることは、相当に高度な対人援助やマネジメントの経験なのかもしれません。

ただ同時に、少し引っかかることもあります。

育児は、仕事の役に立たなければ価値がない、というものでもないはずです。

もちろん、この本が、そのような単純な主張をしているわけではありません。むしろ、育児を仕事の妨げやキャリア上の損失としてだけ捉える社会に対して、別の見方を提示した本なのだと思います。

それでも、「育児は仕事の役に立つ」と説明しなければ、特に男性が育児に関わることを正当化しにくかった時代があった、ということでもありそうです。

育児をすることで、仕事にも良いことがある。育休を取っても、長期的には会社の役に立つ人材になる。そう説明されて、ようやく男性が育児に関わることを、会社も本人も受け入れやすくなる。

そこには、生活や家族よりも仕事を中心に、男性の価値を測ってきた日本社会の姿も透けて見えるように思います。

父親が育児に関わる理由は、仕事に役立つからだけではありません。

子どもと関係を築くため。パートナーと生活をともに営むため。家族の誰か一人に、過度な負担を負わせないため。そして、父親自身が、自分の人生を仕事だけに限定せず、家族とともに生きていくためでもあるでしょう。

育児が結果として「仕事に役立つ」ことは、十分にありえます。

ただ、仕事に役立つかどうかを超えて、育児に関わること自体が、父親にとって重要な人生経験なのだと思います。

「参加する父親」から「ともに育てる父親」へ

男性の育児休業取得率が50%を超えたことは、大きな節目です。

少なくとも数字の上では、「父親が育児に参加するか、しないか」という段階から、「父親がどのように育児をするか」という段階へ、社会は移り始めているように見えます。

ただ、その変化は、必ずしも簡単なものではありません。

父親が家庭にいる時間が増えれば、夫婦の意見がぶつかる機会も増えます。育児を担おうとする父親が、自分のやり方や正しさを家庭に持ち込み、妻や子どもをコントロールしようとしてしまうこともあります。母親の負担を軽くするはずが、夫婦ともに仕事と育児に追われ、二人とも余裕を失うこともあります。

また父親自身も、「仕事のできる自分」「家族を支える自分」「子どもに必要とされる自分」といった複数の役割の間で、迷ったり、傷ついたりすることがあるでしょう。

父親の育児参加には、たくさんの可能性があります。

ただ、参加すれば自動的に家族が幸せになる、といえるほど単純なものでもなさそうです。

だからこそ、この先何回かにわたって、父親が育児に関わることについて、子どもへの影響、母親や夫婦関係への影響、父親自身の変化、仕事との関係、そして育児参加によって起こりえる難しさも含めて、考えてみたいと思います。

目指すのは、「育児をよく手伝う父親」でしょうか。

それとも、家事や育児を効率よく管理する「有能な父親」でしょうか。

あるいは、家族とともに迷い、助けを借り、ときには自分の正しさを手放しながら、子どもとともに育っていく父親でしょうか。

……みなさんの身近にいる「育児に参加している父親」は、どのような父親でしょう。

そして父親自身は、その育児参加によって、どのように変わっていくのでしょうか。

次回から、もう少し具体的に考えてみたいと思います。

【引用・参考文献】

浜屋祐子・中原淳（2017）． 育児は仕事の役に立つ——「ワンオペ育児」から「チーム育児」へ 光文社

厚生労働省(2010)．「イクメンプロジェクト」サイトを開設しました 厚生労働省 <<https://www.mhlw.go.jp/topics/2010/06/tp0618-1.html>>（最終閲覧日 2026 年 8 月 25 日）

厚生労働省(2019)．平成 30 年度雇用均等基本調査：結果の概要 厚生労働省 <<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-30r/07.pdf>>（最終閲覧日 2026 年 8 月 25 日）

厚生労働省(2026)．令和 7 年度雇用均等基本調査：結果の概要 厚生労働省 <<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-r07/06.pdf>>（最終閲覧日 2026 年 8 月 25 日）

日本能率協会総合研究所(2023). 令和4年度仕事と育児の両立等に関する実態把握のための調査研究事業:仕事と育児等の両立支援に関するアンケート調査報告書<労働者調査>概要版 厚生労働省 <<https://www.mhlw.go.jp/content/11901000/001086990.pdf>> (最終閲覧日 2026 年 8 月 25 日)

<プロフィール>

児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、早 10 年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育て&子育て支援まみれの日々を送っている。プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに不定期投稿中。
(<https://childcare-support.hatenablog.jp/>)

社会科の授業を対人援助学の視点から⑭

2026年8月 内田一樹

0. はじめに

今年度も高校選択授業「東北と復興」の石巻市スタディツアーが7月28日から7月31日に無事に実施できた。今年度も多くの方たちに関わっていただき、お世話になりました。ありがとうございました。

ここでは今年度のスタディツアーの行程と一人の引率教員としての私の感想を書いていきたいと思う。

1. 今年度の授業のテーマ

2026年度の選択授業「東北と復興」のテーマは、「表現としてのA r t」である。普段、学校の授業の中では何らかの教えたいことを教師が様々な方法を駆使して表現していく。言葉、数字、写真や映像、パワーポイントを用いた動的なスライド、身振り手振り、端的にまとめた黒板など。歴史・地理・公共にかかわる概念やその概念と概念の結びつきを、用語や事実を用いて表現していく。それゆえに時にその用語や事実の「暗記」に終始するのではないかという批判が根強くある。「社会科は暗記科目だ」という言説は、ポジティブにもネガティブにも、生徒・保護者・教員、様々な層の人たちが言う。確かに教育の中には、用語や事実、定理や構文などを当たり前に使いこなすために、その前段階としての「暗記」は当然にあり得ると個人的には思っている。もちろん「暗記」するまでのプロセスとして、好きで自然と覚えたのか、一夜漬け的に必死に覚えさせられたのかの違いはあるだろう。

しかし「東北と復興」で出会うこと、景色や言葉、出来事などは簡単に言葉として表現しえない領域にある。死者〇〇人、行方不明者〇〇人…といった数字的な表現も、「あのとき私はここにいて…」という語りによる表現も、ある一瞬を写し取った写真もその前後の多少の幅がある映像も、すべて起こった出来事のある側面を理解できるように表現されたものである。その意味ではその表現がすべてであると、理解したように思うと、その表現の裏にあるさらなる本質的な何かをそぎ落としてしまうのではないかと考えた。「あのとき私はここにいて…」という語りの指す「あのとき」とは？「ここ」とは？文字通りに表現された部分と、表現しようとした結果文字になっている部分と。その両方について一緒に考えることができるようにしたい。

そこで今年度は東日本大震災とその復興の中で起こっている言語化しえない、あるいは語りえない、可視化できないような「何か」を考えるために、それでもその「何か」を様々な方法で表現しようとしている人たちの作品や活動に焦点を当てようと考えた。「表現としてのA r t」に焦点を当てることによって、その本質そのものに迫る可能性があるのではないかということであった。

ここからは実際にこのテーマのもとに宮城県石巻市スタディツアーがどのような行程であったのか。そしてその中でどのように感じたのかを書いていく。

2. 全体の行程

7月28日(火)

午前;大宮駅から石巻駅へ移動・「生きる家」見学・ちばふみ枝さん講演

午後;震災遺構門脇小学校・南浜ツアー・MEET 門脇(3.11メモリアルネットワークの方の案内のもと)

7月29日(水)

午前;震災遺構大川小学校・Team 大川未来を拓くネットワーク只野哲也さん・佐藤周作さん講演・案内雄勝ローズファクトリーガーデン・雄勝花物語共同代表徳水博志さん講演

午後;雄勝ローズファクトリーガーデンにてボランティア作業

7月30日(木)

午前；2チームに分かれてみやぎ民話の会の方たち(代表；島津さん)と活動

午後；みやぎ民話の会の方たちから話をきく・石巻市博物館見学

7月31日(金)

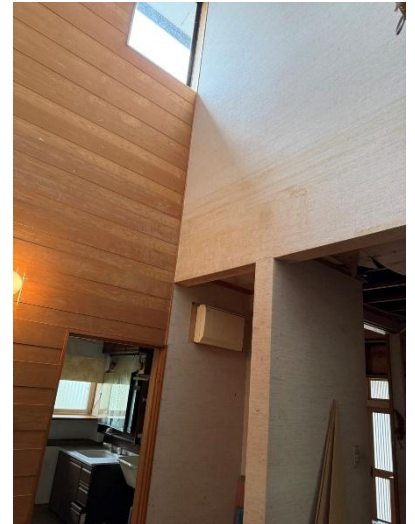
午前；志賀理江子さんオープンスタジオ見学、講演

午後；リアスアーク美術館・館長山内さんの案内

3. 具体的な内容と感想

1日目(7月28日)

今年のスタディツアーのはじまりは、ちばふみ枝さんの「生きる家」訪問だった。「生きる家」は、石巻市の渡波にあるお家である。もともとはちばさんのお父さんが建てられたマイホームで、現在の家主のちばさんが育った家でもある。東日本大震災の際に被災し、一階の天井上まで浸水した。震災後、この家をちばさんは家主として引継ぎ、アトリエ兼物置としてこの家を使用されていた。その後2019年ごろにこのままでよいのかと思い始め、2023年に「生きる家プロジェクト」としてオープンスペースの開催にいった。震災前にたっていた「家」が、震災後も「家」として時間を重ねている。ちばさんからいただいたプリント資料には「家に刻まれた経験としての津波のことや、その他様々な記憶について家自身に語ってもらいながら、お越しいただいた皆さまにとっても語るきっかけとなるような、そんな場所としてお過ごしただけでしたら幸いです。」とある。



高校生たちは、ちばさんから最初にお話をうかがって、松井至さんの短編ドキュメンタリー『家は生きていく』を鑑賞し、その後自由見学とした。1時間程度である。家には震災以前の写真や被災物、津波の跡が残る壁紙などの震災の記憶、震災後のオープンスペースとして活用される中で新しく置かれた作品等があった。

印象に残ったのは、記憶に残すことが行為や実践を通じてなされるということである。頭が器状になっている人形の陶器群でなる作品があり、その頭の器状の部分の縁いっぱいまで水が入っている。持ち主が水を注ぐ行為によって完成するその作品は、水を注ぐたびになぜここに水を注ぐのかを思い起こさせ、結果的に記憶することを、水を注ぐという行為を通して可視化している。仏壇に水を注ぐ行為はその度ごとに死者を思い起こす意味がある、というのをどこかで読んだ気がするが、そのこともあってこの作品が印象に残ったのだと思う。ちばさんもお気に入りだそうだ。

スタディツアーは、関東、埼玉県から宮城県石巻市へ訪問するという意味もある。その意味では、「生きる家」の玄関で「おじゃまします」といって訪問する経験も何かを示唆しているような気がした。「生きる家」への「おじゃまします」から始まった今回のスタディツアーは、石巻市で出会う人たち、震災遺構、展示されているモノ、景色や場所、音や風や匂い。様々な場所に残る震災前、震災当時、震災以降の現在までの日々の記憶の痕跡に触れる旅でもあったのだと今、改めて意味づけている。

午後は南浜門脇地区フィールドワークで、今年は少し曇りで途中から雨も降る中での実施となった。昼食を毎年恒例の石巻げんき市場でとったのち、震災遺構門脇小学校で3.11メモリアルネットワークの藤間さんと交流する。案内を担当されるのは今回で4回目である。「生きる家」プロジェクトについても藤間さんから教えていただいた。震災遺構門脇小学校、南浜復興祈念公園、そしてMEET門脇の順でまわった。



昨年からの変化として感じたのは、震災遺構門脇小学校を補強する鉄筋コンクリートの歩道のところに、小学校の中についての写真をつけた展示パネルが増えていた。展示パネルが増えて、明るさや角度などによって外から見ても見づらかった部分が、分かりやすくなった側面があるなど感じた。おそらくは震災遺構を設置している人達が訪れる人向けにされた工夫なのだと思う。一方で、案内してくださる藤間さんは、毎年のご案内の中でこの小学校に当時いた人や、以前に通っていた人たちからの語りを中心に案内してくださっている。死者〇〇人、

行方不明者〇〇人という数字だけではなく、それは一人一人の名前がある人たちであるということを実感したいとおっしゃっている藤間さんなので、一人一人の経験や記憶を中心に語ってくださっているのだと思う。そう考えた時に、展示パネルによって分かりやすくなっているぶん、一人一人の固有の語りという点では、なかなか言語化できないが、難しくなる側面もあるのではないかと感じた。2022年に震災遺構門脇小学校として始まってから毎年来ているが、震災遺構となってからも変化し続けていることを感じる。それは訪れる側であるこちら側の変化もあると思う。

その後南浜復興祈念公園内の「がんばろう！石巻」の看板に移動する。「がんばろう！石巻」の看板は5年ごとに作りかえられ、修繕されている。そうして5年後に更新し続けることを通して、思い出し続ける、忘れないことを目的としているようだ。ここにも思い出し続けるための行為や行動を通して、忘れないことを実践し続ける営みを感じた。忘れないことは覚えておくことではなくて、思い出し続けることなのかもしれない。

MEET 門脇では、一人一人の物語に焦点を当てた展示がされている。色々な方の語りがあるが、別の場所で話を聞いたり、交流したりする中で、語りの受け取り方が変化するときがある。新しく知ったことで、その一言の意味や重さが変化する。当たり前なことだけれど、それを強く実感する場所が毎年訪れている MEET 門脇だと思う。

2日目(7月29日)

石巻市で迎える朝。朝から震災遺構大川小学校に移動する。大川小学校では Team 大川未来を拓くネットワークの只野さんと佐藤さんから案内をいただく。只野さんは当時、生き残った小学生としてメディアで取りあげられる中で感じていたこと、今一緒に活動している佐藤さんとの思いを語ってくださった。そして副代表である佐藤さんから震災遺構大川小学校を案内していただいた。奥の山の手の崖のところで、ここで多くの児童が亡くなっているのが発見された、と黙祷をした。



Team 大川未来を拓くネットワークの只野さんはまた大川地区をみんなが帰ってくる場所にしたいと活動をされていた。未来に向けて現在に行われる活動。震災以前にあった大川小学校やその周囲の町の生活は私には見えない。生徒と一緒に来て、やはり生徒からは毎年大川小学校に対して、「被災した」という意味付けを強く持ってきたが、この場所に住んでいた人、通

っていた人たちにとって、その意味だけにフォーカスすることは違ったという感想を聞く。その通りだと毎年思うが、大川小学校について語る人はその人それぞれによって当然けれども異なっていることを感じる。当然なのかもしれないが、この人だから感じる、知ってほしい語りが、大川小学校にはある。しかし同時に震災遺構大川小学校そのものが訴えかけてくるもの、語りかけてくるものもまた大きいと感じる。

「皆さんは大川小学校に何を求めて来られているんですか？」という問いかけは、今年大川小学校のあとに訪れた雄勝ローズファクトリーガーデンの徳水利枝さんから投げかけられた問いだ。雄勝ローズファクトリーガーデンでは、午前中に徳水博志さんから復興教育に関わる講演を聞き、午後実際にガーデンで徳水利枝さんと地域のおばあちゃん(森の妖精さんたちと呼ばれている)と一緒に作業を行った。アロマをつくるためのラベンダーの花をより分ける作業で、生徒たちも話をしながら妖精さんたちと作業を進めていた。ここ数年、この時間は作業にしている。様々な話や情報を仕入れる中で、少しだけ作業という身体を使う時間によって、ここまでの学びが少し整理される時間だとも思っている。森の妖精さんたちとの作業は、ここまでの講演や展示物を見る形式とは少し違い、雑談の中で何かを知ることに近い。実際に高校生たちだからこそ語れることもあったのではないかと作業が終わり、締めくくりの感想交流の最後に利枝さんから伺った。しかし一方で3月11日のあの時どの場所で被災したか、語れる人語れない人、聞いても分からないだろうけれど知っていてほしいことなどについて伝えられ、その後先述した「何を求めて来られているんですか？」という問いにつながった。この答えについては私も生徒も沈黙するしかなかった。何よりも教員である私に向けられている気がした。その問いの意図もしっかりと受け取れていないかもしれないと不安に思いつつ、問われている私が答えるためには今後もここに通うしかないと思った。今後も来て、再会を繰り返す中でいつか答えが見つかるのではないだろうか。

3日目(7月30日)

みやぎ民話の会の方たちとの交流であった。みやぎ民話の会の方たちは、2026年の3月ごろに立命館大学の鶴野先生を通じて紹介していただいた。毎年立命館大学人間科学研究科の東日本大震災家族応援プロジェクトシンポジウムではご一緒させていただいていたが、直接交流させていただくのは今回が初めてであった。

事前学習でもzoomで鶴野先生や民話の会の現在の代表である島津さんらに講演いただいた。

午前中は2つのチームに分かれて、渡波地区とあゆみの地区で実際に採訪活動に同行する。

① あゆみの地区

お話を伺った方；佐々木さん・菅原さん・白井さん

民話の会の方；加藤さん・小田嶋さん

② 渡波地区

お話を伺った方；佐野さん・遠藤さん・大國さん

民話の会の方；島津さん・山田さん

内田は②の渡波の方に同行させていただいた。渡波地区では、佐野さん、遠藤さん、大國さんと3人の方からお話を伺った。佐野さんと遠藤さんは写真を使いながら身振り手振りで一生懸命説明してくださった。佐野さんは震災で津波を経験され、その後リフォームしてカフェを営まれていた。渡波地区の公園や慰霊碑、防潮堤に立ってもともとここに何があったのかを話してくださり、昼食時には写真と合わせて、カフェに来てくれた人たちが書き残したノートを見せていただいた。

遠藤さんは昨年、こころスマイルプロジェクトとの交流の際にも講演いただいていた、1年ぶりの再会となった。ただしお話を伺う場所が今年度は違い、その意味でも昨年度のお話と重なるところがあったが、むしろ2回目だからこそ受け止めることができたお話も合った

ように思う。生徒たちの中には1年ぶりに再会する人もいた。

大國さんは、渡波地区にある神社の神主さんである。写真はないが、震災当時のことについて語ってくださった。神社の中には写真はないが、絵は掲げられていた。印象に残っているのは、掲げられていた絵の中に日露戦争や第二次世界大戦に出征する兵士が残していった絵があったことだ。この地区から出征した兵士の絵だった。全員無事に戻ってこられたそうだが、大國さんが「当時は生きて帰ってきたいなんていうこともできないし、そういうことを願って描いた絵を自宅に残しておくわけにもいかないから、神社に残していったんだねえ」というようなお話をされたことだ。そのような思いを神社に絵として残したことで、そこから100年近く経った私がその想いをお話として伺うことができた、拾うことができたような気がした。そのとき、佐野さんや遠藤さんから伺ったお話も、同じようにこうやって聞いた私たちによってどこかに残って何年も後に何かの機会に誰かにきいてもらえるのか、と思った。言葉にするのが難しいが、資料館や博物館のような場所にきちんと保管されるのではなくて、私たちの間で残されていくもの。残っていくもの。まるでタイムカプセルのようだったと思った。大國さんが絵を指しながら話をされているのを聞きながら、まるでタイムカプセルを開けたような気持ちになったのだ。ただそれはタイムカプセルとして守ってくれた人がいるからで、語り継いできた人とそれを聴く人によって守られ、タイムカプセルとして残されてきたのだと思った。



午後は民話の会の方たちとの交流だった。今日のこの場は「合同採訪」だったのかどうかといった話から、話を聞くとときにはメモを取る事ばかりに集中してはいけないという話や、話を聴くことによって点が線になり、面になっていくという話。民話の会の皆さんが活動を積み重ねて来られる中で、こういったことに悩んでこられたのか、若いころはこんなことを思っていたといった話を聞いている高校生たちは、少し勇気づけられているようにも思った。実際に石巻市に来て震災体験を伺う中で、そのお話の何を受け止めるべきか、あるいは受け止めきれない自分自身の限界にも打ちのめされてきている高校生たちである。単にツアーを楽しむ、あるいは語ってくださる方の体験を大変だと聞くだけではなくて、その意味での難しさや悩みを抱えられる人たちがこの講座を受講しているからこそ、ツアーが進むにつれて表情が苦しくなっていく。だから民話の会の方たちが話を聴くことについて気を付けていること、逆に高校生たちに一緒に話を聴いていてどう思ったか、という形で話題をふってもらったことで、1日目、2日目とはまたちょっと違う、少し考えや姿勢を整理する時間になったのではないだろうか。この辺りは生徒の実際の感想が夏休み明けに出されるので、それを読んでまた考えたいと思う。今年度のシンポジウムや報告会などの場で生徒たちが何を考えたのかはぜひ伝えてほしいと思う。今回のスタディツアー3日目のプログラムは聴くことを大切にされている民話の会の活動の一端にでも触れることで、生徒たちが聴くことについてメタ的に考えることを目的に行った。むしろ聴くことについて、どのように聴くべきかという点では引率教員である私も、正解を持っていない。だからこそ民話の会の方たちと活動するのは、私にとっても学びが多い時間、気づきが多い時間となった。

3日目の夜は毎年少し早めに夕食も済ませて活動プログラムは終える。そのためここ数年恒例となっているが、生徒たちは宿泊先のホテルの近くのイオンモールに遊びに行く。21時に閉まるので、1時間半ぐらい。高校3年生の子が高1、高2の子を誘って有志で行く形になるが、私もついていっている。夜でもイオンは地元の中学生や高校生、親子連れやカップルでにぎわっている。

地方におけるイオンモールは、何でもあるアミューズメント施設だと思う。私の地元にも中学生の時にイオンモールができて、中学・高校、その後も帰省するたびに思い出がたくさんあったイオンがあった。映画を見たり服を買ったり、友達と遊んだり…。思い出はたくさんある。イオンが近くにあるだけで、何でもそうう気がしたし、何かがあればイオンに行く。日常の一部でもあるけれど、ハレとケの日のうちのハレの日でもある。きっと石巻のイオンも誰かににとって同じような場所なのだと思う。だからゲーセンで楽しそうに遊んだり、ウィンドウショッピングを楽しんだり、何人かと一緒にフードコートで31アイスクリームを食べながら、

ここまでのツアーの感想を話したりする時間は大切なのだ。ツアーに来ている高校生も地元の中高生も、見ていたらそんなに変わらないと思う。たくさん学んでほしいと願ってツアーのプログラムを教員としては組むけれど、こうした隙間時間に石巻市を楽しむ術を見つけてくる高校生たちは本当に素敵だ。こうした隙間時間の中に私たちと石巻で何かつながる、重なる部分があるのではないかな。

4日目(7月31日)



石巻市での最終日。午前中は写真家の志賀理江子さんのオープンスタジオを訪ねる。昨年度のスタディツアーの際に講演してくださった宮城教育大学の山内明美准教授の紹介で、東京で志賀さんの作品を見てから来年度はぜひこの方のお話を伺いたいと思っていた。志賀さんは気さくな方で、オープンスタジオの中でご自身の作品を見せながら生い立ちから震災前に宮城に移住したお話、震災後の日々をお話しくださった。

志賀さんが防潮堤の建設によって生態系が壊れているという話もあると紹介されたあたりで、ある男子生徒が嗚咽を上げて泣き始めた。志賀さんがそれに気づ

いてちょっと場所を移動して、生徒たちにアイスを配られた。その間に本人に話をきくと、自分の地元の川に堰がつくられたことで勝手豊かにあった川の生態系が壊れてしまったという話を、漁師のおじいさんたちから聞いていたという。そして石巻市に来た時、大川小学校を訪れた時に北上川を見てきて、川の豊かなしじみなどについて只野さんから聞いたという。(この話を只野さんと移動する途中でしているのは私も見ていた。)しかし防潮堤がつくられていく中で生態系が破壊されていくことに対して、ここでも同じことが起きているのだと、急に見たわけではないがその景色、イメージが自分の中に流れ込んできて涙が止まらなくなってしまうと。本人も初めての経験で驚いていると語った。その子は自然や動物が好きで、どちらかといえば野生児に近いような感覚で、様々な社会問題や環境問題について考えることができた人だった。だからこそ泣き始めた時に、防潮堤の話だったのでもしかしたら…、と思っていたが、ここまで自分が見えていない景色に対して共感を持って感情を動かすことができるとは。思わず「石牟礼道子みたいやん」と言ってしまった。少し落ち着いてから志賀さんの講演に本人を戻して、本人の口からどうして涙があふれたのかを志賀さんに説明したが、それを聞いて志賀さんは「あの日(震災があった日)の夜(泣いている漁師のおじいさんたち)を見ているみたいだったよ」と返された。志賀さんと男子生徒のやりとりは忘れることができないだろう。

もう一つ志賀さんのお話の中で印象に残っているのは、作品を生み出すときに、「自分の身体の中に入り込んでくる、宿す感覚」といった言葉で説明されていたところだ。不思議とどちらかといえば私は「生みの苦しみ」の方が作品を生み出すときの表現としてはじっくりくるように思っていたが、確かに生み出される前に身体の中(思いなどの心や思考などの脳も含めて)に入り込んでくるはずだったが、そうした感覚になったことはなかった。もしかしたら男性か女性かということもあるのかもしれないとも思いつつ、その気づきがとても印象に残っている。

お昼ご飯を食べて気仙沼のリアスアーク美術館に移動する。お昼ご飯はオープンスタジオの近くで陶片ハンバーグが食べられるお店にしたが、そこで高校1年生の生徒がもう一人の引率教員に「色々なおいしいお店を知っていてすごい」(石巻市で最後の食事だったため)と言ってくれた。それは不思議とうれしかった。それだけ続けてきたことで出会ってきた人やお店があった結果だと思ったからだと思う。

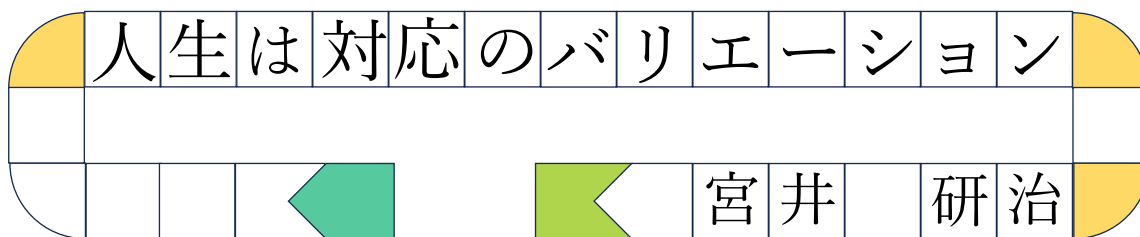
1時間半ほどバスで移動して、リアスアーク美術館へ。いよいよ最後のプログラムである。初めての場所だったが、館長の山内さんが案内してくださった。最初に「歴史民俗史料から先に見ます。なぜだかわかります

か？」と生徒たちに問いかけられる。「震災で失われたものを知るためには失われる前を知らなければ分からないからです」と山内さんが説明されたところから始まった。リアスアーク美術館は資料館や博物館ではなく、美術館で、しかも自前で予算を立てて展示されているのがとても興味深かった。地下にある「被災物」一つ一つの物語もつけられていた。これらは実際に使っていた人から聞いた話というわけではないが、この地域に住んでいれば容易に想像できる物語らしい。ここでも石牟礼道子の『苦海浄土』を思い出した。さらに展示されているものは「瓦礫（がれき）」ではなく誰かの生活の一部



だったもので「被災物」なんだということも繰り返し強調しておっしゃられていた。このお話は2年ほど前の福島県浜通りスタディツアーに訪れた際に、「フレコンバックの中身は汚染物ではなく誰かの思い出の品だったんだ」と気付いた生徒が感想をつづっていたことを思い出した。確かにその通りだと思う。行政によって何月何日までなら無料で処分できますという期限が設定されることと、そのために震災後気持ちを整理するよりも先に、身の回りの物を整理しなければならない難しさを、目の当たりにしてきたことがある。

リアスアーク美術館を出て、一ノ関駅へと向かい、今年度の石巻市スタディツアーは終了した。3泊4日。5年目、5回目のツアーが終わり、来年もまた来たいと思いを抱いた。今年投げかけられた問いを、授業者として返すことができるのは、来年もまた来て来年の生徒たちの語る言葉の中にあるのではないかと思う。何かを続けることの難しさをかみしめながら、それでも、と思わずにはいられなかった。



第14話 心理士、保育現場にお邪魔します～保育士さんとのコンサルテーションを通して②～

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しみながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

みなさん、お元気ですか？ほんとに時間が経つのは早いものです。いや1年のサイクルが早すぎる。歳をとるとなぜ時間が足早に過ぎ去ってしまうのか？それは、その日その日の出来事が、子どもの頃には、新鮮で驚きをもって、迎えられていたのに、大人になるといふか、歳をとればとるほど、いつものルーティンとしてしか受け取れないからだとチャットさんの解答の一つとしてできます。たしかに、人生における感動の総数には限りがあるのかしらなどと少し寂しくなります。一方、お盆、クリスマス、正月や、日々の祭事がいとまなく次々とやってくることは、慌ただしくも寂しくはさせない、先人の知恵の一つではと考えたりもします。そして、今年も祇園祭のお囃子の音が聴こえる季節となりました…なんて書くと、ああ、宮井さんは京の町の方なんだなんて勘違いされるわけです。勘違いといふか完全な虚偽なんですけど。京都は京都でも京都府の南部に居住していますので、京都洛中のあの「コン、チキ、チン」といった鉦(か

ね)、太鼓、笛の雅な音色はどんだけ耳が良かろうと聴こえるはずはありません。それでも、7月の声を聞くと、空耳的に聴こえてくるような気になるのは、京都(府)民のなせる技かと(大分出身で戸籍もまだ置いたままなので、京都民を語るのも騙りなのですが)。でも、対人援助学マガジンの次号が出るのはたぶん9月あたりですから、また、別の行事に心が拠っているのでしょう。

1.コンサルテーション現場での対応のバリエーションのいろいろ

ちょっとややこしい言い回しのサブタイトルでごめんなさい。前号から引き続きのテーマで書いています。今回は、具体的によく上がってくる保育士さんからの困りごとについて書こうと思います。前回書きましたが、困りごとのテーマとしては、

- ①対象となる子どもの発達特性に絡むこと
- ②不適切な養育に関すること

だいたい、この二つに集約されるような気

がします。まず、①について、具体的によく出てくるような困りごとの場面です。

困り事①「聞いているのか、聞いていないのか？わかっているのか、わかっていないのか？それが、わからなくて不安です。」

「集団の中にいるA君に声かけしてもわかっていないのに、個別に声をかけると理解できている。しかし、個別対応ばかりはできないので困っている。」

文脈は、その子や、保育士さんの理解度によって違って来るわけですが、集団と個別の中で揺れる保育士さんのジレンマが伝わってきます。一昔前なら集中力の無さという個別性や、性格に起因しているという考えが多かったのでしょうか。今は、「特性」という言葉が保育士さんの中にも馴染んできているようです。集団の中にいるA君にいくら注意喚起しても、その状況ではなかなか難しいことはわかっている。じゃあ、どうしたらいいとなります。おかしいもので、難しいとわかっているのに「保育園は集団の中で成長するためにある」と基本に忠実な方ほど、集団でのA君への注意を繰り返してしまい、こじらせてしまうような事もあります。もちろん個々の子どもによる理解のレベルの違いも大きいですし、一律の対応などありません。個別場面で理解が良すぎるのも玉に傷で、「わざとやってんじゃないの！」とイラっとさせられるのも人情だと思います。よく使うのは「(A君は) 悪気はないんですね」という言い回しです。「特性」の為せる業という分けです。これはこじ

つければ、心理療法で言う「外在化」の手法でしょう。あわせて「憎めないところもあったりして？」などとフォローを打つと「確かに！」なんて乗ってきてくれるなら、うまい流れができてきていると感じます。こうした保育士さんの側の見方(認知)が変わったからといってA君の集団での行動が急に変わるわけではありません。「特性」が急に変わるほうがおかしいわけです。保育士さんが「まあ、いいか」と思い、個別対応をコツコツ続けてくれることで、A君と保育士さんの関係性は確実に変化すると思います。でも、また時間が経てば保育士さんのイライラは募るので、定期的なコンサルテーションが必要になるのでしょう。

こうした集団 VS 個別の対立が家庭との協力にも波及した場合に、保育士さんの困惑感がさらに高まるようです。「お母さんは子どもさんの発達特性をわかっておられない」「家庭からの協力が得られない」といった嘆きに現れます。これにも外在化がうまくはたらく場合があります。つまり、お母さんも「悪気はない」という言い回しです。家庭は個別の場ですから、A君が理解しやすい状況であり、集団の中のA君の難しさはお母さんには伝わりにくくて当然というものです。そこで説明を尽くそうとしても、お母さんからすると、家ではそこそこか、非常にかわかりませんが、よく物事がわかっているA君に対しての保育園からの『誹謗中傷』に聞こえているかもというメタファーは案外効きます。

困り事①「ちょっと、自分のやりたいことを邪魔されると、すぐに相手の子を噛んでしまうので目が離せませ

ん。」

「他の子のおもちゃが気になるようですぐに取り上げるんです。でもすぐに飽きてしまい、また、他の子のおもちゃに手を出すの繰り返しです。」

「お絵描きとか、お昼ごはんとか、席についてほしい時には必ずどこかへ行ってしまいます。」

「すぐ噛む」「すぐとる」「すぐ逃げる」の3すぐに関すること。勝手に「3すぐ」なんて命名しましたが、これが結構困りごとの定番でもあります。

この困り事について一緒に考えるときは「年齢」「頻度」「期間」「程度」は必ず押さえる必要があるのは当然です。つまり、発達の視点です。同じ「噛む」という行為でも1歳児と5歳児の場合は見立てに大きな違いがあります。実際、どの子にも自我の芽生えと成長の過程で、大なり小なり起こる発達のエピソードなわけで、通常は「問題」となる前になんとか見られなくなることで収まっていきます。「噛む」ことで考えるなら「2歳児あたりの子が、玩具の取り合いで相手を噛んで泣かせちゃった。」これだけでは問題として上がってくることはないでしょう。しかし、その後、頻回となる。保育士さんが、介入して、その子と話をすると「悪いこと」だとはなんとなく理解できているし、その場では保育士さんと一緒に相手の子にも謝れる。でも、またすぐにやってしまう。これは問題なのと聞かれたら「致し方ない(問題ではない)」と答えるでしょう。「噛んでごめんね」と謝れたとしても、2歳児さんでは、他者の立場に立って考えるなんて

いうのはまず無理ですから、保育士さんの言葉をリフレインしているだけでしょう。むしろこの繰り返しが大事なわけで、「噛んだら叱られるし、取り合った末に玩具も取り上げられる。もっといい方法はないもんかな？」なんて2歳が考えはしないでしょうが、「この前、噛まずに口で言うたら、えらい褒められたわ！口で言う方が早いわ」とこれも言わないでしようが。しかし、「噛む」という直接的で強力な行為が、それよりも建設的で賞賛される言語による伝達によって代わるのが発達でしょう。保育士さんへ伝える事とすれば、周りは「噛むこと」を全力で阻止しながら、「言葉」の方がマシとわかってくれるまで気長に待つしかないなんて話を劳いながらするしかない。

一方、5歳になっても、噛んでしまうとなると、話は変わってきます。まずその子の理解力が気になります。知的な遅れがある場合は、言語的な解決に制限があるわけですから「噛んで」主張するという行為が残ってしまうのは当然です。知的な遅れはないのに噛んでしまう。これはどうしたものか？この対処は、「すぐ逃げる」にも通じるものがあります。可能性としては、注意を引くというのが根底にあるように思います。よく言われる方法の一つが「見ない」「見てやらない」というやつ。注意を与えず、できるだけ「無視する」ことで、問題行動を強化しないという行動療法的な対処です。基本的にはその通りだと思います。しかしながら、実験室ではありません。事は現場で起こっているのです。止めないわけにはいきません。しかしながらその噛む子とのやり取りが「噛む場面を止めることばかり」になっていることに、賢い保育士さんならすぐに気

づいてくれます。保育士さんの意識の変化と、「止める→叱る」ことをできるだけ手短かに済ませる。このことだけでも事態には変化の兆しが見える場合も多いと思います。もう一つお伝えするは、「うまくいっている時」「やりそうでやらなかったとき」の対応です。噛むことで言えば、噛む一歩手前だったのに、なぜか噛まずにおられた。逃げ出すことで言えば、教室から飛び出したのに、なぜか自分で戻ってきた。なぜか、ずっと給食の席に着けた。いわゆる「例外」というやつです。よくできた保育士さんでも案外こうした普通の行動(従来とるべき行動)については、喜びこそすれ、別段声をかけなかったり、スルーしてしまったりもあります。褒めるに値するような行動ではなく、こうした従来みんながやらないといけない普通の行動こそ注目すべきだという話をお伝えします。注目するだけでなく、インパクトを残すべく、ちょっと盛り目に褒める。あるいは「A君が〇〇で、先生うれしい」とか「A君が〇〇してくれたので、助かる」とか、先生が一歩へりくだって驚いたり、喜んだりしてくれると子どもも「あら、どうなっているの」と、少しだけ非日常性を感じてくれるようです。A君と問題行動以外で交流できるチャンスを見逃す手はありません。

困り事②「児童相談所から見守りを頼まれたケースがあるけれど、どう寄り添えばいいのかわからない。」

「お母さんの子どもへのあたりがきつい。子どもも帰りたがらなかったりする。虐待かどうかどう判断したらよいか迷っている。」

全く同様の困りごとがあるというのではありませんが、上記のようなニュアンスを感じる相談は受けます。不適切な養育問題抱えているであろうご家庭へどうかかわったらよいのかという事です。まず、申し上げるのは、そう簡単に関われるものではないという事です。「困ってるって聞いているから何でも言って」なんて超ドストレートで言えるわけではありません。こんな直球で言える関係性がもともとあるなら誰も悩んだりしません。こっちは「寄り添いたい」と思っていたとしても、家族にすれば「できるだけ関わらないでほしい」というのがほんのところだったりします。普段の関わり大切さを再認識させられるわけですが。ではどうするの？その家族だけが特別というわけではない定例の懇談会なんていうのは、もってこいですよね。でも何を話すのか？下手をすると、その子の普段の様子を伝えるだけで終わってしまう。かといって先ほどの星飛雄馬(たとえば昭和ですね)タイプで迫っても「なんもないです」と逃げられる公算大ですよ。ズバリ、養育のことでしょう！」ちびまる子ちゃんの塙君みたく迫ってもちっともうけないでしょう。

「A君やお家のことで、今、お母さんが困っていることを教えてもらえると助かります。」この辺りでいかがでしょう。そして、それが園側が思っている困り事と一致しない場合でも、その通り受け止めることが最も大事だと思います。園側は、子育てについての問題でしようが、「旦那が働かない」「姑とうまくいっていない」「引っ越したい」「体調がいまいち」など、困り事が園側とどんなに食い違っているても、「そうですか。それはお困りでしょう」で始めることだと思いま

す。お母さんの困りごとを聴いてから、後半か最後に園が思う困り事というか心配事（不適切な養育に関すること）を述べる順番が大事だという事です。これでお母さんと繋がれるかどうかはわかりませんが、星飛雄馬よりもストライクが取れる確率は上がるでしょう。

次の虐待かどうか心配だけど、わからないので見守っているところというニュアンスですが、けっこう多い。この場合、保育園は、虐待かどうかを判断する場所ではないことを共有します。園として、家族との関係を壊したくない、心配なことはあるがよくやっている家族でもある、判断するには情報が少ないしもっと集めてからなどと、理由はいろいろあるでしょう。しかし、「虐待かどうかわからないけど心配というリスク」があるわけです。わからないから心配というのは、りっぱな根拠です。もちろん、ただ何となく虐待を疑っているでは困りますから、その上で具体的な情報を整理することだと思います。わからないから、はっきりするまで情報を温めておく必要はないという話をします。特に保育園や保育士さんが責任を強く感じている場合など、「(保育園は)虐待かどうか判断する場所」ではないという前述の話をします。

さて、この「人生は対応のバリエーション」を今回でしばらくお休みさせていただこうと思います。お休みの理由は、執筆者@短信に書いています。

また、お会いできる日を楽しみに！！

けふばあちゃんからの手紙(9)

— かがくあそび(2)—

(じゃりんこ文庫 乾 京子)



毎日毎日、本当に暑い日が続いています。皆さん、お元気ですか？

去年も暑くて、暑くて、紫陽花の鉢をいくつか枯らしてしまいました。今年は気を付けようと思っていましたが、やっぱりいくつか茶色になってきました。毎日のようにカサカサに乾いて茶色になった蔦の葉が、ガレージの前に落ちてきています。今年も紅葉になる前にスカスカになるかもしれません。何しろ夕方水撒きをすると蔦の絡まる壁が、ジュッと言いそうなほど暑くなっています。ホースのお水の後に、もわ〜と熱い空気が舞い上がります。

夏休み最後の文庫の日は、「手作り遊び」か「かがくあそび」。今年は、中学生たちが手毬を作りたいと言っています。うまくできるでしょうか？今年初めての挑戦です。小さい人たちは、どうしようかなあ？今年も“色いろいろ”で折り染めにするかなあ？

さて、今回は、「かがくあそび—ひかり(鏡)」の報告といたしましょうか。大きなビー玉(水晶玉)を使って作る“ビー玉万華鏡”は、夏休みしばしば登場いたしました。2018年の夏は、「手作り遊び」というより「かがくあそび」にしてみようと次のような実験もやってみました。

【実験】

- ① スライドグラスで外の景色を見る
- ② そのスライドグラスの片面だけ、黒のマジックで塗る。
さて、どう見えるかな？
透明のガラスの時は外の景色が見えたのに、あれ？
「なんにもみえないよ」「私の顔が写ってる」



「ああ、鏡になってる～」

③

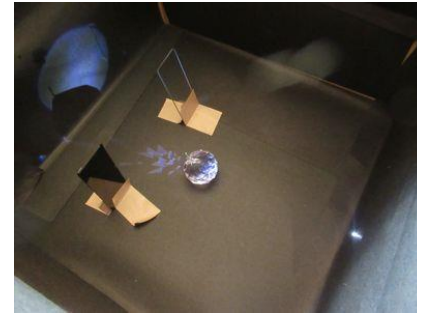
③ ダンボールの箱の中に、透明のスライドグラス、黒く塗ったスライドグラスをたてる。

④ ダンボール箱に小さな穴をあけて、懐中電灯の光をあててみる。

透明のスライドグラスの方は、光を通して向こうに
懐中電灯の明かりが見える。

黒い方は、光がとおらず鏡になっている

プリズムは、七色のひかり



この実験の結果をもとに、鏡のしくみを使って、“ビー玉万華鏡を作りました。

【ビー玉万華鏡つくり】

① 材料(ビー玉・スライドグラス9枚・黒画用紙・厚紙・和紙)

② スライドグラス9枚の片面をマジックで黒く塗る



③ セロテープでスライドグラス3枚をつないで長い一本の鏡を3本つくる

④ 3本を平行に並べて、2ミリほどのすき間をつくって、3本をたてにつなぐ。

⑤ 鏡の面を中にして三角柱にする—セロテープでしっかりくっつける。

⑥ 外側を黒画用紙で包む。



⑦ 黒画用紙の飛び出しているところにビー玉をはめ、テープでしっかり固定する。

⑧ 厚紙で補強する。

⑨ その上を和紙でお化粧して、ビニールテープで補強してできあがり。

万華鏡を覗くと、周りの景色が・・・(わあ！すごい！きれいきれい！)



心理臨床における多重関係を考える

—— 地方のありふれた心理士の日常から ——

本林 友梨

多重関係を避けるという選択

—— 出産をめぐる私の経験から ——

私は今、居住地域からやや離れた場所にある県内の病院にいる。子どもの付き添い入院だ。幸い、命に関係するような類のものではなく、短期間の予定だ（そんな時になぜこれを書いているのかということだが、言うまでもなくいつもの“ギリギリまで先送り病”が発症してしまったからである）。実はここの病院、数年前に子どもを出産した病院である。なので、その時のことを思い出さずにはいられない。そして、実はその時の経験にも多重関係に関するエピソードがある。

私の業務の一つに緩和ケアチームでの活動がある。必要な場合は緩和ケアチームで介入している患者さんと面談をするなどのかかわりを持つ。妊娠が分かり、出産場所を考えなければならなくなった時（妊娠が分かってすぐに出産場所を決定しなければならぬことに驚いた！）、婦人科系の病を持つ人とお会いしていた。私の地域（医療圏域）は、出産できる場所は自身の病院だけであるので、普通であれば自身の職場で出産

することとなる。私もその一人になる予定であった（職場での出産に抵抗はあったが致し方ない）。しかし、職場の産婦人科病棟はその名の通り産婦人科にかかる入院患者を対象とするので、出産のために入院する人も、病気のために入院する人も同じ病棟に入院し、隣の部屋同士にもなる場合もある。それを考えると、私は自身の病院で出産する選択を、どうしてもすることができなかった。お会いしている患者さんは、消えていくかもしれない自身の命と向き合い、様々なことを考え感じながら過ごされている。一方で、私はその隣で、新しい命を生む。同じ場にいるのに、一言では説明しがたいこのような違いを理解し、受け止め、その場で過ごしていくということが、人としても心理臨床家としても若輩者の私は到底できないと感じた。こういう経緯があり、居住地域から少し離れた、今いる病院で出産することを選択した（私の出した決断を家族は反対することはなかったが、決断に至った事情への理解も得られた感覚はなかった）。出産に関する全てのことが未知である私に

として、自宅から最も近い病院ではない病院で出産することを決断するにはかなりの勇気が必要だった。「何かあったら？」と最悪のことを考えることもあった。「母になる人間としてこの選択はダメなのではないか」とも強く思った。けれど私は出産に関するいろいろな責任を引き受け、多重関係状況を避ける選択をした。

多重関係を「どう扱うか」から 「どう生きるか」へ

プライベートの「私」は、心理臨床家である「私」からの影響を強く受けてきた。自身のリサーチクエスト(以下、RQ)は日々の実践や生活から出発したものである。しかし、それは最初から現在のものではなく、実践が重なっていくうちに、また自身の生活の変化を経験していくうちに変化してきた。

初期では、心理臨床での多重関係そのものをどう扱っていくことができるのかという問いであった。主な関心は、一言でいうと、「どのような多重関係が許容範囲内(クライアントやセラピーそのものに与える影響が小さいと考えられるもの)で、どのような多重関係が許容範囲外(心理臨床全体に害を与えると考えられるもの)なのか」というもので、多重関係状況を評価することを願った。今振り返ると、このように考えていたことが安直であったと恥ずかしく思うが、当時の私は何がなんでも避けるべき場合/避けられなくても致し方ないときの場合を知ること、自分の多重関係にまみれた心理臨床実践に明確な指針を示し、実践をクライアントにとって安心安全なものにし、心理臨床家としての自分自身の安寧を手に入

れたかったのだと思う。しかし、実践や日々の生活を営みながら研究を始めることで、問いを、日々の実践からの視点と学問的視点との間を行き来させる必要性に迫られ、いつしか避けるかどうかの問題ではないのではないかと感じるようになった。それが現在のRQに繋がった。現在のRQは「小規模コミュニティにおいて心理臨床と生活を営む心理臨床家は、人や共同体との関わりの中でどのように生きているのか」である。

ところが、このように立ち上がったRQに対し、別の疑問を持つようになった。RQは、心理臨床の多重関係と私なりに真摯に向き合う時を重ねて立ち上がったものではあるが、本当に研究に値する問いといえるものであるのか、ということである。研究を進め、様々な経験(失敗)をすればするほど気になるようになった。

そんな時に、Auto-TEMを用いて第一筆者自身のキャリア意思決定のプロセスを記述・分析した研究を知った(Tsuchimoto & Sato, 2024)。この研究では、まずライフラインチャートの作成からはじめ、様々な議論を行いながらAuto-TEMを作成し、キャリア意思決定のプロセスについて理論的な精緻化と詳細な記述を行っている。その結果、キャリア意思決定は個人的であると同時に集合的な文化的プロセスであることが示された。また、オートエスノグラフィーの視点から個人的文化と集合的文化の相互関連や共鳴を捉えることで、両者が形成されていくダイナミクスを明らかにできることが示唆されている。

このオートエスノグラフィーやAuto-TEMの視点をリサーチクエストの立

ち上げにも援用できないかと考える。私の RQ は自身の経験から始まったものではあるが、その経験は決して私一人の内側で起こったものではないと考えている。オートエスノグラフィーや Auto-TEM の視点を援用して RQ 形成の過程を記述することで、その RQ がどのような個人的・社会文化的経験の中から立ち上がり、どのような過程を経て研究上の問いとして形づくられてきたのかを振り返ることができる。これを通して、個人的経験から生じた RQ の研究上の意味や価値を考えることができるのではないか。

私の RQ はどこから来たのか？

では、私の RQ はどのような経験や関係の中で立ち上がってきたのだろうか。そこで、まずこれまでの経験を振り返るためにライフラインチャートを作成してみた。すると、現在の RQ を持つに至るまでの過程について、自分が理解していたものとは違うところが見えてきた（自分の思い込みの怖さを再確認した）。

まず、初期の RQ である多重関係の扱いについての問いは、確かに自身の生活や臨床実践の中で経験した困難から立ち上がったものであった。多重関係が生じることで日々の臨床実践に難しさを感じたり、心理臨床家としての劣等感を抱いたりする経験が重なっていた。

また、心理臨床家であることが、自身の生活に大きな影響を及ぼすことを実感する出来事もあった。しかし、その経験がそのまま「研究したい」という思いに繋がったわけではなかった。初期の RQ を立てた当時の

私は、多重関係をめぐる困難に疲れ、職場での不安も重なり、いつかは臨床の現場から離れたいという思いを持っていた。その際には学歴というものがあるほうがよいのではないかと考え、いつか大学院に戻りたいと考えるようになっていた。そんな折、学部時代から指導いただいている恩師に相談する機会があり、すぐさまの大学院受験を勧められた。子もまだ小さく、かなり躊躇したが、恩師から「忙しいと言ってやらない人は、一生やらない」という旨の言葉をいただき、勢いで受験を決意した。そこで、研究テーマを立ち上げる必要に迫られ、日頃から困っていた心理臨床における多重関係に取り組むことにした。つまり、振り返ってみると、私は「多重関係を研究したいから大学院に進学した」のではなかった。自分の人生やキャリアについて考える中で、大学院で学ぶという選択肢が生まれ、その選択をしたことで「何を研究するのか」という新たな問いが生じ、そこで初めて多重関係が研究テーマとして立ち上がったのである。

そして大学院に入り、実際に研究を進めていく中で、問いはさらに変化していった。当初は既に記述したように、多重関係の扱い方を知りたかった。しかし、多重関係は不可避であるということを、私自身の経験からだけでなく、学問的見解や他の心理臨床家のお話からも認めるようになった。また同時期に、夫から、生活の中で多重関係を避ける私の姿勢（例：子の保育園の保護者と深く関わることは避ける姿勢。本来なら友達になって、子ども同士も遊ばせることができるのに、という意見。）に対し、「子どもの権利を奪っている」という言葉をもらった出来事も生じた（この言葉は、その後幾度と

なく私の頭に浮かぶことになった)。このようなことも重なり、多重関係の扱いそのものよりも、「私」と同じように多重関係が不可避な環境で心理臨床を行っている心理臨床家は、一体どういうふうに生きているのか？ということを知りたくなった。

このようにライフラインチャートを作成してみると、私の RQ は、単純に「私が経験したこと」から直接立ち上がったものではないことが分かってきた。経験そのものは個人的なものであっても、その経験が何を意味するのか、何を問題として捉えるのか、何を研究するのかは、生活する地域、臨床現場での実践、他者との関係、キャリアの選択、大学院での学びなど様々な関係の中で変化していた。

個人的経験から立ち上がる RQ を 「研究する」ということ

このようにして立ち上がってきた RQ は「研究に値する問い」とはいえるのだろうか？ライフラインチャートを作成することで、私自身の経験だけではなく、その経験がどのような人や環境、社会文化的なものとの関係の中で形成され、研究上の問いへと変化してきたのかについては、ある程度振り返ることができた。少なくとも、私の RQ は、私個人の内側から突然生じたものではなく、様々な関係の中で形作られてきたものであることが見えてきた。しかし、RQ がどのように形成されてきたのかを記述できることと、その RQ が研究として価値を持つことは、当然ながら同義ではない。今回の作業だけでは、この RQ が研究上どのような意味や価値を持つのかについては、十分考えることはできない。今後は、ここで参照

した Tsuchimoto & Sato (2024) の Auto-TEM の考え方を手がかりに、RQ 形成の過程をさらに捉え直してみたい。RQ がどのように社会文化的な文脈と結びつき、研究上の問いとして形作られてきたのかを検討することで、個人的経験から立ち上がった RQ を「研究する」ということについて、何を考えることができるのかを探ってみたい。

Tsuchimoto, T., & Sato, T. (2024). Career decision-making as dynamic semiosis: Autoethnographic trajectory equifinality modeling. *Culture & Psychology, 30*(1), 48–69.



森で出会えば…

~野山で感じるつながり記録~

田中 千晶

夏ならではの体験減少？

気温 35℃以上の日が続いたと思えば、台風が接近して涼しい日が多くなって…気候がコロコロ変わる6月～7月でした。お盆が明けた最近は夕方にトンボがたくさん飛んでいる様子を目にして、ちょっと秋らしさも出てきたかなと感じる日々です。個人的な体感としては去年に比べると比較的涼しくて過ごしやすい日が多かったような気がするのですが、どうでしょう。保育現場で働いている友人と話すところの夏の戸外遊びも例年通り熱中症警戒アラートとの闘いだったとのこと。少しでも安全に外に出られる時間を探して水遊びやプール遊びなどの戸外活動するのがやっとで、天気予報と高温注意報に常に気を張っていると聞きます。心身共に大変さを感じる夏です。



しかし、そんな大人の大変さは子どもたちには伝わらないもの。プールやスイカ割り、お泊り保育など絵本の中から楽しそうな夏の活動を探してきて『これがやりたい！』と無邪気をお願いしてくれるのです。自分が子どもの頃に夏の楽しい体験をたくさんしてきたからこそ、同じ体験を子ども達に提供したい気持ちと、安全のことを考えると快く返事ができないというもどかしい気持ちの間で葛藤しています。しかし、どんどん長くなる日本の夏、ずっと室内で過ごすことは子どもも大人も気が滅入るもの。外遊び、発散遊びという開放的な遊びが不足するとどうしてもイライラしてしまい、ささいなことでトラブルが多発してしまうのです。これは乳幼児期に限らず、学童期以降の子ども達にもみられる姿であると感じています。勤務している放課後デイでは外遊びに変わる夏を存分に楽しめる活動はなにか…と考え、この夏、梅仕事をしてみました。

手仕事は下準備から

指導員宅で採れた梅を使って梅シロップづくりがスタート。発達に特性がある子どもたちの集まりなので、全員一斉にできるとはねらいとしません。職員一同【やりたい子がやりたいことをやりたい分だけできたらそれでいいよね！】というスタンスで見守っていました。

子ども達にとってなじみのある梅を使った食べ物は圧倒的に梅干し。そのイメージからか「え、これが梅？赤くないやん。」「緑やし、ブツブツあるし食べられるん？」とザワザワ。梅の実を見て「おしり…」とつぶやく子も（笑）絵本や図鑑を見ながら梅ってどんな植物なのと調べ、青い梅も加工したら食べられること、梅干しが赤いのはシソの色ってこと…自分でページをめくって、みんなで話し合っ、本物と見比べて…としていくうちにどんどん梅に愛着が湧いてきた様子。「カビんといいなあ」と洗った梅の水気を拭き、ビンの中に余さず梅を並べ、いい雰囲気の中作業が進んでいきました。



【待つ】という工程

梅と氷砂糖を合わせて合計4 kg。無事にビンに詰め終わりました。ここから1か月ほどかけて氷砂糖が完全の溶けるのを待つのですが、コスパ、タイパが重視される時代を生きる小学生、【待つ】が苦痛なご様子。この夏休み期間、梅仕事に限らずいくつか調理活動を行いました。ホットケーキの中身が生焼けならば、弱火でもうあと3分焼くのではなく『チンしたらいいやん。』12時まで炊飯が間に合わない時には『お急ぎモードで炊いたらよかったやん。』…まあ、正論ではあるのですが、火力を調節しながら生地がふくらむ様子を観察する！みたいな調理する上での過程の部

分にはあまり魅力を感じない子が多い印象です。1学期末に保護者さんや学校の先生たちとお話していると栽培活動を楽しめる子とそうでない子がいるとおはなしも。芽が出るまでの経過を観察する、実が熟すまでを待つのが『めんどくさい…』と言われてしまうと返す言葉が見つからないとのこと。

上記の姿やエピソードから、調理や栽培の経験を重ねることで、できあがりまでの過程に楽しさやおもしろさを感じてもらうのが大切だよね…。となった職員一同。自然の摂理を学ぶにおいて、図鑑で調べる、大人が説明するなどいろいろなアプローチはあると思うのですが、本物に触れて体得することに勝る学びはないと思うのです。

梅仕事を一生懸命した子たちは、通所するとまずビンを覗きます。「まだ砂糖溶けてないやん！」とがっかりした同じ日の降所時間にまたビンを覗き「ぜんぜんやんか！」とまたがっかり。これを何日も繰り返すのですが、溶けない砂糖にイライラしているかと言われるとそうではなくて。毎日観察している中で小さな変化に気が付くことができる子ども達「砂糖はそのまんまやけど、梅がシワシワ」「つるんってしてたのにジャガイモみたいになってんねん！」「氷砂糖の下だけ、なんかジュワって線が出てきた。」「これ、溶けてるってこと？」大人が【こんなことを知ってほしい】という学びのレールを引かなくても、子ども同士で学んでいくことができる。一緒に作った仲間たちとなら1か月という長い期間を待つことができるんですね。

無事に梅がカビてしまうことなく完成した梅ジュース。梅の実を煮詰めてジャムにしました。パンに乗せたり、水で薄めたりしていただきます。「めっちゃすっぱい！」と大絶叫の子もいましたが、自分たちで作ったものなので残さず完食。暑い夏を乗り切るいいお供ができました。



第3回：マスキングの先にあったもの

本音を言えば、生成 AI はもっと気軽に、自分のために楽しく使うものだとは私思っている。

しかし、あまりにも文章が上手なので、福祉の現場でも使いたいと思う人が多いのは当然だと思う。

前回、福祉関係者が生成 AI を使おうとしたとき、必ずと言ってよいほど個人情報の問題にぶつかることを書いた。そして、その対策の一つとして、私自身がマスキングアプリを開発していることにも触れた。

私が作っていたのは、生成 AI に文章を渡す前に、個人を特定できそうな情報を自動的に置き換えるアプリである。

氏名なら「氏名 1」、住所なら「住所 1」、事業所名なら「事業所 1」。医師の名前や担当者名、親族の名前なども、できるだけ固有名詞が残らないように置き換える。

その状態で生成 AI に文章を読ませ、記録を整理したり、文章を整えたりする。

少し手間はかかるが、個人情報をそのまま生成 AI に渡すよりは安全だろう。

私はそう考えていた。

開発は比較的順調に進んでいた。

そこであるとき、このマスキングがどの程度有効なのか、試してみることにした。

架空の高齢者の支援記録を作った。もちろん実在する人の記録ではない。氏名や住所、機関名などはマスキングした。一方で、その人の発言や行動、家族との関係、生活の変化などは残した。

それを生成 AI に読ませてみた。

いつ頃から認知機能の低下が見え始めているのか。

家族との関係にどのような変化があるのか。親族によるネグレクトを疑うとすれば、どのあたりから兆候が見えるのか。

複数の記録を時系列に並べて、いわば定点観測のように分析させてみたのである。

結果は、想像以上に良好だった。

氏名も住所も伏せているのに、生成 AI は記録の変化を追い、かなり自然に特徴を整理した。

私は感心しつつも、その画面を見ながら、途中でちょっと違うことを考えた。

固有名詞をこれだけ消しているのに、なぜ AI はここまでその人について分析できるのだろう？

裏を返せば、氏名や住所を消したところで、その人についての情報は文章の中にかなり残っているということではないか。

発言の内容、家族構成、これまでの経過、疾病、生活状況、支援者とのやり取り。

そうしたものが組み合わさって、その人らしさを形づくっている。

私はそこで初めて、マスキングというものを少し違う角度から見ようになった。

なぜ、アプリを作る前にこのことに気づかなかったのだろう。

そこで、個人情報保護法の個人情報の定義を、あらためて読み直した。

そこには、氏名や生年月日だけではなく、「その他の記述等」によって特定の個人を識別できるもの、さらに、他の情報と容易に照合することによって特定の個人を識別できるものも含まれると書かれている。その文章を読みながら、私はだんだん困ってきた。

生成 AI の研修などでは、ときどき、

「個人情報を使う場合は、本人が特定されないようにマスキングしてください」

という説明を聞く。

私自身も、その考えをかなり素直に受け取っていた。

だからマスキングアプリを作った。

けれども、では、どこまでマスキングすれば「本人が特定されない」と言えるのだろう。

氏名を消すだけでは足りない。

住所、勤務先、病院名、家族の名前も消す。

それでも、地域や年齢、家族構成、生活歴、独特のエピソードが残っていれば、身近な人が読めば「あの人のことではないか」と分かることがあるかもしれない。

では、それも消せばよいのだろうか？

けれども、情報を消せば消すほど、生成 AI に読ませる意味も薄くなっていく。

私が試したように、認知機能の変化を見つけないのであれば、本人の発言や行動の変化は必要である。

家族によるネグレクトの可能性を考えたいのであれば、家族との関係や、それまでの経過も必要になる。

具体的な背景があるからこそ、生成 AI はそれなりの分析ができる。

しかし、その具体性こそが、その人をその人たらしめる情報でもある。

ここまで考えたところで、私は完全に立ち止まってしまった。

どこまでマスキングすればよいのか。

その境界線を、いったい誰が判断するのだろう。

ある人には分からなくても、本人を知る人なら「あの人のことではないか」と気づくかもしれない。

しかも福祉の現場で、記録を AI に入れるたびに、

「ここは残してよいだろうか」

「これは消した方がよいだろうか」

「このくらい抽象化すれば大丈夫だろうか」

と考える運用が、本当に続くだろうか。

そんなことを考えているほど、現場は暇ではない。

私はだんだん、これはマスキングアプリの精度を上げれば解決する問題ではないのではないかと思うようになった。

同じころ、何度も読み返していた文章がある。

2023年6月に個人情報保護委員会が出した「生成 AI サービスの利用に関する注意喚起等について」である。

そこには、本人の同意を得ずに個人データを含むプロンプトを入力し、その情報が「当該プロンプトに対する応答結果の出力以外の目的」で取り扱われる場合には、個人情報保護法に違反する可能性があること、そのため生成 AI サービスを提供する事業者が、個人データを機械学習に利用しないことなどを十分確認するように、という趣旨が書かれている。

この文章に、私はかなり長い間悩まされた。「機械学習に利用しないことを確認する」とは、学習に使われない生成 AI なら個人データを入力してよいという意味なのだろうか。



私は長くそう考えていたが、やがて一つの疑問に行き着いた。

AI が情報を学習に使わないことと、その個人情報を AI に入力してよいことは、同じな

のだろうか。

どうも違う。

そこにたどり着くまで、私自身、数か月かかった。

おそらく私は、「仕事で個人情報を生成 AI に使えるようにしたい」という気持ちをどこかに持ちながら、法律を読んでいたのだと思う。

人は、自分がそうであってほしいと思う方向に文章を解釈したくなる。

私も例外ではない。

けれども、

「学習には使われません」

という説明だけで、本人の許可なく、その人の病気や家族関係や生活上の困りごとを生成 AI に渡してよいと考えるのは、私には難しかった。

もし本人から、

「私があなたに話したことを AI に読ませたのですか」

と尋ねられたら、どう答えるだろう。

「大丈夫です。AI の学習には使われませんから」

という説明で、本人は納得するのだろうか。

さらに、学習利用だけが問題ではない。

どれほど安全性の高いサービスでも、漏洩の可能性を完全にゼロにすることはできない。

サイバー攻撃もあれば、アカウントが乗っ取られることもある。人間側の操作ミスもある。

もし何か事故が起きたとき、

「そもそも、その人の情報を AI に入れないで起きなかったのではないかな」

と言われたらどうするのだろうか。

その問いは、最終的には入力した側に返っ

てくる。

そんなことを考えながら生成 AI を使っていると、もう一つ気になることが出てきた。生成 AI は、とてもそれらしい文章を書く。私は日常的に生成 AI を使っているが、元の情報にはなかったことが、もっともらしい文章として紛れ込む場面を何度も見てきた。背景情報が足りないとき、生成 AI は一般論や推測で文章を補うことがある。

私はこの現象を見るたびに、生身の人の処遇や悩みを扱うことに、生成 AI はあまり向いていないのではないかと思うに至った。そもそも支援記録に書かれているのは、その人の生活のほんの一部である。支援者が見聞きした断片を AI に渡しているにすぎない。

AI の答えが驚くほど自分の感覚に合うこともあるが、それを「AI がその人を理解した」と考えない方がよい。限られた情報から返された一つの可能性として受け取るくらいの距離が必要なのだと思う。

だから私は今回、一つの補助線を引き直すことにした。

個人情報をどうにかマスキングして生成 AI に入れようとするのを、一度やめる。そもそも個人情報を生成 AI に入れるという発想を持たないところから考え直すことにした。

かなり悩ましい補助線ではある。

実際、現場には AI にケースのことを相談したいというニーズがある。

自分の支援が本当にこれでよいのか、別の視点から意見がほしい。

ケアマネジャーや相談援助職の方から、

「個人情報を入れたらだめなんですか」

と、がっかりしたように尋ねられることもある。

人の生活について考え、支援の方向を決める仕事は重い。誰かに一緒に考えてほしいと思うことは当然である。

だから、そのニーズ自体を否定したいわけではない。

ただ少なくとも、「私たちの組織では、この条件で個人情報を生成 AI に入力してよいことにしています」「その根拠はこれです」「本人にはこのように説明します」

と明確に言えないのであれば、私は入力しない方がよいと思うようになった。

マスキングアプリの開発に取り掛かり、そして立ち止まったことで、私は一つ手前の問いに戻ることにになった。

補助線は、正解ではない。

考えるために、一度引いてみる線である。だから、考えている途中で引き直すことがあってもよいのだと思う。

今回はずいぶん遠回りをした。

マスキングをどうするかという問いから始まって、どこまで消せば個人情報ではなくなるのかと考え、その境界線が簡単には引けないことに気づき、最後には、「どうやって AI に入れるか」ではなく、「そもそも、AI に入れる必要があるのか」というところまで戻ってきた。

これが、マスキングアプリを作りながら私がたどり着いた、今回の伏線回収である。



対人援助のためのNVC（非暴力コミュニケーション）

シルバーマン恵子

みなさんもこんな体験はありませんか？

一生懸命話を聴いた。
何度も同じことを繰り返し伝えた。
できる限りの支援を考えた。

それでも、その人は変わらない。

むしろ「何もわかってくれない」と
言われる。

「こんなにやっているのに、なぜ？」

「相手のために」と願い、相手を支えたい
と思うからこそ、うまくいかない時に、
苦しくなる瞬間がありませんか？

「どうしてわかってくれないのだろう」

「なぜ、こんなに自分を傷つける選択を
するのだろう」

「せっかくここまで一緒に考えたのに」

そんな時、相手を「変えなければ
（あるいは治さなくては）ならない人」

として見たり、あるいは「変わってく
れたらいいのに」と変えたいことは
ありませんか。

「相手を変える方法を教えてくれるの
では？」と、NVCを学び始める人がた
まにいます。

残念ながら（？）NVCは、相手を変える
ためのツールではありません。むしろ、
自分と相手の双方が大切にしているもの
に目を向け、その両方を大切にできる道
を探していくための、ものの見方であ
り、コミュニケーションの方法です。

大切にしたいものがあるからこそ 苦しくなる

「この人が変わってくれたら」と思っ
ているとき、私たちは本当には、あるいは
深いところでは何を願っているのだし
ょう。

安全？ 健康？ 自立かもしれないし
尊厳かもしれません。

あるいは、希望かもしれないし 安心したいという願いかもしれません。

NVCでは、このような「私たちが本当に大切にしているもの」を『ニーズ』と呼んでいます。

安全、健康、自立、尊厳、安心、希望。
人とのつながり、自由、自分らしさ。

私たちは、何か大切なものが満たされているとき、心地よさや喜びを感じます。そして、それが脅かされたり、満たされなかったりするとき、痛みや怒り、悲しみや不安を感じる場合があります。

「なぜ、私はこんなに反応しているのだろう？」

その問いの先に、「ニーズ」という視点があります。

『ニーズ』の視点で世界を見ると

私たちが「どうしてそんなことをするのか？」と思う相手にも、その人が大切にしているものや必要なことがあるとしたら？

たとえば支援を拒む人。

「困っているように見えるのに、なぜ助けを受け取らないのだろう」と、戸惑うこともある かもしれません。

そこには・・・

- 自分で選びたい
- 尊厳を守りたい

- 自分のペースを大切にしたい

などがあるのかもしれません。

NVCは、相手のニーズを「見抜く」技術ではありません。「この人の中には、私にはまだ見えていない何か大切なものがある。それはなんだろう。」と、そんな温かな好奇心を持って、その人の前にいることを支えてくれます。

相手の言葉や行動の奥にあるものを、すぐに理解できなくても、「何か大切なものがきっとそこにあるのかもしれない」と共に探求することができます。

そして、自分自身の中にある焦りや無力感、怒りの奥にも、同じように大切な願いを見つけることができます。

そして、相手の大切なものと自分の大切なもののどちらも大切にできるやり方を見つけようとしします。

わかり合えないと感じるときにも、もう一度「人と人」として出会い直す。そのための視点であり、生き方でもあるのだと、私は感じています。

相手を変えるための技術なのではないとしたら、**NVC**はいったい何を私たちにもたらしてくれるのだろうか？

この連載では、そんな問いを、これからみなさんとじわじわと探求していきたいと思っています。「こんなことを知りたい」「こんな場面で困っている」など、みなさんからのフィードバックやご提案も大歓迎です。



対人援助のジレンマのありか (2) 農業と福祉、その始まりの風景

八木 慎一

前回のおさらい

私は、就労支援事業所で、農業を通して障害のある人の働くことを支援しています。現場における私の役割には、障害のある人が「よりよく働ける」ように支援をするという福祉の側面と、農業そのものを作っていく農家の側面とが混在しています。特に後者の農業の面においては、「工賃を上げる」ことが様々な事情から必要になっており、それが前者との間でジレンマを起こす構造にあることに触れました。

少し別の言い方をすると、私は障害者の工賃を上げるために農業にのめりこめばのめりこむほど、目の前にいる障害者の福祉から離れていってしまう気がすることを書きました。この現場におけるジレンマを分析していくことが、この連載の執筆の動機です。第2回では、このジレンマがどこから始まったのかを考えるために、事業所の立ち上げ当時まで戻ってみたいと思います。

就労支援B型事業のスタートアップに参加

就労支援事業をしている会社は、元々アパレル事業をしている会社でした。T シャツやパーカーを販売する民間の会社が障害者福祉に参入した形です。「民間」「参入」と書くと、今のご時世ですと、すごく悪いイメージを持たれるかもしれませんが、この会社は単に洋服の企画・製造をしてい

るのではなく、売上の一部を全国のNPO・NGOにチャリティーするというソーシャルビジネスを展開している会社でした。私は、この会社のブランドコンセプトやデザインが好きでした。時々、自分の関心のある社会問題をテーマにしたものや（元々医療的ケア児の研究をしていたので、その人たちの支援に関すること等）、気に入ったデザインのものがあれば、ネットで購入していました。ある時、その会社の服を買った際に一枚のチラシが同封されていました。

「就労B型の事業所を始めたい！一緒に取り組んでくれる仲間を探しています！」

こんな触れ込みのチラシでした。2018年の9月頃です。会社の住所をみると、自分が住んでいる家のすぐ近くでした。自分の好きなブランドが、実は車で5分の距離にあって、しかも自分が専門にしてきた福祉の事業所作りを始めている…。当時、勤務先まで電車で片道1時間半かけて通勤していたこともあり、「地域で働く」ということに強く魅力を感じました。

「仲間を探す」というチラシの案内には、障害者が働ける場所を作りたいこと。その場所を、自分たちだけで考えず、地域住民や当事者と一緒に考えて作っていきたいこと。そのために、意見交換会をすることが書かれていました。早速その会に参加すると、そこには、農家、市議会議員、学生、社協職員、近所のおばちゃん、当事者…様々

な属性の人が集まっていました。「どんな事業所を作っていきたいか」それを、地域の人と話し合うことから始めていました。障害者福祉分野において、「地域」は、他の福祉分野と比べても一層重要な意味合いがありますが、どうしても日本の福祉現場における「地域」は、福祉関係者だけが集まる形になりがちです。それを見てきた分、ソーシャルビジネスをやってきた会社であるがゆえの、交友関係の広さ、軽やかさから生まれる、多様な人を巻き込む風土、そこに新しさを感じました。

その後、起業する経営者との面談がありました。その中で、なぜアパレルメーカーが福祉事業所を作るのかを聞きました。取引先の社長の娘さんがダウン症で、18歳になって支援学校を卒業するが、「一般就労は難しい」とみられていたこと。では、卒業後どこにいけるかといえ、いわゆる「作業所」で、そこでの工賃は最低賃金の1/10にも満たなかったこと。この工賃の低さを改善することが起業の動機となり、会社のミッションということでした。

ただ、経営者は、福祉や支援に関して、経験も知見もなかったことから、もう一人福祉の専門家を誘って、一緒に起業の準備を進めているところでした。私自身は当時、大阪にある自立生活センターで働いていましたが、地域で働けること、新しく事業所を一から作ることに魅力を感じ、一緒に作っていくことになりました。それが2018年の12月でした。

工賃を上げるために、農業を選ぶ

起業のミッションは、障害者の工賃の向上です。では、どのような仕事で障害者の工賃を上げるのか。それが、農業でした。理由は複数あります。事業所のある自治体は、人口7万人規模の地方都市で、まだ田畑が残っているエリアだったこと。都市近郊にもあり、消費者に近い環境で農産物を生産できること。経営者の知り合いに農家がいた

こと。農業は産業としてなくなならないこと。そして、「百姓」という言葉が表すように、農家の仕事は多様にあり、得意不得意のある障害者に適切な仕事を見つけやすいことなど。障害のある人が取り組む仕事として、農業がピッタリな理由はたくさん考えられました。

オープン直前2019年3月には、オープニングイベントもしました。野菜が入場料の音楽イベントで、自然食レストランのシェフが料理をしている横で、DJがダンスミュージックを大音量で流す。その周りに、様々な関係者（福祉関係者だけではない）が集まって踊り、食べ、語りあう場所でした。50坪ほどの小さな事業所に、入れ替わり立ち代わり数百人の地域の人が集まりました。地域の幼稚園のお母さんが「期待しているよ！」と声をかけてくれました。この事業は、ここで働く人だけのためにあるのではなく、この地域を面白くして、住民の人たちに何かを還元する役割もあるのだと感じました。

利用者1名からのスタート

そして迎えた4月1日のオープン初日。職員は実働で私ともう一人のサビ管の合計2名。先日のイベントが嘘のように静かな初日でした。まず、Amazonで買ってあったテーブルと机を組み立てるところから始めました。

この時点で決まっている利用者は、近所に住む方1名でした。この地域に生まれ、地域の幼稚園や小中学校に通った人です。朝、近所を散歩し、時に大声を出したりもする人でした。知的と精神障害のある方で重度訪問介護を使い、地域で自立生活をしていました。私たちの事業所ができるまでは、日中は別の事業所に電車通っていました。家から歩いてすぐのところに、事業所がオープンするということで、利用者登録をして、働くことになりました。

その方も、週に2回程度の利用であったことから、「利用者がいない＝事業収入がほとんどない」ような状態でした。「最初やから仕方ない」という雰囲気はありましたが、事業所経営をしていく上でこれからやることは明確でした。「利用者獲得の営業」と「障害者の仕事作り」、つまり農業でした。

「仕事を作る」ために、農業を覚える

「障害者の働く」を支援するといっても、そもそも仕事があれば、支援もしようがないわけです。その仕事は、様々な理由から「農業がええやん」となっていたわけですが、職員は全員やったことがなかったです。私自身は、横浜市で生まれ、福岡、東京、大阪、京都の都心部で暮らしてきました。農業体験といえば、一度だけ「WWOOF JAPAN」という団体を使って、泊まり込みで有機農業の体験をしたことがあります。当時は今ほど暑くはなかったですが、それでも「真夏×日中×トマト収穫」はこたえました。こんな環境で農家さんは、野菜を作り続けているのかと衝撃を受けました。それくらいの体験しかなかったのも、土のこと、肥料のこと、道具のこと、何から何までわからない、というか知らないという状況でした。

事業所が開設して2日目。農家さんに挨拶に行くことになりました。4月頭の京都。川沿いに桜が満開でした。春の穏やかな気候と太陽の光。風がよく通り、田んぼや畑が広がっていました。通勤で駅周辺しか利用していなかった私にとって、この風景は当たり前なことのようにいて、当たり前でない、新鮮なものでした。この風景が私にはとにかく眩しく、新しいことが始まる、始めるんだと車の窓から思ったのを今でも覚えています。

農家さんのところに行って、いきなり農業をするのかなと思っていたのですが、実際は経営者と農家さんが煙をくゆらせながら、雑談をするところに1時間同席するだけでした。農家さんは30代後半で、ノリのいい兄ちゃんでした。翌日は、

農家さんが畑を案内してくれました。ビニールハウスが合計で7つありました。4月頭からなので、「これから農業をイチから学べる時期やで」と話をされました。万願寺とうがらしという京野菜に加えて、生鮮ハーブを取り扱っており、スペアミント、スイートバジル、イタリアンパセリなども栽培するという話でした。



（写真1：農家さんのハウスでの作業風景。畝を立て、灌水チューブを敷いてから、マルチを貼る）

農家さんとの話し合いの中で、平日の午前中は職員も利用者も毎日農家さんのところに修行をしに行く。そこで、自分たちが農業を覚える。午後は、自分たちが持っている畑で、学んだことを実践してみるという話になりました。その日の午後には、「自分たちの畑」にも初めて足を踏み入れました。そこは5年以上何も栽培されていなかった耕作放棄地でした。駅前のショッピングセンターのすぐ裏にあるという謎の立地の良さはありませんでしたが、水がひけるわけでもなく、多種多様な「雑草」が元気に咲き誇っていました。「まず草刈りからやなあ」と農家さんが話していました。

1週間が終わるころには、作業内容も業務内容も、人間関係も本当にこれから一から作り始めるのだとわかってきました。それまで自分が雇用された職場は、何十年という歴史がある法人や事業所で、先輩や偉い人もたくさんいて、仕事内容が基本的に決まっており、それを覚えるのが仕事で

した。それが、スタートアップという状況で、全員農業やったことない人間が三人集まっただけでしたから、そうなります。そこでは、障害者の支援をするとかそういうことよりも、まず「仕事を作る」が先で、その上で、その仕事に、利用者がどういうふうに関われるかを後から考える状況になりました。

利用者を探す、地域とつながる

一方、利用者は先述の一名のみという期間が1か月以上続きました。その間は、午前中は農家さんのところで修行をさせてもらい、午後は自分たちの畑を耕作したり、利用者営業に行っていました。これもゼロからの営業でした。近隣地域の就労支援事業所、就労移行事業所、相談支援、支援学校、放課後等デイサービス、病院のデイケア、当事者が集まって調理をするサークル、…色々なところを回っていきました。「農業をして障害者の工賃を上げる事業所を作っているんです！農業に向いてそうな方がいたら是非紹介してください！」と頭を下げて、回っていました。地域にある救護施設の方とも仲良くなろうとして、施設の職員の飲み会に参加したりと、挨拶にいくだけでなく、実際に話し合える関係になるように、繰り返しやっていました。

地道な営業活動に加えて、事業所でのイベントも数多くこなしていました。地域の住民が集まってアクセサリやスイーツを販売したり、フリーマーケットをしたりするマルシェを企画・開催したり、朝に事業所を開放してヨガができるようにしたり、障害福祉分野に限らず、地域の人たちにまず認知してもらうことも大事にしていました。そのため、初期の頃は、就労支援事業と並行して、地域住民とセッションをすることが非常に多くなっていました。

その中で少しずつ、相談支援事業所が利用者を紹介してくれたり、別の就労B型の事業所が、「〇

〇さんはパソコン作業より農作業の方が合ってるんじゃないか」というような話で、紹介してくれたりも増えてきました。とにかく来るもの拒まず、基本的に全ての利用者を受け入れる方針でした。発達障害のある10代の方、重度の行動障害のある方、親亡き後に居場所を失った知的障害のある方、様々な社会的事情により障害福祉サービスを受けることになった方、救護施設の中で「この人は地域に移行できる」と期待される方など、1年目の後半には7名ほどの利用者が働きに来てくれるようになりました。

ただ、みなさんが毎日通所されるわけではないので、「日平均の利用者数」は、4名/1日程度でした。この人数は、事業所経営として採算が取れないレベルです。採算ぎりぎりのラインが日平均8名だったので、せっかくながつながった利用者が、安定して通所日数を増やしてくれることも課題としてあがってきました。

農業 < 支援

では、オープン当初の利用者が農作業という仕事に最初から適応しやすかったか、もっとそもそも論でいえば、「就労」できる状態だったかという、そういう人もいれば、そうでない人もいたと思います。

例えば、農業における就労支援の現場として以下のような状況があります。半日で、300坪の土地に1500kgの堆肥をまく、といったケースです。1袋約15kgの堆肥を、どうやって利用者と一緒に効果的にまくかが問われます。作業工程の中には、「あの白い袋をとって下さい」という指示に対する理解。重たい袋をもつ身体能力。どこに、どうやって降ろすかまでの指示理解。そして、袋を開ける時のハサミの使い方。広い畑の中でできるだけ均等にまく作業性や「均等」という感覚。まいた後に偏っているエリアをレーキで均す能力。このように作業工程を分解して、利用者に作業を用

意しつつ、どうしても足りないところには健常者のスタッフが入る、という流れです。それでも、重たい物を持つという粗大作業は比較的得意な方が多かったですが、細かい作業ができる人は少なく、そこにスタッフが入ることになり、そうすると全体が見えなくなるという課題にもつながりやすいです。全体をみないと、作業の流れに淀みが生じているところを修正できなかつたり、一人ひとりの利用者に対して、「もっとこうした方がやりやすいよ」といった就労支援も難しくなります。

「300 坪の畑に 1500kg、100 袋の堆肥をまく」というクリアな目標であっても、そこに様々な特性をもった人が「溶け込む」ことは、当時は容易いことではなかったです。ある重度知的障害のある利用者と畑で働いていると、近所のショッピングセンターに行ってしまう、2 メートルほどのイボ支柱を、ごみ収集車に突っ込もうとしていました。管理人の人がやってきて、「ちゃんと見てくださいよ！」と怒鳴られることもありました。他にも、知的障害がある人と発達障害のある人が、畑の中でケンカをし始めたり、その仲裁に支援員が入っていくような形で、農作業が進まなかつたりもしました。



（写真 2：「就農」当時は、機械がなくみんなで鍬を使って広い面積を耕すこともありました。）

人に合わせて、仕事を作る

家庭菜園ではなく、きちんと稼げる農業を形にしていかなくはいけないという私自身の思いとは裏腹に、現場では、農業以前の生活習慣や行動障害に対する支援がまず必要になりました。ここで、「農業を形にして、障害のある人の経済的自立という意味での福祉に向かっていきたい」という私の思いと、目の前にいる人のニーズとの間にずれが生まれ、そこにジレンマを感じることもありました。ただ、これは当然、当時の利用者が「合っていなかった」という話ではありません。一人ひとりに合わせて作業や環境を組み立てることが、支援する側の仕事です。ただ、そうは言っても、現場の工夫だけで、一人ひとりの障害者にぴったりの農作業を用意できるわけでもありません。また先述のように、農業を形にすること以上に、利用者の安定通所が経営課題になっていた背景もあり、「農業以外の仕事作りをできないか」という道の模索も並行して進めていきました。農作業中にトラブルを起こしてしまうような人がいたとしても、「この人のニーズやストレングスを活かした仕事はなんだろう」という問いをもち、なければ作ろうという気概がありました。

例えば、写真を撮ることが得意な利用者には、写真展を開くといった取り組み。ゲーム依存状態になっている利用者がいたら、ゲーム依存に関して当事者が語る講演会につなぐ。カフェの店員になることが目標の女性利用者が来てくれた際には、事業所で飲食店の許可を取り、カフェをオープンするという形にもしていきました。それらの取り組みで売上を出し、「仕事」という形にしていきました。こうした、その人に合わせた仕事を作り出し、当事者と地域、社会をつなげていくソーシャルワークができたのは、私たち自身の価値や技術だけではなく、利用者人数が少なく、一人ひとりを見やすかったことや、畑の面積も 500 坪程度（現在は 4000 坪）と狭かったことも関係していたと思います。この頃の、作業の余白と、支援の自由度には、それはそれで良かった面もありました。

一方で売上の的には散々な結果となりました。時給 100 円をお支払いして、年間の工賃支払い額はおよそ 10 万円でした。一方農業を中心にした「生産活動」の売上は 11 万円ほどです。あくまで売上なので、ここから様々な経費（材料仕入れ・旅費交通費等）を引けば、当然大赤字になるわけです。つまり、農業を中心にした売上だけでは、その時給 100 円の工賃すら賄えていませんでした。つまり、ビジネスとしての農業は全く成り立っていませんでした。その一方で、今振り返ると、利用者への個別支援やソーシャルワークはありました。このような状態が、スタートアップをして間もない時期の現場でした。

次回予告

事業所を開設し、就農してから 3 年後には、私たちは農家さんのもとでの「修行」から離れ、大型のビニールハウスを建て、農地を広げ、農業機械も導入していきます。農業としては、少しずつ結果が出始めます。それでは、農業がうまくいくようになることで、障害者への支援もまた、うまくいくようになったのかどうか。今回は、農業者として成長していく事業所と、その中で対人援助職として私が感じるようになったジレンマについて考えてみたいと思います。

連載 ジェノグラム for Everyone

第1回 そのジェノグラム、家族が見えますか？

ツール、つくってます

はじめまして。大沼吹雪といいます。

秋田県の横手市役所で働いています。雪のドーム「かまくら」や「横手やきそば」でピンとくる方もいるかもしれませんね。現在は児童福祉とは別の仕事をしていますが、2017年に児童虐待などを担当していました。

ところで、皆さんが普段使っているジェノグラム、それを見たとき、家族がパッと見えてきますか？

今、私は「ああ、なるほど。こういう家族なんだ」とわかるジェノグラムをササッと作れるツールを作っています。

簡単で、しかも、家族の情報を詳しく入力できます。誰でも無料で使えます。とりとめなく話した言葉がジェノグラムになる機能も付いています。

では、どうして私がこんなものを作るようになったのか。話は9年前にさかのぼります。

何だ、この丸と四角は

2017年、人事異動で児童虐待などの担当に。初経験です。私のところでは、一時保護などを要する重篤なケースにも

対応します。学校、病院、一般の方などから虐待などの情報が入ります。そのたびに、何が起き、誰が動き、何をすべきか判断を迫られます。判断の間違いが命に関わる。そんな現場でジェノグラムと出会いました。

資料の片隅にある小さな図。丸、四角、線、ときどき黒く塗りつぶされていたり、斜線があったり。数字もある。何だ、これは。意味が分かりませんでした。



(注)今は若くありません

虐待は繰り返されることが多いです。同僚は、家族の名前が出ると「ああ、あの家族ね」とピンときて、その家族をイメージします。私はサッパリ分からず、何が決まったかも分かりません。本来、私が判断や指示を出す立場なのに、です。命がかかっているのに、異動してきた人間に気を遣ってられません。私が一言も話せないまま、どうするか決まっています。

目の前には、読めば3時間で済まなさそうな、文字だらけの資料があります。

当然ですが、意味不明な丸や四角から目をそらしていました。

なんで人が計算するんだ

私には、部下の資料チェックの仕事もありました。そこで、いろいろな間違いが目につきます。ジェノグラムと文章の年齢が違う。誕生日が来ていないのに年齢が増えてるし、学年も間違っている。そもそも、年齢早見表でいちいち確認したり、どれも面倒くさい。生年月日が分かっているんだから、Excel を使ったらいんじゃないか。

ジェノグラム作りにもイライラしました。当時 Word が使われていました。大きさが微妙にバラバラ、高さもズレて、線がくっついていなかったり……。家族関係が変わると書き直す。しかも、ベテランでもすごい時間がかかっているようでした。

ヤバイじゃん

そんな中、もっと重大なことにも気づきました。ケースについての会話です。



よくよく聞いてみると、話がずれている、誤解しているのに、会話は成立しています。それぞれの頭の中で、別のストーリーができています。「これはヤバイじゃん」と思いました。みんな、頭でイメージしたものだけで話してるから間違えし、間違いに気づかない。

だったら、みんなが同じ家族の情報を見ながら話せばいい。それには、家族の情報が豊富に書かれたジェノグラムが使えるんじゃないか。そこで、それまで別々に感じていたことが、私の中でつながりました。

Excel でできるかも？

年齢を間違える。だったら、Excel で自動計算すればいい。Word で作るのが大変。だったら、Excel のセルを方眼紙のようにしたら、丸や四角をきれいに並べやすい。だったら、ジェノグラムそのものを Excel で作ればいいんじゃないか、と考えました。丸や四角だけでなく、名前も書けばいい。住所も、学校も、仕事も、その人について知っておいた方がいい情報はしっかり書けばいい。それまで資料の 8 分の 1 くらいに小さく載っていたジェノグラムを、A4 一枚いっぱいに広げました。2018 年頃、そんなことを家で思い立ち、自宅でせっせと Excel で自分のイメージするジェノグラムを作っていました。生年月日から年齢や学年などが自動で出てくるようにしました。出来上がったものを見ると、思っていた以上でした。作るのが楽なだけじゃない。想像した以上に家族が分かりやすい。ケースを知ら

ない人が見ても、家族のことがよく分かる。私が最初に困っていたことまで、かなり解消できたのです。

会議で使ってみた

ケース会議で使ってみました。便利。参加者の情報がバラバラでも、ササッと家族が分かる。同じ情報を見ながら話すことができ、とにかくわかりやすい。「ああ、面倒！」をやっつけにいったら、いろいろな問題が一緒に解決できました。スタッフにも関係機関にも喜ばれ、A4 一枚のジェノグラムが職場に定着しました。今では、他の機関から Excel で作ったジェノグラムが欲しいと言われてるそうです。



もっと簡単にできないか

Excel のジェノグラムは完成品のレベルまでいきましたが、それでも初めての人が作るにはハードルがあります。慣れた私が作っても、それなりに時間がかかります。また、オンライン上でジェノグラム

を見てきましたが、みなさん、とても苦労しています。思いどおりに描けず、困っている様子を何度も見てきました。誰でももっと簡単につくれるようにしたい。

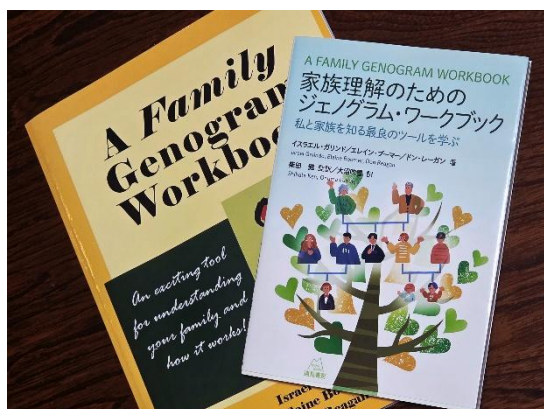
国内外のツールを探しました。でも、機能や保存方法、料金など、私が考える「誰でも気軽に使えるもの」とは、どこかが合いません。思い切って、プロの作り手に相談すると「簡単なものでも 500 万円くらいですね」と。無理です(笑)。いったん、諦めました。

なぜか付き合い続けた

ジェノグラムについて学び続けました。本も買い、ネットもいろいろ見て、私なりに勉強しました。すると、はっきり見えることがあります。描き方がバラバラなのです。夫婦をどう線でつなぐか、婚姻をどう表すか、妊娠をどう描くか。調べれば調べるほど、「こんなにバラバラでいいのか?!」と思うようになりました。ネットをあさっていると、ジェノグラムのことだけで 2 日も講義している人を見つけました。この人に習いたい！それが千葉晃央さんでした。

なんの面識も、つてもないのに連絡を取り、学ばせてもらいました。一緒に「秋田京都ジェノグラム研究会」という研究会をつくって活動してもらったり、ジェノグラムを使った事例検討について教えていただくなど、大変にお世話になってます。他にも様々な方と様々な機会を通じてジェノグラムを学ばせてもらっています。海外にも目をやり、2024 年には『家族理解のためのジェノグラム・ワークブッ

ク』を翻訳しました。福祉を学んできたわけでもなく、「この丸と四角、何なんだ」と言っていた人です。我ながら「よくやるよ、変わってる」と思います(笑)。



今ならできるかも

いま、生成 AI が急速に進歩しています。ふと思いました。今なら、作れるんじゃないか。そう思って作り始めたのが、冒頭で紹介したジェノグラム作成ツール、「結(ゆい)」です。2 週間で、話言葉だけでジェノグラムが作れるところまでできました。最初の目標には、すぐに到達しました。でも、もっとみなさんにとって役立つものにしたい、分かりやすくしたい。開発意欲が止まりません。作り始めて一か月ほどですが、国内外の他のツールに負けない出来栄えになったんじゃないかと自負しています。でも、それを決めるのは現場のみなさんです。多くの方に喜ばれるものを作りたいと思っています。

そして、別の問題へ

ところが、ツールを作り込むほど、以前から引っ掛かっていた、「こんなにバラバラでいいのか?!」という問題が避けられなくなってきました。簡単にジェノグラムを作れても、描く人によって意味が違ったら困ります。マクゴールドリックらが示してきた描き方は有名ですが、日本ではまだまだ描き方はバラバラですし、日本の制度や家族の表現には不十分なところもあります。

私がやりたいことが、「便利なツールを作る」だけではなくなりました。ジェノグラムの普及のため、日本の現場・法制度などにマッチした日本版の表記基準を定めたい。

せっかく便利なジェノグラムなのに、「描くのが面倒」「描き方が分からない」「人によって描き方が違う」で使われないのは、もったいない。そんな障害を、一つずつなくしていきたいと思っています。

ツールの開発も、ジェノグラムの表記基準の検討も、当然、一人で完結する話ではありません。

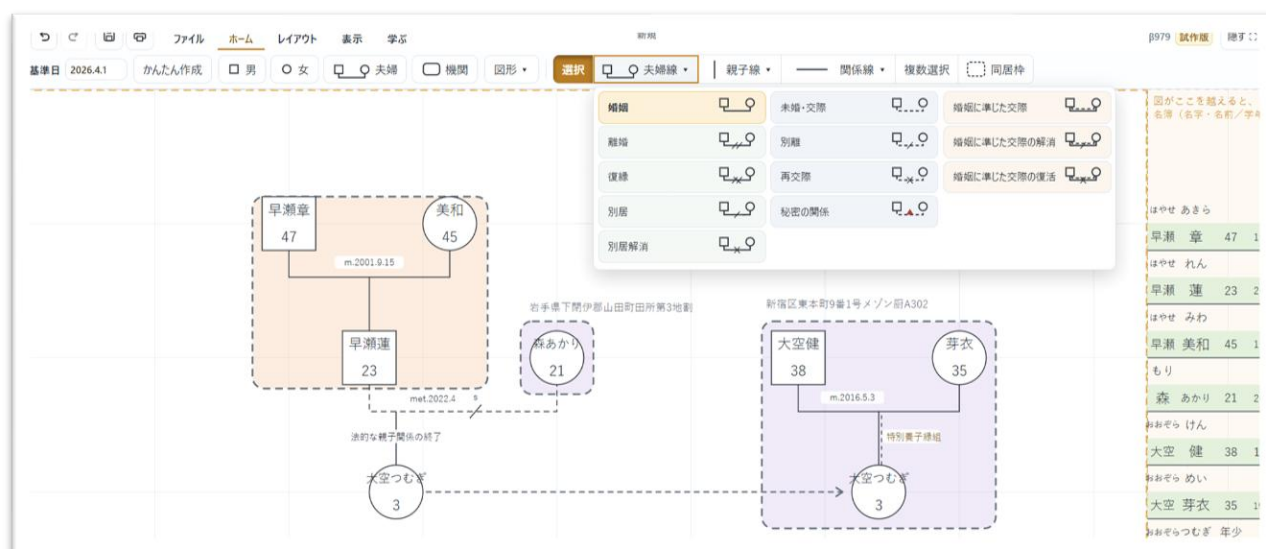
この連載では、ジェノグラムの普及のための歩みや自分が感じてきたいろいなことを少しずつ書いていこうと思います。

ジェノグラムの記号のこと。描き方がなぜバラバラなのか。日本ではどう描けばいいのか。

「うちではこう描いている」「ここがいつも面倒」「こんな機能があれば使いたい」

「こんな家族は、どう描けばいいのだろう」そんな声も、ぜひ聞かせてください。興味のある方には、一緒に考えていただければと思っています。

あっ、それと、ジェノグラム作成ツール「結(ゆい)」を早く使いたいという方は、こちらまでご連絡ください。 yui.kazoku.shien@gmail.com



ジェノグラムを、誰もが使える家族理解の道具に。

ジェノグラム for Everyone。

「結」は、今も毎日のように変わっています。3 か月後、この連載の第 2 回が出る頃には、どうなっているでしょうか。

それはそれとして、最後に、もう一度。

そのジェノグラム、家族が見えますか？

編集後記

編集長(ダン シロウ)

●8月は多忙だった。妻の七回忌を済ませた。月末には2011年からスタートした東日本家族応援プロジェクト行脚、一区切りの顔合わせに、青森(むつ市)、岩手(宮古市)、宮城(多賀城市)、福島(福島市、白河市)に五泊六日で出かけた。各地で長いお付き合いになった方々と懇談したが、今になって初めて聞かせて貰った話もあって、対人援助の必然、息の長さのことを思った。

続いているモノが一段落すると、新たなモノが始まる経験をこれまで繰り返してきたが、私はもう新しい何かが始まることもなかろうと思う年齢だ。「断捨離」なんて無理矢理な煽りにそそのかされず、続くモノは死ぬまでと思って、終わっていくモノも静かに見送っている。

●有り難いことだがマガジンに関しては不測の事態が本当に少ない。今号で66冊目である。

原稿が集まらないとか、発行の遅延とか、合併号にするとか、費用がかかりすぎるとか、編集作業分担者がいないとか、原稿内容のトラブル等、諸々のありそうな事情が17年間、ほぼ発生していない。

あって当然の都市インフラのように存在できているのは誇りだ。そこには継続可能システムの構築が重要だとの認識がある。その自覚的対応がトラブル発生を防いでいるのだが、こういうところは世の中の諸般の事情にも大いにある。

そうではあるのだが悩ましいのは、社会に大きな変化をもたらすのは、準備不足の失敗がきっかけであることが少なくないことだ。周到的準備や恒常性の維持機能は「変革」には馴染まない。

安定性とマンネリを安易に結びつけない知恵は、継続を確保するのが簡単ではない「平和」維持と重なってみえる。

編集員(チバ アキオ)

実家のある秋田には 50 年以上行き来している。秋田に着くと、自然と便利な車社会に入り込んでいくことになる。

これぐらい通っていると、いったことがないところはないぐらい、県内をうろうろしてきた。麻辣担も、もっちゅりんも秋田で食べた。ネットニュースも、SNS も秋田のニュースが関西と同じぐらい入っている。そこは、こう行けば着くところという実感は過去の車の移動経験が基になる。

これを書いている現在は、秋田駅を出発した普通電車内である。この列車の行き先は奥羽本線院内駅。さっき出発するときに秋田駅には、青森から秋田まで乗った「特急つがる」や、横には新潟に向かう「特急いなほ」。青森方面の普通は追分駅行き。羽越本線は新屋駅行き。男鹿方面は男鹿駅行き…と行ったことがない駅名ばかりが電車の行先として表示されている。院内駅は、車では行ったなあと、思い出す。

こうしてみると知っている秋田とは違うように見える。秋田駅にバスで行くにも、ICOCA でピッといけるし、グーグルマップで調べればルートはすぐわかる時代。青森でも、広島でも、大阪の高槻市など出先でバスにも乗れるのも昔に比べると簡単で、便利極まりない。

何を基準に見るのか、どの部分を見るのかによって同じものを見ても見えところ、見え方が異なり、その結果伝わってくるものが異なる。これは編集と同じ。秋田の普通電車にはインバウンドのお客もいるし、飛行機から連絡で乗車している人もいる。普通電車の乗降口は開閉ボタンを用いるのは夏も同じ。まだ乗っていない秋田内陸縦貫鉄道を含めると、まだまだ知ることができそうな余地があり、次回の秋田入りも楽しみでしかたがない。

編集員(オオタニ タカシ)

編集会議でも何度か話題にあがったのが「急に具合が悪くなる」という映画で、「健康な者たちは本当に生きているのか」という作中の言葉が話題に登場しました。

編集者も執筆者も、それぞれの人生の途上にいま

す。当然、病気やケガ、思いがけないアクシデントなど、望む、望まないに関わらず色々な事態が起こって行くことになります。そして、そこで対応というか、何かしらの選択を迫られていく。ある意味で人生とはそういうことの連続なのかもしれません。

この映画の原作は、哲学者である宮野真生子氏と、人類学者である磯野真穂氏の往復書簡から構成された書籍なのですが、その中に“選択したことで、その先で自分が形作られていく”という趣旨の言葉が記されています。人生におけるたくさんの選択が、その人自身やその人の人生を形作っていく。

そう考えると、15年以上、66回に渡って「書く」という選択を継続した執筆者の方々にも、その選択の結果として形作られたその人のあり方が示されているように思います。そんな執筆者の奥行も含めて、ぜひ多彩な執筆陣の連載をお楽しみいただければと思います！

対人援助学マガジン

通巻66号

第17巻 第2号

2026年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第66号は2026年09月15日

発刊の予定です。

原稿締切**2026年08月25日！**

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ書ける分野の記録を発信したいとい

う方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心おきなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。**現在非会員で書いていただく事になった方は、**対人援助学会への入会手続き**を以下でお願いします。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

この絵は木陰の物語 No.312『にぎやかな共同墓地』の一コマなのだが、ワンカットの絵力としては弱い。にもかかわらずこれにしたのは、この場面の話に心動かされたからだ。

これは3.11津波災害の大きかった沿岸部の街のタクシー運転手からの聞き取りだそうだ。

運転手仲間は皆、当たり前の体験として、行き先に流された街を告げる乗客に遭遇している。だが目的地に着いてもお客の姿はない。

「みんな自分の街に戻りたいんだねえ・・・」という感想が胸を打つ。思いが残るというのは怪談話ではない。

2026/9/15 団士郎